愛光二十年

創立二十周年記念

1 9 7 2

愛　光　学　園

記念写真集

愛光学園二十年の足跡

聖トマス像

新校舎正面

われらの信条

われらは、世界的教養人としての深い知性と高い徳性を磨かんとする学徒の集りである。学問に対する情熱と、道義に対する渇望とは、われらの生命である。

幾千年にわたる人類善心の業績――この高貴なるものに寄せる愛情と尊敬、これを学びとるための勤勉と誠実、これを伝えこれに寄与するための忍耐と勇気とは、われら学徒の本分である。

かくて高貴なる普遍的教養を体得して、世界に愛と光を増し加えんこと、これがわれらの願である。

輝く知性と曇りなき愛
愛(Amor)と光(Lumen)の使徒たらんこと！

これがわれらの信条である。

愛光学園校歌

一、
瀬戸の潮路に白南風渡り
懐し古城に青葉の薫り
頬赤らめし男の子々達の
燃ゆる瞳は何をか語る
愛と光の使徒たることを
誓ひて遠き石鎚の峰

二、
蒼きはまれる大空に聞く
旧き伝への聖なる鐘は
出湯絶えせぬ煙のごとく
若き命よ豊かにあれと
道復その昔謂れの土地に
永遠に祈りのあゝセミナリオ

三、
伊予の国原風光り満ち
黄なる蜜柑のたわわな実り
全き姿映さんどかや
清く流るる重信の水
あゝこの地より世界の果に
愛と光をもたらし行かん

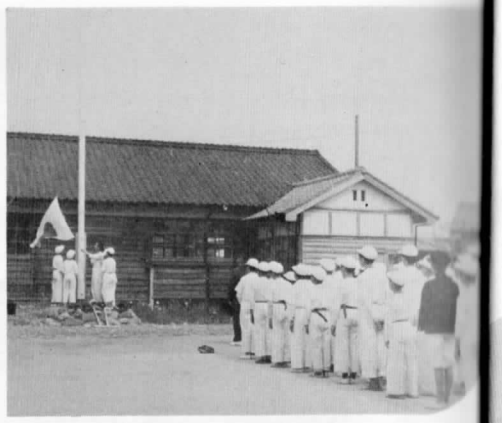
初めての入学生—昭和28年

学校長
田　中　忠　夫

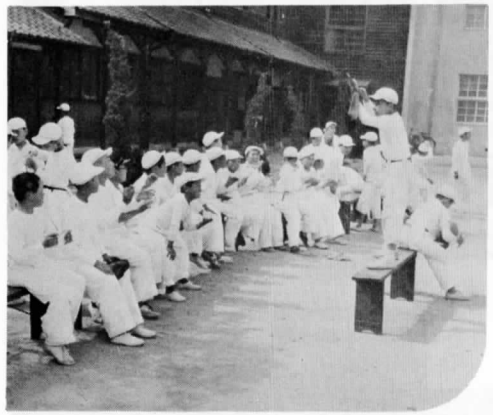
理事長
サトルニノ・ゴンザレス

創立十周年の頃の教職員—昭和37年

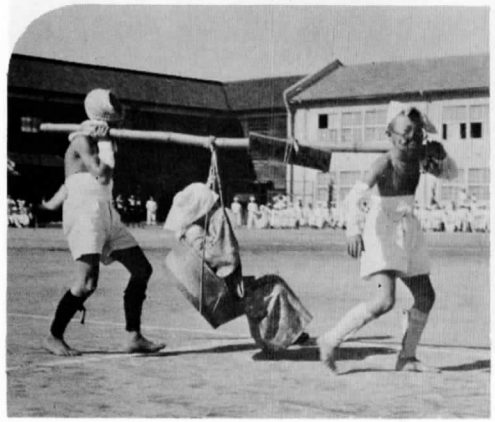
現在の教職員



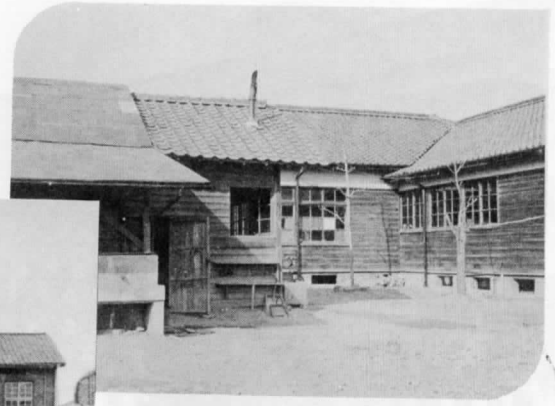
スポーツ・デー



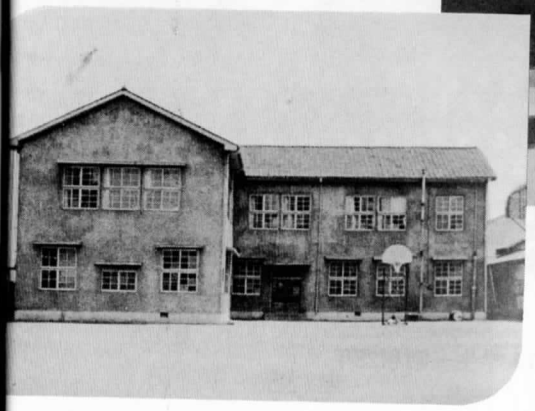
運　動　会



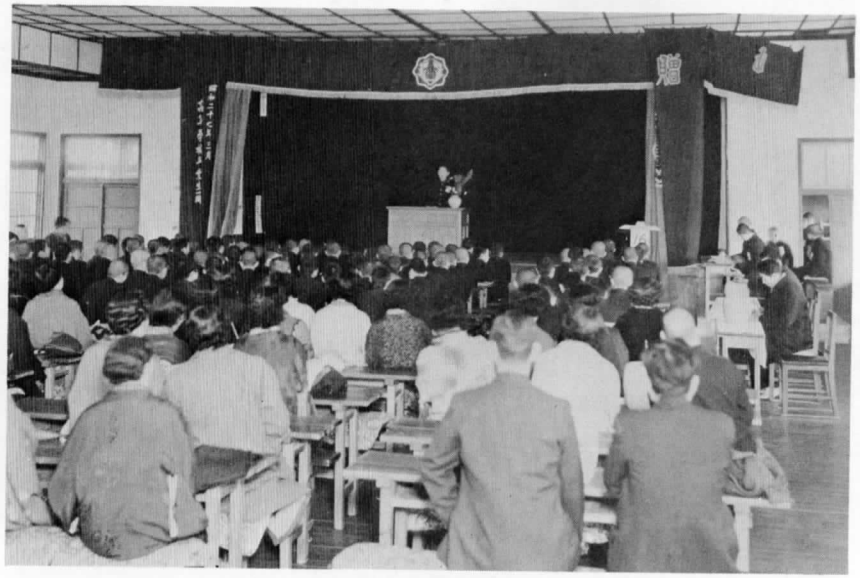
創立の頃



旧校舎

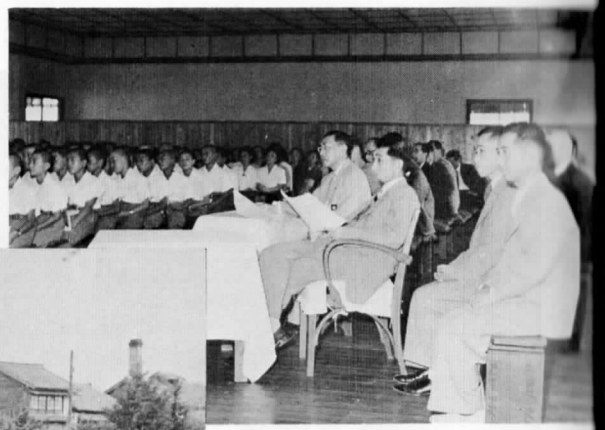


聖トマス寮



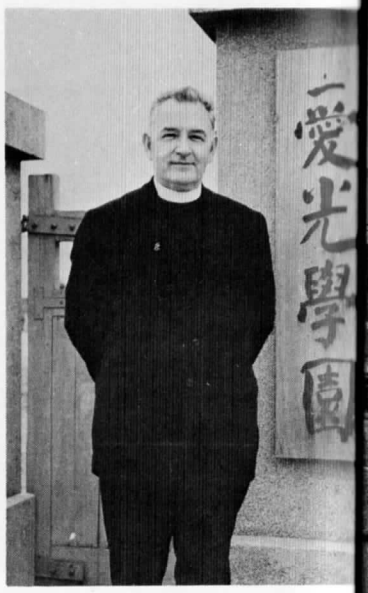
聖トマス記念文化祭

来校された方々



高松宮—昭和29年

サンチョ管区長—昭和28年



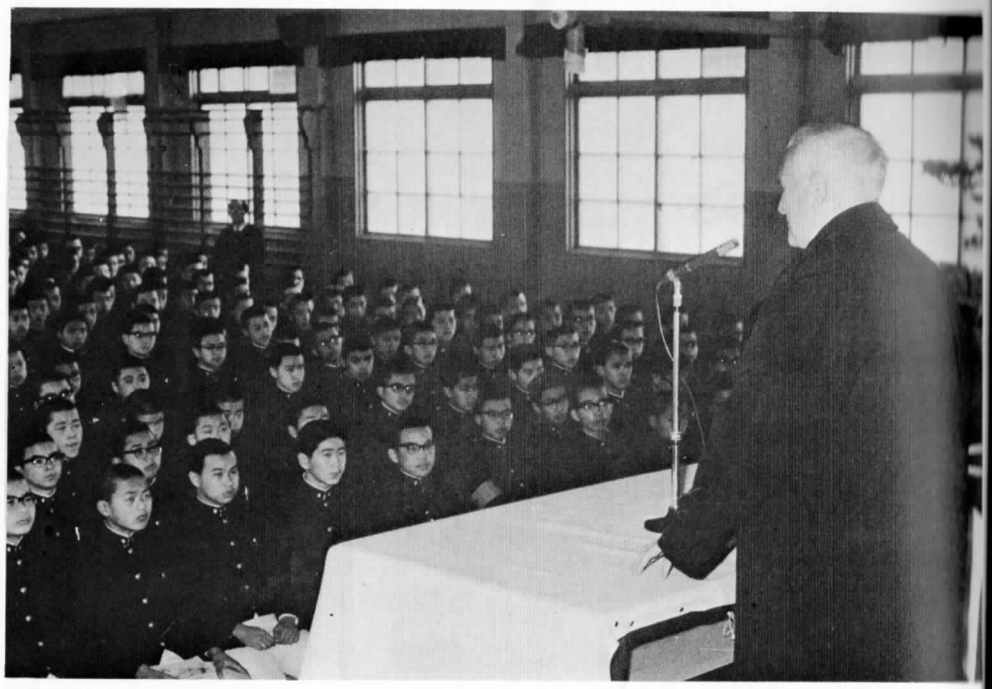
バーク・ドミニコ会総長—昭和30年

アドルフ・ガルシヤ管区長代理—昭和29年

フルステンベルグ教皇使節
第一期工事完成祝別式－昭和31年

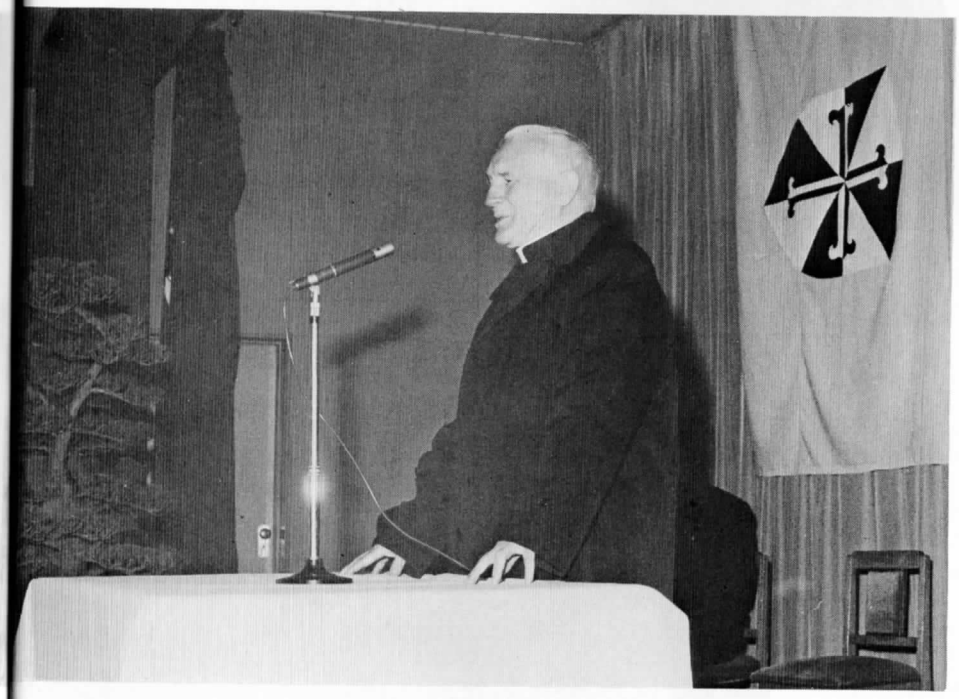
田中耕太郎氏—昭和30年

安倍能成氏—昭和30年

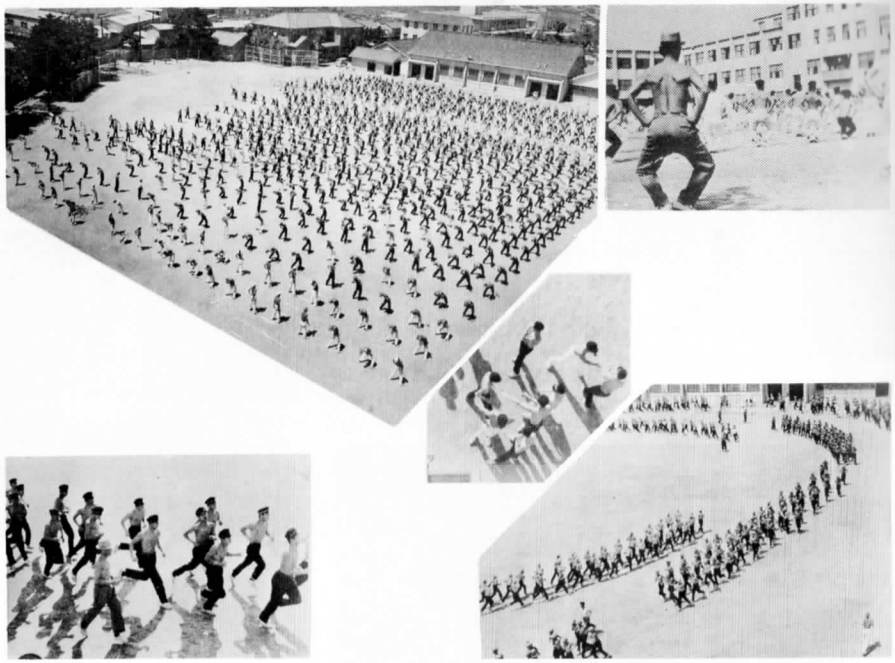


ドミニコ・エンリッチ大司教—昭和37年

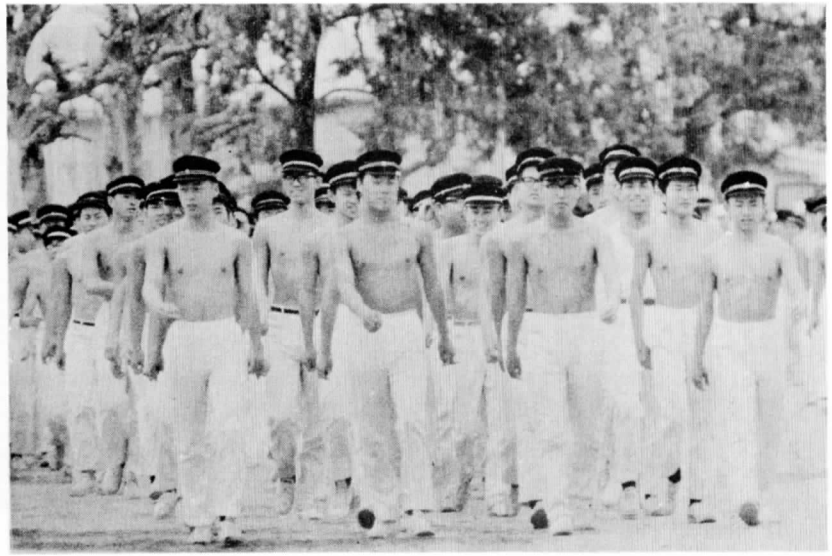
フェルナンデス管区長



フェルナンデス管区長—昭和45年

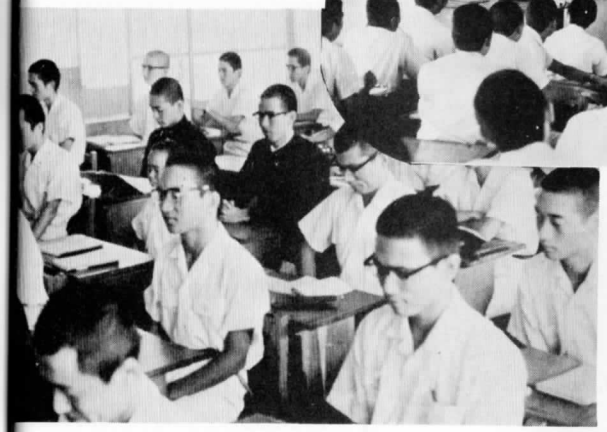


中間体操

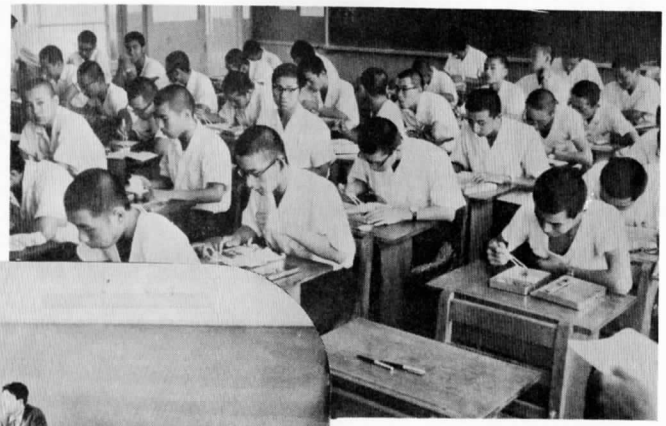


日々の生活

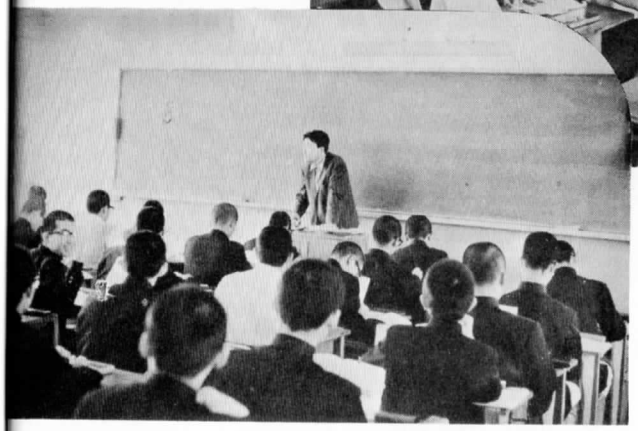
ホーム・ルーム



黙　想



昼　食



授　業

卒業式

降福の祈り

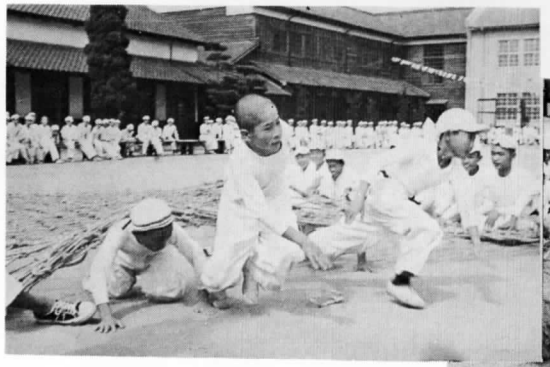
父母席

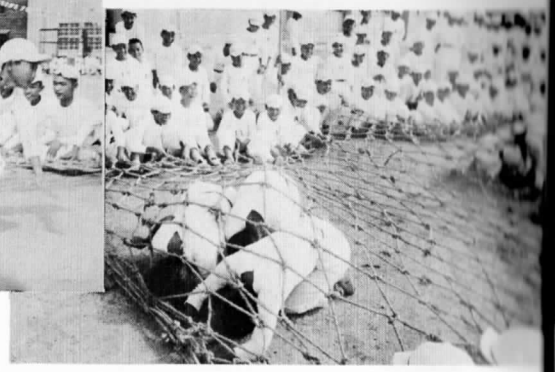
入学と卒業

受験風景

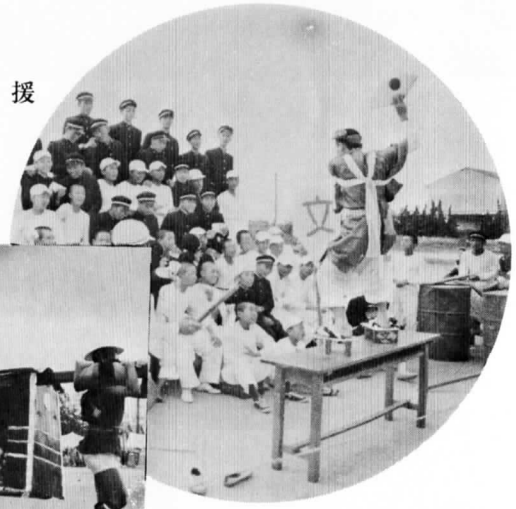
入学式

運動会



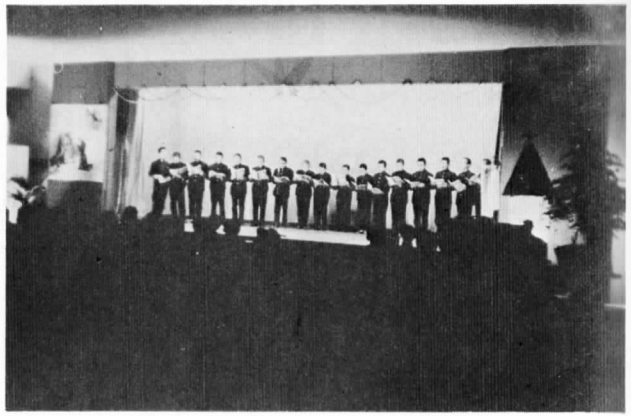


応援



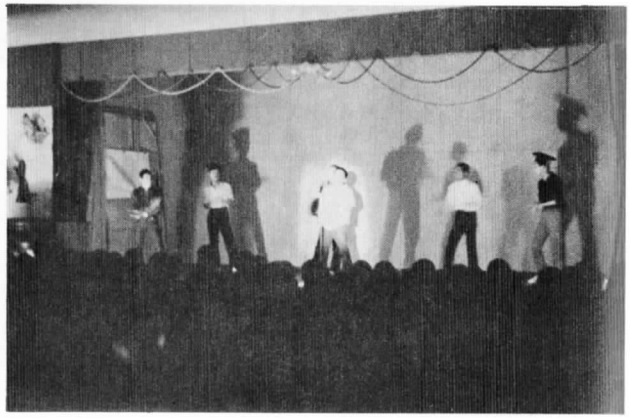
仮装行列

コーラス



弁論大会

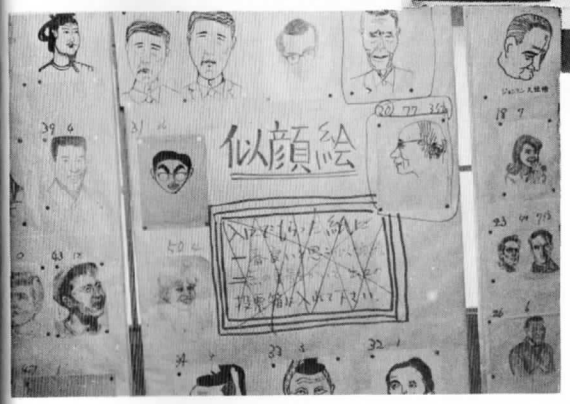
演　劇

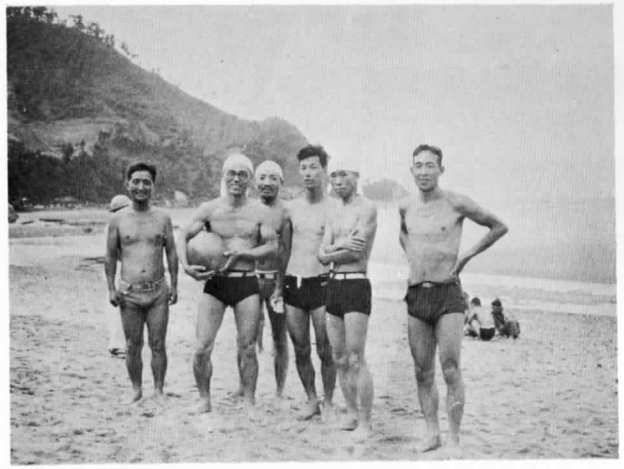


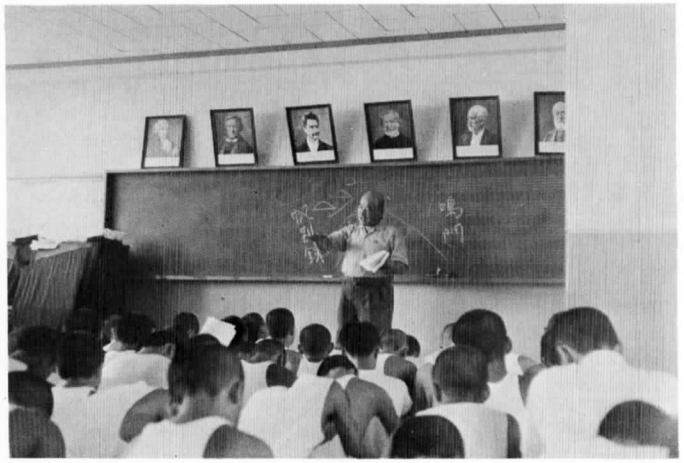
文化祭

創立十周年記念カトリック展

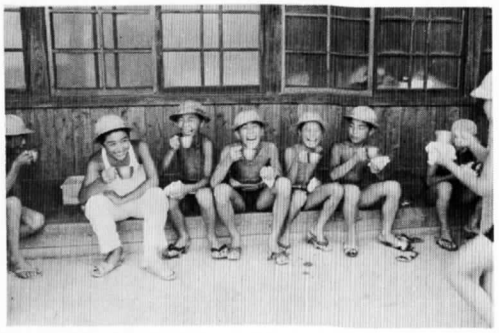
展　示





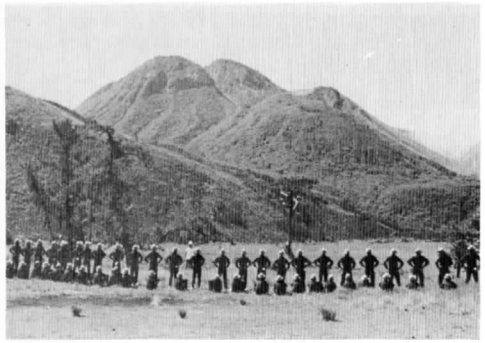


海浜キャンプ

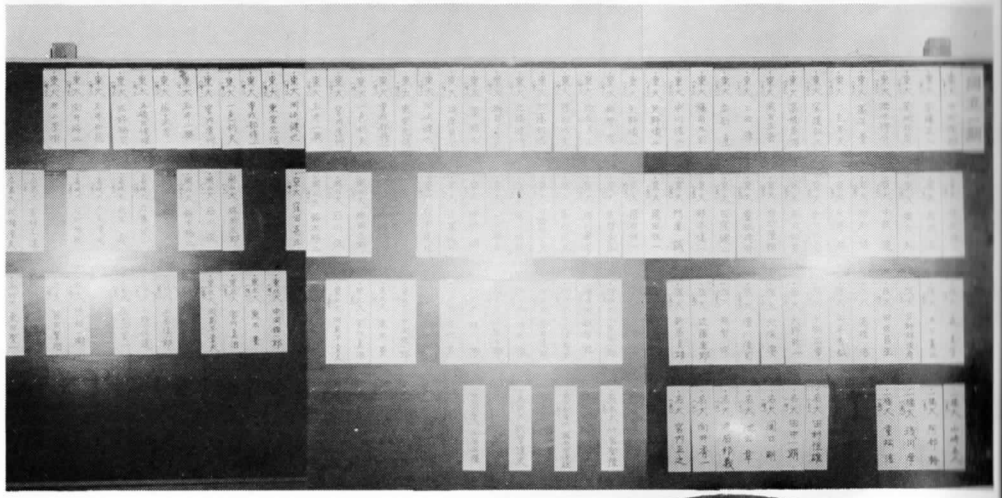


林間学校

九重高原にて



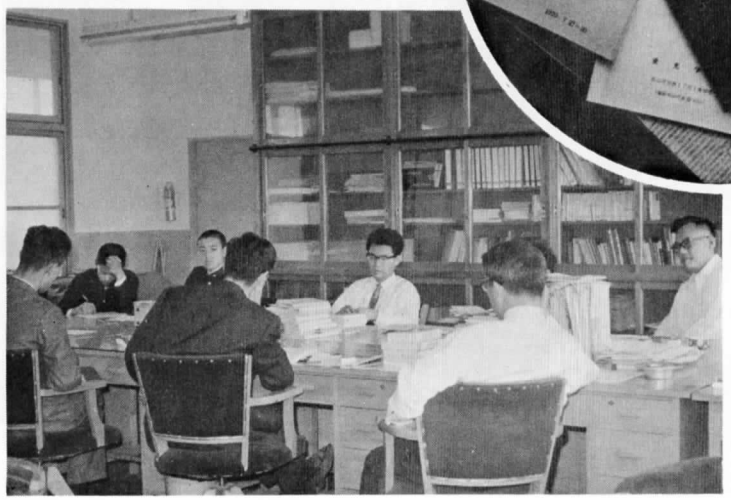
大学への道

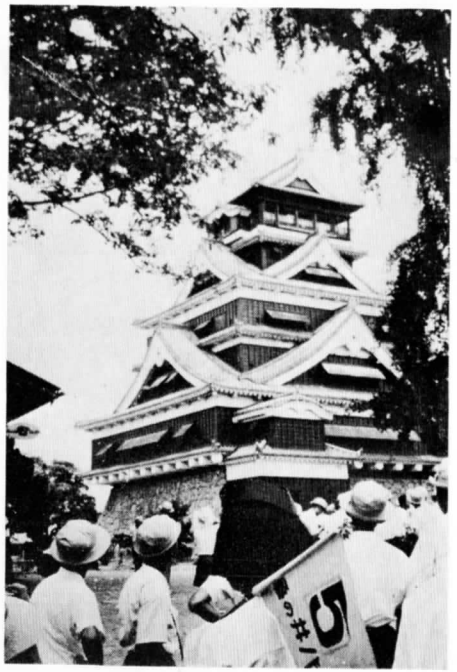


大学合格者掲示板

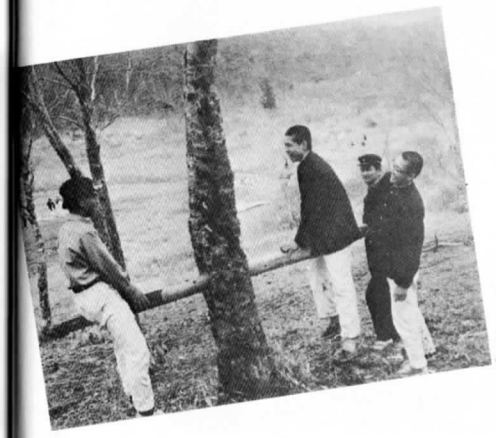
校内刊行物

進学会議





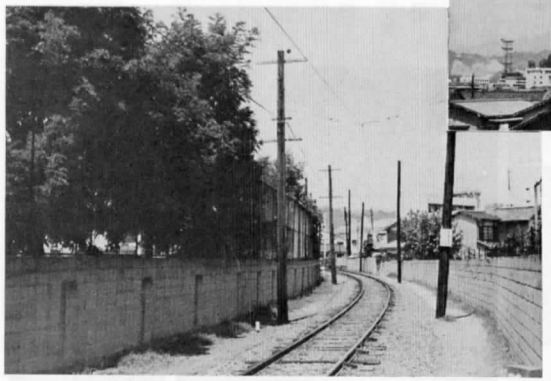
修学旅行と遠足



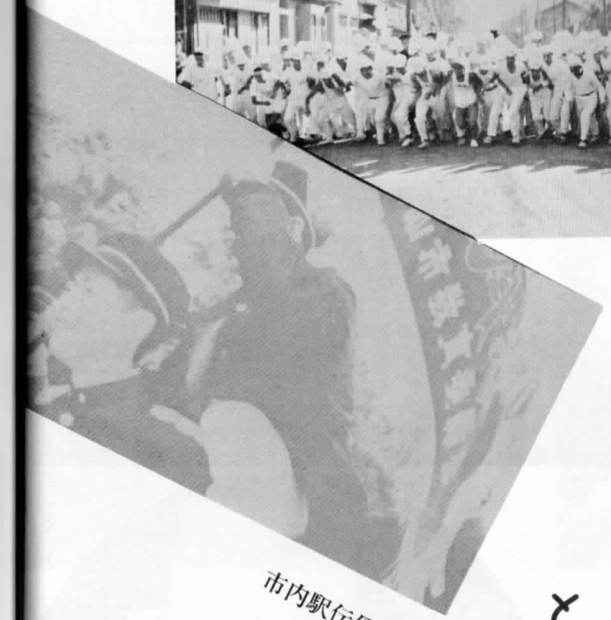
宮西校舎

正面玄関

懐し古城に
青葉の薫り

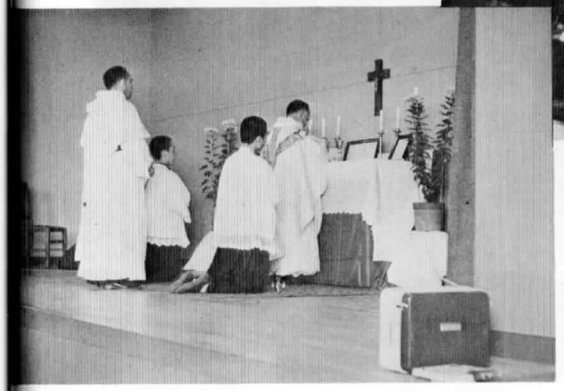


校内マラソン

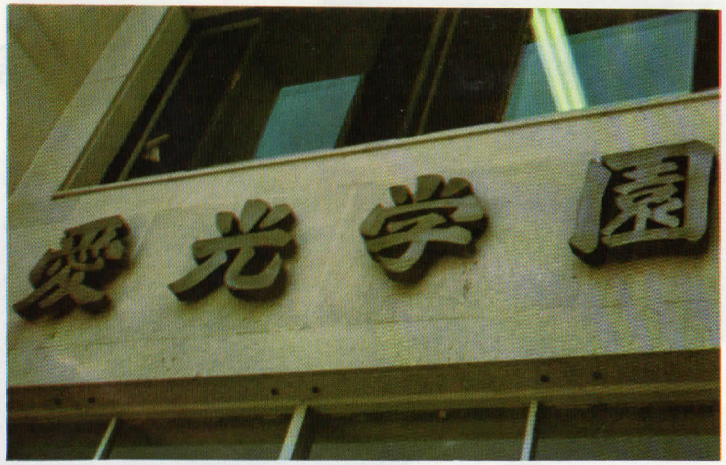


市内駅伝優勝

走ること と 祈ること



クリスマス祝会



全　　景

聖トーマス寮

司　祭　館

目　次

記念写真集

愛光学園二十年の足跡

愛光学園校歌　われらの信条

愛光学園二十周年を迎えて ……1

第三代理事長（現）　サトルニノ・ゴンザレス　聖ドミニコ修道会前管区長　シルヴェストレ・サンチヨ

初代理事長　ビセンテ・ゴンザレス　聖ドミニコ修道会管区長　アニセト・カスタニオン

第二代理事長　マルシアノ・ディエス　カトリック高松教会司教　田中英吉

回顧と展望 ……9

愛光教育の理念 ……愛光中・高等学校長　田中忠夫 ……10

愛光学園創立の頃（対談） ……ビセンテ・ゴンザレス　田中忠夫 ……23

愛光学園父母の会の二十年 …… 31

開校当時の想い出 …… 初代父母の会会長　金井滋雄 …… 32
創立当時の思い出 …… 第二代父母の会会長　中西直幹 …… 33
創立十周年記念祭のことなど …… 第四代父母の会会長　白石定義 …… 35
愛光学園父母の会について …… 第六代父母の会会長　後藤喬 …… 36
父母の会のあれこれ …… 第七代父母の会会長　須賀清次郎 …… 38
ある年度の卒業式 …… 第八代父母の会会長　冲永善五郎 …… 39
迷わぬ愛光 …… 第九代父母の会会長（現）　埜下禮世 …… 41
一父兄から愛光学園へ …… 父母の会委員　井上薫 …… 43
今の若いものは …… 父母の会前副会長　仲田清尚 …… 44
思うままに …… 父母の会委員　小野孝一 …… 45
創立二十周年を祝して …… 同　村上光夫 …… 47
愛光生頑張れ …… 同　山崎恒夫 …… 48
愛光掌篇 …… 同　飛田吉一 …… 49
父母の会の草創期と現在（座談会） …… 歴代父母の会会長・副会長 …… 51

愛光学園を巣立って …… 69

座談会　第一期生は語る
われらの愛光学園 …… 県内在住第一期生有志 …… 70

回想篇 …… 89

在学中の想い出／小池昌長（第二期）89　現在の事業と愛光で得たもの／鶴田健三（第二期）91　愛光時代の思い出／湯山秀俊（第四期）95　在校中の想い出／上田時雄（第五期）97　いとも恥ずかしきこと／門多丈（第八期）99　愛光を出て六年―ああ勉強／木藤隆雄（第八期）102　医師となるに臨んで／是沢俊輔（第八期）104　新しい体操の修得／坪内精次郎（第十期）106　愛光時代の思い出／梅木慎一郎（第十期）108　駅伝の事／木村紳一（第十期）110　在校中の思い出／乗松章裕（第十期）112　にこにこ運動の思い出／出井康裕（第十期）115　夢の意味／和田隆一（第十一期）117　在校中の思い出／河原太八（第十一期）120　私の中の先生／光田和伸（第十一期）122　愛光時代のこと／中岡進（第十二期）123　私と囲碁将棋／進藤勇治（第十二期）125　楽しかった愛光時代／青野信卓（第十二期）127　在校中の思い出／高橋訓（第十三期）129　思い出語り／谷口清久（第十三期）132　カウンセラーをめざして／中須満（第十三期）135　在校中の思い出／河上正二（第十三期）137　愛光生活で得たもの／十亀清（第十三期）140

図表で見る学園の動き …… 143

校内組織と教職員の動向 …… 144
〈表1〉教科別教職員の移動144　〈表2〉年次別校務分掌および学級主任148
学校規模の過去と現在 …… 154
〈表3〉学校規模の変遷154　〈図1〉新校舎教室配置155　〈表4〉現在の学校規模156
生徒の家庭環境 …… 157

〈表5〉保護者の職業と学歴157　〈表6〉生徒の家族構成158
卒業生の進路状況……158
〈表7〉年次別大学合格状況158　〈表8〉年次別学部別進学状況160　〈表9〉卒業生の就職状況160
図書館統計……161
〈表10〉年次別分類別購入図書161　〈表11〉年次別分類別貸出図書冊数162
生徒の身体的発達状況……164
〈グラフ1〉中学1年・高校II・III年生の身長164　〈グラフ2〉同体重164　〈グラフ3〉同胸囲165
愛光学園略年表〔昭和二六（一九五一）年～昭和四六（一九七一）年〕……166
昭和四七年度行事予定表……181
あとがき……184

愛光学園二十周年を迎えて

聖ドミニコ会の紋章

第三代理事長（現）

サトルニノ・ゴンザレス

Saturnino Gonzalez

愛光学園は、一九五三年にカトリック聖ドミニコ修道会によって創立されまして以来、本学園の関係者各位の多大なる御協力と、心からなる御力ぞえのもとに芽出度く、この創立二十周年を迎えることが出来ました。

思えば、創立当時、あらゆる面から色々の苦労と心配がありましたけれども、本学園は様々の困難を乗り越えて、現在まで厳しく守って来たその教育方針のもとに、この光栄ある二十周年の歴史を飾る事が出来るようになりました。

その教育方針及びその目的は、十三世紀に立派な聖人であると共に、学徳に勝れた学者であったスペイン貴族出身の聖ドミニコにより創立された聖ドミニコ修道会の精神に従うもので、〝カトリック的高潔な人物を養成する事〟、なお、〝カトリック的世界観と精神を根本理念とすること〟であります。そうしてこの聖ドミニコ修道会の精神は、真理探究の道を、厳しい勉強で歩むとともにキリストの愛の精神にもとづいた徳の高い人間を作りあげることであります。本学園はその保護者として聖トマスをいただいておりますが、彼はこの修道会の生んだ多くの学徳共に勝れた弟子のなかのひとりであります。

聖トマスは今から七百年ばかり前、即ち一二二五年頃にイタリアのアクイナスという有名な伯爵家に生れ、小さい時から非常に勝れた知性に恵まれていたようです。十五才の時聖ドミニコ修道会に入りましてその後、ヨーロッパで有名なナポリ大学とパリ大学で勉強し、二十才の時にすでに神学博士の称号をえてパリ大学の教授になりました。

そして、特に神学と哲学の歴史に不朽の名を残したのであります。

本学園はこれから後も同じ教育方針のもとに、人間にふさわしい立派な人格形成のための教育を行うことによって、カトリック系の教育機関として、社会的にも意義ある奉仕を果し続けたいという責任を重く感じています。

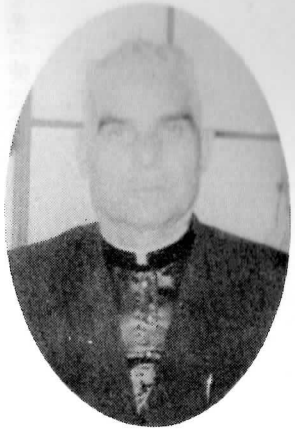
特にこの七〇年代において、二十周年を迎えるに当りまして、いわゆる物質的文明の進歩と共に、進歩をつづける教育学の成果を利用して、人間の円満な教育を生徒たちに身につけさせるように、なお一層努力したいと思います。

数年前、ローマで開かれた第二バチカン公会議に全世界から集ったカトリック教会の二千二百名位の司教達は、多くの学者達と共に、現代の人間教育について、次の事を発表しました。

学校は、心理学、教育学などの進歩を利用し、青少年が、その肉体的、道徳的、知的天分を調和的に発展させるように、また強固な精神を以て将来を克服しながら、絶えざる努力を以て自分自身の生活を自由に実行するための責任感を次第に身につけるように、努力しなければならない。

このカトリック精神に従って、愛光学園は現代の要望する人間教育に応えるため、ここに新しく近代的な校舎と有益な設備を整え、これからも多くの立派な学生を、その教育方針の豊かな稔りとして養成することをめざしています。

本学園は今後共、いわゆる精神教育を特に真剣に考えて、世界的兄弟的な交りの心の開かれた円満なる教育の使徒、愛と光の使徒を社会に送り出したいと強く望んでおります。



初代理事長

ビセンテ・ゴンザレス

Vicente Gonzalez

本校二十周年にあたりまして、創立の動機を少し述べてみたいと存じます。

私達ドミニコ会士が来日いたしました主な目的はキリスト教的教育を施す事で単なる智的テクニックの養成に終始するものではありません。現在当会は、世界数百か所に、中・高校教育施設を有しておりますが、七十年前私達ドミニコ会が四国に参りまして、四国教区よりこの件を依頼され教育センターの創立を日夜願っておりました。幸いにも四六・七年前女子教育の学校の創立を見、昭和二十八年永年の夢でありました男子教育の学校即ち当愛光学園を創立する幸を得る事ができました。

終戦後日本の教育界は一番大切な道徳教育が欠如している事を痛感し、私達は会の精神に従い同時に国際文化の交流にも貢献する事が出来るようにと、昭和二十六年五月十七日、スペインのアビラに於て開催されました会議に於て役員司祭に日本教育界の現状を話しました。その翌年二月十三日サンチョ日本管区長の御来日の際、松山の神父達が一堂に会しました時、正式に私のアイデアを発表しました結果賛成を得、同年三月二十五日本部より許可され四月七日城西女学校を購入し翌年昭和二十八年四月一日に百十一人の生徒と共に発足のはこびをみるに至りました。

現在本校は日本屈指の有名校となり、大いに発展の途上にあるのを拝見いたしまして、誠に欣快に堪えません。と同時に、田中校長先生を初め諸先生の御尽力の賜物とあらためて感謝の意を表したいと存じます。

第二代理事長

マルシアノ・ディエス

Marciano Díez

愛光学園創立の五年目、昭和三十一年に、私は初代理事長ヴィセンテ・ゴンザレス神父様のあとを引き継いで理事長として、この学園のお世話をするために来てから、昭和三十九年に八幡浜教会へ転任するまで九年間、学園とともにすごしました。この期間の思い出は私の心に深く焼きつき、忘れがたいものとして残っております。創立間もない本学園が経験すべきであった苦難の時代に、私を援助してくださった諸先生、事務職員のみなさま、父母会のみなさまの暖かいお心は、今も尚私の胸の中に生き生きとして生き続けており、これからも私の使命を遂行していくためのエネルギー源となりましょう。

さて本学園創立二十周年記念のよろこびにあたりまして、在職九年間の思い出を新たにしながら、少し回想談を記してみましょう。当時の愛光学園はたとえてみますと、貧しい家庭に生れて何一つ遊び道具を買って貰えなくても、知恵を働かせて楽しい遊び方をみつけて遊ぶ賢い子供と申せましょう。終戦後の日本全体が物質的貧困状態を忍んでいましたから、当時の本学園もまた貧弱な教育設備しか持っていなかったことは、当然であったかも知れません。しかし本学園は、その貧困な設備の中で、精神面にも学業面にも多くのすぐれた高貴な魂を育ててきました。こんな情況を目前にして理事長としての私の夢は、一日も早くこの高貴な魂を納める器、つまり勉学にふさわしい設備をもった校舎を建築すること、また男子校に是非必要な運動場の拡張と整備、そして設立者や父母会のみなさまが学園創立以来念願され

てきた学生寮の設置を実現することでありました。私のこれらの夢は、神さまのお恵みと多くの方々の御協力で、次から次へとかなえられていきました。ですから、私の在職九年間は学園の設備充実のための心配と一週数時間の倫理の授業担当で、あっという間に過ぎてしまいました。そして、今回完成された新しい校舎と広々とした運動場を備えた新愛光学園の姿を見て感無量です。きっとこれまでよりももっと多くの高貴な魂が、まるで翼を放たれた鳥の如く大空に高くはばたいていくことでしょう。

終りにあたって、私の在職中初めから終りまで変らぬ御理解と御協力を賜わりました校長先生、諸先生、事務職員のみなさま、父母会のみなさまに厚く感謝を申しあげるとともに、学園の益々の御発展を祈りつつ、学園創立二十周年のよろこびを迎える時に前理事長としての私の簡単な御挨拶といたします。

聖ドミニコ修道会前管区長
愛光学園創立者

シルヴェストレ・サンチョ
Silvestre Sancho

本学園は創立されてから二十周年をお迎になりました。

私は本校の創立者といたしまして、田中校長先生をはじめ、学校管理者の皆様、及び学校教員の皆様と学校の関係各位の皆様方にもこの二十周年の喜びを心から申上げ、更に学校の発展のために皆様方の心からなる御協力を厚く感謝いたします。

今後共、愛光学園は聖ドミニコ修道会の精神に基づいた方針に従って、人間の知的及び道徳的教育の高いスタンダードとして、なお一層発展して行くことが出来ますように心からお祈り申しあげます。

マドリッド・ロザリオ修道院にて・一九七二年　五月

聖ドミニコ修道会管区長

アニセト・カスタニオン
Aniceto Castãnon

本学園が創立されて以来、もう二十年になりました。この間、高いレベルを保っている日本の教育の伝統に従いながら、青年たちに円満な教育を与える上において、良い成績をあげることができましたのは、本校の管理者はじめ教員の皆さまのさまざまな配慮と犠牲によるものでありまして、その二十年の歴史は、十分に誇るにたるものであると思います。

本校の創立者シルヴェストレ・サンチョ師とビセンテ・ゴンザレス師が、日本におけるカトリック聖ドミニコ修道会の神父たちとともに考えられた本校の目的と使命は、十分に果されており、創立当時に夢みていた成果が、着実に実現されつつあることを、聖ドミニコ修道会の管区長として、喜びにたえない次第であります。

新しい広いグランドと近代的な校舎で二十周年を迎えられた愛光学園は、今後とも、日本の若い者たちの人生観と人間的価値を、なお一層高めることによって、日本社会の人たちに奉仕し、貢献することができますように、より豊

かな成功を心からお祈り申しあげます。

マニラにて　一九七二年　五月

カトリック高松教会司教

田中英吉

愛光学園が創立以来二十年にあたり、更に発展のためよき環境の地に新しき校舎が建てられたことは喜びにたえません。

顧みますと我国の教育界には近年徳育が疎かにされている傾きがありますが、愛光学園は特にその点に注意し、古き伝統を有する聖ドミニコの弟子たちによって、管理・経営され、良識ある社会人の育成に貢献されてきました。

今ここに関係諸士の今日までの労苦に感謝の意を表するとともに、益々愛の光を放たれる神様の祝福をこいねがうものであります。

回顧と展望

愛光教育の理念

愛光中学・高等学校長
田中忠夫

第一章　学園創立当時の松山教育界の状況

a　焼失後の私立中等学校の状況

昭和二十年七月二十六日の大空襲によって松山の旧市内は九割の家を焼失し、旧市内の学校は小学校から中等学校・高等・専門学校に至るまで、ほとんど全部焼失してしまった。旧市内で戦災を免がれたものは、道後小学校と桑原小学校の二校のみであり、松山経済専門学校のコンクリート建の部分と、東雲高等女学校の同じくコンクリート造りの一部のみが例外であった。新田中学は郊外に位置していたために戦災を完全に免れた幸福な唯一の中等学校であった。

教育熱心は、明治以来の日本社会の長い伝統で、戦終るや、各学校とも何はさておいても学校再開に一斉に立ち上った。

小学校は、道後・桑原という幸福な学校の他に、新市街の小学校が全部健在であったため、焼け出された旧市内の小学校に、それぞれ場所を提供することができたのでかんたんに処置がついた。通学距離が遠いとか、二部教授の不便とかはもちろん問題にならなかった。

旧制中学校は、新田学園を除いて、公私とも新市内にあったため問題は深刻であった。城北の寺町にはいくつか焼失を免れた寺もあったが、これは焼け出された壇家の臨時宿舎に割りあてられたので、学校として利用する道はなく、ある学校はいくつかの神社の境内を借りて青空教室を開くとか、少し広い農家の納屋の土間を貸してもらった。机は自宅からみかんの空箱などをもって来させて間に合わせた。そのうち松前・岡田・余戸・三津・小野小学校の校舎の一部を借り受けるとか、時間外に校舎を利用させてもらうとか、何とか屋根の下で授業することができるようになったのは、秋もようやく深まり行く頃であった。私立中学校がバラック建ての校舎の再建に狂奔したのは当然であろう。

私立学校の将来がどうなるかとか、今後の学校経営のあり方はどうあるべきかなど、私学の生死にかかわる問題が身近かに迫っていることは誰でも承知はしていたが、目前の生徒の授業という焦眉の急の前には、明日のことなどかまっておられないというのが当時の私学経営者の心境であった。

資金の問題・資材の問題・大工左官など人手の問題、すべてにきつい制約があったにもかかわらず、この困難をのり越えてひたすら再建にとりくんだ必死の姿は記憶さるべきであろう。釘一つにしても焼け跡から拾った古釘をその道の商売人から手に入れるとか、瓦の代りに杉の皮を屋根にふくとかは普通のことで、瓦を手に入れた学校は他からひどく羨ましがられたものである。教室を建てるためには梁材が必要だが、五間もある梁材を手に入れることは容易のことでなく、幾枚もの厚い板を鉄板とボートでつないで梁代りに使うとか(これをサンドウィッチビームを呼んだ)、ガラスが十分に手に入らぬので、一部は新聞紙や障子紙で間に合わせるとか、とにかく涙ぐましいほどの苦心をしたものである。このような困難を乗り越えて、私立中学全校が、どうにか自校で授業ができるようになったのは、昭和二十二年の秋に入ってからのことであった。

b　学制改革と私立学校

戦後、進駐軍の指令に基いて、各種の命令が次々と矢つぎ早やに出され、各学校とも応接にいとまのないほどであ

った。しかし昭和二十一年三月、米国から第一回の教育視察団が来朝し、その勧告にもとづいて、昭和二十二年四月一日から教育基本法が実施せられることとなって一応落ちついた。いわゆる六・三・三・四制の現行制度である。落ちつきはしたが、これは明治五年の教育制度確立以来はじめてといわれるほどの大改革で、食うに食なく、着るに服なく、寝るに家なき敗戦直後のわが国としては、いかにも受け入れ難い政策であった。しかし理想に狂ったような進駐軍は、地方自治法・国会法・労働基準法など、国政の基本となる制度と同時に、断乎としてこの大事を決行したのである。理不尽だと考えられていたこの新制度が、愛媛県でもともかく実現せられ、昭和二十二年四月十五日には、公立中学が二七七校開校の運びとなったことは、驚くべきことである。私立学校としてもこれに従わざるを得ず、中学はいままで通り存続することとし、同時に高等学校を併設して、中・高一貫の六年制の学校をつくることとなったのである。

c　私立学校の深憂

私立学校における苦心は、急造バラックの修理とか、無理して建てた借金の返済のみにあるのではない。むしろ将来にわたって、はたして私立学校が中学・高等学校として存続することができるかどうかにこそ本当の心配があったのである。私立中学は、相当高い授業料をとらなければ経営できないのに、公立中学は無料である。その上、入学希望者のある限り市町村はいくらでも学校設備をととのえる義務をも負うている。私立中学が、公立中学とくらべて、よほど高い教育内容をもたぬ限り競争にならない。その上、たとえ私立中学が優秀であるとしても、はたして親が子どもを私立中学に入れるだけの経済負担能力をもつことができるかどうかが、第一の問題である。

私立高等学校についての問題もほぼこれと同じである。ただ一つ異るところは義務制でないという点であるが、しかし公立の高校が、学校全体の収容人員を今まで通りもちつづけるということであれば、――設備も教師もそれに足るだけのものを備えているので、これはきわめて当然のことでもあるが、――一学年の収容人員は七〇％の増となるのである。旧制中学は五年であるのに新制高校は三年であるから、そしてこの七割という数字は、松山においては旧制私立中学の収容人員と同じであるから、もし高等学校への進学者が戦前の中学進学者と同数であるなら、私立高等学校は存在の余地がなくなるはずである。たとえ戦後経済が戦前程度に復旧したとしてもそうであるのに、戦前経済への復帰が夢であるという見通しの当時、私立高等学校の運命はもうすでに定まっているといってよいのではないか。明治時代の私立中学の苦難の歴史を再びくりかえすのではないかというのが、当時の私立学校経営者の深憂であった。松山でも、公立学校よりはるかに低い先生の給与さえ支払いかねて、窮状を訴える先生のあるたび、校長夫人が家の裏口から質屋へ急いで足を運ばれたとか、給与の遅配を皆済するために、夏と冬年二回、校長が阪神・京浜の郷土出身の成功者を歴訪して援助を仰がれるとかいう悪夢のような年中行事を思い出す人もあったのである。

d　日本経済の崩壊と復興の予測

私立学校の前途の不安は、主として日本経済の将来への不安に原因があった。吉田茂の『日本を決定した百年』によると、戦争で失った国土は四六％、産業設備は四四％、都市住宅は四〇％、かくして昭和二十一年度の工業生産は、戦前の昭和十六年にくらべて七分の一にすぎなかった。基幹産業としての鉄鋼生産は二十分の一、石炭生産は朝野をあげての努力にもかかわらず八分の一、東畑精一がたび重なる吉田首相の懇請にもかかわらず、農相受託をことわったのは、食糧管理の専門家として、国民の食糧確保にどうしても自信がもてなかったからであると同書に書いてある。工場施設が賠償撤去される懸念とか、集中排除法による経済規制があって、大企業が手も足も出せなかったという事情があったにもせよ、まことに惨憺たるありさまである。その上占領政策の根本が、日本を最低生活に縛りつけることを大方針とし、戦前復帰など一切考慮すまいとするものであったから、経済の進歩はおろか、昭和十六年程度への復旧も望めないのでないかというのが一般の予測であった。

しかるにソ連の予想外の実力、昭和二十三年九月北朝鮮に、翌二十四年十月中国大陸に、共産主義政権が成立し、

その上二十五年六月には南北朝鮮の激突がはじまるなど、自由主義国米国を脅かす政治的材料が矢つぎ早やにあらわれた。そのためにわかに日本経済の復興と発展策が日の目を見ることとなったのである。しかしそのことがようやく人目につくようになったのは、昭和三〇年代に入ってからのことで、二十年代における前記の私立学校の深憂はきわめて当然のことであったのである。

e　私立の中学と高等学校の歩み

私立中学の存続は既述の通り難かしかろうと考えられていたのに、いざ蓋をあけてみると全国的に意外な結果があらわれて、私学側を驚かせたのである。少し基礎の充実した私立中学へは、小学校卒業生中の優秀者が殺到した。理由はかんたんである。公立中学は設備も先生も旧制小学校程度に止まるであろうのに、私立の中学は先生も設備も旧制中学校程度、つまり新制高等学校程度になるであろうという予測からであった。そして当初は事実もその通りで、公立中学と私立中学とでは、教育内容に相当の格差があったといってよかった。

しかし、そのうち公立の中学が設備もととのい、先生も経験を積んでくると、公私の差が追々に縮まってきた。その上私立中学に併設されている高等学校の評価に問題がある。もしこの高等学校が公立高等学校より相当に優秀でないという場合は、せっかく私立中学に入った優秀生が公立に転校するということも起きてくる。さらにまたその公立高等学校への転入学試験の成績が、公立中学卒業生と大差がないということになれば、私立中学への魅力は急に衰えざるを得ないのである。かくて私立中学の落潮は、昭和二十五・六年頃から追々顕著になり、この頃になると、全国でも中学を存続している私立の学校は、数少いこととなったのである。

松山は落潮が比較的おそく、昭和二十九年にはじめて中学の募集を停止する学校があらわれたが、しばらく様子を見ていた他の学校も、応募者が年々激減するので、昭和三十五年までには、東雲学園を除いて、全部募集を停止してしまった。

愛光学園はこのような私立中学の落潮期に発足しようとしたのであって大変な冒険といってよかったのである。

高等学校については、自分の中学の卒業生が入学してくることが予想されるので、少くも最初の三年間は全然問題がなく、ようやく影響があらわれるべき時期には日本経済の一般的復興が緒につき、高等学校への進学率が年々急速に伸びて来たので自然に問題が解消したのである。――昭和十五・六年頃の中学への進学率は一五～一六％に過ぎなかったものが、戦後、高等学校への進学率は五〇％となり、七〇％となり、最近では八〇％台にまで高まってきた。また松山市では終戦以来相当の人口増加がつづき、最近十年間の年平均の増加数は八、七〇〇人にのぼっており、これもおとろえる気配はない。これらはすべて根本的には日本経済の異数の発展から生まれたことで、愛光学園誕生期の昭和二十年代に予めこの趨勢を予測することのできなかったのは当然である。

第二章　創立の動機と基本的性格

学園設立の動機については、昭和三十七年十一月一日、十周年記念祭に当って作った「創立十年を迎えて」というあいさつ状に一応述べているので、それを再録することにする。また具体的教育内容については、昭和二十八年度第一回生徒募集に当って作成した「入学案内」に詳しいので、これをもここに再録しておきたい。

a　マルシアノ・デイエス理事長のあいさつ

愛光学園は創立十周年を迎えました。その間大過なく順調に発展し得ましたのは、歴代の生徒諸君の御父母の御協力、学園外より陰に陽に御支援下さいました無数の方々の御善意、また創立当初に示された旧城西学園理事団及び同窓会の御好意の賜と深く感謝しております。

私共修道会は七百年前に創設、開祖の名を冠して聖ドミニコ会と呼ばれる世界的組織をもつもので、清貧・貞潔・従

順の三誓願を厳守する点は他のカトリックの修道会とは変りありませんが、会固有の精神としてとくに真理を愛し、「真理の根源たる神への惜しみなき献身」を眼目としております。この精神のもとに聖アルベルト・マグヌス、聖トマス・アクィナスのような世界的思想家を生み、今もなおこの分野で活動しつつあります。

四百年の昔、切支丹時代には多くのカトリック宣教師が来朝し、当地の道後にも教会ができておりました。わがドミニコ会もこの日本伝道の壮挙に協力し、幾人かの壮烈な殉教者もだしております。明治になって、再び四国に布教を開始してから六十年近くになりますが、戦後愛する日本の混乱した教育界の再建の一助として、愛と光の道標をかかげて本学園を創立しました。「愛と光」、即ち徳性と知性との完成への練磨は、私共の会のみならず総ての人に課せられた義務であると確信し、この確信のもとに生徒諸君の教育に従事しております。

なにとぞこの私共の微意をお汲み下さいまして、十周年を契機としてなお一層の躍進を念願する本学園に、この上とも温かい御援助を賜わらんことを切にお願い申し上げます。

b　田中忠夫中学・高等学校長のあいさつ

わが学園の発足は昭和二十八年の四月一日である。しかし日本に男子の中等教育機関を献じようという構想がドミニコ会のうちに芽生えたのは、二十六年の五月十二日、スペインのアヴィラの修院においてであった。（中略）「愛光」の命名者はモデスト・ペレス師である。

発足当時、学園から松山駅に至る間には、製材所二ヶ所と、他に二軒の家とを除いては何もなかったし、道路は瓦礫まじりの焦け土をしいた凸凹道で、焼け釘が無数に散らばっていて、そのため自転車はしきりにパンクした。校舎は罹災後急造されたバラック建てであり、正面校門のあたりは、約二十五間にわたって焼け跡のコンクリートの基礎がそのまま残っていて、戦災当夜の悲惨を生々しく物語っているというありさまであった。

当時は生徒数百十一名、専任職員は、校長以下六人の教師と一人の事務員、応援講師四名という寂しい人員構成であり、専任職員も一人の例外を除いては、中等教育に全く無経験の者ばかりであった。その上はじめは、八百五十名の城西高女の生徒や多数の城西教職員と学校設備を共同使用したので、われわれ専用の室は、職員室をふくめてわずか四教室にすぎなかったし、教具や実験設備は何一つなかった。このような状態が、三十年度末まで続いたのである。市内の中高の学校もほとんど罹災校であり、みな充分な校舎や設備に恵まれなかったとはいえ、これほど徹底して無一物の学校は外にはなかったであろう。

しかし意気のみはきわめて旺んで、教師は明日を荷う愛と光の子を育てるのだと信じて感激をおぼえたし、生徒も亦世界的教養人の卵をもって自認し、英国のパブリック・スクールの日本化をその志とした。最後に付記した「われらの信条」の生れたのは、このような心意気からであった。男子中等教育界の競争相手は全国的であり、伝統に輝く優秀校が多数ある中で、あえて自己の存在を主張した姿は、よそ目には定めて滑稽であったと思う。当時を回顧して泌々井蛙の勇であったと思うのである。

かくて昭和三十七年度には定員増加も完成して、生徒数は十八学級一、〇七〇名、専任職員は校長以下四十一人の教員と九人の事務員、応援講師二名を数えることとなり、校舎と教具・実験設備も一通り形をととのえることとなった。まだ不備の点があるとはいえ、発足当時のことを想えば隔世の感がある。これについては設立者ドミニコ会、毎年度の生徒の御父母の御支援に心よりお礼を申しあげたいと思う。それとともに、学園を愛して有形無形の御援助を賜わった学園外の方々の御厚意に対しても、深く感謝せずにはおれないのである。

c　第一回入学案内　（昭和二十八年度）

一、本校教育の基本方針

1、高潔な、世界性のある人物を養成することを目的とする。

2、大学へ進む希望者を教育することを目的とする。

3、男女共学でなくて、男子のみを教育することを目的とする。

4、昭和二十八年度百名をもって中学校第一学年を開始し、毎年百名ずつ殖やして、六年後に中学校、高等学校の完成を期する。完成の上は、生徒総数六百名、十二学級の編成とする。

5、中学校と高等学校の六年間の学科の配当、授業の進度を計画的に編成して優秀大学への進学を期する。

6、中学校と高等学校とは一応別のもので、中学校卒業生は自由に他の学校へ行ってよく、又他の中学卒業生も本校高等学校に欠員のあるときは入学を許す。

7、学校専任の先生、及び学校の建物・設備・先生住宅等は、必要に応じて、おくれないように整備する。

8、学校必要の経費については、寄付その他これに類する御迷惑を父兄にはかけない。

但しこれに要する経費については、四国ドミニコ会が責任をもつ。

二、道徳教育としつけの徹底

1、本校は宗教を教えることを目的としない。従って聖書の時間や宗教の学科を設けないし、又礼拝の時間も作らない。宗教はもっとも内的なもので、外部からおしつけるようなことは、少しでもあってはならないと考えるからである。

2、社会倫理学科を設ける。

今後の日本人は世界の人と交わって、世界の人から尊敬を受けるようでなければならぬ。本校は世界に通ずる正しい道徳の基本原理を教えるために、社会倫理学科を設け、人格、識見の高い専門学者を配してその徹底を期する。

3、日常生活のしつけをしっかり与える。

しつけの正しさは徳を養う母胎である。日本の古いしつけの中から世界性のあるものを選び出し、日本に欠けているものを補って、新時代にふさわしい、世界に通用するしつけを、しっかりと与えて行くつもりである。

社会倫理学と、このしつけにより、視野の広い、清純・高貴・明朗・豪毅な世界性のある人物を育成する方針である。

三、優秀大学への進学を期する。

左表に示したように、旧松山高等学校の卒業生は、全員残らず旧制官立大学へ入学し、東京、京都の二大学への入学も、年々一〇〇名―一五〇名に上っていた。その中の二割―三割が旧制松山の中等学校の出身者であったので、松山人が年々三〇人―七〇人旧制官立大学へ入学していたのであり、東京、京都の二大学へも年々三〇人―四五人は入学していたのである。

その上左表に示すように、旧松山中学校のみの卒業生をとって見ても陸海軍の学校、旧官立の優秀な学校への入学者も相当多かったので、もしこれらが全部松山高等学校を志願したとすれば、この数はもっとずっとふえた筈である。ところが最近の松山の四高等の卒業生は、旧官立大学へわずかに昨年一名、本年十五名しか入学しておらず、東京、京都の二大学へは昨年十一名、今年は六名入学したに過ぎなかった。(中略)せめてこれを旧制松山中学校程度、できればそれ以上の成績に上げたいものである。そしてその可能性は十分あると確信するのである。

松山中学校卒業生の進学状況

学校名＼年度	昭和11年度	昭和13年度	昭和15年度
旧松山高等学校	37人	38人	54人
旧陸士・海兵・海機	8	14	34
旧官立高等専門学校	21	22	30
旧松山高等商業学校	46	35	49
早稲田大学(専門部を含む)	0	0	0
慶応大学予科	0	0	0
其の他高等専門学校	38	43	35
計	150人	152人	202人
卒業生徒数	226人	202人	241人
卒業生徒数との百分比	66%	75%	84%

そのためには

1 教授陣容の整備

2 中学校教育の尊重と、中学高等学校教育の計画的編成

3 基礎学科の重視

4 原理の理解の重視

の諸方策を徹底することが必要であり、本校はこの四点に特に注意を払う方針である。

(中略)

十一、現在決定の本校専任教員

職名	担任学科	出身学校	氏名	年令	職名	担任学科	出身学校	氏名	年令
校長	社会	東京帝国大学 現松山商大教授	田中忠夫	(54)	教諭	英語	米国シカゴ、フエンウイック大学及ウイスコンシン大学・元香港国際大学哲学講師	サルバドール・ルイス	(29)
教諭	国語	東京帝国大学	正岡二一	(36)	〃	倫理			
〃	数学	東京帝国大学	松野五郎	(35)	〃	社会	スペイン・ロザリビール大学	レオナルド・マリン	(44)
〃	理科	大阪帝国大学	河井豊	(34)					
〃	英語	津田英学塾 現松山商大講師	天野明子	(44)					

第三章　建学の精神

a　世界的教養人の育成

愛光学園の誕生は、実質的には昭和二十八年四月一日であるが、形式的には、学校法人城西学園が、学校法人愛光学園と名称を変え、法人の理事や評議員の人名が変わっただけのことである。私立学校新設の至難な当時にあって、このようにすらすらとことが運んだのは、城西学園関係者のご好意に負うところが多いので、この点深く感謝しなければならない。

学園創立にあたって、学園当局者がいちばん頭を悩ましたのは、学園の基本的性格をどうするかということであった。

学園当局者は、第一に日本の社会が男子中等学校に最も強く期待しているものを充たすこと。第二に日本におけるミッション・スクールとしての誤らない姿勢をととのえることの二つを基本的性格にしようと考えた。

社会が男子中等学校に期待している第一のことは、一流の国立大学にも入学し得るような深い知性と、世界のどこへ出しても恥かしくないような高い徳性を涵養することであると考え、これをわれわれは世界的教養人という標語で要約した。その内容は第一回の「入学案内」にも記しているが、さらにヒルティに従ってその基本的資質を列挙すれば、a、常に勤勉であること。b、魂の高貴なことである。高貴であるためには、少くも、イ、心がまえとして常に最高をめざすこと、ロ、利己心・享楽心・流行心よりの超越を志すことが必要である。かくて日本の旧制高等学校、英国のパブリックスクール的徳性と知性を備えた生徒を育てあげることを第一の目標とした。もしこの一点にある程度の成果を収めるなら、中学・高等学校の存続困難な教育事情の中にあっても、社会はその存在を容認してくれるであろうと考えたのである。

b　ミッションスクールとしての性格

この点については、入学案内に記したように、ミッションスクールとして期待せられる最低基準に止まろうと決心した。最低基準とは、

1、唯物論的無神論を排除すること。

2、有神論的世界観の基礎を培うこと。

3、キリスト教への善意ある理解を深めること。

の三点である。

さらに進んでキリスト教そのものを、学校の正規の課程に組み入れようとは考えなかった。元来キリスト教の提示する規範は、高邁かつ普遍・妥当性をもつもので、これを守ることの必要性はキリスト教徒たると否とを問わない。

「一般に文化の進歩か退歩かはキリストに近づいたかキリストより離れたかの問題であり、歴史の審判とはキリストよりの距離の測定に外ならない」というベルジヤエフのことばはわれらの信念である。そして、キリストの訓えに近づく最上の道が、キリスト教の信仰そのものであるというのもわれらの確信である。しかし、現在日本のミッション・スクールとしては、前期最低基準に止まることが正しい姿勢であるというのがわれらの信念である。その代り、もしこの最低基準にふれるという事態が発生したら、学園は自己の生命を賭しても戦わなければならぬと、覚悟しているのである。

c　実際の運営

第一の知的・道徳的人物の育成に関して学園がとくに力を入れたこと、また今後も努力したいと思っていることは、教師に人を得るということである。教育機関の良否を決定するものは、一に教師・二に生徒・三に父母・四に教育施設である。その全部のよいことはもちろん望ましいことではあるが、もし全部にたいして配慮する力がないというときは、教師にたいする配慮に専念すべきであるということを、学園運営の基本的心がけとした。それには教師にたいして、物心両面の敬意を欠かないということが基本であると考えたのである。

生徒については、頭もよく授業料も支払い得るという人を、松山市および周辺小学校において、平均一クラス一人と想定して定員を定めた。当初各学年を二学級としたのもそのためであり、次いで三学級、さらに四学級にしたのも、通学区域内の学級数がふえたことと、遠隔地よりの志願者がふえたからであった。

学校施設については、当初よりこれにたいする配慮能力無しとあきらめて、施設・機具は必要最少限で満足し、後は教師と生徒の創意と努力で補うという方針をとった。設立者たるドミニコ会が、本建築の校舎を建て、校具をそろえ、さらに寄宿舎をも建設されたことは、望外の喜びであった。

d　二十周年を迎えて

最近の世界的趨勢として、教育施設や教育機器の進歩には眼をみはるものがあり、一種の教育革命といってよいほどである。時も時、日本の教育界は新制度が一応の落ちつきを見せ、今や施設や校具の充実に力を入れるべき段階にさしかかっており、幸いにも経済の充実がこれを実現する充分の力を備えたので、この面での今後二十年間の進歩にはめざましい飛躍があるものと予測しなければならぬ。このような状勢の中で、今までの愛光でよいのかというのが、二十周年を迎えるにあたっての、学園の深憂であった。

教育成果の基本的起動力が第一に教師、第二に生徒にあるということは、昔も、今も、さらに将来にわたっても変ることはあるまい。しかし、これも程度の問題で、機関銃にたいして、槍や刀で立ち向えるものではない。少くも新設備・新校具を備えつけるだけの基礎設備だけは整えておかなければ、百年の悔を残すことになるのではないか。このような考慮から、過去五年間、学園はこの一事に心をくだいたのであるが、今二十周年を迎えるにあたって、どうにかこの悲願の達成せられたことは、喜びにたえないのである。

これについては、現理事団・現教師団の努力、現在ならびに将来にわたる父母会・同窓会の犠牲的な学校愛は記憶されなければならぬし、これを助けられた多くの公私の温かいご援助も長く忘れてはなるまい。

われらは一応の精神的・物質的準備と経験を背景に、今や揺籃期を終らんとしている。真の愛光の歴史、愛光百年史はこれから書き始められなければならぬ。どのような歴史が書かれるか、その将来を想うにつけても、内部生命の充実と、外部の温かい援助と、上よりの豊かなご加護を祈らずにはおられないのである。

対談

愛光学園創立の頃

愛光中学・高等学校長
田中忠夫

愛光学園初代理事長
カトリック松山教会主任司祭
ビセンテ・ゴンザレス

編集委員
島津豊幸（進行担当）
二宮一夫（写真担当）

学園創立の発端

編集委員　神父さん、お忙しいところをお出かけ下さいましてありがとうございました。今日は、校長先生の方から、神父さんの方に、創立の事情などを、色々お尋ねいただくという形式で、話を始めさせていただきたいと思います。

田中　この前の十周年記念の時に出した略年表に、昭和二六年の二月に、神父さまがスペインにお帰りになって、その時に、新しく管区長になられたサンチョ神父さまと、アヴィラの修道院でお会いになった時に―

ビセンテ　え、アヴィラです。

田中　そこで、学校をつくるという構想を、神父さまがおのべになり、管区長さんも、それはよかろうということになったのですか。

ビセンテ　はい、その時、管区会議がありまして、サンチョ神父さまが管区長になりました。

その会議には、ローマから総長さまもお見えになっていて、総長の前でも、この話をいたしまして、管区長も総長さまも、これは非常にいいことだといって、賛成してくれました。そうです、総会が開かれるすぐ前でした。

田中　ははあ、そうですか。サンチョ管区長さんが、管区長に選挙されなすって、すぐその後ですね。

ビセンテ　え、すぐその後です。

田中　そして、その時には、どういう風な学校ということは、まだきまっていなかったのですね。

ビセンテ　その時に、別に、はっきりとはきまっていなかった、ただ、男子のための中等教育の学校ということ。前から、私どもこちらにいる神父たちの間には、布教のためにも、非常に役立つものだから、なるべく早く、つくったらいいというようなお話があったのです。

田中　そうですか。で、こちらにお帰りになったのが、何月でしたか。十二月、それとも十一月でしたか。

ビセンテ　十一月でした。

田中　十一月にお帰りになって、すぐに、私にご相談があったように思います。

ビセンテ　えー、そうです。が、その前に、こちらの神父さま方に、こういうようなお話をじまして、意見を聞きましてですね、大体、神父さま方、そのプランに賛成しました。

田中　そうしますと、神父さま方の会合は、十二月上旬ということになりますか。

ビセンテ　そうです。十二月の上旬だと思います。

田中　そして、その後で私にご相談があったのですね。

ビセンテ　はい。

田中　で、その時は、まだ場所はきまっていなかったわけですね。

ビセンテ　はい、まだきまっていませんでした。でも、

つくるなら松山にというような、みんなの意見でしたし、私も松山につくりたいと考えていました。高松にもつくったらどうでしょうか。というような話もあったんですけれどもね。

田中　モデスト神父さまからは、徳島は学校が少いからどうだろうというお話も聞きましたですがね。私、数日考えさしてもらいました結果、教育熱心で、教育に金をかけるという点では、徳島よりも、四国では高知が第一、次いでは松山。ところが、高知には、すでに土佐校という名門校があるので、松山の方がよかろうとお答えしたのでした。

編集委員　ところで、そうしたことが決まったのは、二六年の十二月頃ではなかったですか。

ビセンテ　そうでしたね。十二月頃だと思います。

田中　そして、私にプランニングしろというお話がその時あり、翌年の二月にサンチョ管区長さまがおいでになるということがわかったので、プランニングをいそいでくれというお話が、一月にあったと思いますが。

ビセンテ　え、一月だと思います。

編集委員　私立学校設立については、どういう手続が必要なのですか。

田中　私立学校をつくるには、県の認可を受けねばなりませんが、知事に、その前に私立学校審議会の意見を聞かなければならないことになっております。そこで城西女学校の設立者でもあり。校長でもあり、また、この審議会の委員でもあった田村さんに相談しました。ところが、田村さんは、私立学校側では、松山には私立の中学・高等学校が多過ぎて、このままでは共倒れになるので、その中の二つくらいは少くしなければなるまいという意見が強い。だから、今、新設の学校をつくるといっても、とても審議会の賛成は得られまいというお話です。では、どのような条件をととのえれば賛成が得られるだろうかと尋ねますと、文部省の定めた学校設置基準に達しておれば、反対できないでしょうが、他の条件ではとてもという答えでした。ところが、この学校設置基準というのが大変な代物で、この基準に達している学校は、愛媛県には一つもないといったものなんですな。色々と相談するうちに、都合によっては、自分の学校を譲ってもよいという話になり、この線に沿った計画書を二月十七日にサンチョ管区長さんがおいでになった時、お見せしたのでした。

ビセンテ　はい、そうでした。

田中　そして、管区長さんご帰任の後、三月十四日のマニアの会議で決定して、すぐ電報をいただいたんですね。

ビセンテ　ええ、そうです。

田中　それでいよいよ具体案をつくることになりました。その当時、私は松山商科大学に勤めておりましたが、その夏休みを利用して、東京では開成・麻布・暁星・横須賀の栄光。名古屋で南山、京都で汝星、神戸で六

甲と灘を見てまいりました、こちらへ帰ってから土佐校へ行きました。という風で、大体こういう風な学校をということを申し上げたのが、八月の半ばだったと思います。

ビセンテ　そうです。八月でした。

編集委員　最初の設立というのは、具体的にはどういう風な経過だったのでしょうか。私立学校審議会の意見とか、県の認可とかは。

田中　私立学校審議会のメンバーには、私立中学・高等学校の校長さんが多いのですが、前にも述べましたように、私立学校が多過ぎるという当時の情勢からいって、新しく設立するのにはみんな反対の空気でした。それで、田村さんが、私立学校全体のために、自分が城西を譲ろうといってくれまして――。そうすれば、設立認可がいらないんです。内容変更ということで通るわけで。

編集委員　男子校に切り替えるということですか。

田中　そうです。城西学園という学校法人を譲り受けて名儀を愛光学園にかえ、この学園が一時女子の城西中学・高等学校と男子の愛光中学校を経営する。女子の募集をやめて男子のみを募集して追々男子校にきりかえる。それから理事も交替するということで、設立認可は必要なかったわけです。ですから、これは城西の好意がなかったら、できなかったですね。

編集委員　神父さんが最初に計画をもって帰られて、校長先生に話をもってゆかれたいきさつは。

田中　女子商業へもってゆかれずに、私の方へもってこられたということですか。

編集委員　いや、そういうことでもないんですが。

ビセンテ　そうですね。私どもの方から学校設立の根本的精神について、二、三回の会議が開かれました。その結果は、一般の教育の上でカトリックの精神に則り、また、ドミニコ会の精神に従って、道徳的な点に力を入れて、新時代の日本にふさわしい全人教育を青年たちに与えるということ。このことを学校の基本方針にしたい。この根本的なことについては、田中先生によくお話して計画もたて、校長も引き受けてもらう。その他、具体的なことについては、全て先生にお任せしようということにしたのです。

編集委員　はあ、そういう点では、校長先生以外にはないとお考えになったのですね。

ビセンテ　はい、その通りです。

初代校長となるについて

編集委員　それで先生が校長をお引き受けになったのですね。

田中　そうです。学校のプランニングがいくらよくても、運営は校長がしなければなりません。校長のことは早くから気になっていましたので、まだどなたからも頼まれてはいませんでしたが、視察旅行の帰りに、下相談のつもりで大阪府立の高等学校長をしていた私の友人に話しましたが、アッサリと断わられ、誰か無かろうかと聞いても、さあ、どうだかという重い返事でした。帰ってから、松山東高の校長をしていられた鞍懸先生にご相談しましたが、それはさがしても無理だろう。学校の設備は焼け後のバラック建てだけである。今後のことについては、建築についても、運営についても、経済的な裏付けが何もない。そのような学校で生徒募集をしても、果して生徒が集まってくれるであろうか。これでは足腰立つ者は来はしませんよ。停年退職で遊んでいる人でも、少し責任感のある人なら、苦労だけを背負いこみそうな、そんな学校には二の足をふみますよと印導をわたされて、これでは私が引き受ける外はないと思ったんです。

編集委員　資料で見ますと、田中先生を校長に起用することが公表されているのは、十一月十七日付になっていますね。連絡協議会の案内を発送していますが、その生徒募集の案内の最初に、城西の女子高を改革し、男子校にする、田中忠夫氏を校長に起用するということが記してありますが。

田中　私が校長を引き受ける決心をしたのは、実は昭和二七年の五月です。

編集委員　それは非常に早いですね。

田中　二七年の五月に、私の非常に懇意にしているクリセルというドイツ人の神父さんが松江におられまして、その神父さんの所へ、夫婦で相談に行きました。プランニングはできても校長はなかなかみつからないであろう。その時にはどうするか。なんとなく私以外には人がないのではなかろうか。まだビセンテ師からは何のお話もないし、具体的に校長をさがしたわけでもないが、鞍懸先生のご意見と同じような予感がありましたので、まさかの場合の覚悟だけはきめておかねばなるまい、そう考えての相談旅行でした。クリセル神父さんのお返事。あなたが死んで神様の前で裁きを受ける時、この学校を引き受けてよかったと思うでしょう。もし不安に思うことがあれば、条件を出して相談しておいたらよかろう。といわれましたが、私には条件はありません。もし教会に金がなければないで私が一番よいのですし、金があればあって、私が一番よいという自負らしいものがありますとお答えしたのでした。帰りの

汽車の窓から、中国山脈の山あいに咲いていたサツキが非常に印象的でした。校長を正式にお引き受けしたのは九月の始めだったと思います。人に頼み、自分、でも物色しましたが、どうしても見つかりませんので。

ビセンテ神父さまや、モデスト神父さまからは、一時でもよい、見つかるまでつとめてくれといわれましたが、校長を引き受けるとなれば、当時つとめていた松山商科大学をやめなければなりません。生半かな気持でお引き受けするわけにはゆきませんとお答えしたわけです。

なお、ビセンテ師からは、お前の引き受けるための条件は何か、自分の方にも条件があるというお話がありました。が、待って下さい、私には条件は何もありません、また神父さまからの条件も承わりたくありません。問題ができたら、その時その時ご相談しながらやって行きましょう。私は神父さまをご信用申しあげていますし、神父様も私をご信用下さっていると思っていますので、とお答えしました。これは五月以来の覚悟でしたからビセンテ神父さまのお部屋で、立ったままお答えしたことでした。

編集委員　松山商科大学の方は。

田中　すぐその翌日商科大学の学長に事情を話し、今年一ぱいでおひまを頂きたいと願い出ました。数日後、伊藤学長よりご返事があり、外ならぬ教会の事業のことだから了解しよう。しかし商科大学としても教授難の今日だから、両方を併任という条件でというご好意のあるおことばでありました。ビセンテ師にこの旨をお話して、こちらでもご了解を得たわけであります。

学園設立準備

編集委員　それから具体的準備に入られたのでしょうか。

田中　具体的準備といっても大したことはありません。事務の金井さんが十月一日から机一つを私の家の片隅に置いて事務をとってくれる。外部から時間講師の先生三人、専任の先生四人を見つければよい。河井君が正式に来てくれたのは十二月一日。しかし話は、女子商の土居校長から八月頃にあり、十二月には、生徒募集のため私と一緒に小学校を相当歩いてくれました。一月からは正岡君も来てくれて、三人で手分けして学校巡りをしました。

編集委員　それで、教会の方としても、具体的に何か準備されたことはございませんでしたか。

ビセンテ　そう、別に準備することはありませんでした。何人の神父が学校で教えるかといったこと。それからお金のことについては、管区の方にこちらから時々必要に応じて請求しました。向こうの方針は、初めに資金はこれだけ準備しておくというようなやり方ではなく、必要の時、その都度こちらから本部へ請求するということでした。

田中　大体は二月十七日に管区長さまが来られた時お見

せしたものが基本で、それ以外には余り請求しませんでした。建物は城西の既存のものだけでやってゆく。城西は十八学級、九〇〇人以上の学校であるのに、愛光は全部完成しても、十二学級、六〇〇人の学校ですから、建物には充分の余裕がある。

ただ、技芸を主とする女の学校のことで、理科設備は何もありませんでしたから、そのためにはとりあえず五〇〇万円の理科設備をする。その教室は、三教室をあて、その座板をとりのけてコンクリートの床にする。もし金がなければ借金してでも間に合わせようと考えていたわけです。

編集委員　生徒定員のことですが、その決定については何かお考えがありましたか。

田中　自宅から通学できる小学校の学級数が、当時の調べで六十四学級でした。高い授業料も払い、成績もよいという子が、一クラス平均二人はあるだろうというのが、定員二学級構想の基礎です。ところが、最初の入学者にも、八人の下宿生がいましたし、追々自宅通学以外の者の数がふえましたので、定員を増員したのです。

編集委員　学校の建築はいつからですか。

ビセンテ　第一回が昭和三一年度、この年の三月に城西の生徒全員が卒業して（残りの少数一学年は、済美で引き受けてもらいました）愛光生のみになりましたので、新築を思い立ちました。理科教室がこれでできました。

編集委員　そのお金は、本部からですか。

ビセンテ　はい、そうです。

田中　寄宿舎も、昭和三二年度には本部で建ててもらいました。

学園の発足

編集委員　神父さんが理事長をなさったのはいつでしたか。

ビセンテ　はじめからです。ドミニコ会の会長でしたから最初の理事長をも兼ねることになりました。

編集委員　二八年の四月に学校が始まった時、理事長として特に神父さんの印象に残っていることはございませんか。

ビセンテ　別にありません。新しく始まった学校ですから、いろいろと心配はありましたが、小学校から何人ぐらいの子供が来てくれるかということが一番の心配でした。その数を毎年管区本部に報告するのが一番の楽しみでした。はじめから先生方のおかげで成績も割合いよかったので、私どもとしても非常な喜びでした。それが一番印象に残ったことでしたね。

田中　生徒の募集については、学校案内の印刷が第一の仕事。第二は小学校の勧誘めぐり。これは先ほどの通り。

最初の年に、頭の良い子がどれだけ受けてくれるか、これが学校の運命の岐れ目と思っていました。最初に

良い生徒が入ってくれれば、本気で教えさえすれば必ず成績は上る。そうすれば引きつづいて良い生徒が来てくれる。その反対であれば結果も又反対になる。好成績の再生産になるか、不成績の再生産になるかは、最初の年の生徒によってきまるというのが、私どもの考えでした。

追々願書が集まってきて、毎日河井君が木切れを定規にしてそれを黒板に記しく行く。願書の数も予想外に多く、内申書も予想以上によい。願書締め切りの前前日、私の相談に行ったクリセル師と、その甥ごの上智大学のロゲンドルフ師に『わがこと成れり』と報告しました。

編集委員　応募者はちょうど二倍ですね。二二三名で一一一名をとったのですから。

最初に、開校式と入学式をいっしょにやっておりますが、開校式の印象はございませんか。

ビセンテ　最初は管区長さんも見えましたからね。

田中　いいえ、そのときではありません。

ビセンテ　あ、そうでしたねえ。

とにかく、あれだけの長い間の心配と、長い間の努力の結果が、うまくいったことがうれしくて、それが一番の印象でした。

編集委員　あれから二〇年ですからね。

ビセンテ　はい、もう二〇年たちました。

編集委員　最後に、二〇年というところで創立にあたられた神父さんとして、現在の本校に対するご意見やお考えを聞かせてくださいませんか。

ビセンテ　最初からもっていた希望は、一般の学校と違って、もっともっと道徳的・キリスト教的教育を与えるということでして……、宗教道徳の面で、もっとすすんだものになってもらいたい。この面では、思ったよりもおくれていると思います。これからこの面に力を入れてほしいというのが、私の最も大きな希望です。

田中　これはおそらくマニラでもそう希望しておられるでしょう。その点、まことに相済まないと思います。

ビセンテ　これが目的ですから、みなさん、よろしくお願いします。

編集委員　では、このあたりで終えさせていただきます。どうもありがとうございました。

〔この対談は、本年五月二一日に、旧宮西校舎校長室において行ったものである。〕

愛光学園父母の会の二十年

生徒・父兄対抗綱引（運動会にて）

開校当時の想い出

初代父母の会会長

金井滋雄

昭和二十八年の新春のある日、松山高等女学校での教え子幾人かと話していた時でした。元の松山高等商業専門学校校長である田中忠夫先生が私立の特殊な学校を創められるという事に関心をもち、私に、田中先生の教育方針を聞いてくれと頼むのでした。そこで、田中先生をお訪ねして、色々御説明を拝聴しましたが、要点は、男子のみ、中・高校六年間連続、大学受験を目標とすること、進学に対しては入学最初から特殊な方法をとる、というような事だったと思います。彼女たちに、その報告をしてお互いに話合った結果、賛成して子供を受験させることにしました。

入学式後、田中校長先生から、父兄会をつくって学校と家庭との連絡を密にするのが先ず必要だとの御希望があり、全員同意し六月十三日第一回父兄会総会を開き、役員を選挙した後、学校行事予定、その他を協議しました。

開校当初の先生は田中校長、正岡二一、松野五郎、河井豊、天野明子の諸先生で、美術・渡部、体育・岩本その外何人かの講師先生がおられたと思います。学校は、城西女学校と同居で年上の女の子がいたし、一方可愛らしい男の年下の子が同じ運動場にいて一寸変った風景でした。

父兄会を開いても普通教室で小さい生徒の机と腰掛に窮屈にして会議をいたしました。学校側から、毎日家庭で六～七時間は勉強させてくれといわれ、びっくりした顔をした人も大勢いました。一方、父母の方もいわれる通り、夜おそくまで勉強するのだからお茶くらいは持っていってあげなさいといわれていたので、忠実に実行していた母親も多数おりました。

勉学の方は左様なのですが、体育方面では、毎日駆足をするし、三橋喜久雄先生流の体操を行い、夏には野忽那の海辺でキャンプもしたし、又図画の方でも展覧会を開いたり、学問一本でない事を知り、安心しました。

進学についての学校の話を聞いていると東大・京大と国立大学の話だけが出るので、私立大学は受験させぬのかなあ、などという父兄もいました。横須賀の栄光学園・高知の土佐高・神戸の六甲等の学校の話を度々聞かしていただき、それらの学校へ先生・父母の有志も親しく参観に行き、感心したものでした。私も同行しました。土佐高の大島校長は以前からの交友のあった方で、私が四国バスケットボール協会長で高知市で行われた大会に来ている事を電話しましたら、是非自宅へこいとの事で、御厚情に甘えて一泊させてもらいました。

夕食を共にしながらの二人の話は次々と尽きませんでした。大島校長の言を聞いていると進学とか、有名校とかをのり越え、日本を背おう有為の士は土佐高が育てるのだという意気盛んなもので、大いに感動した記憶があります。

創立当時の思い出

第二代父母の会会長

中西直幹

昭和二十八年三学期、当時松山商大教授であられた田中校長が高浜小学校へ突然来られて、愛光学園創立のこと、昭和二十八年度の生徒募集のことについて勧誘があった。当時校長であった私は前年の十二月二十九日日赤病院で胃潰瘍の手術をうけ、一月下旬退院、やっと出勤をはじめたばかりであった。

戦後愛媛県の教育界は、米軍の占領政策の下スナイダーの派遣等々もあり、極度に混頓とした中にあって模索をつ

づけつつあった。即ち日教組活動華やかな時代で、戦後の民主教育もまだ板につかず、父母たちの自信喪失もあって、児童生徒の学力低下がひし〳〵と感じられ、精神的にも拠りどころ無きかの如き状況であった。この中で平素から現状教育にあきたらなく思っていた私は田中校長のお話をきいているうちに、我意を得たり、と心に期する所があった。当時児童の中学進学は地区へと言うのが、スローガンの様になっていて、校区中学校からの要望でもあった。

ところで、一校長として自分の子供を特殊な学校へ入学させることには多分に抵抗があった。早速東大在学中の長男に意見を求めたところ、世界的視野に立った教育を考え、且つ中央の大学への進学の愛媛の不振をも取りあげて入学をすすめてきたので、三男を入学させるべく決意した。さて入学式を迎えたが、前述の様な理由もあって式には帰省中の長男を代理出席させた。つづいて翌年四男が入学しお世話になったが、この入学式には私は退職したばかりで遠慮無用大手を振って出席した。戦後のあらゆる困難の中で安心して二子を託し得た幸福まことに感謝に堪えない。かつての日、異端視した人々も今は自らの子弟を競って学園へ入学させている現状だ。其の真価は県内のみならず国内に問われている。

思えば当初は古い木造の粗末な校舎であったが、田中校長を中心に諸先生方の教育生命をかけての御指導の下、生徒もあらゆる努力を積み重ね、父母も又家族的なつながりをもって愛光の名のもと団結して六か年の営みがつづいた。第一回の卒業生を送った日は又その成果を問われる日でもあった。

今唯感無量、師友をなつかしく思い出しドミニコ会の御支援に感謝を捧げ、今後も益々の発展と、卒業生の活躍に期待して擱筆する。

〔中西直幹氏は、本年九月十九日夜逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。——編集委員会〕

創立十周年記念祭のことなど

第四代父母の会会長
白石定義

十年一昔と申しますが、私が父母の会会長としてお世話になっていた時が昭和三十七年、丁度十周年記念式典が行われた年でした。宮西町校舎の講堂兼体育館（壁は破れ、正規の柱の外に、数ヶ所斜につっかえ柱を構えた、良くいえば質実剛健な、悪くいえば見てくれの良くない）で記念式典が行われました。当日の父母の会々長祝辞の中で私は「教育の真髄は建物の立派さに非ず、運動場の広さに非ず、諸設備の完璧さに非ず。此処に集う若き学徒の伸びるであろう、羽ばたくであろう、秘めたる優れたる期待される資質を備えた金の卵と、この資質を無限の領域に抽き出し天翔る大鵬たれと日夜真摯に教育に専念する、徳操識見共に有能なる田中校長先生並に諸先生を持っていることである」と父母の会を代表して、誇りと自信を以て述べたことを、今更のように思い出します。

当日、私の席の丁度まん前に、マニラ管区から派遣せられた管区長代理のスペインの神父さんがおられ、私が祝辞朗読を終り席に戻りますと、巻紙に書いた祝辞を読むほどに右側の方へ長々と垂らし読了後それを巻き直す状況をつぶさに見ておられたらしく、隣におった高松の田中司教さんを通訳として私に申されるには、「日本には大変便利な祝辞の用紙があるものだ。重宝なものだね」と言っておられるとのことで、私の緊張した気持が一変にほぐれ、管区長代理の神父さんとスペインにおけるスパルタ教育のこと、日本のカソリック系高等学校に学ぶ生徒の優秀なことなど、いろいろお話できて晴れがましく思いました。

あれから十年、今年は二十周年の記念式典が新装成った新校舎で行われる旨拝聴し、感概無量でございます。また

その間、日を追い年を経るごとに、学校の内容も充実し、大学進学の成績は逐年向上、中学マラソンは優勝または上位入賞を連続確保するなど、知育体育併進の実を挙げられつつあること、大変うれしく思います。この上は徳育面に於てなお一層向上し、在校生卒業生の母校に対する愛校心を昂揚するよう施策せられ、三育併進の姿で全国にその名を成す日の近からんことを望みます。

唐詩選の中に「樹木十数年樹人百年」という句があったように思いますが、「木を用材として使えるまでに育てるには十年の歳月がかかる。人間を立派に育てて一人前にするには木を育てる十倍の努力と十倍の年月がかかる」と諭して教育の至難な大事な仕事であることを教えています。本当に人間が人間として生きて行くため必要な知識技能徳操は、極わめれば極わめるほど底も深く範囲も広いようです。世の中が進歩すればするほど、文化文明は無限の領域に拡がっていくことがわかります。教養の香り高い紳士を育てるため、教育者・被教育者・父母、更には社会国家が一体となって教育問題に真剣に取組むべき時期が到来しているよう思えてなりません。

愛光学園の今後の御発展御隆盛を心よりお祈り致します。

愛光学園父母の会について

第六代父母の会会長

後藤　喬

愛光学園父母会は、一般の中学、高校のＰＴＡとは、いささか性格を異にしていると思う。それは、父母と先生のまじわりを通じて、平穏に、大過なく、子供の教育が行われる事を期待するというような、平均的な会ではなく、学園の理想と情熱に呼応して、父母会は何をなすべきかを激しく探求する父母自身の教育の場でもあると思う。父母会は、個々の授業、指導については、学園に全幅の信頼をよせ、いささかも不安や疑問を持っていない。授業は、科学的に、正確に編成され、また極めて高度のものであるから、子弟がこれに耐え得られるような環境作りを考慮しなければならない。このために、父母会自身、真剣に研究し、子弟と共に絶えず勉強しなければならない。そこには、妥協もなければ虚栄もなく、純粋な愛の魂の唱和があるのみである。愛光の教育方針を正しく理解し、熱心に辛棒強く、実践されている父母の子弟は優秀である。これこそ父母会の目的であり、真の姿であると思う。利己的独善的で、学園の教育理念に無関心な父母は、あらためて愛光の教育の原点にたちかえり、正しい認識と情熱をもって再出発すべきだと思う。

父母会には、学園で行われる定例の会合の他に、地区別父母会が、毎年各地で開かれている。ところが、残念なことに、松山地区は、いろ〳〵の事情で開かれていなかった。が、地区内の父母からの強い要望で、昭和四十六年十一月より、各分区ごとに開かれるようになった。此の会を通じて感じた事は、まことに、なごやかでうちとけたものであり、一層突込んだ話し合いができた事と、同地区内の父母同志の横の連絡と親睦に、極めて役立ったという事であった。とくに子供を一流有名校に入学さすという事は並大抵な事ではない。一家をあげて協力し激励しなければ、目的達成は困難であることを痛感されたと思う。

最近、痛感していることは、世界は動き、人生も複雑であり、価値観の変動も大きく、この複雑な世の中で、子供の将来を限定したり束縛したり、あるいは性急に判定することは賢明ではないということである。愛と智に満ちた、幅の広い、厚みのある国際人を送り出すために、父母会が一致団結して進まれる事をお願いしたいと思う。

父母の会あれこれ

第七代父母の会会長
須賀　清次郎

愛光学園も創立二十周年を迎え、衣山の広壮な新校舎に移転されることになりました。おめでとう存じます。愛光も現在は、一応、学園としてのスタイルも決まり、一般社会の評価もそれにふさわしく、私立学園の優等生として、平穏なコースを辿っているように思います。

父母会という題を与えられましたが、先ず憶い起すのは、草創時の父母の活動です。創立の当初、私は、田中先生が校長になって、カトリック系の、秀才教育を施す六年制の学園を作られるという噂をきき、市民の一人として、非常に興味をもちました。当時は周囲の状況も今とは随分異っており、日教組のはなやかな頃で、教育の均等化、具体化などとなえられる一方、学力の低下がなげかれているときで、愛光学園の創立は、丁度池面に一石を投じた状態であったからです。したがって、学校も、父母も世評に耐えるだけの内容のある学校を作るためには、各自が自ら責任を担う気構えで、子弟の薫育・勉学に熱情を注いでおられたようです。生徒も同様です。いわれなく仕掛けられる他校生徒の暴力にも涙をのんで耐えている姿を、みききして、よそさまのことながら切歯扼腕したこともありました。厳しい校規をよく守り、その中に将来の栄光を期待していたように思います。

私が後藤さんのあとを継いで会長になったのは昭和四十年だったと思いますが、もうこの頃は、話に聞く創建時の我を忘れた熱情というようなものは感じられませんでした。学校を信頼し、教師に期待するという風潮でした。父母の気持は大学入試につながる学力の増進に焦点があったようです。私なりに、学園の安定化、生徒数の増加、他の県

下公立高校の進学成績の追い上げなどが、ここに定着したのではないかと思った次第でした。父母の方々は、学校の要請には全く協力的でした。しかし、関心は深く、父母会委員がいつとなく、母親から父親に代っていったことが、印象深く思い浮びます。私は会長として、ただ流れに乗っていただけであったことを申訳なく思っていますが、在任中、教師の視野の拡大、新風の導入の意味から、教師の内外留学制度を会の事業として提案しました。実のらなかったことを一つ残念に思っています。

新しい革袋は用意せられました。盛るべきものは多いと思います。愛光学園の再出発をお祝いし、御発展をお祈りします。

ある年度の卒業式

第八代父母の会会長
冲　永　善五郎

私が任期中他の会長の方々が出く合せられなかった事柄の一駒を綴って責めを果し度いと思います。昭和四三年頃より「学生運動」という記事を新聞で散見する様になりました。当初はこれは大学と学生との間の事柄で、第三者の余り関知しない事位に世の一般も無関心でした。血気に漲り目的の為めには他を見向きもせず猪突猛進する若者が、政治に頭を入れる事は生き甲斐中の生き甲斐で、まるで革命児気取りで暴れ回り、其の周囲に拡がる速さも早く、燎原の火の如く益々勢を得て、猛火の如く都会より始まり瞬く間に地方の大学に押し寄せてきました。彼等が後続部隊を求めて年齢のあまり変わらない高校生に呼びかけて来るのも当然でした。愛光に於ても四四年頃より服装の改革を

手始めに授業中にも造反の態度が現われて来たようです。「造反」の語は中国文化大革命の時壁新聞によく見られた語の様です。長髪並に服装の事と私も父母の意見者として学校へ出向きましたが、実際は服装の改革は一つの云いがかりで、次に生徒手帳の改革等何しろ既成の物を根本から破壊する事が目的の様でした。愛光学園の学生運動の頂点ともいうのが四五年二月の卒業式でした。私は卒業式が午前十時からとの事で九時半頃学校へ参りました処、校門の入口で道路の境に一線を画して先生方職員の方々と例のヘルメット覆面の大学生とが対峙の構えでした。式場へ入場迄校長室で校長先生他の役員の方々と話して居る間も、周囲からのシュプレッヒ・コールとか云ってメガフォンを用いて盛んに学校側の今迄の姿勢を弥次り、卒業式をボイコットする様生徒等に呼びかけて居りました。其の内総代が周囲の圧迫のためか答辞を読む事を辞退して来ました。其後一部の生徒が卒業式に出ず、近所のお宮で集会デモをした事は新聞で報じた通りでした。私は医師でありますので病気に例えるなら、特に麻疹の発疹発熱期に当った頃の状態でした。子供がはしかに感染致しますと、約二週間の潜伏期の後発疹期に移ります。其の時は頭の先から足の先迄赤い発疹が体全体を被い、結膜炎、鼻炎、口内炎、気管支炎、腸炎等々体の到る所を侵襲し、特に幼児が高熱と発疹の為呼吸困難に呻吟して居る様子を見守って居る親は、此後良く堪え続けるものであろうかと云う不安に襲われる事と思います。校長先生と対面して居りまして、焦操と不安のお顔色を見まして心中如何許りかと思いました。然し今から思えば、其の時周囲の圧力とジャーナリズムの煽り立てに負けて、知名の大学教授又は名門校と云われて居た高校の責任者が媚びる迄に学生側に迎合して、あたら地に堕ちた例も少なからず有りましたが、流石に田中校長先生はカソリックで鍛えあげられた立派な御人格と、長い教職生活から体得された豊富な御経験に依り、一筋の指導哲理を堅持され（学校全体の先生方の御協力は勿論の事でありますが）毅然として我が道を進まれあの未曾有の難局を切り開かれました事を、子供の御世話を願って居る父母として、心より感謝し喜んで居ります。やがて嵐は去り風は静まり、委員会等で学校を覗きますが、現在は昔通りの平和な学園風景が取戻されて居ります。本年は愛光創立廿周年とか、其の規模に於て設備に於て斬新雄大な新校舎の建設が行われて居るとの事、此後愛光に益々幸多からん事を祈りまして筆

を置きます。

昭和四十七年二月十五日

迷わぬ愛光

第九代父母の会会長（現）
埜下禮世

次男が中学に入れていただいてからの五ヶ年のあいだで、最も印象に残っているのは、一昨年の学園騒ぎです。このの発端となった東京大学をはじめとして、全国の殆んどの大学が、いたずらに手をこまねいて嵐を大きくしたあげく、部外者の応援によってやっと辻褄をあわせましたが、それらのなかにあって愛光学園では、はじめから毅然とした迷うことのない態度で解決をつけられました。ことに当って迷うことのなかった姿勢には、教育という仕事に本格的に取り組んでおられる人たちのみもつ自信の裏付けを感じさせられます。

社会や経済のいろいろな事象が、異常なスピードで移り変り、それから起る混乱のために教育会にもあれこれと迷いが見受けられるなかにあって、創立後の二十年間を、『世界的教養人の養成』という香り高い旗じるしを掲げて迷うことのなかった愛光の存在は、まことに貴重なものと思われます。

さきごろのある父母の会の席上で、田中校長先生がスピーチをなさいました。「愛光は創立当初の苦労を乗り越えたあと、二十年近くなってから第二の試練を経験したが、この障害を克服した只今からみれば、まだ七十年や八十年は大丈夫のようです」ユーモアたっぷりの座談のなかでの一節なのですが、このお話には、単なる学校経営能力につ

いての自信とか、或いは大学入試の好調の実績などといったことよりも、より次元の高い建学の理想についての誇りや自信を感じさせるものがあります。

そのつもりになって「世界的教養人の養成」を見直しますと、学校が創立されたころ部外者であった私にとって、少々難かしかったこの言葉が、二十年経った只今の世相のもとでは大層すんなりと受けとめられます。受けとめかたがいささか皮相であるかもしれませんが、旗じるしにはますます重みが加わっているように感じられます。

創立二十年と学園の移転という記念すべき年に、たまたま父母の会のお世話をおおせつかりました。不徳未熟でありますだけに、ひとしお責任の重さを感じておりますが、なにはともあれ、二十年間迷うことなく前進を続けてこられた校長先生以下学校御当局と、学園の移転という大事業をなんなく成し遂げてゆかれるカトリック聖ドミニコ会とに対して、心からの感謝をささげます。

この機会に紙上をお借りして一つ二つの提案をさせていただきます。立派な施設が出来上りました。このあとには立派な先生に定着をしていただかねばなりません。若い先生方に視野をより広くしていただくために、海外研修のチャンスをもっていただけぬものでしょうか。現在の学校や父母の会の会計のなかでは、長期留学はいささか荷が重すぎるようですけれども、夏休み利用などの研修旅行でしたら、なんとかやり繰りがつきそうな気がいたします。ちなみに私の長男がライオンズクラブの交換学生として、昨年の夏休みの四週間をアメリカのクラブ会員の数家庭でお預かりいただきましたが、そのときの費用は、おこづかいも含めて三十万円でした。研修旅行の訪門先で、カトリック系の施設を利用させていただくことができるものなら、なんとかいけそうです。入れ替りに先方の先生がたを私たちでお世話をしてもよいではありませんか。

いま一つは学園に巨きな樹木を、ということです。大樹はそのまま学園の歴史と伝統を語ります。もの言わぬ大樹を見上げるとき、青年たちの胸のなかで、夢や希望が大きく成長するもののように思われます。樹木を育てるのには長い歳月の風雪が必要ですが、それだけに植樹のスタートは一日でも早いことが望まれます。

一父兄から愛光学園へ

父母の会委員　井上　薫

愛光学園が誕生して二十年、光陰矢の如しと申しますが、月日の経つのは早いものです。世界的教養人の育成を目標に、田中校長先生はじめ諸先生の日夜御精進された御努力が、幾多の困難を乗り越えて、子供を持つ親の心の中に、県内は勿論、遠く県外からも、愛光へやりたいという気持を起させる学園に発展していったものと思います。

この度、創立二十年を迎え、山紫水明の地に、理想の学舎を建設し、八月には移転される由うけたまわっておりますが、誠に慶賀の至りに存じます。私も三人の子供が大変お世話になり、また学園父母の会の御世話をさせていただき、数年になろうとしております。数年間一父兄として外から眺めた愛光学園の感想やらお願いを、一言のべさせていただきたいと思います。

中間体操について

私達戦中派の中学の頃を想いうかべてみますと、将来の希望は時代の趨勢により、市ヶ谷か江田島を目標にする者が多かったように思います。私もその一人として東京で約四年間、文武の道に悔のない青春を送りましたが、その中に共通したことが愛光学園にみられたことです。

八年前、長男が学園に入学し学校参観にいきました時、上半身裸体の中間体操を見て私の頭の中にふとよみがえったのは、過去朝霞と座間で起床と同時に上半身裸体で生徒舎の前に整列して、乾布摩擦や体操をしたことでありました。関東の冬は零度以下のことも度々あり、武蔵野の北風は仲々の寒さです。また士官候補生として北支大原に参った時、昭和十八年十二月でありましたが、零下十五度のもとで八人の同僚と共に、裸で体操をいたしましたが、同じ兵営にいた兵隊が驚異の眼で私達を眺めておりました。私が今日強健であるのも四年間の裸体体操が大変有効であったように思われます。

校長先生に中間体操の由来について尋ねましたところ、やはり戸山学校の体育専門の方から指導を受けたということを聞きまして、大変結構なものと思っております。心身の鍛練、気分の転換に有意義なものと思いますし、今後も是非続けていただきたいと思います。

医学部へ進まれる方へ

創立二十年にもなりますと卒業生も多く、それぞれ社会に出て指導的な立場に立って地域社会に貢献されていることは大変よろこばしいことであります。私は専門が

医師であり、医師として、医学に進まれる愛光生の皆さんに一言申し上げます。

最近特に医学部の入試が難かしくなったように聞いております。入学者をみると浪人が六～七割、現役三～四割のようで、他の学部に在学中の者や卒業した者も医学部を受験する傾向がみられるようです。採用人員がまた少いということもありましょう。ところでその難関の医学部へ進まれる方に私が望みたいことは、生活が安定するからというような理由で、安易に選ぶのではなく、まず何よりも、強健な身体の持主であってほしいと思います。医療という仕事は体力なくしてはつとまりません。

今の若いものは

—第八区支部総会より—

父母の会前副会長　仲田清尚

「今の若い者は一体……」、何時の時代にも古い世代は、新しい世代をこう観るのかもしれないが、今の若者をとりまく社会環境には、それなりの重大な原因があるように思われる。

著しく巨大化した現代の社会機構は、個人の機能をあまりにも細分化し、果ては個々の人格を無視し、人間に自己喪失の意識を生じさせるであろう。又、史上空前の「豊かすぎる社会」は、反って若者に、力を尽くして欲望を獲得しようとする努力を失わせ、虚無感をさえもたらして来るであろう。こうした複雑な社会環境に育つ若者の心理を、益々不安定にする今一つの大きい原因として、余りにも多すぎる無責任とも言える情報が彼等をとりまき、目から耳から彼等におしせまって来ることを無視する事も出来ないであろう。更に加えて人間関係の遮断、親子の断絶が、その若者を更に孤独においやるであろうし、自由主義は放任主義にすり代り、無干渉、無関心に発展すれば、最早若者は何をよりどころとして選べいずれ医学希望の皆さんが、医者になって初めてぶつかる心の迷いは、体力の問題ではないでしょうか。医師の平均寿命が厚生省の統計と比較して、五年も低いということをみてもわかります。身体の弱い人は此の道に入っても、真の医師としてそのつとめを果せないと思います。

特に体力の養成に留意願いたいと思います。学園におかれましても、現在の中間体操などで充分とは思いますが、今後とも御検討いただきたいと思います。

最後に校長先生初め諸先生の御健康と学園の益々御発展されますことを祈って止みません。

ばよいのであろうか。

こんな疑問を持った昭和四十三年、学生運動の記事が紙上をにぎわし、子供に対する家庭教育の重要さが強調され、教育過熱時代に静かな反省が求められてきた頃でもあった。熱意あふれる第八区の委員さん方におされ、田中校長先生始め諸先生方の深い御理解と強い御支援を戴き、父母の会第八区支部総会を開くべく、卓を囲んで策をめぐらし、会員父母に呼びかけたのも、今は遠い懐しい思い出となった。以来回を重ねて四回、総員に近い出席率、過半数をしめる父親、多数の父母揃っての出席等、今尚喜ばしい記憶が残っている。学年別懇談に、全体会に、時には、先生、父母の間に、熱心のあまり激論を戦わす場面も現われ、共々に「うちの生徒、うちの子供」の為に、教育のあり方を論じあう、涙する程に美しい場面を見て来た。そこには学校経済後援会的ＰＴＡの姿はみじんもなく、躾のＰ、教育のＴ、一体の尊い姿Ａを見せた。

「今の若い者は……」と言う前に、現代の社会環境を作り出した古い世代の人間が、今一度自らの足跡をふりかえっている姿であろうか。

思うままに

父母の会委員　小野孝一

いささか旧聞に属するが、かっての愛媛県知事が、「高松高校一校の東大合格者数は、全愛媛のそれに匹敵する」と言って当時話題になったものである。東大だけが大学でないのは勿論である。しかしながら難関中の難関であることも間違いない。だからその合格状況が高校に対する一種の評価尺度にはなる。知事の真意は香川教育の後塵を拝することを潔しとせず、教育界全般に奮起を要請したものである。当時愛光学園は発足後、歴史が新しく、まだ実績で答える状況でなかったと思われる。

今年（昭和四七年度）もまた三十名ラインを超えて全国ランク二十位を連続堅持した。今なら知事は、「愛光高校一校でオール愛媛を凌駕している」と言うのではあるまいか。大時代めいた表現に、「俊秀雲の如く集まる」というのがあるが、今、愛光に集う県下・近県の英才も漸くこのような潮流を作りあげつつあるように思う。校風の故に英俊が蝟集するのか、俊才雲集して校風をなすのか、因果相関していずれとも断じ難いが、不動の伝統が形成されつつあることは心強い限りである。それかあらぬか、県下高校の一流大学合格者が増加しているのも、

「愛光」が指標校としての実質を示しているからであろう。

私が客観的に愛光学園を眺めていた過去のある時期に、一時ドーナツ現象があった（新居浜だけのことかも知れないが……）。市内の中心的小学校から愛光進学者が減少する一方、新市域よりの志望者が増していった。その原因する所は面白い考察材料となるが今は省くことにしよう。現在は再び旧市域よりの進学者が増大している。愛光学園の教育実績が再評価されて来たのである。そして、わが子を愛光学園に托して、わが学園として身近く垣間見た時、まことにたのもしく思っている。

学校教育の範疇を云々する前に、私たちは激動する社会の中に凜然として生き抜く魂の育成をこそ学校にお願いしたい。とうとうとしてうつり行く社会の進運に眼を奪われて、脚下を忘れては穴を失った豬になってしまう。自分の城をもつことが如何に人間として大切であるか、主義に眩惑されず、深く培われた人間性を以て処生する人こそ万古変らぬ理想像ではあるまいか。学校教育は不変の徳性と可変の知育を培う修練の場であってほしい。古くして新しい学校教育を、比較的教育諸条件に恵まれた愛光においてこそ、最高度に行なってほしい。

親として知る限り愛光の教育は共感を覚える。行事の一つ一つにたぎるような教育の意図がうかがわれる。二十年の愛光教育関係者の鏤骨の跡が偲ばれただ敬服に堪えない。が、『隴を得て再た蜀を望む』は世の常であり、愛光に望む親の願いでもある。

愛光は二十年の歳月を経て、その真価を世間に問う（そのつもりはないかも知れないが）。燻し銀のような歴史である。その歴史の中に師弟同行の足音がとどろいている。喚声がどよめいている。それは生きた歴史である。愛光史三十年、さらに四十年へと愛光のたくましい歩みを続けてほしい。パブリック・スクールのように苔むすまで愛光の栄光をうち樹ててほしい。

時あたかも学生の政治的過激運動が、野火の如く火の手をあげている。この子等の親はわが子に精神的糧を与えなかったのかと憤りを覚えると同時に、生徒不在の教育がなかったかと出身校への疑惑を禁じえない。わが愛光こそは、歴史の続く限り、師弟同道の愛光、師弟哀歓の学園であってほしい。新しい校舎が建つ。それが古びた時、その一本一草にも、心耳を澄ませば生徒のどよめきが潮騒のように聒く、心の故郷・ハイマートであってほしい。

愛光よ、永遠なれ。

創立二十周年を祝して

父母の会委員　村上光夫

学園が満二十才になった。創立以来、理事、職員の方々の卓越した指導と父母の協力、生徒の努力によって学園は優秀な卒業生を多数有名大学に送り出し、年々内容を充実して、ここに、新天地を求め、近代的設備の校舎を建築して、躍進の移転を実施することになった。誠にめでたいことである。

二十年の歴史と伝統が育てた愛光生の人間像を私はこう思う。

まず、学問に志すものの気品というか風格がそなわっている。私は五年前、子どもが入学した頃、トーマス寮を初めて訪れた際、私の質問に答えてくれたある生徒の印象を今も忘れることができない。私の方をまっすぐに見ている澄んだ眼、簡潔だが礼儀正しい言葉、私はこれが愛光なのだなあと思った。そうしてその生徒にある憧憬のようなものを感じ、私の子どももこんな生徒になってくれるといいなあと思った。社会の急激な変動の波は、学園にも容赦なく押し寄せて来て、幾度か生徒の中に、愛光生らしからぬ行動をとるものがあったようであるが、私は二十年の長い間に培われた愛光精神は決してゆるがないと信じている。

次に、学園には学問を楽しむ雰囲気が漂っている。学問以外のつまらぬことに心を左右されたり、時間を奪われたりすることなく、学問に精出すことを自分の本分と心得ている。生徒個々の眼はいつも学問探求の理想に輝やいている。しかし学問は楽しいことばかりではないと思う。楽しくなくても、計画的に「考え」「記憶」しなければならないことが沢山あると思う。苦しさにうちかつ学問の「きびしさ」を知った計画的学習こそ重要なのではなかろうか。

最後に学園での体操のあり方がすばらしい。これも五年前のことだが、六月のある日、機会あって二階の廊下からみた中間体操が実によかった。上半身裸の千数百の若人のかたまりが、四列縦隊で「たっ、たっ」と足音高く、砂煙をあげて整然と運動場を回る駈足行進の見事さ、堂々と男らしく、まさに壮観であった。その後、幾分方法は変わってきたようであるが、この裸中間体操が今尚存続されていることは頼もしい限りである。放課後はいつも誰かが汗を流し、我を忘れてバスケットやサッカーを楽しんでいる。天気さえよければ、毎日少しずつ、そこにいる誰とでも、自由にグループを組んでスポーツに打興じる。しかも決してやり過ぎず、適当に汗を流して

気分の転換が出来れば「さっ」と部屋に帰って勉学に打込む。いい習慣が身についている。

以上が私の感じている学園の生徒像である。少し買被っているむきがあるかも知れないが、私は学園の生徒が好きである。列車に乗っていても、どこかちがう感じをもった愛光生、校長先生はじめ諸先生の「教え」を貪欲に吸収し、学業に磨きをかけ、愛光精神を一層高めて、二十周年を意義深い年にしてほしい。

愛光生頑張れ

父母の会委員　山崎恒夫

先づ創立二十周年を祝います。いろ〳〵と私学経営の難関に出逢っても、ゆっくりと山道を登りながらこうとも、ああとも考える間もなくあわただしく過ぎ去ったことと思います。一口に二十年と言っても短い様で長い試練の毎日、よくぞここまでと賛美の詩を捧げたい気持です。私たちは単なる委員ですが、学校側としては物心共に父兄になるべく負担をかけないで今日に至り、そして新築まで漕ぎつけた苦労、その中から有能なる学生を次々と送り出した努力、これはなんと言っても学校当事者の不撓不屈の精神の現われ以外のなにものでもありません。教師同志が手をとりあってこの喜びを、そして又建設の喜びを遠慮なく味って下さい。

二十周年についてペンを取ったものの何か自己流の散文になりそうですが、私のとりとめもない話の一つでも参考になれば幸いと思います。立派な論説の間のオアシス程度に読まれたし。原稿は締切すれ〳〵になりそうなので息子は心配そうに横で見ている。一般に親の権威も消費経済の隆盛と共におとろえ、家庭での格も下り、地震や雷と共におごった昔を偲んで孤独感に落ち込んでいるとか。しかし矢張り父親は貫録のあるもので「腐っても鯛」息子と意見を言い合い、励ましもし、叱りもし、反省もさすのは母親よりも父親の様です。

最近「断絶の時代」などときびしい言葉が言われていますが親子共その言葉におぼれている様で毅然として断絶追放を推進すべきです。ただし過保護は禁物であり、又ぜいたくも慎むべきです。ぜいたくと言えば職業柄常に見受けますが最近の学生は一般的に金の有難味を知らなさすぎる。なんとか良い方法はと考えているのですが……。

何かと欠点の多い環境を救ってもらえるものの中に、「親友」の存在が浮び上ってきます。学生時代に良き友

達を持った者は一生幸福です。大きな財産の様なもので遠慮なく忠告され、励ましもされて、断絶、ぜいたく、又大学生活でしばしば耳にする長期欠席も解消することとなります。私たちも同期会がしば〳〵開かれお互いの健康を祝していますが、クラスが違ったりしてさほど親交を深める機会がなかった者でも、同期生であると言う親近感から口角泡をとばして共通の諸問題を論じ合って、心の温まる友情を感ずるものです。クラスの者が病気で休んだことにより自分の成績の順位が上ったことを喜ぶ様な学生は将来社会の指導的地位に立つことは出来ないし、又その卵の愛光生には特に慎しむべきことだと思います。よい意味の競争は必要ですが、病気見舞に行って授業の内容を説明する様な気分こそ将来大成する要素の一つです。愛光卒業生のうしろには国民がいる、ということを忘れないで欲しいものです。卒業生が次々と植えつけた気風即ち「愛光生は真面目だ。立派だ。好感が持てる」と言う校風を今後も持続して不動のものとしていたゞきたい。卒業生も年浅くとも今や社会の中堅として大いに活躍しています。三十周年、五十周年と迎えるうちに「偉大なる愛光」と言うものが大きく浮び上ってくるのは必然的だと言えましょう。

愛光掌篇

父母の会委員　飛田吉一

愛光父母の会に加えていただいてから十年になる。と云うことは、宮西町愛光（こんな呼び方はいいのかどうか）二十年の歴史の後半を知っているに過ぎない。

戦前、現在の愛光界隈には松山技芸女学校というのがあり、それに隣り合せて、今の運動場の辺りは師範学校の農場であったと思う。ともかく、この辺が市街の西限で、三津街道から西山までは、もう田園でドブ川が流れたりモンシロチョウが飛んでいたりした。

愛光の設立は、サンフランシスコ平和条約が成立した頃から心ある方々によって考えられたのではないかと推測される。『生徒手帳』の『愛光略史』によると、「昭和二十八年四月、愛光中学が発足した。生徒は二学級一一一名。教師は校長以下六、事務一、応援講師四名というささやかなもので、校舎も、戦災バラック三室を用いた。経営主体は、学校法人愛光学園、法人の中心はドミニコ会員。このドミニコ会員の寄付によって、創設、運営されて、今日に至っている」とある。

当時はやっと独立はしたものの、すべてが闇中模索の態であった。しかし、国の前途・平和・文化といったことについては、一般が現在などよりも真剣に考え、模索した時機であり、それだけに愛光の誕生は、たといそれが小さなものであったにしろ、教育界の惑星として注目されたのは勿論である。愛光関係者は（生徒諸君を含めて）先ずこの創校に対して謙虚な心をもちたいものだと思う。此処に勇気をもって一粒の種子を落とす人がいなかったら、今日の愛光はなかったのである。

私は愛光一期生の落藤という人を知っている。月に一回くらい私的な会で顔を合わせ、時々は愛光の話をする。創校当時からの先生方のことが多い。彼は京大出のエンジニアだが、今は今治市でタオルを造っており、余暇に小説を書く。構成のしっかりした無駄なくおさまった作品である。比較的無口で、素朴で謙虚な青年である。もう家庭を持っているらしいが私には青年に見える。本人は迷惑だろうが私は身近かなこの人を愛光の歴史が産んだ青年の様な見方をしていることに気付いて苦笑する。そして落藤さんの様な人が次々と巣立って、この猥雑な世間を少しでも清々しくしてくれたらと願っている。

長男を愛光に受験させようかと思ったとき、私は田中校長先生のお名前以外は何も知らなかった。それに村から進学した者もまだいなかったので家内を参観させた。家内は真剣な授業や中間体操のことなどを私に告げた結論として、すっきりしたいい学校でしたと言った。人間性をゆたかに――など称えながら、怠惰な人間を作っている現状に腹を立てていた私は、かなうなれば長男を入学させたいと考えた。そして次男をもお世話いただく結果になったのである。憾むらくは両名ともに豚児であったが、これは学校とは関係がない。一人お世話願って、更にその弟も――という父母は案外多いのである。

愛光が制定している校章を染め抜いた黒の大風呂敷がある。木綿の手応えがしっかりしていて、惜し気がなく大変便利だと思うのだが、生徒諸君があれを提げているのを見かけない。安っぽいザックを負うたり、ナイロン・バッグを提げていたりする。フィーリング、ルックス、プロポーションといったことに、我が愛光生も――と勘繰りたくなる。まあ、黒の風呂敷は措くとしても、こんな一片の言葉で大切なものが忘れられたり、葬られたりするのは断じていけない。在校生諸君が、ペラペラなものを捨てて、ぐっと手応えのある確かなものを追い続けてくれるよう祈らずにはおられない。たとい西衣山に移っても――。

父母の会座談会

父母の会の草創期と現在

日　時　昭和四六年十二月十二日
　　午後三時一〇分～同五時
場　所　松山市三番町　料亭桃太郎

出席者

中西　直幹（第二代会長）
藤川　郁三（第三代会長）
白石　定義（第四代会長）
森　　勲（第五代会長）
後藤　　喬（第六代会長）
須賀清次郎（第七代会長）
冲永善五郎（第八代会長）

埜下　禮世（第九代会長）
武智忠次郎（前副会長）
白石　通明（　同　）
谷水　規浩（現副会長）
田中　忠夫（校　長）
河井　　豊（教　頭）

編集委員会

島津　豊幸（司　会）
中村　一省（記　録）
平岡　光雄（設　営）
今村　　章（写　真）

司会　今日はお忙がしいところを、この父母の会の会の座談会にご出席下さいましてありがとうございました。今日は、係りの方から、すでにお知せいたしておりますので、ご承知のことと思いますが、父母の会の今昔といったところで、皆さんのご忌憚のないお話を伺わせていただけたらと思います。私、司会役をつとめさせていただきますが、司会者と皆さんとのやりとりというのとはちがって、皆さん方お互いに、自由に問題や質問をだしていただいて、自由に話しあっていただくということで進めていきたいと思います。まず、校長先生、一つ口火を切っていただけませんでしょうか。

第一期生の募集

田中　私、中西さんを見て思い出すのですが、ここ（愛光学園）が生徒募集にかかったのは、昭和二七年の十二月八日に、市内や温泉郡などの小学校の先生にお集り願って、創立のことをご報告してからでした。それまでは、どこの小学校へも出かけなかったのです。その小学校訪問の時、中西先生は高浜小学校の校長をしておられましたが、私が参りますと、開口一番「先生、私らのところで、あなたのところへいくようなのは一人もおりませんぞ」と、かんで吐き出すようにいわれて、これは大変だぞと思って非常に悲観して帰りました。各学校ずーっと廻って歩きましたが、大てい同じようなご返事が返ってきました。はたして生徒がきてくれるのかどうか、非常に疑問に思ったものです。十二月になってからですかね、河井君がきてくれたのは。

河井　はい。

田中　十二月に河井君がきてくれて、二人で廻ったんですが、どこへいっても、はなはだ悪い。ところが、いよいよ締め切り間ぎわになって割合志願者がきまして、結局二二三人。二〇〇人近くなったとき、我がこと成れりと思ったものです。それまで、どこへ行ってもみなそんな風で、中西先生ほどニベもなくいわれた人はありませんでしたが（笑）、なかには、会うてくれない校長さんもありました。その時分は教員組合の非常に強い頃でしてね。それもあってか、校長も教頭も、六年担任の先生も、会うのは会うがといった学校がほとんどでして。これはあかんのじあないかと非常に心配したものです。

中西　私は、田中先生がおいでた時分に、そうは申しましたが、子供は、この学校によこしましたんですよ。第一回に続いて弟を第二回に…。というのはですな、どうも普通の小学校なり中学校なりが不安なのです。これじゃあ、なんぼにも東大あたりには、はいれん思いまして、続いて二

人もお世話になったんです。金井先生が初代の会長さんをやられ、おやめてから私があとを継ぎまして、今度は私が松山市内や伊予郡あたりの学校なんかに勧誘にまいることになりました。勧誘にいって、今度は私が悪いわれる方になったんです。愛媛県で一人や二人しか東大に入れんようじゃあかん思いましてな。その後、ご承知のようなぐあいで、まことに結構なことじゃと思うとります。

司会　今、創立前の状況をお話しいただいたのですが、その頃は、まだ本校の評価も定っておらず、お子さんを入学させるに当っては、色々と不安がおありになったことだろうと思います。ほとんど無名に近い学校におよこしになられたご父母の気持などを、お伺いしたいのですが――。武智さんあたりいかがでしょうか。

武智　はじめに愛光ができるいうんで、新しい学校じゃから受けてみい、とうちの坊主にいうたら、ほなやろうちうて、息子が、東雲小学校へいていうたら、同級生がわれもわれもいうて、志願者が六人できたんです。それで、正月にわたしの兄（愛媛大学教授―編集部）がきたときに、愛光ができるいうがどんな学校じゃろか、ときいたら、あれやってみい、校長さんがええし、先生も自分が知っとる正岡君と河井君がおるから、ええ学校になる、是非やってみい、相当力いれてくれるじゃろうけれ、といわれましてね。それで、いよいよやることになったんですが、さあ、今度は通るかどうかわからんいうて大変でした。大街道あたりでは、一時受けるのをやめとったのが、また受けるいうて、みな自分とこへ教師などつれてきて勉強しよる、結局、東雲からは、六人うけて五人うかりました。（森勲氏到着）

田中　そうでしたか。

武智　ええ、五人通ったです。卒業したのは六人です。K君が高校から編入しまして。ま、色々あって、さあ卒業するようになって、ええとこへいたと息子にいうたんですが――。

司会　昭和三四年ですね。第一期生の武智君が卒業したのは。あの第一期生を送りだしたときに、大学進学という点で一応の成果があがったといえると思うんですが、その三四年以前と以後とでは、お子さんを本校にお寄こしになるご父母の気持に、何か変化といいますか、たとえば、初期の方々は非常に不安であったが、後になるほど、大学進学という点で学校に対する信頼が増してきたとか――。

白石（定）　あの、私の友人で中学、高校と同期だった桑原君のお子さんが二期生ですね。

司会　そうです。

白石　これは、お子さんをいれるについては、ほんとに

不安があった。受けさそうかどうしょうか、と随分迷われた、けれども入れてみて、先生が非常に熱心であったし、その後の子供の様子をみると、非常によく勉強する、これは入れてよかったということをいっておられました。実際、大学進学に対する確たる実績もないので、不安であったということを聞きましたですね。

私どもの子供（六期生）が入るころは、丁度、高Ⅲができたところでして、入学式の校長先生の最初の訓辞で、これで一応全学年をととのえた、今年は、はじめて大学を受験する、それについては、いろいろな考えもあって、前年度、高Ⅱの時に予備校へ集団入学をさせた。そういう試練を受けてきたのが、高Ⅲとして受験するのだから、その成果をみておって欲しい、という風なお話で、この入学式のお話が、われわれはじめて入れたものにとっては、期待のもてるようなお話でした。

田中　たいへんえらそうなこというとったもんですな（笑）。いざフタをあけてみて、案外なと思ったでしょう。

司会　二期生が、また、一期生よりも飛躍した合格成績をあげましたですね。

田中　そうです。桑原さんあたりからは、一期生にばかり力を入れて、二期生ははせだにしておるいうて、いつもお叱りをうけていましたが。

六年生教育への期待

司会　大学進学ということで、これまでお伺いしたんですが、それ以外に、なにか、別の角度からの期待といいますか、草創期は勿論、現在でも、大学進学という以外に、なにか愛光に期待するといった点はございませんでしょうか。

藤川　私は、教育熱心な皆さんの中にぽつんと入ってるようなんですが、校長先生が中学の恩師でして、校長先生を存じあげているだけだったんです。お世話になりました子供は三男でして、長男も二男も東京におりました関係から、三男も暁星中学などにすすめられました。が、どうも、エリートというのは、あまり自分のハダにあわないものだから、東京へは進ませなかったんです。ところが、附属小学校へやっておりました三男を、家内がどうしても愛光へすすませるんだと申しますもので、家内にまかせましたんです。

そうですねえ、私のところの子供がお世話になった時分の愛光生というのは、後ろから見ても、愛光生だということがすぐわかったですね。町を歩いておりますときにも。また店屋へ入っても、ちゃんと帽子をと

って挨拶する、これを下さいというて、ありがとうございましたといって帰るんですね。田中先生は、まあ、なんとよく子供をしつけているんだろう、と思いましてね、私、その点に、非常に共感をもちましたですね。それから、もう一つ思い出すことを申し上げますと、あの始業のベルが鳴ると、階段の途中であろうがどこであろうが、直立不動の姿勢で黙想するということです。私自身はもともと不信心ものなんですが、そういった風な子供になってくれるのだったら、ということで、是非子供をお世話していただきたいと思ったですね。実際、あの時分の愛光生の姿というのは、いまだに目に残っておりますですね。

白石（定）　私は六年制の中学高校が連続していることに関心を持ちました。実際、中学三年から高校一年というのは、年令的にいって十五歳か十六歳でしょう。体力・気力・智力、すべての面で、一番充実してくるといいますか、一刻千金ぐらいの値打のある時期だと思うんですが、それを一般の公立校では、新制の中学三年でぶったぎりまして、高校へいくと、また中学三年のおさらえみたいなことを一学期くらいはやる、という風なことで、非常に大事な時期を無駄にロスしているような感じをもっていました。そんな無駄をなくするような六年制の中学高校ができるんじゃないかなあと思っていた矢先、東京あたりでどんどんできてきたのを、愛光でやるということなので、私は、非常にその点に期待を持ちまして、これはいい学校ができたという感じをもちましたですね。

司会　今、お二人の会長さんから、愛光生のイメージと、六年制一貫教育という点で、貴重なお話を伺ったのですが、現在のお父さん方はどのように見ておられるか、その点を一つ、後藤さんあたりから……

後藤　私も実は、長男（八期生）が愛光へ入りますときに、私の友人が、松山東高校で先生をしておりますし、その他二・三の友人がおりますんですが、いろんな機会に話し合ってみました、愛光へいくと勉強々々で勉強ではきたえられるが、人間形成という点で難点があるんじゃあなかろうか。また、

非常に勉強がきついので、体を損なう恐れがあるんじゃあないか。この二点をいろいろいわれて多少の危惧はありました。ですがお世話になってみまして、全くその心配がなく、かえって、健康の方は非常に元気になり、人間的にも非常に、教養を身につけ、幅の広いものができました。よく考えてみますと、先ほど白石さんがいわれましたように、人間というものには、人生というものには、区切りが心要なわけで、中学・高校六年間というものを、きたえきたえ、いわば磨かれるといいますか、いろんな意味で、非常に得難い時期じゃ

あないかと思いますね。そういう風な、やはり、人生には一時期があってもいいので、このような時期は、愛光の中学高校時代を過ぎれば、恐らくもうないんじゃあないかと思いますね。それに、非常に清らかでまた厳しく、また尊い、そういう時期が、この六年間にもてるということは、これは、なにものにもかえ難いと思いますね。

司会　どうもありがとうございました。時間の間係で、今のお話に関連して、あとお一人だけお願いしたいのですが――、現在の会長さん、沖永さんいかがでしょうか。

沖永　私、長男（十期生）が入りまして、そのとき、学校の「生徒手帳」を読ましていただいて、実にすばらしいものだと思いました。私らが中学生時代に一番優秀なのは海軍兵学校へ行っていましたが、その海兵の諸制度を、たとえば、五分前の準備だとか、思考の集中だとか、といったことを同年配のものから聞きましたが、校長先生がお作りになったんでしょうけれども、そういうものが、全部網羅されていて、実にすばらしい、これから進んでいく若いものの指針だと思いました。そして、ちょうど私がこういう役につきましてから、日本の学

校史始まって以来の学生運動といいます。、改革の動きが起りまして、その後、実は、二男が高校三年でお世話になっておりますんですが、長男のときのようなのが望めないのが残念でございます。つまり、愛光というものは、エリートというのではなくして、あらゆる生活全体において、他の高校をひきはなしていたと思っていたのが、どうも一般の渦に、といいますか、足を引っぱられて平均化したというか、他の高校となにもよりわけられないような、藤川さんがおっしゃいました愛光生のイメージはなくなったのではないですか。それに一般社会の目といいますか、愛光生への関心も変ったといった感じですね。

司会　イメージダウンといった感じですか。

沖永　そうです。今ちょうど移行期でございまして、世論がだんだん学生運動からはなれまして、もとの状態に帰りつつある、といったところで、この際、昔の愛光の失ったものをとり返していきたいものですね。

草創期の父母の会

司会　ありがとうございました。昔のイメージをとりもどして欲しいというお話がでたところで、また話題を草創期にもどしたいと思います。

創立当初の父母会事業報告などをみて一番気がつきますことは父母委員会・父母会といった会合がしょっちゅう開かれているということですね。つまり、学

校と父母の会とが、非常に緊密に連絡をとりあって、やっていたという点が印象に残るんですが、そういった点で父母の会の思い出などをお聞かせ願いたいんですが……。お手許に資料として最初の規約をお配りしておきましたが、それによると、父兄会になっておりますですね。名称はどうでもいいようなものの、当時は、ほとんどがＰＴＡといっていたのを、あえて父兄会としたところに、なにかそれなりのお考えがあったと思うんですが。そのあたりのところを、河井先生。

河井　これは校長先生です。校長先生が案をお作りになったと思いますが、栄光ですか、どこかのを参考にして作られたのであろうと私は思っとるんですが。栄光でございましたか。

田中　栄光よりも、あれは六甲でした。ＰＴＡというのは先生も入るんです。学校のことだから、先生は当然入るべきものでしてね。ＰＴＡは理クツにあうまいと思ったんです。Ｔが入るのは当然なんで、特別にＴを入れる必要はあるまいと思ってました。六甲学園が父兄会であったかどうか、ちょっと確かでないですが――。それから、父兄会の兄を母にかえたのは、実情からいって、兄にきてもらうということはないんですね。兄さんというなら、姉さんも書かねばならない、それなら実情にあわせて、父母会とすべきだということが、どなたからかでまして……。

河井　始めは、どっかの規約が父兄会となっていて、必ずしもＰＴＡというなにを追うのではないということで、父兄会というなにで作ったように思います。それで、第二回目か三回目のときに、父母会という前名にかえておりましょう。

司会　はい、第二回の父母総会のときです。

河井　そうですか、なにかの話し合いをしておるときに、お母さん方がぬけるのはおかしい（笑）という意見がでましてね。それで校長先生が父母会という恪好にかえられたと思います。最初は実にいいにくい感じをもちましたがね、一年くらいするとそちらの方が、ピンとくるような感じをもってきて、自然と父母の会になったように思います。

須賀　現実の問題として、お母さん方のほうがたくさん集まっておられたのではないですか。

田中　そうなんですよ。

須賀　恐らく、私、他からうかがって、そういう感じをうけておりました。ずっと以前のことなんですけれど、私の知ってる古い父母会の方が、お母さん方が非常に熱心で、愛光々々といって、お母さん方が出向いておられる、ということをいっておられましたね。恐らく、そういう空気がもとになったのではないですか。

田中　実際そうなんです。例えば制服は一応こしらえましたけれども、これも制服委員会で自由にご検討を願う。夏の帽子（登山帽）は、親ごとの相談の上できめましたし、その他いろんなことについて、ほんとに親ごにご相談したのです。親ごのご意見というのは、非常にたくさんあって、そのために、たびたび集ってもらった。記録してあるのは、正式に集った会だけですが、ちょっときていただいたりなんかして、ご相談したようなことは、たくさんありました。

河井　それとあのう、父母の会規約を校長先生がつくられたときに、父兄会という名前で出した、ところが、第一回のご父兄がみられて、先ほど中西さんがいわれたように、ＰＴＡというのに、少々抵抗を感じておられた人が多かった、というところとよくマッチしたように、私は感じたのですが――。審議をするときなど、非常にスムーズに、父兄会ということで……はい。

森　あの、附属小学校では、父母と教師の会といってました。当時は、ＰＴＡが大はやりで、どこの学校でもＰＴＡ。今、須賀先生がいわれたように、実際は、お母さん方が強い、父兄会では、もうちょっと陳腐で現実離れがしているといったところではないですか。父兄会から父母の会になったのは、一つの進歩なんで、現実味をおびてきていいと思いますよ。

河井　これは、今、司会の方が指摘されたように、委員会その他が非常に多かった、しょっちゅう、父母の方が学校にこられて、そこでなにもかもいいたいことを校長先生にいって帰られる、だから、いつの間にか、校長先生の頭の中に、父兄を父母にかえなければならないということができておって、たまたま、つぎの総会のときに、ということで変ったんでしょう。

田中　今、思い出しましたが、一番はじめに私は父母の会というのを考えてたんですが、ちょうど六甲のをみますとね、そこが父兄会になってるんです。誰かから意見があって、別に異を立てなくてもいいのではないかということで、父兄会になったと思います。しかし、やってみると兄はこない（笑）。実質はひとつもない、それじゃあもう、母を入れようかということになったんです。

禁下　私がおうかがいしたかったのは、そういう形とか名前ではなくて、校長先生のお話を時々うかがいますと、なにか他の学校とはちがう、他の学校ですと、父兄が、親が、余り叱られんのですね。ところが、ここへきますと、それはお父さんの責任、お母

さんの責任ですよ、とぴしゃんとやられるので……。

田中　そんなこといっていますか。

埜下　はい、どうも、親の責任ということをはっきりおっしゃるような、そんな感じをうけるんです。それで、なるほどなあ、今まで学校にもたれ過ぎておったのかなあ、といった反省を時々いたします。それで、なにか、校長先生は、父母の会というのに、特別の重みをもっておっしゃってるんじあないかと思っております。

田中　そこまでの意図はないんです（笑）。

父母の会委員の学校視察

司会　初年度には、ご父母の方に、土佐高へ視察にいっていただいていますね。それから二年度は、東京班・神戸班というようにわかれていっていただいていますが、その学校視察について話して下さいませんか。神戸班の方に中西さんががいっておられますね。

中西　はい。

司会　その時のことをひとつ。

田中　あれが二年目ですか。

司会　二年目です。その時は灘校ですか。

河井　六甲高と灘高です。

司会　調べてみますと、この場合、旅費実費支給ということで、かなり厳しいですね。

田中　その頃は、父母会費も安かったですから。そんなに費用はないですよ。ほんとうに手弁当ですね。

中西　生徒をみたんですが、ここの生徒と同じようでしたが、あそこの方が、少し厳しいようで、成績なんかも張り出しとったように思います。

田中　ははー、灘ですか六甲ですか。

中西　どっちじゃったですかな。

河井　この時、中西さんとご一緒にいったんですが、中西さんが私にいわれたことをひとつ覚えとります。灘高でしたが、あそこの数学をみて、河井先生、この上数学をしぼられんぞな、いうて、私にいわれたのを覚えとります（笑）。

司会　三年目には、東京班として藤川さんが行っておられるんですが――。

藤川　はい、私が学校のお世話にひっぱりだされて間もなくのことで、愛光自身のこともよくわかりませんで、そんな時、正岡先生に連れられてうかがったのです。駿台の予備校とそれから日比谷高校と横須賀の栄光と、暁星へは、道を通った記憶はあるんですが、学校の記憶はありません。私自身、そういう点に詳しくないものですから、格別これという印象を受けた覚えがありませんが、栄校へ行きました時に、校長先生に、私は父母会の派遣ということでいったのですから、ひとことくらいはうかがっておかなければと思って、父母会と学校の方針ということについて、どういう風なかみ合わせをなさるのかと聞いたら、ドイツ人の若い方でしたが、なにも学校の方針に父母会の容喙は許しませ

ん、私はこういう方針でやります、ときっぱりいわれたですね。今にして思えば、やはり、ドイツ人らしい発言で、何の仮借するところがあろうという風な語気でございました。

日比谷での印象は、ほとんど予備校化したような感じで、格別学校としての雰囲気の感じられなかったのが異様でした。駿河台の予備校は、ただもうつめこんでしまって、後ろで立ってきいているのがいる、窓側にもたれながら半分眠っているのがいる、これじゃあしようがないなあいうて皆で笑ったんですが。……。

司会　武智さんが二年度に神戸の方へお行きになっておりますね。

田中　あれは奥さんでしょう。武智さんところは、たいてい奥さんでしたから（笑）。

司会　そうですか。その件で、奥さんからお聞きになったことはございませんで。

武智　あれが帰ってきた時にね、灘高へいったんですが、愛光ももっとやらないかん、いうたのを覚えとります。

司会　こういう風に、学校視察まで、父母会の方々にやっていただいて、新しい学校をつくりあげていくというような、非常に緊密な協力体制ができあがっている事実のなかに、草創期の一つの特色があると思います。

父母の会と学校

司会　では、このあたりで、その当時の本校でなにか具体的にご記憶になっているようなことを、お話し下さいませんでしょうか。

藤川　私の記憶に非常に強く残っておりますのは、今、それをそのままあてはめるのは無理だと思いますが、教員室で先生の態度が非常に真剣だったということですね。もう、ほんとうに神さまかと思うたです。ほんとうにあの時分の先生方は、職員室にいつうかがっても、新聞種の話をしているときがない、いつでも、いかに学生を育てていくかということなんですね。そのまじめさ。そんなのは、小人数で塾的雰囲気が、そういうことにしたんでもありましょうし、勿論、これは、一般的ないい方をすれば、先生のご人格がそういう風であったことによると思うんですが、そういうものが非常にいい影響を体質的に、学生さんたちに与えたんじゃあないのか、だから、河井先生は非常にこわい先生だったのですけれど、河井先生くらい好かれた先生はなかったろうと思いますね。そういった風な、塾的な気持のつながりが、一期生二期生の人間形成に、非常に役立っているのではないかと、私は今でも思っとります。

司会　そういう風なところが、ご父母の気持を直接学校の方へ引きつけることになったのではないかと思いますが――。

藤川　はい、確かに、その通りと思います。だから、私は、子供よりも、私自身が、愛光へよせていただいた

ことで、改められたと思います。

司会　その当時からおられる先生として、河井先生、なにか――。

河井　私がコワイというのは、父母がこしらえた伝説ですので（笑）。

田中　ようおらぶのは、おらびよりましたよ、河井君（笑）。

河井　私は、本性はそんなになんではございませんので――。

武智　そやけどね、愛光の生徒は、ほんとうにこう道徳的な感じがしましたね。自転車に乗っている後ろ姿を見ただけで、、はっきりわかりましたね。

田中　この頃、そういうイメージがこわれてしまったといわれるんですが、実際、私もそう思います。今は全然こわれてしまっている……。

藤川　今はほとんどわかりません。

森　それは、長髪と関係があるんじあないですか。長髪を許可したのはいつからですか。

田中　一昨年からです、一昨年の九月からですね。

森　私、一向しりませなんで、電車などで見ますと、愛光生にちがいないのに、髪を伸ばしている、その髪が帽子の下からはみ出している。が、他校の生徒は、アミダにかぶっているのに、愛光の生徒は、髪がはみ出しながらも、帽子はまっすぐにかぶっている、やはり愛光はいいなと思ったんですが……。

田中　この頃は全然いけません。

司会　話をまた元へもどしますが、学校のイメージを作りあげていく上では、ご家庭あるいはお父さんお母さん方の学校に対する協力が、非常に大きな力になったと思いますが、この当時、運動会などの特別行事のときに、お母さんがでてこられて、飴湯などの準備をされたようですが――。

田中　あれはいつまで続いていましたか。生徒の数が多くなってできなくなったのですが――。

藤川　武智さんの奥さんなんか、よくなさったんでしょう。

武智　何年くらいまでですか。うちの子供が中学三年生くらいまでしたか。

司会　そういうことが、学年がふえ、生徒数が多くなって、不可能になったということでしょうか。

田中　不可能でしたね。その時は、自由に飲んでいいということで、特別な釜を幾つもこしらえて用意したものです。

武智　飴湯は生徒には評判よかったですなあ。

司会　海浜キャンプにも、ご父母にいっていただいて、炊き出しその他をやっていただいたのではないですか。

河井　第一回目は、現地（野忽那）のご父母三名に手伝っていただきました。原料はこちらで調達して、北条から特船で運びましたね。

田中　その後も、ご父母から申し出があったのですが、

余りにも仕事が多すぎるものですから、第二回目から、主として寮の方にお願いしました。幸いに寮ができましたものですから。

司会　第二回の入試の時には、ご父母にお手伝い願ったという記録が、「学校日誌」にあるのですが、非常に緊密な協力関係がありましたですね。

藤川　その当時のブロック会に出席した感じでも、そうでしたね。とくに、校長先生から、その地区の生徒一人一人について、色々聞かされるんですが、それを聞かされることで、おやじたるもの真剣にならざるをえなかったようですね。

　それが、こんなに大人数になって、なかなか、ブロック会も続けられないのでしょうが、私などの感じでは、是非続けて欲しいと願いますね。

平岡　現在は、復活しまして続けております。後藤さんの会長さん時代からでしたか。松山周辺の三津・伊予市をはじめ、南予の八幡浜・宇和島・東予の三島方面にも拡大しております。

河井　道後・東雲・石井地区が早くから始まり、他では、潮見・久枝・北条地区で、四、五年目頃から始まっておりますね。

藤川　私どもの頃には、先生のご日程がなかなかとれませんので、その上、余計なご負担をかけることになって申し訳ないと考えながら、それでも、親ごさんの希望の方が強くって、ついつい先生にお願いして、続けていただいた覚えがあります。

田中　道後地区ですね。何回ぐらい続きましたか。

藤川　三回ぐらい続いたと覚えております。

　それに関連しまして、私、思い出すんですが、たいへん皆さんが熱心で、ついつい時間が遅くなって、十二時近くなったことがありました。それで、先生に車で帰っていただいたんですが、お車代を、ご負担かけてはいけないということで、運転手にその旨いって渡しておきましたんです。そうしたら、どうしても、その先生がとってくれなきあ降りないといわれてですなあ、運転手が代金を別にいただいて帰りまして、私は、皆から集めた車代を、皆さんにお返しするのに困ったことがありました。あれは、どの先生でしたか、はっきり覚えてないですけど、そんなことがありました。

田中　そうですか。それが、最近は、人数も多くなり、校内の仕事が多忙になりましてなかなか思うようにゆきません。しかし、皆さまのご指摘の通り、これではいけないという空気もできていますので、おいおい変ってゆきましょう。

平岡　そうですね。今年あたりは、父母会の地区会も大分盛んになりまして、全県で、十五か所開きました。

藤川　そうですか。ご父母の皆さん、お喜びでございましょう。

平岡　ええ、もう。ご父母と教師とが膝をまじえてですからね。学年別に、時間は、一時間半ということにし

ているのですが、とてもそれでは終ってくれません。時間を過ぎても、終らせるのに一苦労です。

藤川　そうでございましょう。それが、学校ですと、やはり思っていることの、その十分の一もおたずねできないですね。それが、先生に地区においでいただくと、気安くおたずねができますので、大変、喜んでいましたですね。

田中　この頃は、そのようにしましても、一ヵ所で七〇人とか八〇人になりまして、皆さんにひとことずついっていただくことがなかなかむづかしい状況です。

藤川　そうでございましょう。

田中　それだけに、もっと盛んに開かなきあいけないと思いますですね。

制服と制帽とフロシキ

司会　父母会の地区別懇談会の話が続きましたが、このあたりで、最初の制服決定の経緯とか、ついこの間の頭髪問題における父母委員会の状況とかに、話題を移していただきたいのですが。

田中　最初に制服をどうするかというので、父母会に服装委員会をつくってもらって、視察もしたり、研究もしてもらいました。ある方は、土佐校が服の袖に一本白線を入れていて、生徒はこれに誇りをもっているのでこれを入れたらどうかという提案をされ、六甲を視察された委員の中には、学習院と同じあの服がよいのではないかというご提案もあり、とも角何か変った服装論が相当でました。ところが、元陸軍士官でおありになった白井さんが、服装は普通のものが一番よいので、とくべつの服装を考えることは邪道であると喝破されてこの正論に従うことになりました。しかし、白井さんは、夏帽は現在のような登山帽を強く推奨され、これは陸軍の長い間の経験と研究から生れた英知だから、ぜひそれにするようにと説かれ、全員それに賛成されて、最初の年からこれにきまりました。普通帽では日射病になる危険が多いのだそうです。

この夏帽については、第一回生が中学三年になった時に、非常な反対がありまして、他の学校と同じように、普通の学生帽にしてくれ。理由は一途に他の学校が着ていないからというのです。たとえ日射病で倒れても、それは自分なので、先生に迷惑をかけるわけでもないという、一応もっともな意見でした。しかし、これが合理的な健康帽であること、新らしいものを育てるために、世間の習慣に反抗する勇気をもってもらいたいこと、親ごさんの服装委員会全員のご意見でもあることを述べて、納得してもらいました。

司会　その頃は、公立中学では、制服をきめてなかった頃でしょう。

田中　そうですね。ことに、夏の制服というのはありませんでした。しかし、うちで夏の制服をつくったものの、部厚い木綿だったものですから、暑くって、三年

目くらいで普通の生地にかえました。

河井　それと、ズボンは、霜降りの生地にしてました。ところがしばらくして、霜降りの生地が生産されなくなりましてね、それで、普通の黒ズボンにかえました。

司会　その当時きめたもので現在残っているのは、夏の登山帽だけですか。

田中　もう一つ、高校生の風呂敷があります。

河井　この風呂敷には、父母の方たちの意見も大分ありましてね。反対の向きが強かったようです。亡くなられた大北さんは、風呂敷賛成でして、大分やかましくいわれまして（笑）、結局、生徒の意見をきいてやれということで、生徒の意見をきいてみますと、風呂敷賛成が圧倒的に多かったです。現在の生徒諸君は、色色いいますけれどそのようないきさつできまったことです。

田中　その当時は、六甲も、灘も風呂敷はやっていない、ずっと古くは、神戸一中がまっ白の風呂敷でしたが、なにしろ昔ですからね。が、そういうことも、一つのヒントになって、白は汚れるから黒の風呂敷ということになったのでした。

河井　そうですね。三年目でしたか、来年は高校生になるという時に、一期生から意見がでて、そうですね、七割ぐらいが賛成だったように思います。それで、大北さんなど、わが意を得たりというような感じであった（笑）ですね。

今後の課題として

司会　もっと、色々とおうかがいしたいのですが、時間の関係で、現在の方へ話題を移したいと思います。父母会係の平岡先生、現在の問題点といったところをひとつ――。

平岡　そうですね。現在の問題点といえば、先ほどもでましたように、生徒数も教員数も多くなり、父母と学校との間が、創立当初のように親密にいかないということですね。ただ、生徒募集との関係もありまして、近年は、地区懇談会が盛んになりまして、今年も、夏休みから引き続いて、この前の十二月五日まで、ほぼ、土曜日曜連続でずっとやりまして、大変盛んになっています。出席率の方も、松山市街は、不慣れな点もあって、それほど多くありませんが、全体平均では、七割弱というところですね。ところで、私の感じでは、冲永さんが会長さん当時に、学生運動の余波をかぶりましたが、それを無事乗り切ることができたのは、一つは、この地区懇談会にあったと思います。そうした運動が起ってくる数年前から、この地区懇談会をもちまして、校長先生が直接学校の立場をのべられ、ご父母の方も、忌憚のない意見をのべられ、双方の意志が充分通じあっていたということが、あずかって力があったように思います。

冲永　その点に関しまして、私、一つ申し上げたいこと

があるんですが。私が、会長になりました時に、突然、妙な学生運動が湧き起りまして、いやもう、燎原の火のごとく、各地方大学にも拡がりまして、その潮流の渦の中に、愛光も巻き込まれました。そういう時に、会長をしておりましたので、諸先輩方が経験されないような経験をいたしました。昭和四四年度の卒業式の時でございましたが、私、学校の方へ参りますと、先生方がほんとうに緊張しておられまして、不穏な空気が漲っておりますし、式場へ入る前に校長室へ参りますと、校長先生が非常に焦慮されておられる、周囲では大学生が盛んに、あのシュプレヒコールというんですか、大声でヤジをとばしておりまして、私たちもほんとうにはらはらいたしました。それに、卒業生の一部が、卒業式をボイコットして、学校の外のお宮へ集ったりしまして、これは新聞記事にもなりましたが、この時の愛光の態度といいますか、校長先生の姿勢に深い感銘をうけました。さすがに、カトリックできたえられたご人格と長い教員生活で築かれた豊かなご経験をお持ちの校長先生が、毅然とした態度で、学校のすすむべき道を示された。実際、周囲では色々な声があり、学校史はじまって以来のことで、経験もなく、学校のすすむべき道をきめるのは容易なことではなかったと思います。その時に、ある強い信念でもってすすまれまして、今から考えまして、ほんとうに、あの時点で選ぶべき最良の方向だったのではなかったかと私は思います。あの頃には、新聞にも出ましたけれど、大衆に余りにも耳を傾けすぎたり、生徒に媚びるように迎合する風潮がありましたが、愛光は、幸いにして、すすむべき舵が、一番確実で一番立派なものであったと思います。

森白石（定）　あの時は大変でございましたでしょうね。

今、沖永先生のお話をうかがったり、これまでのお話を総合して、私、思うんですが、草創期には、教師と生徒との間が、ほんとうに親子以上に親密であった。その後、だんだん薄れてきて――、父母の会の方は、親と学校側との親密さは、また復活してきてもとのようになって、非常に結構なことなんですけれども、教育をうける主体となっている生徒と教師の間の親密の度合というか、そういう塾的な精神連帯といいますか、そういったものの対策ですね。これは、生徒が多くなればなかなかうまくいかない、ではほっておけない、という意味で重要だと思うんです。クラス主任のほかに、指導教官あるいはカウンセラーとか、スポンサーという風なものを設けて、教室で知識を教える以外に、訪問日を設けるなどして、何でも話しにこい、世間話をしよう、社会問題を話そう、悩みがあったら何でも聞こう、という風なですね、先生方には非常にご負担になると思うんですけど、そんな風なことはお願いできないものか。私などの過去の経験を考えてみて、クラスの主任の先生よりも、やっぱりこの三年間指導して貰った指導教官の方が、何かこう、何でも話せる、大学進学についても、いろんなことについて話しができました。中学時代についても、保恵会というのがありまして、松山中学では、これが父兄会に相当したんですが、やはり、地区ブロック制でありまして、そこに、五人ほどの担当教官がおられまして色々とお世話してくれるしくみになっていました。その先生方が人間的な接触をしてくれるという風なことで、学校を卒業してみて、やっぱり、クラス主任の先生よりも、そちらの先生方とお互いに文通するということで、現在もつながっているんです。大学へ行きますと、そういうものがないもんですから、大学の先生というと全然音信がありません。というような訳で、そういう風な制度がありますと、わりと生徒も、さきほどのような重大事件が起きた時に、ほんとうに先生の考え方、学校のあり方、指導の仕方がわかっていて、それほど無茶苦茶に、外の力で押しまくられるというような、一種のインフルエンザにかかった風なあり方も、もっと未然に、円満になごやかに対処できたのではないか、という風に思うのですが。

父母と先生とのつながりと同等にですね、先生と生徒のもっと人間的なつながりというものをお考えいただけたらと思います。これは非常にむつかしいことですがね。

司会　貴重なご意見ありがとうございました。この点につきましては、今後、我々教員の側が真剣に努力していかなければならない問題だと考えます。新しい校舎に移転するのを機会に、学校長を中心に新らたな決意で取り組まれることと思います。

実は、もっと色々お話いただきたいのですけれど、時間も迫ってまいりましたので、このあたりで、おかせていただきます。不手際な司会にもかかわりませず、長時間ご協力ありがとうございました。

資料(1)「家庭連絡」(昭和31年～43年)より

昭和三二年八月五日

田中忠夫
中西父母会長
大北委員

第二学年御父母様

東京夏季講習会に関する御報告

田中は七月二十八日、父母委員と第一班指導員四名は昨八月四日朝、夫々帰校しました。上京以来夙くも二週間を経ましたので、生徒は全く東京の生活に慣れ、皆元気で楽しく勉学にいそしんでいますから、どうぞ御安心を願います。簡単ではございますが、東京生活の大要を左に御報告申しあげます。

(一)寮の生活

(イ)設備—寮は五階建鉄筋コンクリート造りの大きな建物でありまして、設備は一流ホテルのように立派であります。その上寮務担当の方御一同が、大変御親切にして下さいますので、この点全く申分がございません。

七月末日までは、まだ上智大学生が幾らか残っていましたが、八月一日以後は、全館愛光生の独占となり、一同のびのびとやっております。

(ロ)食事—質量ともに田舎出の者には十分とは申せませんが、色々の関係で特別食を依頼することができません。しかし食堂には、定食以外に、パン、牛乳、ランチ、うどん等がありますので、生徒は適当に補食しております。松山からも昨四日武智副会長の御世話で上等のチリメンジャコ十一貫(一人百匁当り)送っていただきました。

(ハ)寮の日常生活—寮規則の通り、毎日水の流れるように規則正しく敏速に、まことに気持よく運んでおります。十二時半の昼食から、五時半の夕食までは自由時間で、野球、フットボール、バトミントン、ピンポン等の運動、昼寝、勉強、たまには銀ブラ等思い思いにやっております。しかし夕方七時の点呼以後十一時までは、皆熱心に勉強に励んでおります。毎金曜日午後には寮の講堂で、高名な先生に一時間程度の文化講演をお願いし、毎日曜日には全員で市内見物等をしております。

(二)流感について—東京到着と同時に一名発病、その後毎日二、三人の患者が出ましたが、八月一日指導員交替の日には全員全快し患者は一名も残りませんでした。今度の流感は熱は三九・五度—四〇・五度という高さでしたが、臥床の期間は一日—二日に過ぎないという軽いものでありました。流感以外には一人の病人もありません。

校医のお宅は寮のすぐそばで、病人のいる間は毎日来診してもらいました。尚外科的急患についてはカトリック系の聖母病院が、夜中でもいつでも引き受けて下さることになっております。

(後　略)

愛光学園を巣立って

運動場よりみた旧宮西校舎

座談会

第一期生は語る

われらの愛光学園

昭和四七年五月九日・松山市二番町　小判ずし広間において

出席者

一色　誠　　武智克行
北村昌義　　徳永清孝
栗田忠紀　　野本和宏（旧姓奥村）
河野有人　　鮒田周資
佐伯善男　　古川哲
須賀正樹　　村上景一
杉野原史　　村上健二
高田（旧姓高岡）登　　森本和史
竹内紀彦　　山本勝彦

構山　豊（アイウエオ順）

編集委員会
島津　豊幸（司会）
砂田　任叙（記録）
五百木誠也（録音）

武智　この度、二十年誌を発行するに当りまして、一期生からの投稿がございませんので、編集側の特別なお計いで、本日お集まりいただいて、当時のことをいろいろ話し合っていただき、それを投稿代わりにするということになった訳です。

最初の入学試験

司会　どうもきょうは、ありがとうございました。ぜひとも一期生の皆様の原稿をいただきたいと思いましたが、原稿をいただくよりはこうして、ざっくばらんにお話しいただいた方がかえって真相に近いものが得られるのではないかということで、皆様にお願いすることにいたしました。そんなわけで、司会は、私の方でやらせていただきます。不手際でまとまりにくいと思いますが、その点、おゆるしを願いたいと思います。それで、座談会ですから、対談ではないので、私の方は問題を最初に投げかけるということにして自由にやりとりをしてやっていきたいと思います。ところで、学校全体からみますと、四つのグループがあります。理事会――経営グループ・職員グループ、それから生徒諸君――この生徒諸君が、どのように活躍するかが、一番中心になると思いますが――その次が、父母会のグループと考えまして、学校を構成している四つのグループの一つである生徒諸君が、草創期にどのように活動していたかということは、どうしてもなくてはならない条件になって来ます。堅い話になりましたが、今日は、皆様の草創期の気持や、思い出をざっくばらんに出していただきたいと思います。それで、まず、年表をお配りしましたが皆さんが、愛光学園と関係をもったのは、昭和二八年一月だと思います。年表のそこのところに入学志願者関係書類発送というのがありますが、それに応じて皆さんのお手許にある入学案内というのが行ったと思います。これらをみて二月一日から受付が始まったわけで二二三名の諸君が出願してくれた訳なんですが、その中から選ばれて一一一名の諸君ということになるのですけれども、そこらあたりから、最初の関係が出て来たと思うのです。まず、この学校を志した動機ですね。何しろ海のものとも山のものとも判らぬ訳で、こういうところに出願するには、かなり勇気のいったことと思うのですが、そういうところをどなたか覚えていますか。

武智　大体、こういう入学案内、ぼくら見たことないな。見たのは番町小学校ぐらいじゃないかな。

佐伯　いや見てない。（佐伯君は番町小出身）

栗田　先生が見ただけだ。

竹内　記憶がないですがね。ぼくら自身が愛光を目ざして入ろうとして入った人がいるかどうか――。

一色　新聞に出たことがあるんだそうですよ、田中忠夫さんという人が愛光をつくるというのが。ぼくの場合は、先生がその切り抜きを見て、田中先生は人格者で

よく知っている。その先生が作る学校だったら、間違いないから行けということだったんです。勿論、時間的に準備する時間がある訳ではないし、こちらは何のことやら判らず、先生が行けというから行こうということになったのです。

竹内　それが大半じゃないですかね。

一色　だから田中校長がやるから行こうという人がかなりいるんじゃないですかね。

古川　そうですね。それが多いと思います。

高田　私は同期生の本田君のお母さんが、愛光学園といって、秀才教育をする学校がこんど出来るので、よく出来る子は、みんな受けるのだから受けとうみ、と言われたのがきっかけです。願書を出すのも一番最後で、すべったら城東へいったらええがというので受けたんです。

武智　ぼくは、男子だけの学校へ行きたかったですからね。新田受ける準備しとったんです。

司会　この間、お父さんが、座談会の中で、武智君が、ぼくが受けるんだと学校でいったら、われもわれもというので六人できたということだった。それでね、その次に入学試験があったでしょう。その時の感じ、問題を見てどう感じたかということですが――。

古川　しやすかったんじゃないかな。

竹内　卒直にいってやさしかった。あとの方がむずかしくなって、ぼくらの段階が一番やさしかったんじゃないか。

古川　今でもやはり作文はあるんですか。

司会　ありますよ。

古川　ぼくらの時は、何がテーマだったかな。

高田　あの時、〝動物園〟〝自治会運動〟ともう一つ何かあったんじゃなかったかな。

森本　〝自分の家庭〟じゃなかったか。

須賀　〝祭り〟もあった。

司会　そうすると、作文が印象に残っているのかな。

古川　それと現像と現象という字が出て、どっちだったかな。現像とみんな読んだのが現象だったのかな。それとあけの明星というのが出た。

野本　平等いうのが出た。

司会　今、答案みな残っているそうです。二十周年記念の時、展示会に出すかという話もあるんですが（笑）。〔やめてくれという声あり〕それで、合格した時の感想というか、感じですね。どうですか。感激というようなことは――。

古川　なかった。あたりまえのような気がしたですね。

竹内　ぼくらが、入りたいと思って受けた試験じゃないから、感激はないんじゃないですか、ほとんど。ああ通ったか、という程度で――。

森本　見にも行かなかったですね。

司会　こういう点は、やはり今とずいぶん違うようですね。現在だったら、学校の壁の前で親子が抱き合って

泣くとかいう風景が見られるんですが――。

野本　ぼくは、学校に対する不安よりも、同級生が三人受けて一人しか入らなかったので、一人で知らんところへ行くのが不安だった。

入学式・スポーツデー・遠足・海浜キャンプ

司会　それで、入学式・開校式というのが四月一日にある訳ですが、その時の思い出みたいなものはないですか。

武智　その日に宿題が出て、試験があったような記憶がありますよ。

北村　科学の本を一八冊、社会の本を一二冊ぐらい買ったような記憶がある。

司会　教科書を一年から三年まで全部買わしたということでしょう。

高田　そうではないですね。何かシリーズものみたいな――。

森本　水の科学とか、空気の科学とかいったような――。

武智　それでうまくいかなくなると、河井先生がプリントをしていた。

司会　開校式というのがどういうふうな状況だったかというのが、ぼくらにはよく判らないのですが――。

高田　校庭でみんな並んで写真をうつしたのを覚えている。

武智　あれは、やはり講堂でやったのと違うか。そこで誓約書に墨で署名した。一〇〇人位ですからね。先生が、三人か四人で、あと事務員さんがいるくらいの少人数。

司会　試験の発表時の人数は、もっと少ないんですが、後から追加したりして一一一名。この時には割と内申書を見てますね、試験の成績だけじゃなしに。

野本　それは事実ですか。ぼくら入る筈なかったのに。内申が良かったんだろう。（笑）

司会　入学試験がすんで入って来て、最初の印象ですね。

古川　ぼろじゃったのう。（笑）

一色　城西のお姉さん方と一しょで――。（笑）

古川　池田が、お姉さんがおるというので非常にハッスルしていた。（笑）

司会　その頃、授業でかち合うとか言うことはなかったですか。

一色　ソフトボールを一しょにしたりしていた。

古川　運動場では、いつも一しょだった。

森本　朝礼台が低くてね。

古川　ほんとに小さい、ちょっと行ったらすぐ職員室に行けるような――。

一色　今の入り口近くが職員室だった。

司会　講堂は、その頃はあったんですか。

古川　今のままです。ただ床が抜けそうで――。（笑）

司会　それで授業の最初の印象ですが、何か印象に残っているようなことはないですか。

一色　印象がありますよ。マリン神父はいたのかな。社会倫理の時間があったでしょう。それで社会倫理学とは何ですかという話をされた。

古川　それからあの頃、校長先生が、〝せんだんは双葉より芳し〟といわれた。これが印象に残りますね。小さい部屋に集めて、みんな整列させて。

司会　愛と光というか、世界的教養人ということは、その頃から打ち出されている訳ですか。

一色　それはしょっちゅう云われた。

北村　あれは、さいさいよまされ、写させましたよ。生徒必携――あれは、しょっちゅう読んでいた。

古川　だれか、もっとる人間おるかいの、こんど展示せいや。（笑）

司会　それで、その次に出て来るのは遠足――薄墨桜から、太山寺を越えて高浜までかな。

一色　発表があったときに遠いといったら、遠足とは、遠い足だと言われた。

竹内　あれは、本当の遠足ですよ。四〇㎞近く歩いたのと違うかな。

武智　ぼくら意地になって梅津寺からも歩いて帰った。歩きますと云ったら、校長先生が、やめて下さいと云われた。（笑）

竹内　しかし、だれも病気した訳じゃなし、あくる日、足が痛かったぐらいでどうということはなかった。

古川　しかし、とにかく印象には残りますね。

司会　その頃、管区長歓迎スポーツというのがあったでしょう。これについての思い出はないですか。

武智　あめ湯があるな。

一色　それにスポーツ・デーというのがあって、楽しみだった。

竹内　授業は休みでしょう。

武智　あれは山本じゃないんか、あめ湯を十何ばいのんで下痢を起こしたのは。高戸か。（笑）

司会　種目はどんなことをしていたのですか。

高田　**古川その他**　騎馬戦、棒倒し、バレー、バスケット、ソフトボール、リレーなど。ほとんど全員が出ていた。

森本　クラス・マッチと同じですね。先生との対抗もあった。

古川　優勝の桶があったろうが。

一色　相撲があった。

司会　だから結局、特別の運動会というのはなかったんでしょう。

武智　なかった。しかし運動はしょっちゅうやっていた。城

西とも一しょにやっていた。

司会　正式な運動会みたいなものは、翌年度からであったんですね。それを第2回運動会というからには、初年度にも運動会はあったのかなあと思ったんだが――。十一月十三日に学校記念日というのがあって、モデスト神父さんが、聖トマスについて講話をした。この時に、スポーツ祭をする予定であったが、雨のために一日延期して二時間の短縮授業であとスポーツ・デーにしている。これが、運動会の代わりとすれば、比較的大きな行事ではなかったのかなあと思うんですけど――。

武智　毎月あったですよ、試験がすんだ翌日くらいから。印象がうすれてしまっている、毎月あったから。

野本　試験をしない週間というのがあったよ。

武智　そうそう、テスト・フリーデー言うんがあった。とに角、試験がしょっちゅうあったですからね。

北村　毎月あった。英語のテスト・国語の書き取りテストなど――。

司会　それは試験の前の日？

武智　いや、テストの終った後の日です。

司会　次に海浜キャンプをやっているでしょう。野忽那でやっているんですがね。そのへんの思い出はどうですか。

古川　大きな地震があった。野忽那の小学校か中学校の運動場に小さなひび割れがいったなあ。

高田　ぼくが覚えているのは、校庭の裏山に雀がたくさん泊りに来ていたのを、つかまえに行って校長におこられた。白井、本田、ぼくとゴットン（宮内鼎）――。（笑）

古川　それと海辺で相撲をとってスイカ割りをしたな。

一色　松野先生が神伝流の水泳をしてみせてくれた。

高田　それと最後、キャンプ・ファイヤーをしたなあ。

武智　とに角、印象に残っているといったら、河井先生が、おらんでおらんで声をからしてしまった。横を通っただけでも、あの先生の顔が見えたら何か云われずにはすまなかった。運動場の横にちらっとでも顔が見えたら緊張して警戒した。（笑）そのころのキャンプは、父母が交代で飯たきに来るんですがね。

武智　あの頃は、父母が勤労奉仕みたいにして、座蒲団を作ったり、スポーツ・デーの時などには、あめ湯などを作ってくれた。

司会　その点、非常にこの時期の特徴なんですけどね。ここで、初年度の印象をしめくくってみたら、どういうことになると言えますか。

古川　楽しかったんじゃないですか。

鮒田　先生の方にも新しい学校を作るという意欲があった。
一色　君たちは、若きプリンスだからそのつもりでやれと校長からしょっちゅう言われた。
司会　今も、校長はいつもそれを言っている。今の生徒の受け取り方と、君たちの受け取り方とは違うだろうと思う。かなり強烈な印象があった訳ですね。
武智　生徒必携というのをいつも読まされていたが、切実な問題としては受け取らなかった。
野本　ぼくは、その生徒必携いうのを全然覚えていない。
武智　世界的教養人とか、愛と光の使徒たらんことをとか書いてあったろうが。
高田　覚えてないと、河井先生なんかにおこられた。(笑)

中間体操と黙想

司会　中間体操というのがあったでしょう。あれはどうでしたか。
高田　あれは、嫌だった。寒いのに裸にならにゃいかんので。
森本　休んだら出席簿みたいなものにペケをつけていた。
高田　河井先生がエンマ帳みたいなのをもって教室に見に来るんですが、ぐずぐずしていたら叩かれるか立たされるかされた。卒業するまで嫌だった。
一色　冬なんかは寒かった。雪が降りよってもやるんだから。
古川　結局、あとで考えてみたらよかったと思う。
司会　黙想についてですが、この問題は最初の職員会からいつも出ているんです。ということは、実状はどうであったのかと言うことなのですがね。みんなきちんとやっていたんですか。
古川　やっていた。
竹内　中間体操の効果は認めるが、黙想はあまり意味はないと思う。
森本　中学一年二年でそれを判らせるのは無理じゃないのか。
一色　ぼくら、どこにいてもベルが鳴ったら黙想をしていた。
古川　今でも米軍基地なんかで、旗が上り出すとじっと静止している。あれと同じだ。
司会　だれか駅へ行って、ベルが鳴り出すと黙想したという話がありますよ。(笑)
武智　条件反射みたいなものだな。
村上(景)　大学に入ったとき、教室へ行くときにベルが鳴ると止っていた。
北村　たしかに一歩も歩かなかった。こそこそ歩いているとわかるもの。
野本　一〇歳すぎの子供に黙想の意義など判るはずがないので、小便に行きたいと思っている時に鳴ると、くそっと思っていた。(笑)

司会　これは話題が悪かったかな。
一色　けじめはつきますけどね。
古川　それは、個人のとり方の問題ですね。

英語コンテストその他

高田　とにかく一年生の時の印象は、先生に会うのがこわかったということだ。
一色　それと試験が多かったな、河井先生はこわかった。クラスが違っていても。
北村　検便のときは全部自分がやらされた。顕微鏡で見るのは先生がやったが、準備は個人にさせていた。
古川　一年のとき、余興会みたいなものをやったんじゃないか。
司会　何かクラス会のようなものが出て来るんですがね。
古川　徳永のおじいちゃんが、銀紙に火をつけようとしてつかなかったというようなことがあった。
武智　たしかに行事が多かったですね。管区長が来るとか、どこかの先生が講演に来たとか――。
司会　九大の法学部の教授が一年の時に来ていますね。
武智　土佐高の国語の先生が一年の時、夏休み中の授業の時、一週間来たろう。それから、大阪大学のだれやら。
野本　河井先生の知り合いかなんか――。
武智　管区長が来たら、いつも歌をうたった。〝サルベ〟を。ぼくらの頃はあれが校歌だった。あれと〝あゝ玉杯〟が校歌みたいなものだった。
司会　それから、英語コンテストというのがありましたね。
森本　光藤がいった。
司会　全国大会に行ったというようなことは――。
古川　竹内がいったろうが。
竹内　中三のとき行った。英語の時間は多かったですよ。週八時間ぐらいあったように思いますよ。
武智　勉強のことはあまり覚えてないが、英語の時間が多かったことだけは覚えている。
司会　次の第二年度にうつります。最初に下級生を迎えた印象はどうでしたか。
森本　かわいかったな。小さいのが一ぱい入って来たなと思った。
高田　えらそうにはしていたですね。会ったら必らず礼をせよとか。
古川　しかし、あまり印象はないな。
一色　下に対する印象は、うすいものでしょう。
古川　それよりか、校舎のできた時の方が印象に残っていますね。
北村　三年の時校舎がかわったのかな。
武智　城西には、ガイな女の子がたくさんいたので恐ろしかったですよ。)(笑)
高田　卒業式に出させられたろう。
古川　みんなもらい泣きをした。池田が泣いた。あれは

オーバーだったな。（笑）

須賀　ぼくは、夏の登山帽と霜降りズボンですね、よその学校にない服装だったのでちょっと恥ずかしかった。

一色　ふろしきは、いつからだったかな。

司会　一年のときから登山帽にしているんですか。あれは恥ずかしかったですか。

古川　初めは、恥ずかしかったですね。

須賀　特にぼくなど汽車で通っていたので、ああいうスタイルは外にいなかった。

森本　わざと形をくずしてかぶった。

竹内　恥ずかしかったが、その反面、他にない服装だという、嬉しいような気持もあった。

中二生になって

司会　二年度には、一〇月に運動会というのをやっているんですけれども、その時の模様というのは、どんなだったですか。

武智　城西と一しょにやりましたね。仮装行列もやった。

一色　仲田が女になった。看護婦になった。きれいだったな。

武智　三年のときに、もっと組織だったものにしなければいけないと藤井先生に言われ、ぼくらが農村風景と、も一つ何だったかな——。

高田　やぐらを組んだろう。

司会　も一つ生徒会というのを、三月十日にやったことになっている。その前に、生徒委員会というのをクラスから代表を二名ずつ選んでやっているんですがね。

古川　覚えてないな。

司会　河井先生にお聞きすると、君たちが高IIのときに生徒会を作ろうという運動をするでしょう、ところが、その前に生徒会はあったんだと。だからあらためてやる必要はないと聞いたんですがね。

古川　ぼくの覚える限りでは、生徒会的な活動をしたことはないですね。

高田　柔道部を作るという話はあった。線路の近くにボロい平屋の校舎があって、そこで相談したように思う。

武智　茶室よ、茶室を使っていたのは新聞部だ。

古川　その頃は、いわゆる運動に関しての生徒会ということなんでしょうね。思想的なものはなかった。

司会　職員会議記録を見ると、自治精神の涵養といったようなことが、よく出て来ている。それに則って、クラス委員みたいなものを作ったのではないかと思うのですがね。

武智　中二ごろまでは、級長いうのがあった。

須賀　二学期からではないか。

一色　入ったときは、村田だった。

竹内　入学試験の成績順ですからね。

古川　級長、副級長制度は中三で終っているのではないか。

編入生の印象

司会　それから、だんだん上っていって、編入の人がはいって来るんですが、このあたりで、村上（健）君の方で、入って来た時の印象を話してくれませんか。

一色　何人はいって来たのかな。

村上（健）　竜崎とぼくと、梶谷と、藤山と——。

司会　村上君どうですか、入って来た時の印象は。

村上（健）　公立校にはない、たとえば中間体操とか静粛だとか、先生がかなり立てるという雰囲気が全然なかったですから、最初はとまどいました。最初の英語の授業でしたが、マリン神父さんがぼくに自己紹介しろと云われ、マリン神父さんが先に自分で自己紹介されたんです。ぼくはそれまでに日本人以外の人が、英語をしゃべるのを一度も聞いたことがなかったんです。それで名前がよく聞こえなかった。それで、私の名前を言ってみろと言われるのでファーザー・マリリンと言ったら、みんなにひやかされた。（笑）当時は、まだマリリン・モンローが生きていたので、みんなに後からつつかれた。それが一番印象に残っています。

司会　それで、全体としての印象はどうでしたか、しばらくしての。

村上（健）　静粛が、非常に効果があったように思います。きちんとけじめがついて、公立の中学校では見られなかったような雰囲気だったと思います。

野本　というけれど、入って来たときはぼくの近くで、うるさくてうるさくて——。（笑）

一色　公立の学生は、やかましいと思った。（笑）

中三——文理科コースの選択

司会　中三の時の際立った思い出がありますか。

高田　まず、成績の悪い者を転校させるということでしょうね。

森本　対外試合の問題もあったな。

竹内　文科か理科に決めさせられた。

一色　判らんですよ、数学がきらいだから文科へ行こうとかそうでないから理科へ行くとか——。

北村　中途で一〇人程変ったでしょう。それだけ迷ったのではないでしょうか。

古川　それと、竜崎君が来てから、ものすごく刺激があった。〔竜崎君は灘中学から編入—編集委〕

一色　愛光の進度が遅れているというので、先生がものすごくハッパをかけた。これでは東大などとおりゃせんぞといわれて——。光藤先生が入ってこられてぐんと変った。

古川　あれから数学が嫌いになった。

司会　それでも、中三の一学期ぐらいで中学課程は終るようなことだったんでしょう。

一色　そういうスケジュールを組んでいたが、竜崎君が入って来たら、大ぶん違うということになった。それ

で、ハッパをかけられたので、みんながアップアップし、中にはついていけない者も出て来た。

森本　急に進んだので、テストも白紙が多かった。

古川　ハッスルしたものと、きらいになったものの開きが割合に大きく出た。それから、その年は、旺文社の深夜放送をみんな聞いたと思う。

司会　文科、理科に分かれたでしょう。その場合に気質的な違いというか――。

一色　それはありますね。

古川　自分自身では、よいと思うがな。

鮒田　とにかく、文科と理科という対抗意識は強かったんじゃないですか。

司会　村上（景）君あたり、編入したときは、どうですか。

村上（景）　高校編入で入りましたとき、一度理科に入りましたが、大学の文科、理科を決めるについては、親の希望もあって、結局、文科になりました。それよりも、編入して感じたことですけど、すべてが新鮮だったですね。それで、今でも思うのですが、上がいないというのが非常にのびのびした感じでした。今まで、上級生がいていつもわずらわされるということがありましたので。それからもう一つ、仲間同志のけんかがないということですね。ぼくは非常に気持ちいい学校へ来たなと思い、見るもの聞くものがすべて新鮮で、楽しかった記憶があります。先ほどから云われている数学の問題も、もともと、ちゃんと順序をふんで教わって来た人たちでも困られたぐらいですから、入ってまだ二～三月で順列・組合せなどが出て来た。中学のときやっとピタゴラスの定理かなんかを教わって出て来たのに、高校へ入ると、順列・組み合わせなどで二時間位、ぶっ通しで授業がある。すると、始めからおしまいまで判らないんです。授業としては、ほんとうにつらかったですね。だから、数学がきらいになるのが当然だと思うんですがね。

司会　それでも、理科でずっとおしたわけでしょう。

村山（景）　通しましたけど、大学は、結局、文科系の大学へ行きました。

武智　数学がきらいと言うけれど、ぼくは、英語に頭を悩ました。

高田　数学は、泉田先生のできんクラスに入れられて、ものすごいショックだった。

竹田　あれは英語もやったね。

初期の美術教育

司会　それで、高一のとき、校舎ができているでしょう。なかなかその頃ではスマートな建物で、理科の設備など、松山では一番良かったように思うんですが、そこらの印象はどうですか。

古川　よかったなあ、夏休みなど三階ぐらいに上ると風が吹いて涼しかった。

竹内　設備はよかったですね。

司会　やはり入った時は嬉しかったですか。

村上（景）　そうですね。嬉しかったなあ。立派な校舎で勉強させてくれるのは、嬉しかったですね。

武智　ぼくは、前の校舎で、二階へ変ったときの方が嬉しかった。

司会　そのころの図書室の印象はどうですか。

竹内　ぼくらは、あまりいかなかった。

武智　絵を書いたのは、どこだったかな。あの頃、よく県展などにとおっていた。その頃は枠を買う金がないんで、ぼくら、板を割って、それにペンキを塗って作ったことがある。中一から油絵をしていたなあ。ブリュッセルへも行っているでしょう。あれは、だれの絵が行っているんですか。

武智　あれは、藤井啓三郎の絵です。

村上（景）　ぼくの記憶では、カトリック系の展覧会がありましたが、そのとき、中西淳君が金賞、ぼくが銀賞で、時計を記念品にもらったことがあります。

司会　村上君の絵じゃなかったですかね。化学室にずっとあったのは。

村上（景）　いや、おそらく中西君の絵でしょう。淳君の絵は、繊細で、あまりにも大人っぽすぎるという批評をもらうぐらい完成された絵を書いていましたね。

司会　あのごろの美術教育といいますかね、渡部徹先生の。ちょっと特異なものではなかったんですか。

武智　自由想画というのを書かされた。自分の発想で何でもかかすんですね。

古川　ぼくも二科会のジュニアの賞をもらっているんですよ。書いたのは、二〇号の抽象画ですが、よく見ると、ほんとによく書いていると思います。念入りに、うまい、へたでなく、あの頃は、日曜日によく写生をしていたなあ。

武智　先生がこの絵を見て、おまえは、右の体に欠陥があるのじゃないかといわれた。よくわかるらしいのです。鼻が悪いとか、胃が悪いとか。

古川　おもしろいのは高田がね、絵を書いたとき、まぶたを書いたら、いらんことを書くなといわれた。まぶたをかいて、その中に映った景色などを書いたんです。

武智　あの先生がいなくなったのは、さみしかったですね。

村上（景）　石ころをクロッキーさせましたね。

〔渡部徹先生は、昭和四七年六月一日病気のため逝去された。享年六一歳　編集記〕

高田　あと書道の沢田先生がいたな。筆で書く前に、まず手をひろげましてね。言っている時は、どんな字を書くんだろうと思ったが、いざ筆でかくとものすごくきれいな字なので驚いた。

竹内　あの人は楽しかったですね。

森本　すみをすったら一時間すんでしまったこともある。

司会　あの先生は、いつごろぐらいまでですか。

森本　三年ぐらいまでじゃないか。
武智　二年までじゃな。印象に残っているな、あの先生も。
森本　三年のとき、書道と図画が分れたんじゃなかったか。芸術コースで三つに分れたんじゃなかったかな。
武智　音楽は近藤先生だった。

夏休み予備校集団入学

司会　高Ⅱでは、ぜひみなさんに語っておいてもらいたいのは、予備校集団入学がありますね。
古川　よかったのう。（笑）
武智　あれはよかったなあ。（笑）
一色　あのとき、得能じゃろが、ゴルフのボールをあつめてきたのは。
山本　宮内のゴットンが代表でかえしにいった。
一色　ボールの中に何が入っているか切ってみた。
高田　ゴットンは、拾いにいってつかまった。それでボールを集めてかえしにいった。わしゃ拾いにいかなんだらといっておどされた。
武智　まじめにいったんもいたろが、大体ぐれてかえった。
高田　中西淳が、警察の職務尋問に会ったなあ。新宿からの帰りに、きれいな女の子がいるといって後をおっかけていたら、職務尋問やられた。（笑）
古川　あれは、エメロン・シャンプーみたいな髪の長い子をおいかけよったんよ。あのころ、ポニーテールという髪がはやっていた。
村上（景）　まあ、変な服装、くりくり坊主で花の東京へ出ていって、はなやかな噂話ができるわけじゃないですよね。大人のつもりで、銀座をもの珍しそうに歩いてみたり……。
一色　あのときは、どこへいったんぞ。城西と駿台と水道橋と三箇所へ行ったんよのう。
野本　考えてみたら、あのときは、予備校と寮の間を往復した記憶しかない。（笑）
須賀　ぼくは、一番印象に残っているのは、あそこの食堂のおばさんで、今でもときどき手紙が来るんです。この前、東京から来た時には、連絡があって会いにいきました。あそこで松尾がかぜを引いたとき、このおばさんがよく面倒をみてくれた。
武智　あれだけは、ほんとうに忘れられんですね。
竹内　あんな経験は、普通の学校では、できんでしょう。本来の目的は達せられなかったが、ものすごく印象に残った。
武智　遊びにいったようなもんだな、あれは。
古川　あれで、学問ガリガリ一辺倒にならずにすんだ。
高田　新聞に叩かれた時、屋上に全部並ばされて、校長さんが、宣伝料を出さず宣伝してくれたんだからそう思えといわれた。
竹内　ラジオ関東かなんかが来たろう。

武智　〝ほやけんのう〟と伊予弁丸出しで話した。（笑）
一色　得能が三越で、〝チョンマイ方をくれ〟と云った店員がわからなかった。（笑）
古川　あれは、康堯（中西）だ。
武智　水道橋で、ゴットンがけんかしたというので、すぐ、ステテコでとんでいった、都電にのって。
森本　鼎（宮内）は、ああいう荒っぽいところには、必らず顔を出しているな。（笑）
司会　それで、楽しかったというのはよく判りますが、肝心の授業の方はどうだったんですか。
古川　おいおい細りですね。
武智　眠とうて、眠とうて弱った。
司会　科目は数学と英語ですか。
一色　成績はよかったですよ。
古川　よかったから、アホらしなって、さぼったんじゃなかったかな。
北村　ぼくら、四人位で鎌倉へ遊びにいって地理がわからんので、一生懸命走って帰って遅刻したことがある。この時、遅刻者が大ぶおったので、全員外出禁止になった。
村上（景）　あれは九時ぐらいまではよかったんかね。
北村　朝から遊びにいったんじゃけん、予備校へ行かずに。
一色　〝ペンフレンド〟がいて、駅に迎えに来るとか、送りに来るとかして――。
古川　おれもそうなんよ。（笑）
村上（景）　早熟じゃわい、大ぶん。（笑）
予備校の印象は、今ならば冷房も完備しているでしょうが、あの当時は、ずい分薄暗くて風通しの悪いところなんですよ。そこへ他の人は、真剣な気持で来る訳でしょう。教える方も、玉の汗を流しながら教えている。そういう光景を思い出しますね。
古川　旺文社の数学の戸田先生の講義――放送だけで聞いていたのが、実際に会って。そういうことでは、何かあったな。試験は入ってすぐあった。
一色　これだけ成績が良ければ、遊んどってとおるというので、みんな安心してしまったのを覚えている。
古川　そのあとで、ペンフレンド禁止令が出た。
高田　海外の女性との文通ならよかった。英語の勉強のために。

「愛光新聞」の創刊など

司会　高Ⅱの時には校舎を拡張するので、（第二期工事）運動会がなかった。ぼくが来たのはその年ですが、その時、新聞部を作ろうという話があって、前任校で経験があるので、一生懸命やった。ところが、みんなの話はそうじゃないので、新聞は一つの手段で、おかしいと思いながらやって来たが、その辺の思い出はないですか。
一色　一号には、アゴラなどもつくって、ちゃんと書いてやった。

司会　この一号は、コンクールに出して、本当なら入選するんだが、その前の号がないので、選にもれたといういきさつがあります。
一色　あのときは、随分熱心にやったんじゃなかったんですかね、あの茶室に集まりましてね。
司会　その前に生徒会を作ろうという動きがあって、校長さんとだれか会っている時期があるんですよ。すると、校長先生が、生徒会をすぐというわけでもいかぬので、新聞でも作ってぼつぼつやったらどうかというような話が出たというようないきさつが記録にあるんですがね。
一色　三ちゃんなんかがやっていたな。
武智　記憶がないなあ。
村上（景）　そんなことは文科の連中がやった。理科はノータッチだった。
司会　二期の諸君になると、文科・理科の別がなくなったので、みんな一しょにやっているんです。
武智　生徒会長も何もなかった。それでも、みんなで団結して――。
村上（景）　ストレス解消の一つの手段だな。
武智　愛光のある面でのかたい一面を打ち破ろうとして、言うぐらいならかまわんじゃないかと――。
野本　一つの抑圧されたような気持があったんじゃないか。
村上（景）　編入して来たら、その抑圧された気分というのはなかったですね。
武智　しかし、全体のもり上がりはなかったなあ。
一色　新聞は、あまり全体的に作った覚えはない。
村上（景）　しかし、あの新聞ができたとき、河井先生なんかずいぶん喜んだように記憶していますよ。
武智　二号位まで出たんよな。
司会　在学中は二号までだったね。
一色　島津先生に天声人語欄――アゴラなど、全般的に指導してもらった。
司会　あれは、矢野の三ちゃんの発想です。
村上（景）　生徒の処分者が出たりして、最後ごろは、ちょっときびしかったでしょう。でも、私などは抑圧されているというより、先生が親身になって面倒をみてくれて、こんないい学校はあるかと思いましたね。
武智　河井先生なんかも、ずい分若かったし、よく面倒見てくれましたね。

大学受験・卒業式

司会　それでは最後にいきましょう。高Ⅲになって、さあ、これから勉強ということになる訳でしょう。その辺のとろいかがですか。
一色　記憶としては、中1～2が一番鮮明なんです。高校に入るほど薄くなって来るんです。
武智　運動会・仮装行列ぐらいしか高Ⅲの印象というのはないなあ。

北村　高Ⅲといったら、休みが早かったぐらいじゃないですか。
司会　実際うちの学校としては、はじめて大学へ送り出す訳でしょう。資料は、旺文社のものはありますが、校内のデーターないし、一番最初の進学者というのは大変だったろうと思います。
一色　旺文社の試験は、それまでにやっていた。そして、中にいいのがおりました。
古川　旺文社の試験を、北高あたりにいって受けたことがあるな。
北村　高Ⅲの時には担任に度々呼ばれた。どこを受けるかということについて――。
武智　しかし、自分らがこれから愛光を背負って立つというような気負った気持というのは、そんなになかったな。
北村　玉井君は防大を受けるために、三日程学校を休んで勉強していた。こういうことをみると、多少熱ははいっていたのではないか。
司会　それでは卒業式にいきましょう。あのとき、ぼくは前の方にすわって、河井先生と正岡先生、白石先生、らが半分ごろから終りまで涙を流していて、ぼくも、もらい泣きをしましたがね。
一色　印象がうすいな。
司会　あの時の答辞は、だれだったんですか。
竹内　村田だった。
村上（景）　卒業式の印象として、非常にスパルタ的なところがありまして、式に行くまえに、そろった時、髪の長いのがいて、河井先生が、まだ時間があるから散髪にいって来いと云ったのをおぼえています。
北村　そういえば、ぼくも、前の日に短かく髪をつんで、くりくりにして式に行ったのを覚えている。
徳永　長かったら、つみにいかしたな。

今後の学園に望む

司会　そこで、現在の愛光にのぞむといったところの忌憚のない御意見をお聞きしたいと思います。
栗田　髪の問題は、この間改善した。耳にかぶさってはいけない、前は眉のところまで、後はえりにかからぬように。
高田　私は、髪の問題は、父母がいかんと思うんです。よく父母の話を聞くんですが、先生から髪を切れといわれ、父母が必らず言うのは、うちの子よりどこそこの子が長いということです。長髪の中学生は、かわいいところもあるが、高校生は、汚らしくて、嫌になります。
武智　結局、親の過保護の現れなんだな。
村上（景）　何でも先生に任せてしまおうとする。
北村　根本的には、やはり、親が悪いと思います。
高田　すぐ他の子と比較したがる。つつかれた時には、すぐ、うちの子よりは、よその子がという言い方をす

る。

北村　子供のことで親が呼び出されても、うちの子は、絶対そんなことはしていないといって、親が子供を保護しようとする。家庭教育がなっとらん。愛光だけで、とやかく言っても仕方がない。社会全体の問題として直してゆかなければだめです。

司会　すると、結局、どういうことになりますかな。

野本　何かしら今の愛光生は、頭も良いかもしれんが、小粒で、おもしろみがないですね。

武智　たしかに、もっと指導が欲しいと思います。今の先生が小さい時受けたような、たとえば、目を自然に向けるというような指導を、先生らにして欲しいと思います。

北村　ぼくらの場合は、親と一体であった。河井先生や正岡先生からは、おまえ等を教えたような教育がもう一度できたら、教師をやめてもよいと云われた。やはり、入学した時から親の教育をしてゆかねば、先生方のそういう教育はできないのではないですか。

武智　制服の問題にしても、ズボンを霜ふりにするというのは、親から出たんですよ。これを今の問題におきかえてみると、髪の長いのより短かい方がいいから、短かくしましょうという意見が、親から出てもよいと思うのです。

古川　髪を長くすることについては、どこからどういうふうになったんですか。

司会　生徒から、嘆願やその他色々出まして、それらを職員会にかけると同時に、父母会にかけたんです。父母会委員の意見を聴取して、賛成が多いからというのでふみ切った。そういう点では、君達の頃のように、学校と父母が密接にコンタクトを持ったというんではないけれど、一応の父母の意見を汲んだということになっていますね。

村上（景）　次に、長く伸びた場合に規制するというのは、学校側から出来る問題でしょう。その枠からはみ出る者には、強い処置で臨むということは出来るんじゃないですか。

司会　それは、この四月からかなり厳しくやっております。今までは、いわば、試験段階だったんですね。最初は、自主的にやれるだろうということでもっていったんです。それが、だんだん長くなっていったのは、やはりテレビの影響ですね。

武智　うちの弟なんかと、私らの年代とは、考え方がものすごく違いますよ。しかし、一期生の意見として、愛光は、やはり、質実剛健であって欲しいと思います。うちにぼくの友達が来る時と、弟の友達が来る時とでは接待の仕方が全然違うんです。ぼくに来た時は、酒を持って来い！で大体すむんですが、弟の方は、お茶菓子にコーヒーがいって、酒なんかは全然いらんのです。そして、自分でギターをひいて遊んでいますからね。

野本　自分らが、愛光生を見て、見苦しいとか何とか云うのは、彼等から見れば、自分らが老境に入っているということですね。

武智　願望として、今の愛光生に外観を飾ろうとする気持をもって欲しくないのです。

村上（景）　伝統というものが時代と共に変遷するというものであって欲しくない。

高田　親が甘やかしている訳よ。他の子供には厳しくするが、自分の子には許してしまう。例えば、ボーリング場なども普段は行ってはいけないと言っているが、お祭とか何とかの時には、少しぐらいなら黙認しようという態度をとるわけです。それが、ひいては、普段にかかわって来る訳です。

一色　ぼくらの時代は、映画も駄目、食堂は親が連れていった場合は、よろしいということだったんですが、都会の子はいざ知らず、田舎の子は、それを後生大事に守っていた。親から連れて行くというケースもなかったですね。

北村　最近、ボーリング場を禁止しているというのも、あれは金がかかるからでしょう。そのために、これが非行につながって行くんです。

武智　髪を伸ばしてもおかしいとは思わない。しかし、髪をつめと云われたら、外にも出られないとか、学校も行きたくないというような、そんな人間は作って欲しくないと思います。

司会　最後に、大先輩として、直接的に後輩に伝えたいことは、何かありませんか。

一色　ぼくらの時代は、大学というものは、それほど意識になかったんじゃないかと思うんです。今の方がその意識は強いんじゃないですか。ぼくらは、入学以来、われらの信条で鍛えられたが、一期生の和があって、大学はどこでなければいけないという意識は、しばらくはなかったんです。根本的にそこが違うんです。

村上（景）　仲間同志の競争意識はなかったですね。

司会　逆にいうと、愛光生は、仲間として、仲よくやっていって欲しいということになりますか。

古川　ぼくらの時代と、今の十三～十四期生とを比べるとどうなんですかね。

武智　ぼくは思うんですがね、学生問題などについて、ぼくは、愛光時代から詩吟をやっておりましてね、とにかく合吟はうまいんですが、独吟ができない。ことばを変えると自主性というんですか、他人と一緒ならばものが言えるが、一人では、なかなかものが言えないということは、やはり、自分を鍛えるという気持が少ない。これは困ると思うんです。

古川　それともう一つ、今度校舎を移転して、立派な勉強の場が出来ますが、それ以外に運動もできると思いますので、学業を忘れない程度に運動もしっかりやってほしいと思います。先輩を大いに活用して欲しいと思います。ぼくなど下手でも、テニスなら指導にいき

ますよ。

村上（景）　ぼくも最後に一言。愛光出身一期生として、頑張らねばという気持は、みんなあると思うんです。ところが、後輩に望みたいのは、愛光はあそこにあったんだなあというような淋しい経路をたどらぬようにしてほしい。これから、あなたは、あそこを出たんですかと言われるようにするためには、卒業していく人達に責任があると思うんです。われわれは、われわれの範囲内で一生懸命努力していると思います。後輩も一生懸命努力してほしいと思います。

栗田（忠）　二、三年アルバムを作っていないようですが、学校が思い出の場にならんのだろうか。まあ、アルバムのことは、さておいておいても、思い出の場になるようにしてほしいと思います。

野本　強制的に作ってもよいと思うんですがね。

栗田　アルバムは作らぬとしても、何か思い出になるものを作ればよいと思うのです。

須賀　でなければ、学校が何であるかわからない。

北村　愛光の友達が、一生を通じて最後の友達だと思います。

高田　一生を通じて本当の友達は、高校時代の友達で、大学を出ての友達は、仕事上の友達で、利害を抜きにしてつき合えるのは、高校時代の友達だと、河井先生に言われたことがあります。

司会　結局、在校時代に、本当の友達を作って、本当の友情を育ててほしいということですね。

古川　一期生は、そうであったと言ってよいのではないんですか。

武智　一期生は、本当に恵まれていました。良い先生や、よい友人に恵まれて、本当によかったと思います。

司会　どうも、今のことばをしめくくりにして、この会を終わりにしたいと思います。

回想篇

在学中の想い出

第二期生　小池昌長

われらの母校愛光学園は、昭和四十七年度で創立二十周年を迎えることになりますが、創立当時と比べ現在の充実、発展は同窓生の一人として大いなる喜びであり、また誇りでもあります。

創立当初は、その存在すら知られなかったような一粒の種子から成長し、今日のような隆盛をみるに至ったことは、校長先生をはじめ諸先生方ならびに経営に当たられた方々の、確固たる方針のもとに結集した、真摯な教育者としての指導、精進の賜と思います。これはまた、ゆるぎない使命感と尽きることのない情熱、たゆまぬ努力をもってすれば、いかなるものも実現可能であるという一つの実証に他ならないものであり、われわれに大いなる勇気を与えてくれます。

私が第二期生として愛光中学校に入学したのは、昭和二十九年四月です。その頃は、愛光学園も開校二年目を迎えたところで、先生方と一期生の諸先輩が〝ここに愛光あり〟と少ないながらも懸命に頑張っておられたものです。私が愛光学園の存在を初めて知ったのは入学六ヵ月前頃で、小学校の担任の先生の話によると、教育方針、内容、スタッフどの点でもすばらしいとの事、また在学生を見ても何となく風格があったものですから、是非このような学校で勉強したいと幼いながらも切望したものです。

入学当時は、先生方も少なく、一人の先生から二科目教わることもありましたし、また教育専門家としての経歴をもった方も少なかったように思います。建物も木造で、城西女学校の一部を使用しており、教育設備もとても現在のように整備されたものではありませんでした。しかし、理想は高く、使命感に燃え、熱心にご指導なさる先生方の集りであったことは他に類例をみないものであり、これら先生方のご努力の積み重ねが今日の愛光学園の隆盛をあらしめたのだと思います。

在学中六年間は、毎日興居島から船に乗って通学しましたが、欠航のときなど大変困ったものです。その間父母にはいろいろと苦労をかけたことを今でも感謝しております。

入学後まず私に与えられた課題は、〝健康な身体になること〟でした。入学試験合格直後に風邪をこじらせて肺炎をわずらい、その後しばらくは健康が回復せず入学式の後数日休んだり、また床の中で勉強したりで、田舎の小学校から入学した私にとっては大変苦しい日々が続きました。そんな私を心にとめていただいて多々ご配

意いただいた先生方のご厚情が、つい先日のことのように想い出されます。とにかく、何をやるにも身体の健康が基礎であることを十分に味わったのも一つの想い出です。

中学・高校を通じ、いろいろなことが計画され実行されてきました。高縄山登山、興居島キャンプ、運動会、クリスマス、宮島、小豆島旅行等、どれも楽しい想い出として浮び上ってきます。そして開校後、年を経るに従い、校舎も新築され、教育設備も充実してきました。建設の槌音と共に愛光学園発展の基盤づくりも進んできたように思います。

このような学園建設の途上に在学したため既存の教育体制の中に学んだ者に比べ、われわれは、より一層自主性と創意と人間性の重要さについて教えを受け、学ぶことができました。そのうち、強く印象に残っているものをあげますと、次のようなものがあります。

第一は、〃われらの信条〃にもあるようにわれらの進むべき方向を示唆してくださったことです。すなわち、〃世界的教養人〃として、〃わが国民のために民族再起の道を発見し、希望と勇気をもって新国家建設の最前線に立たんこと〃〃愛と光の使徒となること〃という目標が与えられたことです。この〃われらの信条〃は、学園創設にあたってその理想を述べたものでしょうが、当時、戦後七年を経たとはいえ世界情勢は危機に満ち、日本国家の前途も明るいものではなく、社会的、経済的不安の存する背景のもとに理解する必要があろうかと思います。しかしながら、今日その背景は変ったとはいえ、異質の危機感、不安感の存する以上、そこに新なる意義を見出すことができます。これらの目標に到達し、われらの使命を完全に果すことは、あるいは不可能かもしれませんが、しかし一歩一歩確実に進むことによって、一見不可能な目標にも到達できるのではないでしょうか。私も今後共、拙いながらも与えられた立場で姿勢を正して、一歩でも目標に到達すべく努力いたすつもりです。

第二は、キリスト教的倫理を学んだことです。といっても、私はキリスト教徒ではありませんが、当時としては、他校ではあまり中学生、高校生に倫理なるものを教えていなかったため、特に興味深かったのかもしれません。躾については従来の日本的躾教育を受けながらも、精神的支柱として倫理学を学んだことは、非常に意義あることと考えます。人の生くべき道、人の歩むべき道の本質について、一生求めつづけたいと幼稚ながらも考えたものです。従って、倫理学は、私の好きな科目の一つでした。

第三は、創造的な教育を受けたことです。最近は科学技術の自主開発が特に要請されておりますが、これは一朝一夕にできるものではありません。創造的な思考は中学生頃から養うべきだと考えますが、その意味でも、われわれを指導された方々は先見性があったのではないかと思います。例えば、すべての科目にわたって言われた

ことですが、問題を解くときには、解答集など見るなということです。すなわち、解を求めて考えぬき、その解を自分で確め、それに自信をもつという態度を教わったことです。また、美術（油絵）でも、描きあがった作品そのもので評価するといういわば本質に直接迫ること、また他人の作品を見るときも、自己の率直な目で見ることを教わったこともその一つです。

その他にも、機会あるごとに著名な方の高説を聞くことができ、大いに刺激されたこと、便所掃除をして、やる気があればできるものだと思ったこと、中間体操で体質強化ができたこと等、想い出は尽きません。

省みると、愛光学園に入学したのがほんの少し前のような気がしますが、それから早くも二十年近くもたとうとは、本当に年月の過ぎるのも早いものです。この機会に、己の努力の至らざるを反省し、今後もわれらの信条に示された目標に一歩でも近づくよう努力いたすつもりです。

末筆ながら、愛光学園の発展と校長先生はじめ諸先生方ならびに学園関係者の方々、および同窓諸兄のご健闘をお祈りします。

現在の事業と愛光で得たもの

第二期生　鶴田健三

おめでとう!! 我が母校の成人式

光陰矢の如しと云われるが誠にその通りである。自分が二期生だと思うと一層感無量だ。おめでとう！万才！声を大にして喜びたい。創立二十周年と云えば大きな区切りである。特に現代流に考えてみても成人式を迎えたわけでおりその意義の重要性を痛感せざるを得ない。本当にご苦労さんでした。田中校長をはじめ創立以来労苦を共にして来た神父様や諸先生方、本当に本当にご苦労さんでした。成人式と共に、名実共に備わった光輝ある一票を、正々堂々と世に投じることができるわけであり、今後さらに、重みのある一票として社会に貢献できるよう、教師諸兄のみならず卒業生現役一同励み合いたいものだ。むしろこれからの社会的効果と云おうか責任と云おうか、世に問われることを思えば、一層の精進を一同覚悟せねばなるまい。

私の略歴……自己紹介

この度の二十周年誌に標記のタイトルで寄稿を依頼されたものの、既に後輩で愛光の教壇に立つものも幾人かいるような現況であり、如何に二十年と云う年月の重みが大なるかを思い、自分の略歴を披露しつつ思い出

に耽ってみたいと思う。

一九四一年（昭和十六年）五月三十日、愛媛県越智郡菊間町にて大内家の三男坊として出生。三才の時教師職（英語と数学を担当していたらしい）にあった父親を亡くし、終戦後母親の出里である松山に移り、松山市立番町小学校から愛光学園中学部へ入学。母親と小学校担任教師に勧められて受験したわけであるが、殆ど何の感激も持たず合格の報を受けた。と云うのも当時の愛光は、先輩として中学一年の一期生がいるだけで、進学コースの素晴しい学校と教えられはしたものの、海のものとも山のものとも判らないばかりか、祖父から『健三、お前は城東中学から松商へ入り野球部で頑張って甲子園へ出ろ。』の言葉に非常な興味を抱いていたからだと思う。野球選手を夢見ていた私にとって、これで大きな人生の指標が決められたわけである。一期生二期生だけの全校生二百五十人と云う少ない生徒数、その割に硬いことばかり並べる先生がた、全く堅苦しく感じていたものだ。それでも放課後よくソフトボールをやったものだが、当時は廃校の運命にあったある女子高と校舎を並べ、運動場を共同使用していた関係もあって、対抗戦（今から思えば我々の愛光在学中唯一の対外試合であった）と云う楽しい思い出もある。然し、悲しいかな一度も勝ったことがないのである。相手は高三の女子で体格技倆とも数段上であったとは云え、好きなソフトボールで女子に勝てなかったことの口惜しさ……。中間体操の苦い思い出、試験々々で常に競争を意識させられたこと、倫理とか云う耳慣れない授業、全く何を思い出しても苦しきことのみ多かりきであった。成績の方は中位で上になったり下になったりで、高校部へ入ってからも相も変らず放課後のソフトボールは止まらず、先生がたをやきもきさせたものである。遂に運命の大学受験到来、国立大学は予想通り不合格、浪人の自信もなく早大の商学部へ進んだ。つまり平均的と云おうか生粋と云おうか当り前の愛光人なのである。但し商学部へ進んだ私の決意が、と云うよりもこの『商』の字が、三年後に私の運命を大きく決定づけることになろうとは神のみぞ知ることであった。以下自分の事業を紹介しつつ愛光で得たものを拾い出してみたいと思う。

現在の事業

昭和三十八年六月のことである。当時松山で商売をし、親代りとして私の経済的援助をし続けて下さった叔父が、私の商売人になる決意を買って、卒業後の商売の指導を快く引受けてくれた関係上、大学生活四年目を迎えても、就職の心配もなくのんびりとしたものだった。その叔父が叔母と共に急逝したのである。悲惨な事故によって私にとって最も尊敬すべき両巨星を失い、その悲しみは筆舌に尽し難いばかりか、恐らく私にとって一生の中で最も悲しむべき出来事であったろう。急逝の報を受けて東京から松山へ帰る道中の苦しかったこと……。結局残された子息達も弱年であったことや、

私が叔父のお気に入りであったことなどから、跡目を継がされることになった。巨星の跡を継ぐことの重大なる責任を感じ、大学卒業も返上する決意であったにも拘らず、店の番頭をはじめ周囲の温情ある人達の応援即ち『大学だけは卒業して下さい。残り九ヵ月の辛抱です。』の熱意ある懇請に打たれ、ここに不本意ながら学生社長が誕生したわけである。社名は（有）つるや商会、業種は靴・履物・袋物の小売業である。学生でありながら社長と呼ばれることの恥ずかしさ、商売と学業を両立させる苦労、翌年の三月に卒業証書をもらうまでの九ヵ月間の長かったこと、その間確か十九回東京松山を往復しながらも心身共に疲労の極に達した自分に打ちかったこと、然も自分は未だ学生の身分であると自覚し飛行機の利用をすすめられたにも拘らず学生らしく列車を利用し続けたこと、全くよく頑張ったものだと思う。然し、卒業証書を持って帰松した時、番頭をはじめ店の者達が涙を流さんばかりに喜こんでくれた時、私の苦労は一度に吹き飛んだばかりでなく人の心に触れたのである。先代社長つまり亡くなった叔父が、如何に偉大なる商売人であったかは、その仕える番頭をはじめ店の人達の意気込みを見れば一目瞭然であるばかりか、私のようなものが跡を継いでも何とかやれるだけの布石のあったことを知れば尚更である。全く偉大なる実業家であったと、日が経つにつれて、一層その感を深くするものである。

現在既に九年近くなり業績の方も何とか向上し、やっと全国靴のベスト二十位に名を連ねることができるようになった。とは云えまだまだ一介の靴屋であってこんなことで慢心しているわけではない。目下先代の子息も早大の商学部を卒業後店に戻り、専務業とは云え小生顔負けの活躍振りであり、女子社員が殆んどであった頃に比べ、若き男子社員の採用を図って業績向上に務めている次第である。つるや即ち愛光二期生鶴田健三、七期生鶴田学を軸とした愛光精神の通った店である。私は商人になって悔いはなかった。欲を云えば人に使われずして人を使う宿命を背負ったことが、私の最大の弱点であると思う。その点弟であり私の後輩である専務は、より若くより新しいものを学んできているだけに誠にうらやましい限りである。

小生がやりたくて出来なかったことをどんどん消化してゆくあの若さとバイタリティー、小生が最も目を見はることの一つである。どんどんやってもらいたいものだ。私はこれまで自分の事業にも愛光精神をとり入れてきたが、それは今後も恐らく変らないと思う。決して愛光の二十周年に花を持たせて美辞麗句を並べている積りはない。自分の人間形成の主要素を成した過去を振り返ってみるに、愛光時代の六年間の思い出が殆んどなのである。自分でも不思議でならない。大学の四年間も確かに重要であったに違いないが、自分には愛光の同期生とのつき合いが殆んどであったことや、愛光時代のような真摯な学業態度をとらなかったこともその理由だと思う。要す

るに大学は愛光の延長であって、愛光精神以上のものを自分には把み出せなかったのである。事業の経営とは、経営者の決断と経営に従事する人々の結びつきなのである。即ち人間の信頼が一番大切なのだ。人間が事業を行なっているのであって、そこに愛光精神の大切さを身にしみて深く感じるのである。

愛光精神とは何ぞや

然らば愛光精神とは果して何だろうか。誠に難解な事である。愛光時代の六年間を振り返ってみるとしよう。まず最初に当時の現役時代の観点からすると、授業の始まる前に唱和させられた『我々は世界的教養人として…』の理解し難い文句、雪の降る中でさえ裸で走らされた中間体操（今だに当時の音楽を聞くと走る姿勢になるが）、月例テストだ中間テストだ期末テストだ、やれ模擬テストだのテスト攻め、倫理と云うおもしろくもない道徳教育……等々どれを拾ってみても余り喜こばしいものではなかったような気がする。ところが愛光卒業後十三年目の現在の観点からすると、良薬は口に苦しの諺通り、上記のことがどれを拾ってみても良薬として生き残っているから不思議なものだ。三十一才を真近かに控え、一子の父親であり、小とはいえ一事業家であり、愛光精神なるものを常に肌に感じていると自負する私が、私なりにその愛光精神を論理づけてみるとしよう。人間の知識吸収能力が最も秀れているのは、中学高校時代であるから大いに勉強をさせるが良い。又、体力造りを最も可能にするのもその時代であるから大いに体力造りに専念すべし。健全なる精神は健全なる肉体に宿ると云われる通り、健全なる肉体があってはじめて健全なる知識も精神も身につくのである。ところが精神的な反発力と云うか抵抗力が最も強くなるのもその時代からであって、それらの相反する要素を調和させるものが現代社会に於て最も欠如していると思われる。それが倫理であり道徳なのである。即ち健全なる肉体に豊富な知識が一体化し、さらに道徳が備わった時そこに生れて来るものこそ教養なのである。知識人と教養人とは大いに異なるのである。幸いなことに愛光では体力・知識・道徳の三本柱が確立している。私の説く愛光精神とは即ち教養人になるためのものである。然も世界的教養人なのである。冠たるかな愛光精神！最後に駄弁を弄するようであるが、愛光生は社会的常識が欠けていると云われることが時々あるが、これは英才教育に走り過ぎた故に、教養人としての資格を得られなかった一部の卒業生への批判だと思う。諸先生方の『体』・『知』・『道』さらに『愛』を加えた教育精神を切に発揮されんことを願い、我々の二世にも愛光精神を一刻も早く引き継がせたいものである。

愛光時代の思い出

第四期生　湯山秀俊

「愛光学園20周年記念」これについて感じたことを書けということであるが、一体何をどう書いたらよいかさっぱりわからない。どうも頼んだ方もよくわかってないらしい。しかも明日が締切日であるから、何が出来上るかについては責任は持てない。まずは思いつくまま筆を進めてみたい。

小生が卒業して今年の三月末で丁度十年になる。十年ひと昔というが、なる程、今や高校生活は昔ばなしということになるのかと、何か月日の立つことの速さに空恐ろしい気がする。そういえば最近のガキどもは小生のことをオジチャンと呼ぶ。この若さにあふれるカッコイイ独身男性をつかまえてオジチャンとは何だ、オニイチャンと呼べと訂正させるが、それも何か無理じいさせている感が強くなり、非常にさみしい思いをしている。

過ぎ去ったことの話をするのはあまり好きではないが、この際話を前へ進めるため過去をふり返ってみると、最も強烈な思い出は大学時代である。中学、高校時代の記憶は何かぼんやりかすんでいる。もっともこれは生活に変化があったか否か、自分のやりたいことを徹底してやったか否かによるものであって、社会生活に入ってからの思い出も大学時代程ではない。高校時代で思い出すことは、校長先生には甚だ申しわけないが、校長先生と二度にわたって大口論したことであろう。口論の内容は、今でもはっきり憶えているが、別に書く程のことでもなく、すべて小生の未熟さから出たことである。その他にも思い出せば色々あるが、全体としては、適当に遊び適当に勉強したという感じが強い。毎日、日中はテニス、ピンポン、ソフトボールなどの球技に熱中し、夕食後勉強、十時頃から小説を読み、週に一度ぐらい映画を見に行くといった生活パターンが頭にうかぶ。つまり生活に際だった変化がなかったという印象が強い。もっともこう書いているうちに、先生方と一緒になって遊んだ楽しい日々が思い出されてくるし、高校三年生の時の、勉強もしないが、遊びもしない苦しい思い出や、同級生諸君の思い出も次々頭へ浮かんでくる。が次に来る大学時代の千変万化の生活とはまたその種類が異なる。しかし、別に思い出をもつことが人生の大事でもなければ、その時々に応じた生活の仕方もあり、中学・高校生活に変化を与える必要があるなどというつもりは全くない。それどころか、小生の場合、中学・高校生活を適度にエンジョイさせてもらったこと、各先生方に家庭的な雰囲気で色々指導をうけたこと、基礎知識、理論的な考え方の基礎

をたたき込まれたことなどに対し大いに感謝している。もっとも、作文教育がほとんどなく、ここに生き恥をさらす結果になったことについては大いに恨んでいる。

大学の四年間はこの中学・高校時代の反動であったということができる。愛光学園の卒業生は受験勉強の反動で、大学へ入ると全く勉強もせず遊びに走り、就職すると再び落着いてまじめに戻るといわれている。これは一面では真理をついているといえるし、また、一面では愛光の教育を誤解しているといえよう。小生の場合、上記の風評のサンプルともいえるため、その両面がある程度自分なりに理解できると思う。愛光の卒業生の場合、なる程大学時代授業にも出ず、徹底して自分のやりたい事をやる者が多い。小生の親しい友人を見廻してもそういう連中がほとんどを占める。また、その連中が社会生活に入ってやる気で各々の仕事にとり組んでいることも事実である。

大学に入って授業にも出ず、勉強もせず、自分のやりたい事だけやっているというのは社会的に見れば明らかに非難に値しよう。とくに、さしても多くない収入からやりくりして学費や生活費を送金している親にとっては大変な裏切り行為である。そのような大学生は、親や社会に甘えているという非難を甘んじてうけるべきである。そしてこのような大学生を生み出す原因は、高校時代の欲求不満、甘やかされた教育、マスプロ大学制度などにあることも事実であろう。

小生の場合、甘やかされて育ったせいか自我が強く、自己中心的な人間であり、高校時代の変化の少ない生活に不満をもち、大学へ入れば自分のやりたい事を徹底してやりたいという欲求が非常に強かった。そして大学は自分の自由な時間を四年間与えてくれるところという考えで入学したためマスプロ教育にげんめつを感じるなどということは一切なかったといってよい。

そして自分のやりたい事に熱中したが、その熱中する中で種々の摩擦に出会い、人間の弱さ、醜さを知り、自分の意志を通し、やりたいことをやるということが如何に困難であるかを認識させられた。これらは、お互いが学生であるために一般社会よりも自我が裸でぶつかり合い、より端的な形であらわれる。そして挫折感にしろ満足感にしろ若いがためにより激しい形であらわれる。そしてその中で得るものも失なうものも多く、自分自身が大きく変化して行き、卒業時には四年間でやりたいだけのことはやったという満足感をもつに至った。もちろん自己満足にすぎないかもしれない。これらのことは、真面目に勉強していても得られたかも知れない。得られるべき学問上の知識が十分得られなかったことは大きなマイナスである。

しかし、社会に出て以来、高校時代の基礎学力、理論的な考え方とこれら四年間の大学生活で得た体験、できるだけのことはやったという満足感が大きな支えになっていることは否定できない。

どうも議論の途中で字数オーバーとなってしまった。心残りではあるが、このような青っぽい議論を続けても興味はなかろうと感じ、筆を置く。

在校中の想い出など

第五期生　上田時雄

愛光学園が創立二十周年を迎えられたとのこと、心よりおめでとうございます。

私が五期生にあたり、昭和三十八年の卒業。ちょうど愛光の歴史の半ば頃、またいわゆる一昔前の想い出を抱く者といえそうです。想い出と称する断片がうまくまとまりそうもありませんが、今こうしてペンをとる時、第一に感じることは、私たちの在校中と現在の在校生では、本質的に相違がないとはいえ、さまざまの変化や多様性が見い出されるのではという感慨です。

今は生徒は長髪であるそうですが、私達の頃は皆イガグリ頭。生徒会で時々議題として提出されていましたが、一蹴されてしまう有様でした。卒業式の日は、全員廊下に並び、許される限度の長髪基準が選ばれ、それ以上の長髪者は、散髪してこなければ卒業証書を渡されないなんてことを演じたりしたものです。散髪を命ぜられた者の中には、こっそりと先生のスキをみて、卒業証書を盗みとり、喜々として学園を去ったのです。

教壇の前に座らされたり、白墨を投げられたり、ゲンコツで悟らされたり、運動場を周らされたりはよく経験したことで、別に当時は何も感じなかったのですが、今私がそれを味わされるならばどんな気持を抱くだろうか。どうも反発心が先立ちそうですが、これは何故だろう。先生のあり方という問題は抜きにして、自分の変化に驚きと興味をかきたてられます。

ある日生徒が机の横に足を出していた。授業中であり、先生が教科書を読み上げながら生徒の間をまわっていたところ、その生徒の足につまずいてしまった。その時、その先生はその生徒に「あっ、すみません。」と言われた。このささいな出来事は、何故か今もさわやかに想い出されることがあります。

野球・柔道・バスケット・テニス・卓球等と運動もよくやりました。ソフトボールでの先生との対抗試合は、日頃のうさ晴しとして記憶に新たなものがあります。が、何よりも印象的だったのは、私的に企らんだ他校との対抗試合（軟式野球）。〝愛光スーパーマーケット〟のユニホームを借り勇躍乗り込んだものの試合は惨々なもの

で話にならない。日頃の天狗連が全く小さくなってしまい、日々練習を積んでいる者のスゴさというか、美しさというか、片手間に趣味として遊んでいる私達とは、次元の違う何かに圧倒されてしまったものです。

こうして書いていると、どうも勉強についての想い出が浮んでこない。いかによく遊んだとはいえ、今から考え現在の私の生活と比すれば確かに雲泥の差の勉強をしたな、という感慨は抱けるものの、それ以外に特に印象がない。想い出というものは、あるいは逸脱の楽しみの中にのみ形成されるのではないか。私自身の興味が、遊びにしか集中していなかったという結果の現われかもしれませんが、それを割引いても、やはりその感はぬぐい去られません。

愛光を出た時、「大学に入るためならばいい学校だったな。」という印象が浮かびました。何故なら、鶏口となるよりも牛後となる方が怠惰な私にとっては楽であったのです。現に大学での友人の話を総合しても、学校から一人とか二人しかいわゆる有名大学へ入らない高校を卒業してきた者は、私に数倍する孤高の努力を重ねてきているようです。愛光ならば劣等感を抱かされながらも、ひよっこひよっこと ついて行けば、まあなんとか大学というものだけは達せられたのです。大いにその意味では感謝すべき環境だったかもしれません。

しかし、余裕というか、多様性というか、幅広き教養というか、何かそうした拡がりの不足を感じさせられたのは私だけでないのも事実です。後になり他校出身者の教養なんてものも、私たちと大差はないと気付き安堵したりもするのですが、それでも彼らの持っている教養の拡がりや深さ、少くともその下地には羨望を抱かされました。何よりもそうした一般教養的なものや、高校生らしき濶達さに歩を向わしめた環境をうらやましく思ったものです。現在の愛光のカリキュラムや課外活動等について詳しくは知らないため断言はできないのですが、今後の愛光の課題は、余裕ある学園への志向にあるのではないかと感じさせられます。ある時点にまで到達すればいいのですから、その過程では大いに寄り道をしたり、回りをながめ楽しんだりの、いわば大学受験に直結しない無駄を拡げるべきだったと、いささかの後悔を憶える昨今です。

授業を例にとれば、英語なら速読の練習、英会話の時間、歴史、社会ならばディスカッション形式あるいは発表形式の授業、国語なら読後感の作文や発表といったいわば生徒の主体的参加がより計られる授業がもっともっと導入されてもいいような気がします。今ひるがえって中学高校の勉強を考えてみますと、社会に於て仕事に於てその知識が独立独歩で役立つことはほとんどありません。常識であったり、あるいは他の知識の肥料として土に埋もれたものだったりします。それならば、何故興味を培う勉強方法をとらなかったのかと、やはり悔やまれてなりません。もちろん能力不足もあったのですが。

今私はたまたま会社より貿易研修センター(貿易大学)に派遣され、いわば学生みたいな身分で勉強させられています。ところが、いつまでたっても勉強が好きになれない。これは恐らく愛光のせいではないだろうか、と自分の努力をたなに上げ、ひそかに恨みがましく思ったりもしています。

ともあれ、愛光は進まねばなりません。大いなる発展を期待するのみです。

いとも恥ずかしきこと

—音楽放送と図書館—

第八期生　門　多　丈

我々が十二から十八にかけて過ごした愛光時代。それは意識するとせざるとに拘らず、受験というものが大きくのしかかっていた時であると同時に、その反面自我というものに目覚めていく頃の常として、さまざまな人々、さまざまなもの、さまざまな出来事との触れ合いの中で自分というものが揺り動かされ、そして、大きなブレを描きながらもそれに対して、自らを対処させていった時であったと思います。

私はこれらのことを忘れかけていました。我々の多くにとっては愛光時代はほんの断片的な思い出を除けば、「無」としてしかとらえないものであるかの如き観を呈していると思います。それはそれぞれがその後に続く大学生活そして社会生活で、より大きな、より幅の広い、より深いものに出喰わしそれと必死に取組むことで精一杯だったこともある。あまりにも身近かであるが故に逆に巣立った所をぞんざいにする傾向があることにもよるでしょう。いわば、更に時間の経過を経なければそのもっていた意味をとらえられないものとしてあるのではないかという気がします。

それに気づかされたのは実にこの「記念誌」への寄稿依頼という出来事によってでした。そのテーマとして「音楽放送など」と書いてあるのを見て私は新たな感慨をおぼえました。自分でも忘れていたことが私の印象(我々の共同生活の波紋ともいうべきもの)として残されていること(ちなみに原稿担当者は砂田任叙先生となっていました)に対する感慨と、「音楽放送」という言葉によって惹き起こされる自分の図書館生活というあるひとかたまりの思い出に対する感慨です。更に言うならばこれらのことに「音楽放送」はいわば「若気の至り」としていとも恥ずかしきこととして何となく忘れてしまいたかったものであり、それほどでなくても何か「充分にやりきれなかった」ものとして心にひっかかるものでしたから。

大分前置きが長くなりましたが、テーマに入っていきましょう。

「音楽放送」とは我々が高二の時（昭和39年）週三回昼休みに流したクラシック音楽の校内放送のことを言います。モーツアルトの交響曲第39番の第3楽章のメヌエット（ワルター指揮のNYフィルのレコードでした）をオープニング・テーマとしていましたが、選曲は思いつきのままでなるべく親しまれやすいもの、お腹の消化に悪くないもの、話題になりそうなものを選んで行ないました。装置は事務室の片隅にあったあの中間体操用のプレイヤーでした。皆が走る時にかかった「歓喜の歌」を流したプレイヤーは心なしか砂埃がジャリジャリとついている感じで（野本先生ゴメンナサイ）「大丈夫かなあ」って心配しながら秘蔵のレコードを披露したものでした。私の相棒は山内元君（早大理工学部在学中）で小学校以来のコンビでした。二人で図書委員をやったり、レコードコンサート・レコード鑑賞部をやったり、あげくの果てが音楽放送という道筋でした。この二人は対照的なコンビであったと思います。押しつけがましい私とさらりとした彼というとりあわせでした。例えば、この音楽放送の場合も音楽の前の解説を彼がサラリと流すのに対して、私の方は我ながら満足しているプログラムなのでつい説明がくどくどと押しつけがましくなるという具合でした。これは図書館活動その他にもあらわれ、しかも全体としては彼の方が芯が通っているということでしばしば私の反省の材料になりました。大分話が横にそれたので戻すと、この音楽放送は我々にとっては図書館活動の一つの発展であり（後には後輩の諸君が「本の紹介」などに昼休み放送を使っていました）、又受験というものに皆が呑み込まれてしまいそうな現実に対してのささやかな抵抗であり慰みでした。（事実放課後のレコード・コンサートは人がなかなか集まりにくいという現実がこの放送の背景にあったのです）そして何よりも担当した二人が丁度音楽が好きで好きでたまらない時期であったことも見逃せません。話は余談になりますが、この放送のせいで私は音楽の権威者にされたのでしょうか文化祭ののど自慢の審査員にされたこともあります。この放送は一年間続けられました。これはある意味で我々の図書館生活・活動の執念深さ（別の意味では押しつけがましさ）の一つの頂点ともいうべきものであったという気がしてなりません。そこで我々の図書館生活についても少しのべておこうと思います。

我々八期生の図書委員は殆んど六年間続けてやった者が多く、歴代の委員の中でもユニークな存在でした。「金魚鉢（カウンターの後のガラスで仕切った部屋をそう呼んでいました）の主」と呼ばれるのに相応わしいぐらい、何とはなしにたむろしていたものでした。そんなことを何年もやっていれば、いくら鈍な山椒魚達でも考えつくものでいろんな図書館活動をしました。本の整頓・貸出しなどの日常的なものの他に、図書館紙「ビブリオ」の

発行、読書週間や夏休みの図書推薦、様々な調査や発表、レコード・コンサートや映画会（講堂でやった黒沢明の「隠し砦の三悪人」が忘れられません）、他校訪問など幅広い活動、いわば文化活動ともいうべきものにとりくんだものでした。我々が愛光にあったさまざまなサークルに較べても（図書委員会は単にサークルとは言えないものですが）、幅広い活動の基盤があり、現実にそれなりの活動ができたということは幸福なことであり、誇るべきことでした。それを支えたのは、中一から高三までの層の厚い人材によって構成されていたことと、やはり本が好きな者が多く、お互に無意識に刺激し合っていたことによるものだと思います。勿論こういうきれい事では済まない様々な困難があったのも事実です。いくら平気なようでも受験の重圧もあったし、それ以上に我々自身をとらえたのは我々の活動のひ弱さに対するひけ目のようなものでした。マンネリズムに対するおそれと、具体的に「何かをやった」という手応えのなさに対する焦りというものがつきまとっていました。そういう自信のなさがお互に対する批判や励ましを鈍らせていましたし、更にいうならば当時にあってもいうべきことをなかなか言わないし言えないという実情がつきまとっていました。それは我々自身が知識（社会問題なども含めて）というものを生半可なままに鵜呑みにしている傾向があったと同時に、それに正しく対処する訓練を充分には受けていなかったということにも起因していたのだと思います。

このことは我々より更に若い世代、即ち現在愛光に在学している後輩諸君の中により深刻に存在するのではないかという気がします。それが時代の趨勢であるとしたらそれに対して一個の自立した個人として自己の確立に努めて欲しいという気がしてなりません。これは可能性の上でも、又必要性の上でも我々の時以上に深刻です。そしてこのことは、「若いんだから」とか「受験があるんだから」という逃げ口上は許さない厳しさをもっていると思います。ここに於ては他人に対する傲慢と自己に対する不遜は一切許されないし、今までの理性とか感情とかはもう一度問い直される必要もあると思うし、ましてや青春期にありがちな自己閉塞の状況を自らつくり出しそれに浸るという甘えは許されないと思います。大分堅苦しくなりましたが、今言っていることは我々が学生時代を振り返って一番痛切に感じることであり、汲みつくせなかったものを何とか後輩諸君に頑張ってほしいという切なる気持から出ているのです。そういうものを含みながらも図書館での生活は楽しいものでした。遠足や海水浴、夏休み皆で本を修繕した後食べた西瓜の味、卒業生の送別会をした寒い日などの思い出は、様々の企画・催し物に衆知を集めて、そして肩を寄せあってしたなつかしい思い出とともに心の中に残っています。我々を支えて下さった先生方、岡部さん（旧姓乗松さん）始め多くの方に対する感謝の気持を込めてこの筆を置きます。

愛光を出て六年——ああ勉強

第八期生　木藤隆雄

「木藤！お前勉強してるかっ、勉強しなきゃダメなんだよう、ダメなんだよう——」……。春まだ浅き東京の夜は寒かった。その中を、三人の男が、有楽町ガード下の寿司屋へと消えた。寿司屋のカウンターに坐った時、三人は既に赤い顔をしており、足は、ややふらつき気味だった。緊張の連続だった一日から解放された事で、酔いも心なしか早かった。その寿司屋で先輩のT氏は、新人の小生をつかまえ、わめいた。「勉強しなきゃダメなんだよ。勉強やれよ、寿司食えよ、ギンギンにやらねばいけないんだよ、ビール飲めよう」、小生は、ただ黙ってきくだけであった。

社会人となって一年、何もかも新しい事だらけの毎日に、疲れ、傷つき（？）メロメロになってアパートに帰り、泥の様に眠り、翌朝朝食もとらず飛び出すという毎日が続いていた。これでは、いけないいけないと思いながらも続いていた。

あこがれのアナウンサーになって一年が、あっという間に過ぎた。

新人に与えられる主な仕事は、宿直勤務、昼間のニュース、そしてコマーシャルである。宿直の時は、夜六時に会社に行き、翌朝十時迄仕事をやる、この間眠られるのは、午前一時から四時迄の三時間。しかし、これはあくまでたてまえであって、三時間の熟睡を楽しむアナウンサーは少ない（よっぽどのベテランか、心臓に毛のはえている人以外）。宿直室はベッドが十二並んでおり、アナウンサーの他に、技術さん、放送記者、翌朝早く競馬の取材に行くスポーツアナウンサー、何だかわけわからないで寝ている正体不明の人などが、思い思いの姿で眠りこけているが、人によってイビキかく者、フトン抱いて悶える者、寝ながら歌を口ずさむ者、途中で起きてオシッコに行く者と色々いて、ガタついてなか〳〵眠られないばかりか、寝ついてもすぐ起こされる。こんな中でうと〳〵とまどろんだら、もう守衛のオジサンが起こしに来る。四時に起きて、顔を洗って、「アエイウエオアオ」なんて声出して、報道部へ行くと、朝五時用のニュースが出来ている。ストップウォッチ片手に、まわらぬ口で下読みしたあとスタジオへ入りニュースを読む（こんな時間誰もきいてないだろうなと思いながら）。その後、六時、六時半、七時、八時と眠い目をこすりながら、ニュースを読むのである。それも朝だという訳でサワヤカな声を出さねばならない。この宿直が週二回あるから、もう

完全に夜の男とあいなり、時々何の為こんな事やってんのかしらと思う事もある。

コマーシャル。これも又、なか〳〵大変である。「水虫にきく〇〇を是非お試し下さい」などというなまやさしいコマーシャルはまずない。或る時は女性アナと、恋を語るが如くささやき（ただし、スタジオを出ると、もう二人は決して親しくない。親しいのはあくまでスタジオの中のみである）、そして或る時はうたいあげ、或る時は叫び、或る時は泣き……もう大変である。スタジオの外にはスポンサーがいて「もっとコミカルに」「もっと野性味をおびて」「メチャクチャに早口で」とメチャクチャな注文をつける。スポンサーも必死であるから当然アナウンサーへの注文も厳しくなる。アナウンサーは、ただ耐えるのみである。或る先輩アナ氏曰く「大学出てまで、恥かこうとは思わなんだろ。」小生「はい…」。そんな訳で、毎日実に疲れる。だから毎日毎日生きていくのがやっと（ちょっとオーバーかな）余裕のない毎日だった。

そこでT氏のこのワメキとなったのである。T氏は今や深夜放送で人気ナンバーワンのディスクジョッキーであり、若者に圧倒的人気を誇っている。忙がしさの故か、それとも他の理由からか、めったに会社にいない。ヨウとして行方はしれぬ。が番組が始まる一時間程前、さっそうとあらわれ、終わるとサッと消える。従ってゆっくり話す機会もあまりなかった。しかしその放送をきいて「何であんなに面白いんだろ」「きっとものすごい素質を持ってるんだろ」と、うらやましく思っていた小生、T氏の話をきき尊敬に変わった。

T氏が読む本、週刊誌、新聞は、ものすごい量である。そして何でも経験し、何でも見に行くという勉強ぶりに「このベテランにして、この努力」と、大いに尊敬すると同時に、人気の秘密を悟ったのである。

勉強、勉強、勉強——考えてみたら小学校以来、この言葉に追いかけられ通しである。或る時は「宿題をやらねばならない」という雰囲気だったり、又或る時は「大学に受からねばならない」などという厳しい雰囲気だったり、色々だが「いつになったら解放されるかな」と思いながら今日迄来てしまった。本当のことを言うと、苦しい受験時代が過ぎれば楽しい大学生活が待っている、そして社会に出れば、もう、勉強とはお別れ、——という予定だったのだ。それなのに、どうも様子が変だ。まあ勉強は一生続くものだと覚悟を決めた方がよさそうである。まあ、好きな仕事だし、何でもかんでも吸収して大きく成長したい——こんな風に思っている。しかし、いくら何でもかんでも学びとりたいと思っても基礎がしっかりしてなくてはどうにもならないが、その基礎を作ってくれたのが愛光である。何と言っても六年間毎日々々勉強に明け暮れた実績（？）は大きい。城山の見える運動場での中間体操、運動会、文化祭、マラソン大会、そしてクラブ活動と色々な事があり、六年間があっという間

に過ぎた。時々松山に帰り愛光の傍を通るたびになつかしさと同時に、あの当時と同じ自分なのに、いつの間にか社会に出て社会人としての毎日を送っている自分に、何か不思議な感じさえ抱く。

医師となるに臨んで

第八期生　是沢俊輔

緑色の校舎と、あの狭い運動場の愛光学園を卒業して早六年目を迎える。今日までの六年間、私はずっと山口大学医学部にいて、今年やっと六年生となり、卒業まであと一息のところまで来た。

山口大学に入学してから、私はすぐに庭球部に入ったが、理由は、ただ愛光の先輩が二人いて、その二人から誘われたというだけである。医進時代の二年間は、中学・高校と運動らしい運動はまだ一度もしたことが無かったので、もの珍らしくてただ無我夢中で練習をした。二年になると、いつの間にかレギュラーのどんじりに引掛っていて、それから私は、翌年の一つの大会を除いて今年までの全ての対抗戦に出場することとなった。この医進の二年間は、受験生時代の反動と練習のための疲労で、食事を済ませて風呂を浴びると、すぐ眠くなり、本らしい本は一冊も読まなかった。それでも、進学課程の終り頃になると、毎日毎日テニスばかりしていて本を読まないと、それまで蓄えていた知識が少しづつ頭から抜けていき、次第に自分が馬鹿になっていくような気がして、毎晩、濃いコーヒーを入れては本を読もうと頑張ったこともある。しかし、私にとってこの二年間は愛光学園での生活の懐しさや感謝の気持を抱くという余裕は全く無く、明けても暮れてもテニスのことで頭が一杯になっていた。

学部に上がり、練習時間が短かくなって専門書などの本を読む生活が始まると、それまで抑えていた読書欲が俄かに昂まって来た。そして、体力に自信のあることを頼みに、試合の前などを除いて毎日睡眠時間を減らして本を読んだ。リルケやキルケゴール、マルセル等に親しみ始め、また、それまでの友人が運動部の人達で、あまり哲学や文学の話をしたがらない連中に限られていたのが、次第に哲学の好きな連中とも交際が広がり、私の中には、高等学校時代への懐しさが生じて来た。

「愛光卒業生として恥ずかしくないよう、「一生懸命頑張ろう。」夜も更けたアパートの一室で原稿用紙のマス目を埋めながら、固く心に誓った。

私は中学・高校を通じて、キリスト教は、全く理由も無いのに人間の欲望や行動をがんじがらめに縛りつけているような気がして、ずうっと心の中で反発しつづけていた。社会倫理の時間の退屈だったこと！　その内容はいかにも論理的であるかのように見えるが、その大前提が正しいという証明はどこにも無く、まさに砂上の楼閣だ。利他的な愛というものが絶対的に存在するのだろうか。神の存在を因果律より証明するに至ってはまさに、笑止の限りである。このように高校時代の私は、愛光学園に対してずっと疑問を抱きつづけていた。しかし、受動的ではあったにせよ私は愛光学園で宗教に対する知識を与えられ、又、反発的ではあったが宗教について考え、ある程度哲学の本を読んだ。理解にはほど遠かったが、私がとにかく共産党宣言を読んだのはこのような時であり、寮では、寮母さんに見つからないように友達と夜更けまで話し込んだりした。

このような愛光学園での生活が、二年余りの空白ののちに、再び哲学に親しみ人生を考え始めたとき、本当に懐かしくかけがえの無かったものに思えて来た。そのようにしながら私は、失恋したり、されたり、友人に裏切られたような気になったり、自己嫌悪に陥ったり人並の経験をし、また色々な意見や人間を見たりした。ある時、愛光時代の友人が手紙で、まだ私のなじみのない哲学者の名前を教えてくれた。シモーヌ・ヴェーユである。私は彼女の名前を知ってから一、二年経てはじめて、彼女の著作に触れた。この時の感動は今も忘れない。自分自身が嫌いになって、将来に対する自信の全く無くなっていた時、本屋の店頭でふと彼女の本を見つけた。「神を待ちのぞむ―シモーヌ・ヴェーユ」どこかで聞いた名だな、と思って拾い読みして見ると、胸をナイフでえぐるように私自身を告発するような文章が次々と現われ、私はいつも窮々であるのに、この時ばかりは前後の見境いもなくそれを買って帰った。そして、あとで、愛光時代の友人から紹介してもらった本だということが分った。それ以後私は、彼女の本を持つだけは持とうと思い、「シモーヌ・ヴェーユ著」とある本や、それに関連した本は全て買うことにしている。そして暇を見つけては読み、悩んでは読みして、リルケ・キルケゴールと共に私にとってはバイブルとでも言うべき本となった。

今まで私が好きになった著作家を見てみると、例外なくキリスト教と深い関係をもっている。私は現在神を信じている訳ではないけれども、私の考えの根底には、かつてあれほど反発していたキリスト教が、どうしようもなく横たわっているように思える。それは私にとっては愛光という小さな社会に属していた時の、最高の遺産ではなかったかと思っている。罪を知り、愛を理解し、ヨブの気持を少しづつ理解でき始めたことが、あと半年のちに、医師として社会に出ようとしている今の私にとって、どんなに大きな意味をもつものかを考えてみるとき、愛光学園での、あのいやいやながら受けた授業と、寮で

の生活と友達との交際を感謝せずにはいられない。

新しい体操の修得

第十期生　坪内　精次郎

私達十期生が入学したのが昭和三十七年、もうあの時から十年もたったと思うと、「歳月人を待たず」とか「光陰矢の如し」といった格言が正に当を得ているということがよくわかります。あの古い木造の校舎で学ぶということが私にとっては誇りとさえ感じられました。いかに外観はみすぼらしくとも、いやそれだからこそかえって内容の充実した授業が受けられ、自らを磨くことができる、と少年らしい希望を抱いていたことを覚えています。振り返ってみると、愛光時代六年間の思い出は枚挙にいとまがありません。あの六年間は「青春」といわれる時期そのものなのだから、それも当然のことなのでしょう。とにかくアッという間に過ぎ去ったという感じです。この多い思い出の中からどれを選んで書けばよいものか全く迷ってしまいます。ここでは、今の時点で最も印象に残っている事を書きますが、年月の経過と共に、別の出来事が一番なつかしく思い出されることだろうと思います。

高Ⅰの夏休みに、私を含めて六人が東京の三橋体育研究所へ実習を受けに行きました。その時に修得して帰ったのが、「誰でもできる体操」「疲れをなくす体操」「体を鍛錬する体操」の三つです。ラジオ体操しか知らなかった私は、新しい体操を三種も一度に体得することができるかどうか正直言って不安でした。東京に連れて行って戴いた野本・竹本両先生と当時まだ学生であった砂田先生のご指導で何とかものにすることができるようになると、この体操は実に健康に良いということを再認識するようになりました。

私にとって初めての上京でしたが、東京駅から宿舎の国立競技場に行く電車で早くもちょっとした事件が起きました。中央線の或る駅で電車から降りようとした時、急にドアが閉じてしまい、僕は必死の思いで腕をドアから抜いてホームに飛び降りましたが、友達の一人が電車に残されてしまいました。次の駅で待っていたので何とか連れ戻すことはできましたが、「生き馬の目を抜く」という東京の世智辛さを思い知らされました。

東京に着いた翌日から連日特訓を受け、最初は食事も喉を通らない程でした。牛乳とコーラばかり飲んでいたように思います。宿舎は前述の様に国立競技場でした。

といっても、勿論グランドで野宿したわけではなく、競技場の建物の中にホテルがあるわけです。その名がスポーツマンホテルとは恐れ入りました。ホテルといってもただ泊まれるという程度のものでした。（こんな事を言っては、費用を出して戴いた学校に申し訳ないですね。）

ともかくあの時はアクシデントの連続で、前に述べた電車での事件があったり、講習中ずっと下痢で悩まされる者が出たりで、それは大変でした。さらには、松山へ帰る道中でも静岡附近で信号機の故障で二時間待たされ、やっとの思いで大阪へ着くと、こんどは地盤沈下のため線路が壊れたとか。いくら待っても復旧しないので、とうとう関西汽船で帰るという始末でした。そういえば我々十期生が何かしようとするときは必ずといっていい程何かが起りました。中一の時のキャンプといい、中三の時の修学旅行といい、台風の為、出発直前迄、先生方はどうするか決めかねておられたようでした。修学旅行の時などは、別府港に着いてみると、どの船も退避して港に入っているという状態で驚いてしまいました。

松山に帰ってからは、十月の運動会での発表を目差して、この体操を多数の学生に普及させる為の活動が開始され、二学期からは中間体操の時間にこの体操をやりました。東京へ行った六人が交替で朝礼台に立ってやらされましたが、最初は足がガクガク震えていたようでした。運動会でのこの体操の発表も何とかうまくでき、除々に学生間に定着していきました。今も在校生諸君はやっていることと思いますが、実に健康の為に良い体操だと思います。ただ、翌年から生徒を東京に派遣するということがないのは、我々の成果が余り上らなかったからではないだろうかと少々責任を感じています。が成果が十分あったからこそもう東京へ派遣する必要がなくなったのだと自分で勝手に解釈しています。

その他、出い出す事と言えば、高Ⅲの時、ＡＢＣＤ対抗リレーでアンカーとなり、バトンをタッチされた時は三位、何とか頑張って二人を抜き一位となった為、総合点でも逆転できたということがありました。この時、二位にいたのが担任の望月先生で、先生が遠慮され、私が内側を抜かしてもらったので、このためもう一人も抜けたように思います。我々の時は、対外試合はマラソンだけで、私の様に短距離は自信があるが、長距離は駄目といった者には活躍の場が与えられていませんでしたが、今はあらゆる種目で対外試合が許されているようでうらやましい限りです。在学中、内心ではマラソンばかりに力を入れる学校の態度に少々反感らしきものを持っていました。陸上部イコールマラソン部という感じでしたので、短距離、走り高跳び、走り幅跳び等の得意な者が寂しい思いをしましたが、今は違いますので、後輩の活躍が楽しみです。

勝手な事を書いてまいりましたが、開校以来最も幼稚と言われた十期生が巣立ってはや四年、母校が二十周年を迎えることはうれしい限りです。校長先生はじめ諸先

生方がいつまでもお元気で母校の発展に尽くされますよう、私も一卒業生として心より祈っております。

愛光時代の思い出

―説教の歴史―

第十期生　梅木慎一郎

在学中の思い出といっても、すでに四年も母校の地を離れ、遠く東京でのんびり気楽な生活を送っている私にとっては、ありきたりな事よりも、とるに足らないつまらないことでも、ちょっと変わった事の方が、はるかになつかしく、また楽しいこととして想い出されるのである。

入学したての私は授業中も緊張しっぱなしで、担任の長島先生の英語の時間などは、一時間中黒板の方そっちのけで先生の顔ばかりながめていた。先生もそれに気づかれたのか「おい、あんまりじろじろ見んなよ」。当時の私は、なぜしかられたのかわからなかった。あんなに真面目に聞いていたのに。

中学二年の時だったか、私は物理の小林先生にこっぴどくしかられたことがあった。授業中、ヒソヒソ何やらいっていた。私は先生の視線を気にしながら、時々目が合うと、いかにも真剣に聞いていますというように、じっと黒板をにらむ。そうこうしているうちに突然「梅木、態度悪いぞ!!」その声は遠く廊下の外まで響きわたり、腹の底までこたえた。教壇に立つと、何もかもお見通しなのであろう。いやはや恐ろしい。後輩諸君、気をつけられたし。

けれども、中学二年までの私はどちらかというと、まあまあ真面目な方だった。特別悪い生徒でもなければ、また誉められたこともない。もっとも、その後も誉められたということは記憶にないが。私の先天的ないたずら癖は、中学三年の頃から順調に発揮されるに至った。

当時、校舎の北側に新しく研究所の様なものができたが、そこのコートでは毎日昼休みになると、男女所員がバレーボールをやって楽しんでいた。丁度それが私たちの休憩時間と重なり、私たちは窓から坊主頭を出し、ワイワイさわいでいたのであるが、とうとうそれが先生に見つかって、一同右へならえで、河井先生からありがたいゲンコツをいただいた。みんなも知っているかどうかはわからないが、河井先生のゲンコツは天下一品。一発くらえば十分で、その瞬間目から火が出る原爆級。まだその味は忘れられない。

色々の体験の中でも私が一番印象に残っているのが砂田先生の国語の時間。そもそものきっかけは宿題を忘れてきたことで、教室の外で授業を受ける身となった。その時は私に親切に付き合ってくれた者がもう一人いた。そこへ私の近くに住んでいた先輩が向こうから来たので私はきまりが悪くてニコッと笑っただけで何も言わなかった。先輩も何となく私の立場を察したのかニコッとしただけ。はにかみからか、私はつい手の平を教室のガラスにピタッと当てて上下左右に動かしているうちに教室の中から全員の笑い声が聞こえてきた。すると先生が飛び出して来て「二人とも中へ入れ」と言われた。やっと解放されたかなと思いしに解放されたのはもう一人の者だけ。「お前は外に立たしておくのはもったいないから教壇の真前に正座しておれ」と言われてわが意を得たり。いやはや友のために私は犠牲になりました。

何とも自分自身を傷つけるような記憶ばかりが残っているのには今さらながら驚いています。

話は変わりますが、あの恒例のマラソン大会は今でも行なわれていると思いますが、私たちは中学一、二年の時は十キロ、三年の時から中学生は七キロ、高校生は十四キロとなり、三年の時は過去十キロ走れたのに今年は七キロしかないのかと落胆しました。こんな風に言うといかにもマラソンが得意だったかのように思えるかも知れませんが、実は常にビリから数えた方がはるかに早かったのです。ではなぜ落胆したかと申しますと、美しい池や山道を、二、三人の友と共にしゃべりながら、時には人家で水を飲ませてもらったりする道のりが短かくなったからです。最初の十分間くらいはお互い競争しましたが、途中どうしても一緒になってしまうのです。それからは足の向くまま気の向くままでもないが、例の通り。それでも田中校長先生がニコニコと道端で拍手してくださっているのを目の前にした時は、疲れた足をいっぱいに回転させて走りました。

こんなことをやっていた私も無事高校へ進学できましたが、やはり癖というのは恐ろしいもので、高校に進学してもやまず、選挙演説のまねを教員室の真前でメガホンもってやったところ、世界史の中村先生に教員室に呼ばれて五、六人の先生の前で説教されたこともありました。短い髪の毛でしたからつかみにくかったと思いますが、最近は長髪も許可されているので、引っぱりやすくなったと喜んでおられるかも知れませんね。

まだまだあげれば枚挙にいとまがないほどです。私の愛光時代の想い出といえば、三七年に入学してから四三年に卒業するまで、今反省してみると実に説教の歴史であったといえる。先生方の顔の一人一人思い浮かべるたびに、ああ、あの先生にはこうしてしかられたな、あの先生にはこう……。あれ、あれ、あの先生には一度もなかったかな？しかられないのが不思議なくらいである。

しかし、今こうしてまぶたに浮かんでくる先生方の顔すべてに、語りかけるような微笑みがあふれているのである。

駅伝の事

第十期生　木村紳一

確か小学校六年の時だったと思う。体育が常時〝3〟を動かなかった僕が、校内マラソンで10位という成績を修めて先生から誉められて、走るという事に喜びを覚え始めたのだった。そして生まれて初めての長丁場、10キロを愛光で走り、完走できたということが益々走ることに対する興味を湧きたたせた。更にタイミングの良いことに、中二になって初めて一桁（八位）になれた年、中学駅伝に初めて参加が決まったのである。

正直な所、走ることは好きだったけれども毎日コツコツと練習することは余り好きではなかった。中二のときに強化選手になったが朝早く起きてのトレーニングは辛くて辛くて仕方がなかった。不断から寝坊の僕にしてみれば、驚くべき時刻に起きなければならないハメに陥ってしまったのだから。そんなわけで練習も休んだりして結局何にもならずに終ってしまった。強化練習を毎日毎日、黙々とこなしてゆく選手から、どんどん遅れてゆく自分が惨めで仕方がなかった。

しかし、駅伝に対する興味は次第に強くなった。惜しくも初参加の年は第二位に終ったけれども、駅伝という競技の独特な〝味〟を心ゆくまで嚙みしめてそれに熱が高まってゆくのを覚えた。さてそれからというもの、とにかく今度こそ優勝だというので、皆はりきってはりきって、本当に優勝して当然だという位まで意気が上ったものだった。選手層も厚くなり、出場メンバーになるため必死だった。やはり応援するだけというのは面白くないものだ。

中三になってからは、それこそ正選手の十人という座を争って必死になった。一日でも練習を休めば、直ぐに十人の枠からはみ出るのではないかと思う位だった。早朝トレーニングも遂に一日も休まなかった。（その代わり、一時限の授業に遅れてよく叱られたものだった。）午後のトレーニングも中二のときよりずっと量も増え、質も高まった。今でも、痛む足をひきずりながら雨の中を黙々と走った想い出がとても懐しい。競争も激しかった。こんなに一生懸命練習して正選手になれなかったら、どんなに阿呆らしいだろうとさえ思った。それでも走った。やめようかとも思った。しかし先輩の涙ぐまんばかりの激励にまた走り続けた。もうここまできたら後には引けない。しかも自分より遅く練習を始めた連中がどんどん追いつき追い越してゆく。彼らには負けられないという意地もあった。そんなことなどを色々考えながら毎日を走った。少しずつ少しずつ速くなった。何トンという標

本からやっと数mgの物質を抽出してゆくみたいなものだった。放課後、さっさと帰ってゆく同級生をみながら、グランドを黙々と走った。全校を挙げての参加という振れ込みだったが、僕らだけで走っているような気分だった。それでもいい。僕は彼らのために走るんじゃない。自分が闘いたいから走るんだ、そう開き直って考えることもあった。毎日の辛いトレーニングの間は、とりとめもなくつまらないことを考えるものだと、今でも想い出しては苦笑を禁じ得ない。

何とか選手代表に選ばれ、試合に出られることが決まったときには、嬉しいやら、出られなかった連中が気の毒やらで妙に複雑な気持だった。しかし、あの黄色のバッグをかつぐ気分は何とも言えず気分の良いものだった。学校もいろいろ予算を投じてくれたし、やはり優勝は必ず達成しなければ…という気持だった。だが正直に言って負ける気は全然しなかった。十人とも二千メートルを七分以内で走っていたし、初参加のときにも出場したメンバーが三人もいた。それに他の学校で強そうなのは見当らなかった。少なくともそういう話は聞かなかった。何より初参加のときの成績が自信につながっていた。

自信というものは恐ろしいもので、開会式のときにも、どのチームも皆弱そうに見えた。しかも僕は第八区だし、そんなに速いのはいないだろうと思っていた。第七区の大出君が痛み止めの注射をうって走ってきたときには、トップは当然とばかり僕はもうランニングとパンツだけになって待ち構えていた。タスキを受け取ってから後をずっと見やったが、誰もやってくるようには見えなかった。スタートして最初の曲り角でもう一度みたが、やはり誰も来ない。仕方がないから、先導の白バイを追い抜くべく走った。白バイというのは実にうまいもので、こっちがどんなに抜こうとしても、ちゃんと一定距離を保って先導してゆく。予め試走して目印にしていた地点が次々と後になってゆく。ペース配分はどうだ。どうもはっきりつかめない。やっぱり少しあがっているのかな。そんな事を考えながら走っていると愛光の校旗と応援旗が電柱にさしてあってハタ〳〵とひらめくのが目に入った。その向こうで玉置君が両手に旗をもって応援してくれている。サンキューというように手を振って、さあラストスパートだ。ちょっと早過ぎるかな。後は？誰もいない。良好〳〵。中継点で徳永君がこっちを見て手を振っている。よし全力疾走だ。「ガンバレよ！」「ＯＫ！」徳永君がタスキを肩に回しながら、小気味良いペースで走り出す。ああ終った。先輩が毛布を背中からかけてくれる。まだ息がはずむ。しかし余り疲れていないなあ。もっと走れたか？いや、精一杯走った。こんなことを考えながら息を静めていると、二位、三位と続々後続のチームが飛び込んで来た。ウン！これ位の開きがあれば、アンカーはエースの前田だ。大丈夫勝った。優勝だ。

バスに乗ってゴールに帰って来ると、皆浮かぬ顔をしている。ひょっとして前年と同じくゴール直前で抜かれ

たか？と一瞬ギクッとした。しかしやっぱり優勝！当然だ、そんな気がした。完勝だ、楽勝だ。優勝旗がとても重かった。

その夜、やっと実感が湧いてきた。練習を続けて良かった。出場できて良かった。何よりも皆が必死にやって優勝したんだ、その事が嬉しかった。大出君がよろけるように中継点に走り込んできたときの情景を想い浮べて思わず胸がいっぱいになった。今でも駅伝が一番好きなのは、そのときのタスキを受けた際の感動が忘れられないからである。

在校中の思い出

第十期生　乗松章裕

今度、「在校中の思い出」という題で、小文を頼まれたわけですが、早いもので、この間愛光を卒業したと思っている間に、いつのまにか今度は大学を卒業する事になってしまった。思い出を書くようになるという事は、年をとったという事で、考えてみると、愛光に入学したのはもう十年も昔の事になる。ついに、我々も「一昔」という言葉が、切実な裏付けをもつ年代になってしまったわけだ。ところで、「思い出」という事で、さてと振り返ってみても、在校時代取立てて何かしたというわけでもなく、ただ平々凡々と毎日を過ごして来たに過ぎず、どうひっくり返してみても、人に語るような思い出は浮かんでこない。ただ一昔という事で免じていただいて、書いて行く次第です。

今年は創立二十周年で、近いうちに西衣山の南の小高い地に新校舎が完成し、移転になる運びだそうだが、僕ら十期生が入学して初めて学んだ教室は、木造の平屋建だった。現在の新校舎の位置に、旧校舎に続いて丁度逆L字型に三教室あったのだが、古い建物で、台風などの折には、雨が漏るといった有様であった。ところが、中にはいっている机は、校舎の古さにそぐわない程真新しく、そこで文字通り活気と新鮮さに溢れた毎日を送った。愛光の入学試験の朝は、霧がひどかったが、この机の一風変わった構造―机と椅子が一つにくっついており、椅子の下が物入れになっている―が珍しく、入学試験にパスしてこの机で勉強したいなと思ったものだ。新校舎の工事が始まったのが、中学二年の時であったから、この木造校舎で勉強したのは十期生が最後になるのではなかろうか。開校の折に、この校舎を校長先生自ら掃除され、指にトゲをたてて怪我をされたという話を聞いたのも、入学後まもない頃である。

校長先生といえば、愉快な思い出がある。中学二年の校内マラソンの時であったと思うが、当時はまだ車も少く、コースは学校を学年順に出発して御幸寺山を廻って、学校へ帰ってくるというものであった。さて、学校を出発して本町を通り抜ける頃までは、ワイワイ各人騒ぎながら、タッタカタッタカ快調に走って行くが、護国神社を過ぎて左手へ曲り、だらだら坂を登って行く頃になると、この当りが一番苦しい所で歩き出す者が多い。坂を半分ちょっと上った所に鶏舎があるが、ここまで来て僕も余程歩こうかと思った。が、その辺から、丁度上り坂の終りが見えるのである。「とにかく、あそこまで行こう。上ったら絶体休んでやるから、まあ走ってくれ。」と、自分に云いきかせなんとか走り続けた。最後の坂をよたよたと登り切り、フーと息を吹き出し、さてと、ひょっと横を見ると、校長先生が駆足の恰好をされながら、登ってくる者に、「頑張れ、頑張れ。」と声を掛けておられる。まさか歩き出すわけにもいかない。一段と加速してそこの角曲がるまでと走り出したんだが、どういうわけかその後、楽になり結局完走してしまった。ただ歩かなかったというだけで、何番までに這入ってやろうと、死物狂いで走ったというわけでもないのだが、結構早い方に入っていた。そんなもんかなあと妙な所に感心したのと同時に、それ以後少し走ることに自信を持った。同じような経験を勉強の方でもしたことがある。後日スランプに陥った時など、これらのことが多少とも励みになったものだ。とにかく、目の前の一歩を、何もやらないのは、正に無に過ぎない。苦しい時はあれこれ思い悩むものだが、案外ちょっとした切掛けで解決がつくことが多いのではなかろうか。

大学という所は、クラブにはいっていない学生は積極的に自分で機会を求めないと、体を動かすことから遠ざかってしまう。正課としての体育はお遊び的なもので、勿論いろいろなレベルの体力の者が集まっている関係上やむを得ない面もあるのだが、期間も教養の二年間でしかない。放課後とか空き時間に、好きな者同志が集まって一汗かくという風に、手軽に楽しむ事が、施設の面だけでなく雰囲気としても欠けている。幸い愛光には、中間体操というユニークな授業がある。冬など面倒に思ったこともあったが、今考えてみると、そのことよりも寒風の中を走った後の体の芯から湧き出る暖かみの方を思い出す。実際、朝から四時間目までずっと授業という様な事になれば、楽しみはお昼の弁当しかないわけで、気分転換としても実質的な運動としても、実に有意義であったと思う。大学へ入学した当初、ソフトボールも満足に出来ない学生がいるのを見て驚いたものだが、都会の高校などに比べると、愛光は運動の盛んな方ではないか。

今の愛光の気風がどんなものであるか知る由もないが、僕が在校していた間にも、学校の雰囲気は変って行った様で、中学と高校では感じが違う。例年その傾向はあるだろうが、やはり、受験の事が身近に迫ってくる高校に比べて、中学の方が底抜けに明るく、振り返ってみても

そちらの方へ思いが行く。運動会の仮装行列などに、溢れ出したエネルギーを感じたものだ。それは、学園生活に対する踊り上がる様な期待でもあったろうか。仮装行列は、高校に進学した年に中止されてしまったが、中学一・二年の頃、先輩の出した長崎の竜の舞いや大名行列は見事だった。その事が中止の一因ともなったのだが。バンカラという言葉も当たるまいが、どこかそれらしき雰囲気を残したのは、七・八期生までで、十期ぐらいからこじんまりと大人しくなってしまった様だ。ベビーブームなど、社会情勢の変化が郷愁にも似た呑気さの存在する余地をなくしてしまったのであろうか。創立当初の学校の雰囲気はどんなものであったか興味深い。

休暇に帰省しての楽しみの一つは釣であるが、この頃は海老などを餌にしてもなかなか釣れず、それにかなり遠出をしなければならない。それにつけても思い出すのは、キャンプの事である。我々は、中一の夏休み始まってすぐ、担任他何人かの先生方の引率で野忽那へ渡った。毛布持参で、島の小学校の教室に各クラスさらにいくつかに分かれて寝泊りしたのだが、寝静まってから聞こえる潮騒や早朝の漁船のエンジンの響など、今でもよく憶えている。小学校の運動場からすぐ砂浜になり、その砂浜の左手に磯があった。そこで釣をしたのだが、餌がなくても足元を這っている船虫で、形のいい魚が随分釣れた。最近赤潮などで瀬戸内海の汚染が問題となって来ているが魚も確かに減って来ている様だ。

思いつく儘に書いて来たが、勉強に関する思い出も多い。占める割合からいけば、問題なくこの方が多いのだが、甚だ残念な事に、苦しんだ方のみ多いわけで、あまり自慢にもならない。卒業して四年もたつと、個々の習ったことはだいぶ忘れてくる。やはり授業の時の先生方の風貌や一寸した時の言葉などが残って行くものの様である。休暇の際、先生方や友人に会うのも楽しみである。

にこにこ運動の思い出

第十期生　出井康裕

最近流行しているものに、スマイルバッジなるものがあります。何の変哲もないバッジなのですが、見ていると自然に口許がほころんできます。世の中の人全てがほほえみを忘れず生活する様になったら、今よりももっと住み良い世界になるのではないでしょうか。

このスマイルバッジを見ていると、直接関係はありませんが、「にこにこ運動」の事を思い出します。今から八、九年も前の事になるでしょうか。愛光学園のクラブの一つに「にこにこクラブ」と言うクラブがあり、にこにこ運動推進の母胎となっていました。在校生の皆さんで、その事について知っておられる方は極めて少ない事と思います。そこで私は、にこにこ運動の原点である《蟻の街のマリア…北原怜子》（松井桃棲著・春秋社）について簡単な紹介を試みてみたいと思います。にこにこ運動とは一体全体何なのか、それについても次第に明らかにしていきたいと思います。

この実話の主人公《北原怜子》は一九二九年東京に生まれ、大学教授の娘として何不自由ない生活を送っていましたが、前大戦でその幸せな生活と兄とを同時に失いました。そんな中で彼女は、一九四九年に昭和女子薬学専門学校（現昭和薬大）を卒業し、同年受洗しました。その翌年の十二月……。この時から彼女の新しい人生が始まるわけです。その年、彼女は一面識もないゼノ修士の「カワイソウナ人タチノタメ、オ祈リ、タノミマス」というカタコトの言葉と共に、バタヤ部落《蟻の街》を知ります。《蟻の街》は「虫ケラ同様とさげすまれている浮浪者だって、アリのように仲よく助け合って共同生活をすれば、必ず自力で更生できる。いわんや、日本国民全体が、そして全人類が、ほんとうに力を合わせればこの世の中は、どんなにでも明るく楽しくなる」と信じ且つ実践している人々の街です。

最初のうちは、バタヤ部落の子供達の先生として通いながら奉仕活動をしていましたが、後にはバタヤ部落の人達の心は、バタヤ部落に入ってバタヤの娘にならなくては分らないと、自ら《蟻の街》の住人になります。勿論彼女のこういった思い切った行動は様々の抵抗と反発にあいます。独善、偽善、売名等々。又、彼女自身の内部からの抵抗もあったでしょう。しかし彼女はそれらの抵抗、反発に勝ちました。家族の人達を説得し、口さがない、世間の連中を相手とせず、「一人よがりのクリスチャンのお嬢さんの気まぐれ」と言うバタヤ部落の人達の反発に、自らバタかごをかつぎバタ車を引くという行動

で以て答えたのです。
バタヤ部落の住人として、娘らしい幸せを拾てようと決心した時、彼女は父親にこう言っています。「お父さん、怜子の今度の決心はね、決して、そんな中途半端なものじゃありません。今、お父さんに詳しく申し上げるわけにはゆかないけれど、アリの町には、怜子でなければならない仕事があるらしいの。そして天主様が、それを望んでおいでになるらしいのよ。ですから、怜子が、アリの町に行く以上は、死ななければ帰らない決心ですわ。」
不幸にしてこの言葉の通り、一九五八年一月、両親の待つ家に帰る事もなく、最後迄《蟻の街》の住人として、二八才の短い一生を終えました。
この様に書いてくると、《北原怜子》はスーパーレディの様に思われる事でしょう。しかし、果して彼女は特別に選ばれた人間だったのでしょうか。否、そうではありません。唯、普通の人と少し異っていたところは「いつでも、どこでも、誰に対しても、ニッコリほほえみかけ」て、「心の底から、相手を愛し抜き、信じぬいている」という点でした。
著者は次の様に訴えています。「我々が、《アリの町のマリア》から一番学ばなければならないのは、いつでも、どこでも、誰に向っても、心からニッコリほほえみかける事なのです。《いつでも、どこでも、誰にでも》という事は、人間だけでなく、草にも、木にも、動物にも、水にも、空にも、石ころにもゴミ箱の中のくずにも、大便にも小便にも…この世の中のありとあらゆるもの、つまり、この大宇宙のすべてをひっくるめて―ということになります」と。
そして愛光学園においても、《蟻の街のマリア・北原怜子》の読書会、討論会、校内での映写会、そして著者である松居先生の講演会等が行われ、この「にっこりほほえみかける」精神にのっとり、にこにこ運動がスタートしその中核として、にこにこクラブが誕生したわけです。顧問は河井先生にお願いして部員十四名で活動を開始し、一番最初に出した校内標語が「あなたはほほえみを忘れていませんか?」だった様に記憶しています。一人一人が「誰かを、何かを、今迄よりももっと好きになるにはどうしたらいいか、を真剣に考える様になった時、はじめて世界平和―人類の幸福がやってくる」という著者に共鳴、賛同し、先ず、ニッコリほほえむ事から始めようというのが、そのねらいでした。
クラブとしての活動を思い出すまま述べてみたいと思います。確か、神奈川の住吉中学校だったと思いますが、そこでも同様の運動が行われていて色々と助言をして頂いて、手紙による交流がありました。リヤカーを引いて廃品回収をし、施設に寄付したり、老人ホームの慰問に行ったりしました。慰問といっても唯、話相手をしに行っただけですが殊の外喜んで頂いた様に思います。その他、にこにこ新聞を出して運動のアピールもしました。

後に印刷になりましたが、当初は手書きの壁新聞で、長時間かけた割に読者の反響が少なく、がっかりした事もありました。昼休みには河内桃子朗読の「太陽のほほえみ」を録音しておいて、校内に流した様に憶えています。
当時は、自己満足的偽善者集団とか色々言われはしましたが、私達は一人一人、本当に真剣であったと思います。にもかかわらず、クラブの後継者づくりに失敗し、私達の卒業後間もなくこのクラブは解散してしまいました。素晴らしい運動を後輩の皆さんに伝える事が出来なかったのは、全く私達の怠慢であり努力不足であり、深く謝りたく思います。
翻って考えてみると、この運動が中途半端で終ってしまったのは、運動自体に対する認識不足とそれに起因する運動の方向性に対する曖昧さが、原因の一つに挙げられると思います。はっきり言えば「北原怜子」を漠然としか理解しきれなかった所からくる限界性だと思います。
最後に一言。未だこの本を読まれてない方は一度、受験勉強の合間に読んでみて下さい。現代社会の中で、人の心はややもすると荒みがちであり、人間関係におけるストレスの蓄積は、人間らしい思いやりの心とか、いたわりの気持を圧し潰してしまいます。そんな時こそ、ほほえみを浮かべてみましょう。そしてもう一度、にこにこ運動を起こしてみて下さい。「あなたはほほえみを忘れていませんか」という言葉と共に。

夢の意味

第十一期生　和田隆一

私にとって愛光の六年間が何であったか聞かれた時、まず現状から答をひき出そうとするのは当然すぎる事なのです。つまり、それは「思い出」として抽出するには、あまりに生々しすぎるのです。更にそれは現在の生活の前提として、私の前に立ち塞がり、私に超越することを要求します。従って、編集の意図とは少し異なるかもしれませんが、それも私にとっては仕方のないことです。
私は愛光で「勉強」を学びました。強いて言うなら勉強の方法を習いました。その時の私は水銀燈に引き寄せられる昆虫のように、光があるから前進するという非常に無邪気なものでした。しかし、そういう状況に何の疑いもなく身を浸しきっていられる時期は、逆に幸せなのかもしれません。卒業して、大学に入ると同時に光は消滅し、無明の暗闇と化した時、哀れな昆虫はどうすればよいのでしょう。その時、私は勉強というものが、あくまでも方法であり、プロセスであり、永遠に目的となり、

得ないという悲哀を嫌というほど知らされました。この時、勉強から他のものへの転換が急務だと気づいたのです。自分で光を想定して、それに向かって前進するしかないと……。その結果、光を何らかの形で自分の力で灯し得た時、私は自己の自立性が確立しえると期待しているのです。口幅ったい事と聞えるかもしれませんが、これほど真剣な苦悩は生まれて以来、体験したことはないのです。ともかく、私にとって、「愛光」とは光を受動的に与えられた時期であり、現在の苦悩の原点と規定してよいと思います。その意味で、この精神的軌跡の青写真を設計して下さったことに感謝しなければならないのかもしれません。

しかし、反面「勉強」から他のものへの転換は、その反作用として幻滅を伴っています。つまり、多数の中から一つを選択したことからくる幻滅と言えるでしょう。真冬の膚を刺すような寒さの中、広いとは言えない運動場を裸で走っている時、我々の胸中には意識無意識に関らず、無数の「夢」が渦巻いていた筈です。それは、未完成のみが持つ可能性の宝庫です。「勉強」をしている間は、その中に夢をみすぎることは決してないのです。所が、「他のもの」とは、無数の夢の中からたった一つを選び出し、他の夢を全て捨象する所に存立するのです。それは、夢と現実の交錯と言えるかもしれません。現実は切断された金属の表面のように、厳格に曖昧を追放します。更に我々はその選択に全幅の信頼を持たなければならないのです。

以上は、夢と現実の過渡期にある人間の報告ですが、これからは両者の交錯を具体的に述べてみたいと思います。

私にとって「愛光」がより多くの夢を育てるのに適していたとは残念ながら思えません。それは「愛光」の所為ではなく、多分に私自身に原因があったことはしっています。

それはともかく、私にとって数少ない夢の中で忘れられないのは、やはり先生方との邂逅です。それも、今頃になってやっとその意義がわかりかけてくるのです。人間と人間が師弟という立場を守りながら接触することのもつ意味――その渦中にある時は、遠心力と求心力がつり合っているように気づかないが、その平衡が崩れたとき、影響力は我々の眼前に驚くほどの痕跡を露程します。それこそまさに夢と現実の交錯がはなつ光なのです。

私は国文学を専功した所為か、国語担任の先生が忘れられません。特に高校三年の時の先生は、各大学の入試問題を解く間に時折、評論、小説をコピーして配布して下さったこです。様々なものがありましたが、江藤淳の漱石関係の評論、折口信夫から柳田国男……などはいまだにその分章が甦ってきます。この時の感動が未だに忘れ難くて、文学などという得体のしれないものを追求しているようなわけです。しかし、私は先生によって文学を文学としてではなく、人間臭を感じる文学として把握

できるようになったと思っています。

無意識のうちに他人を傷つけたことは、何年か経て後、意識の表面に現われ、逆に我々自身を苦しめるものである。それは時間（現実）の我々に対する報復であるかもしれない。もう六・七年も前のことですから記憶が曖昧ですが、Y先生は愛光に来られて二・三年目ではなかったかと覚えています。地学の担任で、特別に「変人」と思われるほどではなかったのです。ただ鮮明な印象を残しているのは、独特の甲高い声と奇妙な抑揚です。クラスの器用な者が先生の物真似を休み時間にする程度であった頃は、別に問題はなかったのです。生徒が先生の陰口をきくというのには、不思議な喜びが含まれているものです。自分達よりも教壇の厚さだけ上だと思っている先生を、陰口によって自分達の位置までひきずり降ろせると過信しているのです。それはともかく、我々の欲望はとどまる所をしらなかった。勇気のある者(?)は、クラスの全権特使として受業中に授業妨害と思われる発言をする。それに比例して我々は、クラスの勇者をたたえ、先生を大衆という力で圧迫する。大学に入ってから、大衆団交を体験しましたが、その時、「自分はこれと似た経験を以前に一度もったことがある。」と私の脳裡をかすめました。その時、無意識は意識に、夢は現実に交換されたのです。

それからは、Y先生が廊下を通られると、生徒間に連鎖反応のように伝わり、群衆は有言ないし無言の嘲笑を先生の背中に投げつけるのです。今考えると、なんと馬鹿な事を！と一笑に付すべきなのでしょうが、私の心に汚点を残しているのは、Y先生が一言の御挨拶もなく学校を去られたことなのです。単なる悪戯として、つまり「夢」としてかたづけるには、なにか現実の重みとでもいうべきものを既に含んでいたのです。「我々が先生を追い出したのでは…」という危惧を持っているのは、私だけではないと思います。それが原罪として私の心の片すみに巣喰っているような気がしてならないのです。…Y先生が何処かで元気に教壇に立っておられることを祈ります。

以上、特別に残像として鮮明に残っている先生を二人あげたのは、二人が我々を支えて下さった全ての先生方の代表という気がするからです。生徒にとって先生との邂逅はまさに「夢」なのです。そしてその夢は、何年か経過して現実というふるいにかけられた時、真の価値を発揮するものだと思っています。今、私はその中間に棹さしています。「愛光学園二十年誌」の原稿につまらぬ繰り言を述べたことを後悔しています。

在校中の思い出

第十一期生　河原太八

僕の本箱には、愛光の生徒会誌五・六号が並んでいる。或る友達から送られて来るのだが、先日も別に読むというでなくページに目を通しながら考えた。創刊号より見てゆくと、年によりその内容は違っていても、言わんとする所はほぼ同じように思う。それは社会が現象面でめまぐるしく変化しても、その基礎は容易に変わることがないからであろうし、また人が様々なことを経験しながら成長するさい、同じ様な道をたどるからだろう。

僕がこれから書くことも個人的な体験だが、そういった意味で何かの参考くらいになるかもしれない。さて前置きはこのくらいで、その生徒会誌について書いてみよう。

僕は高二のとき第三号の編集に参加し、その主要メンバーの一人であった。生徒会誌に限らず、このような機関誌や同人雑誌を出す場合、三号あたりが続くかどうかの境だと言われている。創刊号では自分達の手で新しいものを創るという気概があり、多少の困難はあっても、それ以上の喜びを得ることができるが、二号を出しさて三号をという頃になると、それに要する労力や費用が先に目についてしまい、そのうえ初めに期待したほどの効果があがらないのが普通だから、よほどの意欲がないとつぶれてしまうのである。愛光の生徒会誌も、その例にもれなかった。一般の生徒からは内容が面白くないと言われ、またかなりの予算を使っていたため、予算の無駄ではないかとの批判もあった。

そのようななかで作ろうというのだから、よほどの意欲があったように思われるかもしれないが、そうでもない。実際は友人に誘われ、何となく編集委員になっただけで、そのころ別に活動家でもなかった僕が選ばれたのも、彼の気まぐれだったのかもしれない。高一のとき生徒会の役員を決めるにあたって、編集長を引き受けていた彼を中心に、僕とあと一人計三人で、それまでのものや他校のものを参考にしながら、どのようなものを作るか話し合った。

さて編集委員の募集など実際の作業にはいるにあたって、先生に挨拶に行ったところ、次のように言われた。「生徒会誌を出すのは、やめるほうがよいのではないか。」何故かといえば、「費用が多くかかるし、生徒の間にも面白くないという意見が多い。」「限られた人達が書くだけで、父兄の評判もあまりよくない。」「それにかわって、「学校としては、生徒全体から作品を集めた文集のようなものを考えている。」

これは意外なことだった。僕達は何も学校の全面的な支持を期待していたのではない。ただ色々な制限はあっても、生徒会で決定されていることでもあり、出すこと自体は認められるものと思っていた。しかし、このときは突然のことでもあり、十分反論できる材料もなかったので、そのまま帰らざるをえなかった。このことである友人は、学校側は最初から予防線を張っているのではないかと言ったが、そうだったのかもしれない。

僕達の意志は変わらなかった。一般の生徒が無関心だからこそ、生徒会誌を出して、少しでも考える姿勢を創ってゆきたかった。またやっと軌道に乗っただけで、その効果は今後に待つべきだとも思っていた。何度か先生のもとへ足を運んだ結果、生徒のアンケートによって支持があれば、出してもよいという了解を得ることができた。だがこの事件のため編集長をしていた友人はやめてしまった。残りの二人で、生徒会誌発行についてのアンケートを作成し、また広く意見を募るためポスターを出し、投書箱を設けたが、これは無駄に終った。アンケートについては生徒の支持を得たため、制限はあったが、学校の同意を得ることができた。今から思えば、よくそれまでやれたと思うだけだが、その時はただ夢中であった。

編集という我々本来の仕事はそこからだった。夏休みも迫っていたため、急いで各クラスから委員を集め、活動をはじめた。

それ以後の苦労は、ありふれたものだったと言ってもよいだろう。自分の希望もあってクラブについて書いたが、各クラブの実態を調べたり、アンケートによって生徒のクラブの責任者を探して原稿を依頼したり、放課後アンケートの作成・集計などをし、遅くなることも多かった。

冬が近づくにつれ原稿も集まってきたが、その頃になっても発行できるかどうか不安であった。その年の文化祭でも問題となったことだが、愛光についての他校生の意見を載せることが許されなかったからである。僕達は愛光を考えるには、外部の人達の意見も必要と考え、それを実施していた。これについても、学校とかなり話し合わなければならなかったが、担当外であり自分のことが忙がしかったので、詳しくは知らない。最終的には、あくまで個人の意見として、参考にする程度ということで、掲載は認められた。

そのような事件があり、加えて実際に活動していた人が少なかったせいもあり、本が完成したのはやっと三学期の終業式の日だった。（僕の記憶が正しいとすればだが）結局一冊の本にまる一年費したことになる。印刷された生徒会誌が積み上げられているのを見たとき、何となく興奮したことを覚えている。

しかし、僕はその一年間の苦労によって何を得たのだろうか。それはわからない。もしあったとしても、それは書こうとするだけで、あるいはどういうものか考えようとするだけで、形がぼやけてしまうようなものだろう。

ただ僕達の後にも、引続いて生徒会誌が作られていることをみると、全く無駄なことをしたのではなさそうだ。

さてこの文章もまとまりが悪くならないうちにやめるとしよう。読んで何か考えてくれてもよく、つまらないと思われてもけっこうである。僕は思い出すままに、事実を並べただけなのであるから。

私の中の先生

第十一期生　光田和伸

乱暴な言い方、になるかもしれない。が、先生は二つに分けられないか。「降りて来て下さる先生」と「来ては下さらない先生」と。仮にいま、そう認めておいていいものなら、私は「降りて来て下さった先生」から、大きな影響を受けた。しかし、そのことについては、ここには書かない。「降りて来て下さらなかった先生」に対しては、一方、私は消極的だった。示された距離を私の方から近づくことはしなかった。

その、ある先生は、ある日、まるで突き放しでもするかのように、「肌につけるものをまだ自分の手で洗ったことのない人達」、と言った。先生の本当の積りはどうだったにしても、その言葉は私達を指すのだろう、と、その時私は思い、また私の他の人達も、おそらくそう思ったろう。また或る先生は、授業の区切のついた一刻をとらえて、微笑みながら

はたち越ゆれば
母を恋うるもの
されど、そも
娶らむ日まで

と殆ど冗談でも言うかのように、言った。肌に着るものを依然洗ってもらいながら、しかも自らが永く必要としてきたものからの自立を急いでいた――急いでいるつもりでいた――そのころの私達中学生に、その言葉の本当の意味がわかるはずはなかったろう。

今、私は自ら肌につけるものを自ら洗い、はたちの齢を越えた。そうして、それらの言葉が、すでにあの日、何を意味していたのか、ある確かさを持って了解したように思う。私は成長したのかもしれなかった。しかしより正確に言うなら、私の「成長」は、その時既に約束されていたのであろう。それは、成長したものが、もし私に属する何かであったとするならば、何よりもまずそれは「私の中の先生」が成長したのだ、と言うことに等しい。その時初めて私は、「降りて来て下さらなかった先生」を私の本当の先生とした、と言っていいのかもしれぬ。

辛亥十二月三十一日。

愛光時代のこと

第十二期生　中岡　進

愛光時代の友人に会うと、よくぼくらは愛光で六年間過してよかったかどうか、ということが話題になるが、これはなかなか難しい問いである。誰でも自分に都合のいいように歴史を組み立てることは簡単だが、上手に思い出すことは至難の技だからである。

教育問題というのは難しい。自分が専ら教えられている身分の頃はわからなかったが、僅かながらも家庭教師を経験してから、その難しさを痛感した。例えば大人が子供を観察して案外大人だという発見をする。それはよいが、人心の観察はその性質上きりのないものだから、案外大人だと思っていたらやっぱり子供は子供だという発見をする。なんにもならない。そんな道草を喰った揚句大人は子供に図々しくなるだけである。

この図々しさが恐い。たった三人の子供を一度に教えるだけでも、ぼくは三人別々の子供の気持を理解して行くのに骨が折れる。いくら力を傾けて、精神の上に子供の感情を奪回しようとしても、三つ一遍にやるのは至難の技だ。ましてや五十人に講義するとなれば大変だろう。こうなると半分政治学の問題である。しかし教育が政治学に堕してしまってはお終いである。一匹の羊は九十九匹の羊のために迷ったかも知れないのだ。

ぼくは在校中あまりいい生徒ではなかった。勉強に不熱心な許りか、やわらかな殻をかぶって六年間を過ごす機才すらなかったから、何かと生意気なことばかり云っていた。今頃若い高校生が、生意気そうなことを云うと殴ってやり度い程腹が立つが、何のことはない。昔の自分に腹を立てているだけのことで、恥の上塗りをしているようなものである。そんな次第だったから先生方にも随分迷惑をかけた。中学の頃あんまり授業態度が悪かったものだから、ある先生に教室から出されて、しようがないものだから悪仲間二人と図書館で勉強していると、担任の先生に会ってしこたま叱られた。それで済ませばよいものを同じことをまたやって、今度は担任の先生と一諸にその先生のところへ謝りに行ったことがある。

高II・IIIの時の担任の家安先生には、ぼくの一番愚連隊の時で何度も呼び出された。それでも一度だけ家安先先に誉められたことがある。ぼくは元来おっちょこちょいだったから、暗記科目は得意だったが、数学は苦手だ

った。先生の説明はわかるのだが、家で問題を解くのが面倒で宿題などは学校へ行ってから他人のを写していた。校内模試なども数学だけは他の科目の点の半分以下だった。家安先生は担任でしかも数学の先生だったので、兎に角煙たかったものだ。

ある時校内模試で、数学に空間図形の問題が出た。正三角錘の底面に30度の角度で傾いた面の面積を求める問題だったと思う。問題を一通り見てから、絵が画いてある問題なので取組み易そうに見えて、この問題から始めた。ところが豈はからんや、大変な難問で、乏しい想像力を駆使して考えたがなかなかできない。よほど諦めて他の問題をやろうかとも思ったが、何となく出来そうな気がして必死で考えた。苦労した挙句にやっとできたと思ったら、残り時間がもう十分しかなかった。そんなわけだったが点数は当然悪かったが、その問題ができたのは、ぼくともう一人いただけだった。その時随分先生に誉められた。数学で誉められたのは後にも先にもその時だけだった。それで自信がついたのかどうかわからないが、入試の時の数学もいい点がとれた。もっとも六問でて、ぼくはそのうち三問しかできなかったが、そのうちの一問が空間図形の問題だった。半分しかできなかったから駄目だと思っていたのが、数学は愛光から受けた連中で二番目にいい点だった。家安先生も「お前は数学は駄目だったが、空間図形だけは才能があるのかも知れない。」と云われた。もし才能があるとしたら、校内模試で開眼した時からかもしれない。

今ちょうど入試シーズンである。マスコミは受験地獄だ、灰色の青春だと騒ぎ立てるくせに、合格発表があれば、また名門校のランクづけに忙しいことだろう。最近の若者はどうだ、現代っ子はどうだという議論も喧しいが、ぼくはこういう議論を余り好まない。社会心理学者と自称する人々には、語れるだけ語ることがあるだろうと考えるだけだ。若者の実態はもっと複雑でやわらかである。若いうちは、例えば雨の後のぬかるみのように、泥はなおやわらかで固まることを知らない。年寄れば寄る程泥は固まって行く。そして努力と辛抱なしには、やはらかさは思い起せないものだ。どんな型の泥にするのも教育者の自由である。しかしAの泥がBの泥より優秀であるという理由はどこにもない。

もしあの時、入試に空間図形の問題が出なかったとしたら、そして校内模試に先生が三角錘の問題を出さなかったとしたら、どうなっていただろう。ぼくが、一緒に受験して不合格だった多くの学友たちより優秀だったという理由はどこにもない。

私と囲碁将棋

第十二期生　進藤勇治

この度「将棋クラブ設立」という題で何か書くようとの指示を受け、真に光栄と思うとともに、さて何をどう書いてよいやら迷っている次第です。いろいろ考えて結局「私と囲碁将棋」という感じで筆を進めたいと思います。そこでまず、私が高校一年の頃「囲碁将棋部」を創立しようと試みた事がありましたので、その頃の事から述べてみようと思います。

囲碁将棋部設立の動きは、私が中学三年の頃私と同学年の人々を中心に起りました。詳しい話はやめますが、部の規則の試案を作ったり、いろいろと熱心に運動をやり、学園内に新しいクラブ設立の気運がかなり高まりました。そして、先生方からも熱心な御理解をいただき、もう一歩という所までいったのですが、結局囲碁将棋部は設立されませんでした。先生方の暖かい御理解を受けながらも、我々生徒の方に至らぬ点、考えの甘さがあったようです。今思い返して、非常に残念に思うとともに、当時協力して下さった人々に改めてお礼を申し上げたい。囲碁将棋部は設立されずに終ったが、我々新しいクラブを設立しようとした者にとって非常にいい経験になったと思う。新しいものを創るという事は如何に難しい事であるか、しみじみ感じました。私はそれ以外に、何か小さい狭いものを感じたが、今はもう昔の事である。

学園は創立以来、二十年を数えようとしているが、創立するにあたって多くの人々の多大の苦労、長い年月の積み重ねがあったものと思う。その一部を時々聞き知る事があるが、唯々頭の下がる思いである。私が学園にいた時、精神的に弛みがちな我々は、「学園創立当時の君達の先輩は気概に満ちていた。」とよく先生からお叱りを受けたものだが、当時の先輩の方々は、「我々が学園の姿（校風）を創るのだ。」という使命感に満ちておられたものと思う。先輩の方々が残していかれた校風は、いつまでも大切に伝統として残してゆきたいと思う。あたりまえのことではあるが。

話はもとに返りますが、私が高校三年の六月、松山市内の某高校を会場として、囲碁将棋高校選手権・四国大会が行なわれました。種目は囲碁将棋とも団体（五名）と個人でした。私は碁は打てるが自信がない。そこで単純な消去法により、将棋の個人戦に数人の友達と一諸に参加しました。さて会場について驚いた事ですが、団体戦の席の所に愛光学園の札が立っているのでした。諸々の理由で、団体戦には参加しないことになっていたので、どうしたことかなと不思議に思いました。後で分ったの

ですが、市内のほとんどの高校が団体戦に参加している事もあってか、主催者側で愛光も参加すると思い用意しておいた事とのことでした。その立札と空席は最後まで残っていました。その暖かい配慮を無にしまいと、個人戦では頑張りたいものだと思いました。さて将棋の個人戦ですが、参加者は三十名ほどでした。そして何と驚いた事に約半数が我々愛光学園の生徒でした。二年前、囲棋将棋部設立の気運が高まったのも、なるほどと頷けました。さてその時の結果は、

優勝　小田講文（愛光）
準優勝別宮真一（愛光）

でした。決勝はそれにふさわしい熱戦となり、秒読みの終盤は一手一手緊張の連続でした。二人とも一年生ですが決勝戦を始終見ておられた大山名人は、二人の健闘を讃えておられました。

さて次の年の四十五年度の四国地区大会からは、団体戦にも参加するようになりました。一年前は、団体戦に参加するなどという事は到底考えられぬ事でしたが、一年間という歳月の重みを感じるとともに、団体戦に参加できなかった我々十二期生はいまだに口惜しく思います。四十五年度と四十六年度の将棋の方の記録が手許にあるので書きます。

四十五年度　（四国地区大会）
団体　優勝　（全国大会　七位）
個人　三位　小田講文（II）

四十六年度
団体　優勝
個人　準優勝　大沢好郎（II）
　　三位　安藤哲憲（III）

四十五年度の団体で優勝し、全国大会に出場しましたが、その時の健闘はすばらしいものでした。というのは、その年の優勝最有力候補に上げられていたW校と、ガップリ四つに組んで奮闘し、接戦の末これに3―2で勝ったのです。愛光の団体の強さが全国レベルである事を証明した一戦でした。ところが次に対戦で思わぬ事が起ったのです。その時選手であった某君の言を借りれば、「弱い相手に好局をボロボロと頓死で落とし、自ら優勝の道を断った。」そうです。彼らがその時受けたショックは、察するに余りありますが、しかし彼らはその時何かを感じたに違いない、優勝こそ逸したが、もっとすばらしいものをその時得たと思う。人生は長い、くれぐれも同じ過ちを繰り返すまい。

話は私自身の事になりますが、大学へ入学してK君という友を得た。彼の将棋は私より数段強い。彼は忍耐強いというか、自重して指すというか、言葉で表現しがたいが、要するに、落ち着いて正確に手を進めて来るのである。私などは、はやる心を抑えることが出来ず、敗けるのである。囲碁将棋の言葉に「盤上これ人生」というのがあるが、囲棋将棋の一局の勝負は恰も人生の縮図の如きものであるということである。私のように将棋にお

いて忍耐力の弱い者は、人生においても然りと思う。正確に手を読まなかったり、自重を忘れたりして将棋に負けた時、私自身の欠点を見せつけられる思いがする。二年間K君と付き合いをしているが、その間K君は関東学生名人になり、そして全日本学生名人にもなった。私はまだまだ精神修業が足らないようだ。将棋を指せば、自分自身の弱点をさらけ出すような気がする、最近特にそういう事が多い。近ごろ将棋を指すのがつくづくいやになったのは、単に将棋が弱いからというのではないようだ。

楽しかった愛光時代

―思い出すことなど―

第十二期生　青野信卓

私が愛光に十二期生として入学したのは昭和三十九年四月である。最初に感じたのは、あの野郎もこの野郎も生意気そうだという事だった。これは後でわかる事だが、その逆でどいつもこいつも、いい奴だったのである。愛光の生活は「私の信条」によって始まった。残念ながら今の私は、全文を記憶してないが、愛と光の使徒たらんことは今尚、頭の隅に収って居る。そして、時折、頭をもたげる。いつか校長先生が「私の信条」は愛光卒業後に実行する事だとおっしゃったが、そうかもしれないと思う。

私の在学中の思い出から寮生活を除くと無に等しいと言っても過言ではないと思う。それは、少年期の一時期を家から離れ、同年齢の仲間や先輩などと同じ一つの釜の飯を喰ったことが私の人間形成に大きな足跡を残したからである。どんな足跡かは、未だにはっきりしないが!?

そこで私の寮での悪事と失敗の一端を御披露しよう。

★某月某日、私と悪友達（八幡浜出身のN君、野村出身のI君、鈍川出身のT君）とで自習時間中にお好み焼を食べに行き帰ってきて窓から忍び込もうとした。その時、マテオ神父さんに見咎められ、一ヶ月のゴミ拾て当番を仰せつかった。

★某月某日、私と悪友達とで真夜中に酒を汲み交した所、数日前、関東地方に大雪が降った。二年ぶりの大雪だったそうだ。私は寒いので一日じゅう家の中に閉じ籠もっていた。翌日、友達数人と昨日の大雪の話をした。その中で某君は朝起きて一面の白雪を見つけ、そして彼は電車で郊外に出て、白銀の世界を十分楽しんだそうである。

その時私は某君の話を聞いて、今まで忘れていた何かを思い出した。今早くそれを取り戻したいものだと思っています。

少し酔のまわった私、神父さんに見つかると大変なことになるのも忘れ、バットを握るや否や隣に飛び込み、寝ている今治出身のY君をたたき起こしたのである。

★某月某日、学年末試験の最後の前日、バラック建の寮の屋根に雪が積って居るのを見て、眠けざましの法を思いつき、パンツ一枚になり、懐中電灯の明りで徹夜をしたのである。しかし、その結果如何、試験はさんざん。風邪もひきました。

この種の事件を挙げるとキリがないが、こういう馬鹿な真似をしながら少しは得る所が有ったと確信して居る。そして、中三の時、悪運つき、寮を追い出される羽目に相成り候。

もう一つの大きな私の思い出は、スポーツである。寮に居た時から、寮のグランドでバスケットまがいの物をよくやった。そして、中三になった時、新任の体育の先生砂田先生を部長として、バスケット部を皆で創り直し、それまで許されてなかった対外試合の解禁を克ち取ったのである。対外試合許可が決定した日から試合の日まで十日位しか残ってなかった。その時の練習は全員張りつめた物があった。雨のグランドを裸足で走り、あの狭い講堂でパスをしたり、泥だらけのボールをついたり、又、炎天下で一滴の水も飲まず倒れそうにもなった。そして、試合は、初陣で津田に初勝利、準決勝では、雄新に敗れた。(雄新の県大会優勝が少しは慰めになった。)しかし、十日間だけど、やるだけやったという快い気持が残って居た。

校内マラソンも楽しい行事の一つだった。今は、護国神社の方へ走りに行かなくなったが、中一から高二まで私は三瓶出身のI君などと運動会が終わった頃から毎日曜日は朝の五時に起き本番のコースを走りトレーニングをやったものである。このコースを走り終えて、朝もやの中をゆっくりと汗を拭きながらバカ話をしながら帰るのは本当に気持がよかった。

私が、在校中に人に負けず劣らず獲得した事の唯一つはスポーツの楽しさを知った事だと思う。

さて、学生の本分たる勉学の事についての思い出が最後になったのは、私が如何に勉学に不熱心であったかを象徴しているのである。

中一の四月、英語の時間一番最初に長島先生に叱られたのは私であった。理科の実験中蒸留水のぶっかけ合いをやり堀本先生にお叱りを受けたりした。或る時、国語の、日比野先生に「銅羅声」の読みを聞かれ、私、

「存じませぬ!」と答えると

先生、曰く

「青野の声、そのままだよ!!」これには、私もなるほどとうなづいたのである。

中三の時、数学の問題を当てられ、問題の番号を書いたきり一時間中、黒板の前で銅像のようにビクともせず立ちつくした事もあった。

高一の時は、大嶋徳雄先生の主任で、川之江出身のT

君と一緒に数え切れないほど数学教室へお世話になり、お小言を頂戴したのであった。

高三になって例の長髪問題が起き色々な問題が生じたが、その時の白石先生の御言葉は、

「教師と生徒の意志疎通は、授業中の真剣勝負で十分足りる。」

であった。私は、柄にも無くうなづいたものである。

諸先生方の一言一言が私達のなんらかの形として身についている。

以上、思いついた事を書き留めたが、まだまだ書き足らない事が山程あって胸をかきむしりたい気持で一杯だ。

若き十代の六年間を愛光ですごし種々なことを経験し、私は、よき友を得、よき師を得、よき心を得、よき何かを得た。

色々な事があった……

花の十二期生バンザイ!

愛光バンザイ!バンザイ!

そして、友よバンザイ!

永遠なれ!!

在校中の思い出

第十三期生　高橋　訓

僕は愛光学園の二十年誌に何か寄稿してくれるようにとの連絡を受けて正直ドキッとした。というのは六年間この愛光学園に在校し昨年卒業したのだが、六年間の思い出を頭に思い浮かべるということをその連絡を受けるまで全くしなかったからである。僕には文を作るという能力が無いこと等は自他共に認める所であるし、六年間平々凡々と学園生活を送ってきた自分にとって特別な思い出話があろうはずもない。そこで僕は僕の友人仲間或いは十三期生の思い出話を中心に進めてみたいと思う。

僕の入学した時は戦後のベビーブームもすぎ入試は応募人数の増加も加わって少しは楽だった。愛光学園は小学生の時の自分にはまわりの人の話もあってかなりしつけのきびしい学校であるというイメージが有った。まず入学のときの毛筆による署名はそれまで小学生時代を自由に過ごしてきた子供にとっては強烈な印象だった。僕の場合はそのきびしさが魅力であったようで、入学の時の写真にはまるで海軍将校の様に胸をはった自分がいる(僕はそれを見るたび恥かしくなって苦笑してしまう)

僕にとっての最初の試練は入学後二ケ月目にやってきた。僕は原因のわからぬ一種のノイローゼになってしまった

のである。二・三ケ月病院に通った。成績も中程度だったのがますます悪化していった。今から思うのに、当時は友人さえ一定してなかった。そのためか、学校へ行くのも面白くなかったし、先生方も何か巨大な怪物のように見えたりもした。（そうではもちろんないのだが）そのノイローゼ的症状が直ったのは友人ができて勉強もろくにせず遊びまわりだした頃である。何とも自分勝手な病気だったのである。病気が良くなったにもかかわらず成績はひどさをました。

愛光生は、（僕自身だけかも知れないけれど）妙にエリート意識が旺盛で、その自分で作り上げた巨大なエリート意識を守らんがために他校生の愛光に対する批評を気にし、良くては得意になり悪くてはこれは偏見以外の何ものでもないと弁解する。これは生徒会誌を在校中見た時ほとんど『他校生から見た愛光生』といった項目があり、生徒はそこを非常に気にする。その原因とかその賛否はいろいろとあろうけれど他校生にはない奇妙な傾向だと言うことができる。

勉強する者何か一つは趣味をもつべき、と言うのが僕の持論である。「勉強が趣味です」などと答える生徒は鼻もちならないし、実際僕の周辺のできる奴というのは何か一つの趣味をもっていた。現代的に言えばスマートでありビューティフルなわけである。十三期生の間ではかなり初めからサッカー熱が浸透していたしいろいろのグループができていた。僕は十三期の進学に於ける成功はこのようなグループが一つの原因となっているのは否めないと思う。音楽が好きで僕はレコードを買っていた。これは某友人からの影響が大きい。その友人とはその後親しくなった。中三の頃である。この頃から勉強しなくてはと思うようになった。友人が一人できた事と一つの趣味をもった事、それに成績にある程度上昇のきざしが見え始めた事、この三つの事柄はその時が一致する。このことは面白い事だと思う。」愛光は六年教育であるので高一で学園生活も後半となり、もう先生方は大学入試というものを生徒に実感として持たせようとする。これに反対する生徒も高一頃から出始める。僕のクラスではホームルームはしばしばきわめて長い時間を必要とした。学校側と生徒側の衝突である。高一は学園生活の中だるみの時であると言う。しかし僕はそうは思わない。非常に生徒の精神の激動し発達するデリケートな時期であると思う。けっして中だるみではない。この時期は生徒は先生の態度を敏感に知ってゆく時期だ。

高校生ともなると束縛されるのがいやになる。どうすればよいという明確な目標を考えていないのだけれどとにかく束縛されるのがいやなのである。しかし当然の事、秩序は必要、その秩序を保とうとして先生は奮闘していた。そんな高一時代だった。

六十九年、全国で激烈な大学紛争が起こったのであるが、高二のとき僕等十三期生はその寄せ波をかぶらねばならなかった。悪く言えばそれまでの教える者の教えら

れる者に対する権力の破壊、そんな風潮が我が校を襲う。それは長髪問題に端を発する。今の十九期生あたりからはこの事は知らないと思うが、一連の事件に対し生徒の中で特に僕の友人等にもその犠牲になったものがいる。

僕が高二のとき、十二期生、当時高三生が長髪に対する要望を学校側にした。それより以前からその問題は生徒会等で論議されていた。ここで高二・三生が中心となりしばらくの間学校側と折衝をくり返す。生徒の関心は大したもので確か学校側との討論会等が試験の直前にあったこともあったように記憶している。けれどかなりの人数の生徒が出席して熱の入った論議がかわされ、学校は父兄にアンケートを求める型に落ち着いた。このころ僕等生徒が感じたのは『何と先生方は頑固な頭でっかちであろう』と云うごく単純な嫌悪である。けれど今になって思うのに学校のやり方はあれで正しかったと思う。一人の子供を教育して大人に育てる。この苦労さえ測り知れないのに大勢の生徒を教育する学校は確固たる教育方針をもたねばならない。高校生の当時としては考えもしなかった感じを持つようになった。今の高校生から非難されるかも知れないが。

長髪問題も片づき一応学園は平静に戻ったかに見えた。けれどその後も大学生等の呼びかけ等も校門あたりでしばしば聞かれた。

十月、学園を封鎖するとかいった一連のデマが校内を横切り学園内にペンキの様なものが投げ込まれるといった騒動もあった。それにつづくものとしての自主卒業式。卒業式を全く形式化したものだという生徒が大学生等の呼びかけもあって自主卒業式を開催。先生とひともめ。全くいやな一年であった。僕の某友人は学校を去った。その後のある日、彼に会ったのだがひどくやつれているようでかわいそうであった。六十九年の学園紛争の波の彼等は完全なる犠牲者となってしまった。個人的にはものすごくいい奴なのである。僕はノンポリ学生である。一連の友人の身に何が起こってしまったのかは知らない。けれどあの時どうにかならなかったものか。

高三は名実ともに進学の学年である。一般に曰く、灰色の青春であると。在校中、よく人に聞かれた。「どこの学校」「愛光です」「何年」「高三なんですよ」「愛光の高三といえば、つらい程の受験勉強をしてるんでしょうね」愛光生を一般の人が特別な見方をしているのは事実。六年間と言うもの、こんな会話を通して、つくづく感じた事である。でもこの進学校たる愛光に於ける生活を灰色などと認める訳には全くいかない。高三の時こそ一番楽しかったと思う。それは勝者の論と某人に言われた。何故?、目的をもった生活こそ一番楽しいものではないのか。高三の時友人の間には励ましの言葉で成り立った会話しかなかったように思っている。一番信頼しなければならぬ高三の時の主任も僕等友人間では兄貴的存在だった。こんな事も十三期の生徒の進学率にも反映したかも知れない。愛光学園とはこんな所なのである。

今年で二十年になるという。まだ歴史は浅い。けれど新鮮であるという意味にも取れよう。卒業生として自分の育った学校が、ますます発展することを願う。がんばれ在校生！最後にこの在校中の思い出を乱雑ではあったけれど整理する機会を与えて下さった事を感謝しています。

思い出語り

第十三期生　谷口清久

つぎはぎだらけの布カバン。丸坊主の高校生が流行の街をブラブラ。参考書読みつつ満員電車に乗って。授業中当てられた時の絶望感、OH HEAVEN！ガールフレンドが欲しくてたまらなかった土曜日の午後。絶えず夢を持っていた思春期の甘い味。睡魔と戦った長いながい五十分があって、とにかく、たどり着いた先が、今、この小生。

一年という隔たりをいざ経てみると、一年前の私事が、何と容易に、速い話が他人事にすり替わって見えることでしょう。自分だけを精いっぱい、かわいがり続け、頭の中は自分だけで満たしていたはずの昔が、今では、紙芝居のような思い出語りになってしまっているのに、少々白けてしまいます。そして、数限りないはずの昔の事件、事件、事件が、結局のところ、今考えてみると、おぼろげながらに一個の結論めいた「思い出」になっていくのを感じています。そして、思い出語りのストーリーというものが、細かな心理分析を要領としながら再生産されていくように思います。この自称「分析遊び」を改まってやっていこうとする時、一見、論理的に解明されるように見えるものの、数多くのハプニングを認めなければなりません。つまり、「WHY？TELL ME WHY！」といったぐあいに、他人の気持はもちろん、自らの心境のあり方、行くえさえもわからなかったことがあったということです。思い出の大部分がハプニングで埋められていると言った方が、より正しいかもしれません。しかしハプニングを認めつつも、「思い出」というものを、自らの分析遊びをしながら、まとまったものに自覚してゆくのが、多くの人が思い出語りを作り上げてゆく時の常道だと思うのです。このやり方が、決して真実をひん曲げるものだとは思いませんし、虚構を楽しむためのものだとも思いません。

さて、こんな歌の文句があります。

「私には私の生き方がある。そして、それは恐らく自分というものを知るところから始まるものでしょう……云

云。」

人それぞれで、個性をもつからして、例えば高校生活のあり方も、その中で考えたこともさまざまであると思うのです。そして、さまざまな青春の姿は、どれもが興味深く、価値多いものでしょう。なにせ、それぞれの姿には貴重な人生の若い時代をかけたという重大事があるからです。まだ年の若いぼくたちには、「人生をどう終えるか。」という問題よりも、「青春をどう生きるか」という問題に、よりカッコ良さと親しみがあるのです。

「若い」と言われて、自信が持てなかった時の劣等感と悔しさとの脈打ち。自分たちの理想の郷とは、似ても似つかず、やたら反抗したかった現実。ぼくたちは、絶えず、矛盾の壁なるものがありました。そして、BUT矛盾を感じても、次は妥協。これが、素直な子のやり方だったように思います。壁を突き破り、走りぬけようと衝動はあっても、目の前はやたらと広々していて、すぐさま途方に暮れてしまいます。試験終了五分前のようなもどかしさ。何か発散させたいのに、その捌口のないエネルギーの蓄積と時を刻む音。しかし、警告めいた予感はあっても、「殺気!!」というように、決定的に確かな危機感もありませんでしたから、外部からの相当な刺激か、あるいは、内なる活動力を、あてもなく待っていて、結局ぼくは、何もできなかったのです。「何」が意味していることをどうか理解していただきたいのですが、もし、ぼくが、三島氏のように腹を切って、何がどうあっても、強引に自己の人生を結論づけたという自己満足を得ることができたら、「何かできた」と言うでしょう。

生活の昼間、いくら灼熱しきって、破裂寸前にまでふくれ上がった激情も、生活の夜の部分になると、冷えきって、堅く動こうともしなくなります。「動」な部分と「静」な部分のくりかえしです。「静」な部分で、ふと我に帰った時、「動」な部分での活力が、何と欺瞞に見えたことでしょう。全く、白けてしまいます。それでも、少したつと、懲りずにまた「動」な部分にいたりするのです。ちょうど、旧式の水洗トイレの水タンクのようで、水がある一定量蓄えられると、一斉に流れ出すといった式の様です。「人生は、喜びと悲しみとのサークルゲームである」という、バフィー・セントメリーが歌った「いちご白書」のテーマも、水洗トイレの物理現象の周期的な運動と何ら変わらないような気もします。

「静」な部分のことで、ひとつ白状しますと、そこには、逃げ場所としての地下室を持ち続けていた後ろめたい事実、つまりある決定的な証拠があります。個人の心の中の地下室は、あくまでも他人の想像の立入りを絶するものでしょう？そうだから、ぼくは、この個室で、とても落ち着くことができるし、とても満足なひと時があります。ここでは、自らが、まぎれもない人生劇の主人公であります。主人公は、同時に脚本を書き、演出者であることが可能なのです。

詩人のポール・サイモンは、作品の素材を、現代人の

もつ疎外や、コミュニケーションの困難さに求めましたが、この疎外感や意志伝達の煩わしさは、一掃されて、この地下室には全くありません。ですから、主人公は非常に幸福なのです。おまけに、主人公の存在、その他諸諸を否定するような外部からは、完全、完璧に守られています。まさに天国です。

しかし、この天国も、思春期の夢物語であるような気がしている目下においては、かっての輝きと満足は半減してしまいました。THE TIMES THEY ARE CHANGING（時代はかわる）

ところで、創立二十周年を迎える愛光学園を、ぼくは昨年卒業しましたが、「身から出たサビ」式の後悔と不満は、述べていると数尽きず出てきそうですから、すべて、さておき、とにかく、ぼくたちの心の中で残ってゆく愛光学園は変わることなく保たれるでしょう、きっと。狭いグランドがあり、雨でぬかるんだグランドでボールを追いました。窓一つ向こうでは氷のような、冷たく張りつめた教室の空気がありました。（なかには、心地よい吐息もありましたが…。）生徒であったぼくの側から観ると、学園にはこんな二つの世界があったのです。そして、ぼくたちは、この二つの世界を股にかけ、どちらの世界のイメージにおいても、ヒーローであることを望みました。（少なくとも、ぼく自信は、そう望んだわけです。）「ジギルとハイド」とは少々違ってはいるものの、二つの異なった姿を持つことに、やたら勇士のカッコ良さを思いうかべました。しかし、どうも「雨のグランド」側に傾いてしまいましたが……。

ともあれ、思い出し得る細かな思い出の断片が、ぼくを通じて、愛光の歴史に関与していると自負していますから、ぼくは、この上なくデッカイ気分になるのです。

親指がはみ出て、はけなくなったサッカーシューズが下駄箱の中。これ以上は洗濯できない朽ちた布カバン。弁当のおかずの汁がしみた教科書の表紙。×印の方が断然多い英語の答案用紙。授業中の眠気覚まし対策の一分間呼吸停止法。「あの娘に会わなくては」と時間ぎりぎりに駆け込む毎朝の電車。試験前夜の寝るに眠れない空しさ。そして試験が終わった時の腹一杯の解放感。「まじめな感じ」といえば聞こえはいいが、実は「ヤボな生徒」ということ。

そして、ここに思い出語りの結論として言いたいのですが、氷のような教室の厳しいイメージと、雨の戦場での野性の味とが、一見油と水のようで、事実は確かにぴったり一致した様子で心の中に今もあるのです。

男は紳士であり、しかも雨の日は野性であるべきです。

カウンセラーをめざして

第十三期生　中須　満

私はこれから自惚の文を書こうとは思わない。一部の「秀でた」者の影となって苦悩してきた幾多の平凡な愛光生の一員として、その苦しみの一端を書きのこしたいと思うだけである。

何不自由なき小学生活は、憧れの中学に進学して根本的に破壊された。注目され賞讃されやまなかった自分は目が醒めると無名の一分子になりさがっていたのである。苦しんでいる頃「我ら人間の血とならん」というある人道作家の訴えが偶然私を引きつけそして離さなくした。富や名声が幸福の必要条件だとすれば幸福になれる人間は限定されてくる。しかし無数の喘いでいる人々に献身する事によっても生きがいを見い出し得るとすれば、誰にでもそれは可能なのだと気付いた。惨めな自分であったが全体から見ればまだ恵まれている。この恵まれたものを是非ともかかる人々の為に用いよう、そうするしか我を生かす道はないのだという信念が校風の影響下で醸成されていった。

人間に興味を抱き、また中三の先生から受けた助言の暖か味が忘れられなかった私は、心理学に進みカウンセラーとなる事を志向するようになっていた。金に縁遠いのは覚悟の上で機械文明から疎外された人々の心の糧となり続けようと、当時は純粋に願っていたものであるが、この事情を父に話すと頭ごなしに怒鳴られた。苦しい生活の中から辛うじて長男の教育費を拈出していた親から見れば、長男が「銭にもならぬ」方向へ進む事は耐え難き幻滅であったに相違ない。しかし理系に興味も意欲もなかった自分にとって、労働力の販売に有利とか人が勧めるとかそんな理由で嫌な職業に終生つながれる事こそ、絶望と堕落を意味していた。高二からは文系のクラスに入ろうと必死に父を説得したものの、生活資金をもらっていた親には遂に抗し切れず理系のコースにのめり込んでしまった。学習意欲を完全に喪失し頽廃の極に達した私を病気かと問う人があった程である。

人間の変化してゆく可能性は、しかしながら本人の考えよりはるかに大きいものである。初め一概に絶望的にしか思えなかった理科系の世界であるがその中で苦労してゆく内に漸次希望が湧いてきた。そしていつしか心理学の事は考えず確実有利な技術屋を目差す自分になってしまっていた。親友Mが冷たくなったのはその頃からである。徹頭徹尾その訳を聴いてみるに「君は偽善者だ」と断言する。人に奉仕しようとしたのはよい。しかし自

己の満足感を得んがためのものならば受ける人も「喜ぶまい」と言うのであった。長らく私を支えてきた使命感じみたものが自分の卑小感を隠すための衣装に過ぎなかった事実を鋭く指摘され、空襲の焼け野原を全裸で歩くような差恥心と虚脱を感じた。六十余人のクラスで特性のない人間として数量的に扱われる事には慣れていたが、彼の離反は何んといってもこたえた。親だけが、利害も欠点も超越して私を愛してくれるのである。しかしその唯一の絆も今こそ断ち切らねばならない。現実に埋没しきった人間に下手に妥協していては、生きる目標も喜びも失なった満腹奴に陥ったまま流されてゆくしかないであろう。

「脱出」の計画はできていた。理系に行かずんば仕送りせぬと親が云うならばそれも良い。貧弱なヒューマニズムだろうと偽善者だろうと構わぬ。自分は平凡な代替可能な人材として埋没するだけは断じて排除する。力を尽して自ら学資を稼ぎ、力の続く限り心理学を修めよう。研究室育ちの青白きインテリでなく大衆と苦楽をともにしてきた「話のわかる」カウンセラーとなろうではないか。それでこそ激んだ自分は再び「生き始める」事ができるのだと久方ぶりに喜びのこみあげてくる思いであった。

力なき声で呼びとめる親の姿を背に、私は涙をふりきって一人下宿に帰った。行く手を阻む者あらば親だろうと何んであろうと踏み倒してでも前進せねばならないのである。だが、父を踏み越えて誰を救おうというのか。不特定多数に希望を与えんが為に我が命あらしめた肉親を斬り捨てる事になるのである。苦しみの一夜が過ぎていった。社会が正常ならまだしも恐慌や戦争になれば最先に生活できなくなる根無し草になろうとしているのである。ヒューマニズムを発揮できる場は無数にある事を、人間の変化できる可能性は非常に大なる事を知りながら自分は何故心理学だけに固執するのであろうか。無意識の内に数年来私を係累してきた疑問が一挙に噴出し私の頭脳を目茶〳〵に引き裂いていった。

理想と現実との狭間にあって、生きる限り苦悩し続ける存在である。されど本能的要求のこれほど迄に根強いものであろうとは。強靱なる意志と聡明な資質を有する彼は骨肉張り裂ける幾十年の修行をもって煩悩に打ち克とうと努力した事か。しかし親鸞ですらそれを克服し切れなかった事を自白するのである。浮世に在る人間達をやれ善人である悪人であると分類して見たところで所詮五十歩百歩の域を出まい。むしろ全ての人間が生来的に負うている原罪的な或る物を如何に深く認識し、如何に真摯に如来にすがるかが肝要であるという。私は神仏を信じ得ない人間であるが南無阿弥陀仏と自然に唱名せずにいられぬ心境にある魂ほど、真楽なるものはないと、心から確信するに至った。

卒業式の朝、友人の一人が「大分目つきがやわらかくなったね」と言ってくれた。考えてみればこの一言を授かるために六年間の歳月を要した訳である。松山を去る汽車に乗ってうつ向いていると、発車寸前ホームを彷徨している友があった。「迎えに来た、元気でやれよう……。」

在校中の思い出

第十三期生　河　上　正　二

「在校中の思い出」のテーマで何か書けという依頼を受けた時、正直言って戸惑った。あれこれ断片的に思い出らしきものは沢山あるが、いざ書くとなると何を書いたものか。僕は机の奥に隠れていた数年前の日記帳を開かねばならなくなった。あの頃の出来事が何らかの形で跡を留めているかもしれないと期待したからだった。だが、そこに見たのは、重くるしい受験への道と、何故何故と人生を問う苦悩の声ばかりだった。考えてみれば僕の学園生活はほとんど自己との押し問答の連続だったような気がする。

いつの頃からだったろうか、急に自我がめばえ始めたのは。「自分は一体何の為に」とか「自分にとって学問とは何か」「人間性とは」様々な疑問が次から次と飛び出して毎晩僕に解答をせまっていた。そして、それらの疑問に答えるべくして僕の行動があった。表面的にはその行動が僕の歴史となり、具体的な思い出なのだが、僕にとって本当の思い出は、それらの根源に有る色々の思索なのではないのだろうかと思う。僕の行動とは何だったろう……走馬灯の様に頭をめぐるもの。道場の青畳。長い一人旅。マラソンの夜道。禅寺の足のいたみ。応援団長もやったな。弁論大会の壇上。続々とでてくる。一つ二つのエピソードをあげて書けばきっと面白い文ができるかもしれない。だが、この機会に、紙面の限られた中で敢えて僕は自分の心の中にあった本当の思い出を探りだそう。

受験という何かしら冷たいゴールに向ってつき進む生活の中で真に人間らしく在りたいと考えたのは一人僕だけだったろうか。だが真に人間らしくとは一体どういう事か、その頃明確に分からなかった。ローティン化された毎日の生活がレールの上を馬車馬の様に駆りたてられ

去りゆく私に対し「迎えに」と彼は失言したのである。大概の人の言葉は素直に受け取れぬ私であったが、この失言に表われた誠実な潜在意識を知り彼こそは一生の友だ！と直感し、自分は無上の幸わせ者であると思った。

ている様な気がしてたまらなかっただけかもしれない。僕はよくこんな迷いは汗と一緒に葬り去ろうとしたが、机の前に一人向う時、常にそれらの疑惑が襲いかかってきた。自分をもう一度見つめようと出た旅においてすら若干の孤独感を感じとったに過ぎなかった。ままならぬ自分自身に歯ぎしりをしながら毎日の決まりきった生活に身を投じなければならなかった。「真の学問探求」などと大見得をきってみた事もあったが所詮、入試用に単語の一つも覚える努力でしかなかったように思う。心の中の動揺は自然反抗の道をとった。教師が機械の様に思えたり、全てを社会や体制の罪だと言って一生懸命自分の小さな領域を守ろうとする人々の弱さに嫌悪も感じた。弱くとも真の自分を守りぬこうと試みるがゆえに僕は過激な運動家とも相入れなかったし体制にも妥協できなかった。僕に残っていたのは〝孤独な自分〟だけだった。勿論友人は沢山いた。皆いい奴ばかりだ。それでもかつ僕は〝連帯〟という言葉が嫌いだった。僕はこの孤独の中で文集「ヤングパルス」を発行し、文化祭を手がけ生徒会誌「愛光」の編集の中で自分自身との対話を続けていった。〝主体性〟それだけが僕を支えてくれるものだった。弁論大会で「主体性と批判精神」と題してライトを浴びた時は既に高Ⅲの秋だった。あの数分間が僕にとっていかに意味をもった自己との対決であったろう。受験をひかえての僕はややもすれば例の答案用紙一枚の為に自分自身を失なうかもしれなかったのだから。……日記の最後に一通の手紙を見つけだした。一面陽気にふるまっていた僕が親しかった女性にあてて自分を吐露したものだが、出さずじまいになったものだった。この機会に思い出の破片としてここに載せてみようという気になった。

『手紙有難う。早く返事を出すべきだったが期末試験の準備や何やと忙しく、といっても大して机の前に座ってはいないが、ともかく申し訳ない。十二月に入って学校の方もやっと平常にもどり久しぶりにペンをとっている。寝て書いているので字が少々ゆがんでいるかもしれないが判読して頂きたい。実を言って今日はあまり気持の良い一日ではなかった。別にとりたてていう事件があった訳でもないが、疲れている、心身ともに。重い気持でペンを走らせるときっと君に嫌な事を聞かせるに決っていることを知っていながらペンをとる僕の我がままを許して欲しい。君ならば何でも聞いてもらえそうな気もするし、一方的な手紙でなら反論したり止めさせたりできないだろうから。最近の手紙の中で僕は自分自身を陽気な呑気者にしょうと努めたし、ある程度成功したようだ。君もそんな陽気な僕を望んでいる様だし他の僕の友人もそうだ。でも真実は逆だった。僕は矛盾に悩まされ自己嫌悪にもおち、受験受験と騒ぐ奴らにヘドを吐く思いで、それでいて自分もその一人になっていた。そんな中で窓から外をながめて自分の本当の生き方やあり方を考えていく事の何とも言えぬ苦しみを君に分かってもら

えるだろうか。別にわかってもらっても、どうという事は無いが。……ある時は反抗的になったり本の空想の中へ逃げ込んだり、柔道をやってせめて畳の上だけでは無心でいたいと願ったり、そして友達とは冗談やホラを吹いて笑って陽気になろうと努めたり、でも全てが空しかった。僕の手紙をすなおに「楽しく読ませてもらいました。つい吹きだしたりして……」と書ける君に較べて僕にどれ程の真実が有ったろうか。恥しい限りだ。僕は自分の生活の中で自分を偽った行動はしたくないと考えていながら、偽りのない自分が何であるかも知らない。八方美人になって人から好かれて、何も考えずに生きてゆけたらどれ程幸福だろうか。だが、僕はこのままではいつまでたっても道化役者でしかない様な気がする。本当の人間らしさがどこかへ消えてゆく様に思えて恐しい。僕は以前、遠くから君が小さな子供を相手にしきりに何か話しかけている姿を見た事がある。いかにも自然で、それでいて君そのものだった時、本心君を羨しいと思った……」

手紙はそこで切れていた。一連の僕の心の葛藤は高校時代において「烽火」五号でその最後の呻き声をあげた。愛光時代の僕の葛藤は今も数々の思い出とともに生き続けている。僕の過した最後の二年間、学園はかなり揺れていた。新しい意味での教育をすすめる陣痛だったのかもしれない。僕はこの胎動の中でいやおうなしに悩んだのかもしれない。一学生の魂の彷徨はとてもテーマには似つかないものだったかもしれない。最後に不向きついでに「烽火」に載せた僕自身の文章で、おそまつな回想を終えたい。

「青春は清らかであったり美しかったりするものではないのだ。それは苦しい、にがい悶絶しそうな日々の連続なのである。そして僕はそれらに堂々と挑戦して心ゆくまで戦いたい。青春が真に美しくなるのは戦いの血がそれを飾るからだ。」

我が母校、愛光学園の発展と二十年誌の成功を心より祈りつつ筆を置きます。

愛光生活で得たもの

第十三期生　十亀　清

愛光時代の友達に「近ごろだんだん俗化してきていかん、高校時代の聖人君子の生活にもどらなあかんなあ。」とぼやいたら「そんなうわさ聞いたことなかったな」といわれ狼狽した。表面は真面目そうで堅物と思われていたらしく、ある先生が〝平均的愛光生〟と評したこともある。ところが、知る人にとっては笑いがこみあげてくるらしい。実際、その〝平均的愛光生〟は高Ⅲの第四回校内模試の前日、お山のバザーに行って一日中遊んでいたのである。そして、模試の結果は主任をして「まあこの調子でがんばればまず心配はないと思うが…」と言わしめた。――ソレトモ、こういうのが〝平均的愛光生〟なのかな?――

ところが実は、こんな楽しい想い出は、高校時代を終ろうとするころのことであって、『想い出』の大部分は、ヘマ、トチリ、ケンカ、シノビナキ等の今だに自分自身腹立たしくなるようなことのほうが多いのである。

先日、小学校の同級生で、地元の中学、高校と進み、現在阪大にいる男と会って話をしたことがある。「おれだってここまで来たんやから、おまえもわざわざ高い金だして愛光へ行かいでもよかったんやないか。」こう彼に言われて、自分の愛光在学中に得たものはなんだったか考えてみた。

小学校時代の僕の性格といえば、彼が〝きちがいみたい〟と評価したように、成績が優秀だったことに支えられて、我が強く、まさに自尊心の固りだった。それが、中一最初の実力テストで二百五十人中、二百＋α番という成績をとったことで、自尊心はあっけなく崩れ去った。短気でよく人とケンカし、そのくせ泣き虫だったので、寮では常にまわりからなぐられ、こづかれ、バカにされ通しだった。それまで自己の支えであった自尊心がなくなっていたのだから、自己嫌悪に陥ったのも当然のことだろう。

成績不良のため中一の終り、春休みに数学で『追試』を受けさせられるはめになった。この時、出題範囲が限られていたことと、両親の血のにじむような努力のおかげで、「へエッ、僕にも数学でこんないい点がとれるんだなあ!」というような成績をあげることができた。「やればできる」――平凡ではあるが自己嫌悪脱出のキッカケとなった信念である。

たとえ僕が公立の中学、高校と進んでいたとしても、次々と〝より大きな世界〟に進んで行く過程で必ず一度は自己嫌悪に陥っていたに違いない。ただ、愛光学園は

田舎の小学校に比べて規模が極端に違っていたため、その時期が早まっただけだと思う。考えてみれば幸いだったようだ。六年間という長期にわたって〝内なる闘い〟に没頭できる〝暇〟な時はもう二度とやってこないだろう。

現在の愛光の状況からいって、六年間の中高一貫教育が大学受験を目的としているのを否定することはできない。〝暇〟だとは言っても、六年間の間『受験』という言葉は常に頭の中にあり、そのくせ勉強をするわけでもないから、結果としてジレンマに陥り、実際に勉強をする苦痛よりもそのことで悩むことに耐えられなくなり、歯をくいしばってベッドをおもいきりなぐりつけ、ソッと寮を抜け出して西山に登り、海に沈もうとする真赤な太陽を見つめながら、苦しみを忘れさせてくれる感動がこみ上げてくるのを待っていたこともある。

この間に僕は水産学に興味を持った。いつごろからそんな気持ちになったのか。今ではもう覚えていない。ともかく僕は水産関係の本を数冊買ってきて読みはじめた。「何かやっている」そう思って心を静めた。勉強をしなくちゃならないが、どうしても勉強する気にならない時、そういった本が無性に読みたくなり、読むことによって〝勉強〟をしているんだと自分の心に言いきかせていた。「心を偽っているじゃないか」こう言われるかも知れない。だが、とんでもない話だ。僕が授業におもしろ味を感じだしたのはこれらを読み始めてからである。ついこの間習ったばかりの数学や物理の公式、英単語、生物の知識等が専門書に書いてある。そうなるとうれしくなってゴンゴン勉強をやる。―と書くほどスラスラといったわけではないが、いつの間にか『勉強に追い立てられる』ことはなくなっていた。これは多分、心のゆとりがこのことをひき起したのだと思う。アレもコレもとあせっても勉強は遅れこそすれ速まることはめったにないと思う。何事をするにあたっても落ちついていなければ失敗するというのはここ数ケ月で思い知らされました。『落ちつく』手段が、僕の場合には専門書を読むことだったわけだ。

「愛光に行って良かったか」そんな質問を受けたことがあります。答…僕は今の自分が大好きです。

図表で見る学園の動き

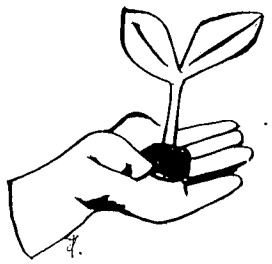
資料(2)「第八回愛光祭プログラム」より

'70愛光統一テーマ

◆ 建　設 ◆

巻頭言

みなさん，今胸に手をあててよく考えてみて下さい。私たちは激烈な受験戦争の中でともすれば受動的になってはいないでしょうか。刹那的理由を盾にとり，その盾のあまりの重さに振り回されてはいないでしょうか。自分の「わく」を破ることを恐れ，怠り，中途で自己満足に陥ってはいないでしょうか。建設に破壊が供うように，自己の向上はまず利己的な「わく」を破ることに始まるのです。自分の「わく」から飛び出し，自分とは相異なるものを謙虚にうけとめ，そこに新しい自分を発見するのです。魔の手が延びてきたら戦いなさい。「意志あれば道あり」です。若者には冒険が許されます。そしてその冒険は今でなくては遅いのです。愛光祭 —— まさに「わく」を破るときです。裸になってぶっかりあいめぐりあい新しい自分を発見するときです。私たちは未来に向けた可能性を秘めています。しかし本当の未来はちっぽけな自分の「わく」をのりこえた者にのみやってくるのです。



〈表１〉 教科別教職員の移動 〔「教職員履歴書綴」１・２より作成〕 ——— 在職期間

教科	氏名	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	備考
理事長	ビセンテ・ゴンザレス						5月																
	マルシアノ・ディエス					5月																	
	サトルニノ・ゴンザレス																						
校長	田中忠夫	10月																					
国語	正岡二一																						
	門屋方典	2月																					
	砂田任叙																						
	武内卓也																						
	村上禎治																						
	日比野正信																						
	二宮一夫																						
	八代昌一																(定年)						
	尾海孝平																				(定年)		
	更科正道																						
	斉藤武人																				(定年)		
	越智聡																						
	小野理行																						
社会	藤井孝夫																						
	島津豊幸																						
	酒井和林																						
	新田三千典										12月												
	中村一省																						
	岡部迪彦											7月											
	平松勝太郎											9月					(定年)						
	玉井和夫																			(定年)			
	田村泰																						
	平田仁																			(定年)			
	伊藤順次																	7月					
	五百木誠也																9月						
	大沢武男																						
	青葉蔵治																						
	春日井直吉																						

教科	氏名	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	備考
数学	松野五郎	1月																					
	泉田一郎			11月																			
	光藤芳夫																						
	望月勇								7月														
	家安幸男																						
	名村忠雄																						
	大島謙介																						
	城築淳英							9月															
	中村正男														5月（死亡）								
	安藤敬三																						
	沢田衛										10月												
	岡田重夫																						
	大嶋徳雄																						
	山一保穂																						
	小立豫司																						
理科	河井豊	12月																					
	望月迪昭																						
	今村章																						
	一宮一男					8月																	
	安藤和博																						
	小林光男																						
	堀本邦雄																						
	丸山恒																						
	平岡光雄																						
	田井貞良																						
	松田洋													4月									
	吉村年博																						
	佐々木稔																						
	大前尚道																						
	高橋映治																						講師
	浜田俊三																						

教科	氏名	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	備考
芸術	渡部　徹																						講師
	玉本　緑																						講師
	田代　博																						講師
	蔵田五十憲																						
体育	野本忠則		9月																				
	竹本友賢																						
	砂田国雄																						
	河野勝昭																						
英語	天野明子																						
	サルバドル・ルイス		9月																		5月		
	白石一夫																						
	榎本富士夫					4月																	
	佐藤利啓																						
	藤原　保																						
	谷後道行																						
	長島　宏																						
	加藤　登																						
	高須金作																						
	長谷部寿郎																						
	清水　襄																						
	青野　勁																						
	アントニオ・フェルナンデス																						
倫理社会	レオナルド・マリン																						
	武田義雄											9月											
	イエズス・バリエス													5月									
	竹島幸一										9月				10月								
	岡本哲男												5月										
	カルロス・マルチネス																						
	本郷　震																						
	佐々木利昭																9月						
養護	村上みゆき																						

事務（現在在勤者以外で五年未満は省略）	氏名	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	備考
	金井大介	11月																					
	和田幸子																						
	渡部敏子												8月										
	川井トシ子															5月							
	岡部　豊						1月																旧姓乗松
	加藤　栄																						
	松長　稔																		10月				
	浅山　修											1月											
	高見ミチ子																						
	江戸鈴子																						旧姓久保
	近藤満寿子																						
	大森鈴子																						
	渡部伊都子														6月								
	ミゲール・フェリペ																						
	樋口千代子																						
	大西ツヤ子																						
	渡辺武夫																						
教科	氏名 年度	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	備考

〈表2〉 年次別校務分掌および学級主任

校長　田中忠夫　教頭　正岡二一（昭和四三年度迄）　河井豊（昭和四四年度以降）

年度	28	29	30	31	32	33	34
庶務					正岡 砂田	正岡・谷後 砂田・名村	正岡・砂田 谷後・今村
父母会					正岡		
同窓会							
教務					今村 望月（迪） 一宮 白石	家安・今村 武内・大島	大家 島安 名村
進学						白石 河井 望月（迪）	河井 白石 望月（迪）
図書館					島津 天野	島津 乗松	望月（勇） 島津 乗松
生徒					門屋・野本 安藤	門屋・天野 藤原・酒井	門屋・天野 武内・藤原 酒井
事務室	金井・中村	金井・中村	金井・中村	金井・和田	金井・和田 川井・渡部（敏）	金井・和田 川井・渡部（敏）	金井・和田 川井・渡部（敏）
学級主任 中学 1 A	松野	河井	松野	河井	泉田	大島	砂田
学級主任 中学 1 B	河井	松野	正岡	藤原	砂田	藤原	砂田
学級主任 中学 2 A		白石	河井	望月	今村	砂田	望月（勇）
学級主任 中学 2 B		藤井	榎本	佐藤	望月（勇）	谷後	藤原
学級主任 中学 3 A			白石	門屋	正岡	望月（勇）	泉田
学級主任 中学 3 B			藤井	望月	武内	泉田	酒井
学級主任 高校 I A				白石	門屋	今村	武内
学級主任 高校 I B				今村	家安	武内	望月（勇）
学級主任 高校 II A					白石	門屋	家安
学級主任 高校 II B					光藤	家安	今村
学級主任 高校 III A						白石	白石
学級主任 高校 III B						河井	河井

年度	35	36	37
庶務	白石 砂田 谷後 安藤 長島	白石 砂田 谷後 長島	白石 藤原 加藤 谷後 長島 高須
父母会	正岡 河井 天野	河井 安藤	河井 今村 堀本
同窓会	河井	河井 安藤	河井 今村 堀本
教務	家安 大島 名村 泉田 中村（正）	家安 泉田 中村（正） 名村 沢田 安藤	家安 中村（正） 泉田 名村 岡田 大島 安藤
進学	今村 武内 望月	白石	泉田 武内 小林 名村
図書館	島津 新田 村上（禎） 乗松	島津 新田 村上（禎） 蔵田 乗松	島津 村上（禎） 蔵田 岡部 乗松
生徒	門屋・天野 藤原・酒井 新田・蔵田 小林・野本 竹本・村上	門屋・望月 野本・竹本 堀本・藤原 高須・酒井 中村（一）・村上 武内	門屋・武内 砂田・日比野 酒井・中村（一） 望月・丸山 平岡・野本 竹本・村上
事務室	金井 松長 和田 川井 渡部（敏） 加藤	金井 松長 和田・渡部（敏） 川井・渡部（徹） 小笠原 加藤	金井 松長 和田・渡部（敏） 川井・日高 小笠原 加藤
主任補佐 A	砂田	砂田	望月
主任補佐 B	谷後	谷後	砂田
主任補佐 C	新田	沢田	長島
主任補佐		日比野	岡田
主任補佐		望月	丸山
主任補佐		門屋	加藤
主任補佐		小林	今村
主任補佐		泉田	武内
主任補佐		谷後	望月
主任補佐		長島	砂田
主任補佐		安藤	大島
主任補佐		望月	高須
主任補佐		加藤	村上
主任補佐		名村	酒井
主任補佐		白石	名村
主任補佐		今村	河井
主任補佐		新田	岡部
主任補佐		丸山	竹本
主任補佐		堀本	平岡
主任補佐		中村（一）	野本
主任補佐		大島	安藤
主任補佐		竹本	門屋
主任補佐		酒井	島津
主任補佐		村上	堀本
主任補佐		武内	河井
主任補佐		家安	白石

	38	39	40
庶務	白石 加藤 藤原 谷後 長島	白石 藤原 加藤 谷後 長谷部	白石 藤原 加藤 谷後 長谷部 長島
父母会	河井 平岡	平岡 今村	平岡 今村
同窓会	河井	河井	河井
教務	家安 中村(正) 泉田 名村 岡田 大島 安藤	家安 中村(正) 泉田 名村 岡田 大島 安藤	家安 中村(正) 泉田 名村 岡田 大島 安藤 大嶋
進学	泉田 酒井 今村 藤原	泉田 島津 白石 中村(正)	泉田 武内 名村 小林
図書	島津 村上(禎) 蔵田 岡部 乗松	砂田 島津 二宮 蔵田 松田 乗松	砂田 島津 二宮 蔵田 乗松
生徒	門屋・武内 砂田・日比野	門屋・武内 望月・長島 野本・竹本 小林・堀本 吉村・田井 酒井・中村(二) 日比野・平松 バリエス・竹島	門屋・武内 日比野・酒井 中村(二)・小林 堀本・望月 吉村・田井 佐々木・野本 竹本・平松 八代・玉井 村上
事務室	金井 松長 和田・川井 渡部・日高 小笠原 加藤	金井 松長 和田 松平 川井 武智 浅山・日高 加藤	金井 松長 和田 川井 久保 森本・別府 高見 浅山 加藤
学級主任 組	A 岡部	A 昆野	A 岡田
中学校 1	B 長島	B 堀本	B 望月
2	C 中村(二) 砂田	C 長谷部	C 長谷部
3	D 日比野 加藤	D 望月	D 野本
高校 I	佐 安藤	佐 安藤 平松	佐 正岡
II	補 大島	補 竹本 平岡	補 田村
III	任 堀本	任 蔵田 野本	任 大前
	主 中村(正) 白石	主 蔵田	主
	今村		

	41	42	43
庶務	白石 加藤 藤原 谷後 長谷部 長島 大前	藤原 清水 白石 加藤 谷後 長谷部 長島	清水 白石 藤原 加藤 谷後 長谷部 長島
父母会	平岡	平岡	平岡
同窓会	堀本	堀本	堀本
教務	家安 泉田 名村 岡田 大島 安藤 山一	大嶋 家安 泉田 名村 岡田 大島 安藤 山一 浜田	大嶋 家安 泉田 名村 岡田 大島 安藤 山一 浜田
進学	河井 今村 酒井 小林 望月 二宮 和田	河井 望月 今村 小林 二宮 ルイス 和田 渡部	河井 望月 今村 小林 二宮 ルイス 和田 渡部
図書	島津 砂田 中村 蔵田 田村 乗松	島津 蔵田 中村 田村 伊藤 乗松	島津 岡本 蔵田 中村 田村 伊藤 乗松
生徒	門屋・武内 砂田・日比野 尾海・岡本 玉井・平田 ルイス・カルロス フェリペ・田井 佐々木・大前 野本・竹本 村上	門屋・武内 砂田・日比野 尾海・岡本 玉井・平田 カルロス・田井 佐々木・大前 野本・砂田(体) 竹本・村上	門屋・武内 砂田・更科 尾海・斉藤 岡本・田村 玉井・平田 ルイス・カルロス フェリペ・田井 佐々木・大前 野本・竹本 砂田(体)・村上
学級主任	金井 松長 川井・高見 大森 浅山 加藤	金井 松長 別府・高見 近藤 大森 木村 浅山・菅 加藤	金井 松長 江戸・高見 別府 近藤 大森 木村 山川 浅山・大畠 加藤
組	A 岡田	A 岡田	A 更科
中学校 1	B 望月	B 堀本	B 長谷部
2	C 長谷部	C 長谷部	C 山一
3	D 野本	D 田井	D 望月
高校 I	佐 正岡	佐 野本	佐 野本
II	補 田村	補 中村	補 中村
III	任 八代	任 平岡	任 佐々木
	主 大前	主 竹本	主 長島
		伊藤	浜田
		カルロス	伊藤
		砂田(体)	竹本
		浜田	岡本
		蔵田	田村
		平田	谷後
		清水	大島
		名村	家安
		岡本	望月
		家安	今村
		望月	安藤
		加藤	武内
		泉田	藤原
		今村	小林
		白石	白石

	44	45
庶務	岡田 加藤 田村 長谷部	今村 家安 清水 フェリペ
父母会	平岡	平岡
同窓会	泉田 (校史) 島津	泉田 (校史) 島津
教務	大嶋 小林 砂田 青野 長島 安藤 山一 五百木 ルイス	大嶋 砂田 二宮 斉藤 五百木 山一 安藤 小林 長島
進学	望月 白石 二宮 家安 今村 田井 和田 乗松 大西	望月 田井 加藤 砂田 大島 渡部 江戸
図書	名村 蔵田 中村 佐々木 大前 小立 松 大西	名村 尾海 蔵田 中村 佐々木 カルロス 浜田 砂田 岡部
生徒	門屋・武内 更科・大沢 大島・堀本 浜田・谷後 野本・竹本 砂田・河野 カルロス・フェリペ 村上・ルイス イルデフォンソ	門屋・武内 更科・堀本 佐々木(神)・岡本 野本・谷後 田村・小立 浜田・大前 砂田・河野 佐々木・長谷部 竹本・村上 (保健体育を含む)
事務室	金井 松長 江戸・高見 近藤 大森 山川 樋口 浅山・大島 加藤	金井 近藤 大森 山川 樋口 大西 高見 浅山 加藤

学級主任	組	A	B	C	D	主任補佐	A	B	C	D	主任補佐
中学	1	中村	五百木	更科	安藤	蔵田 長谷部	小立	長谷部	二宮		中村 野本
	2	小立	青野	山一	堀本	尾海 平田	大前	安藤	青野	泉田	五百木 竹木 斉藤
	3	田村	大前	泉田	長島	玉井 斉藤	浜田	谷後	家安	堀本	河野 蔵田 尾海
高校	I	正岡	佐々木	岡田	谷後	武内 大沢	田村	山一	小林	長島	望月 更科 砂田
	II	田井	加藤	砂田	大島	清水 平岡	佐々木	正岡	岡田	白石	名村 武内 今村
	III	白石	二宮	家安	今村	島津 平岡 望月	田井	加藤	砂田	大島	島津 平岡 清水

	46	47
庶務	今村 田 加藤 大島	今村 砂田 谷後 泉田 岡田 大島
父母会	平岡	平岡
同窓会	泉田 (校史) 島津	小立 二宮 (校史) 島津 (二十周年) 正岡 清水
教務	大嶋 五百木 小立 二宮 安藤 田井 青野 渡部 江戸	大嶋 五百木 佐々木 安藤 田井 青野 砂田(体)
進学	望月 佐々木 正岡 白石 佐々木 春日井 田村	堀本 山一 小林 長島 武内 渡部 江戸
図書	名村 蔵田 中村 青葉 岡部	名村 蔵田 中村 越智 大前 青葉 カルロス アントニオ 岡部
生徒	門屋・更科 堀本・野本 岡本・佐々木(神) カルロス・アントニオ 長谷部・越智 谷後・大前 浜田・小野 砂田・河野 竹本・村上 (保健体育を含む)	門屋・更科 佐々木(神)・岡本 春日井・浜田 長谷部・田村 小野・野本 砂田(体)・河野 竹本・村上 (保健体育を含む)
事務室	金井 渡辺 近藤 大森 樋口 高見 加藤	金井 渡辺 浅山 近藤 大森 樋口 大西 高見 加藤

学級主任	組	A	B	C	D	主任補佐	A	B	C	D	主任補佐
中学	1	大島	長谷部	二宮		望月 島津	田村	越智	望月	岡田	長谷部 野本
	2	小立	越智	加藤		堀本 中村	大前	大島	白石		二宮 河野
	3	大前	田村	青野	安藤	泉田 浜田	小立	小野	加藤		春日井 浜田
高校	I	田井	砂田	家安	谷後	平岡 青葉	佐々木	青野	泉田	安藤	更科 青葉
	II	山一	小林	武内	長島	更科 五百木	谷後	学安	砂田	田井	平岡 砂田(体)
	III	佐々木	正岡	岡田	白石	名村 清水	山一	小林	武内	長島	名村 清水

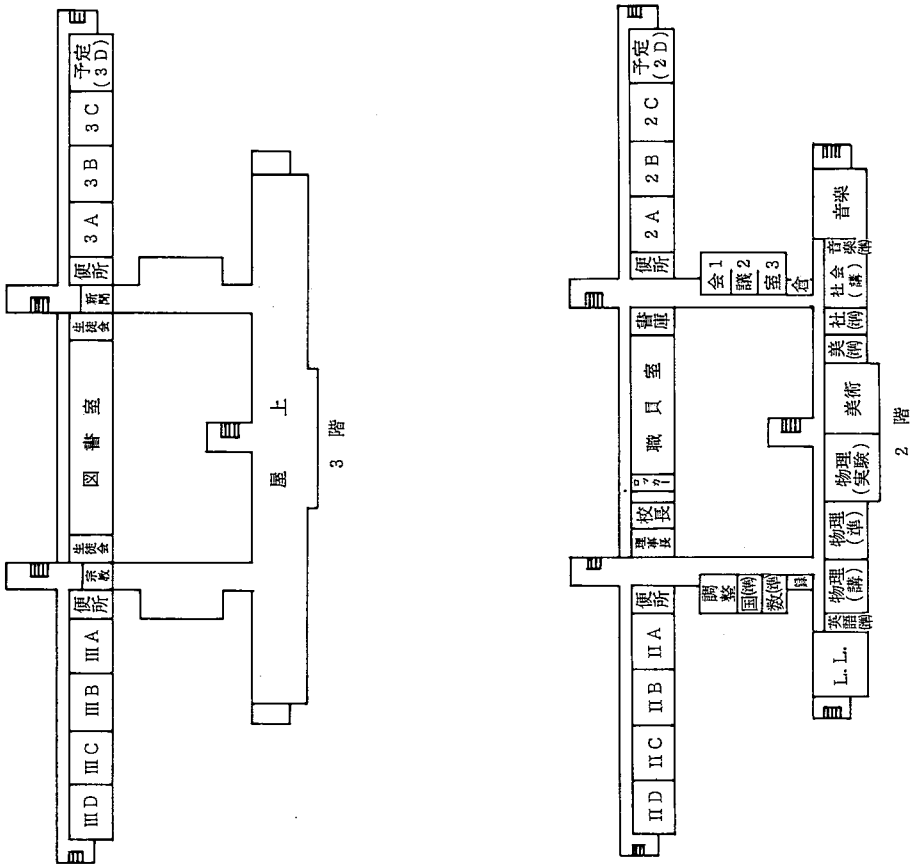
〈表3〉 学校規模の変遷

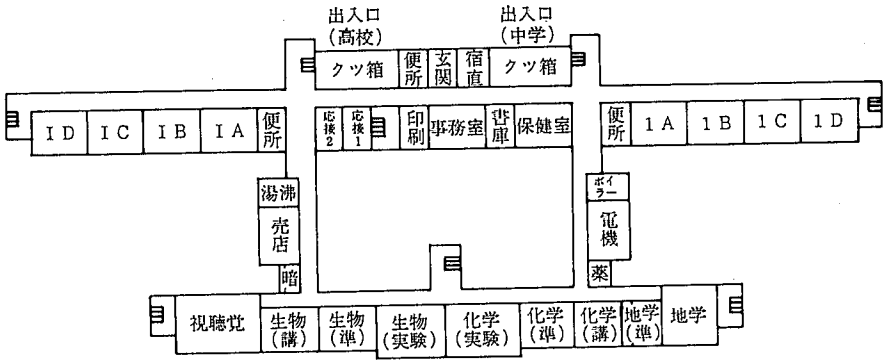
昭和年	中学部生徒数	高校部生徒数	学年別学級数 中1	2	3	高I	II	III	計	(職員数) 教職員数	入学者数 中学	入学者数 高校	卒業者数 中学	卒業者数 高校	校地 総面積(㎡)	校舎 延面積(㎡)	校舎構造別内訳面積(㎡) 鉄筋校舎	木造校舎
28	111		2						2	14 (2)	111				11.810.65	1,439.06	0	1,439.06
29	229		2	2					4	18 (2)	120				〃	1,934.06	0	1,934.06
30	352		2	2	2				6	24 (4)	121		100		〃	2,693.06	0	2,693.06
31	380	131	2	2	2	2			8	27 (5)	131	131	115		12,666.84	3,433.75	(31.4) 1,235.69	2,198.06
32	392	255	2	2	2	2	2		10	31 (5)	143	129	117		〃	〃	〃	〃
33	400	377	2	2	2	2	2	2	12	32 (7)	142	124	122	123	〃	4,732.50	(33.4) 2,534.44	〃
34	401	372	2	2	2	2	2	2	12	33 (7)	140	126	125	124	〃	3,973.50	〃	1,439.06
35	470	424	3	2	2	3	2	2	14	38 (8)	199	179	123	119	〃	5,925.68	(35.5) 4,486.62	〃
36	530	470	3	3	2	3	3	2	16	47 (8)	198	177	136	123	〃	〃	〃	〃
37	572	517	3	3	3	3	3	3	18	48 (8)	198	187	175	160	〃	〃	〃	〃
38	581	530	3	3	3	3	3	3	18	48 (8)	196	187	176	164	〃	〃	〃	〃
39	644	589	4	3	3	3	3	3	19	51 (11)	253	234	185	167	〃	7,465.02	(39.4) 6,025.96	〃
40	699	653	4	4	3	4	3	3	21	54 (10)	253	248	192	172	〃	〃	〃	〃
41	756	707	4	4	4	4	4	3	23	61 (13)	258	249	241	221	〃	〃	〃	〃
42	755	728	4	4	4	4	4	4	24	65 (14)	255	256	248	228	〃	〃	〃	〃
43	728	739	4	4	4	4	4	4	24	62 (13)	224	256	247	236	〃	〃	〃	〃
44	696	740	4	4	4	4	4	4	24	71 (15)	221	256	253	236	〃	〃	〃	〃
45	583	723	3	4	4	4	4	4	23	65 (12)	151	257	215	227	〃	〃	〃	〃
46	516	694	3	3	4	4	4	4	22	65 (12)	158	213	206	223	(46.5) 13,522.84	〃	〃	〃
47	520	661	4	3	3	4	4	4	22	65 (12)	218	210			(47.5) 13,899.17	〃	〃	〃
										計	3,690	3,419	2,976	2,523	(47.9) 40,390.00	9,642.69 (鉄筋)		

〈図1〉 新校舎教室配置

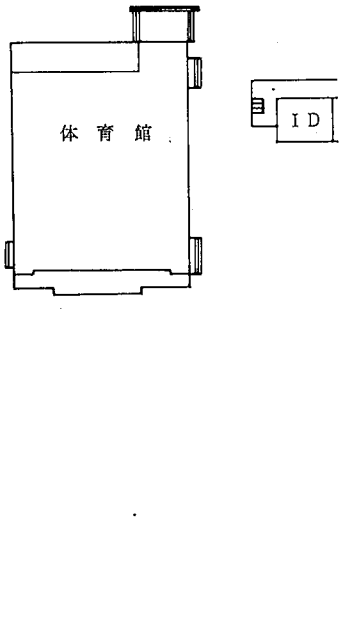
昭和47年9月現在

(松山市衣山5丁目1610番地の1)





1 階



〈表 4〉 現在の学校規模

単位＝m^2 （昭和47年 9 月現在）

敷地			40,390
床面積	本館・特別教棟	1階	3,283.72
		2階	2,980.74
		3階	1,630.56
		塔屋	121.26
	体育館	1階	1,311.64
		2階	156.06
	倉庫		70.32
	クラブ室		88.43
	計		9,642.69

〈表 5〉 保護者の職業と学歴（年次別百分比）（「生徒身上調書」より作成）（学歴欄上段は父，下段は母）

職業・学歴 ＼ 入学年次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
公務員・団体	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
	15.3	15.1	22.3	16.3	20.6	19.0	13.1	12.9	24.9	18.4	22.5	20.8	21.8	19.3	30.0	30.0	27.3	27.6	25.2	14.3
教師	14.5	15.1	15.7	11.4	19.4	14.7	15.0	11.8	11.8	9.2	11.0	9.6	13.5	12.6	8.9	9.3	13.0	9.2	16.5	12.1
会社	8.9	17.5	5.8	15.4	13.8	12.9	21.5	27.6	15.4	26.8	19.5	17.5	23.2	23.9	16.7	21.3	20.8	29.9	35.9	40.7
銀行	0.8	2.4	0.8	2.4	2.5	2.5	0	2.4	2.7	2.2	3.0	4.2	3.1	1.7	1.9	1.9	2.3	1.1	2.9	3.3
商業	23.4	12.9	16.5	17.1	9.4	6.7	18.0	14.7	18.1	14.0	16.9	22.1	15.3	20.1	16.7	19.9	20.4	13.8	8.7	2.2
農業	12.9	11.1	10.8	5.7	5.6	11.7	6.6	5.3	5.4	5.3	5.5	8.3	6.6	6.3	5.1	4.6	2.3	5.7	2.9	5.5
土建業	1.6	0	0	0.8	0	0.6	1.8	0	0.5	0	3.8	3.8	1.7	1.3	4.3	0.5	0.9	3.4	0	2.2
医師	8.9	7.1	9.9	10.6	10.6	5.5	8.4	9.4	7.7	11.8	11.9	5.8	8.7	7.6	8.9	7.4	7.0	6.9	3.9	15.4
その他	13.7	19.8	18.2	20.3	18.1	26.4	15.6	15.9	13.5	12.3	5.9	7.9	6.1	7.2	7.5	5.1	6.0	2.3	3.9	4.4
新・旧大学	20.8	21.7	21.2	31.8	27.3	22.5	25.3	32.0	22.8	27.1	23.4	22.5	21.1	21.2	31.2	21.6	21.2	21.6	38.5	44.0
	0.8	1.6	2.6	2.5	4.4	1.3	3.3	5.9	3.2	3.9	3.0	2.1	2.2	2.1	7.1	1.9	5.6	12.2	9.5	12.1
旧高専・新短大	24.8	27.3	23.1	18.7	26.7	25.8	15.8	17.6	24.2	17.9	14.5	15.1	21.6	20.7	12.7	22.0	25.9	18.2	17.3	25.3
	7.5	10.6	12.7	10.7	11.3	11.3	4.7	8.2	8.1	5.7	6.8	6.3	6.6	4.7	3.2	7.9	12.1	6.7	4.8	6.6
新高・旧中	16.8	24.5	28.8	27.1	29.3	29.1	24.7	25.2	25.1	32.1	38.3	36.4	28.9	39.2	30.8	34.4	32.6	35.2	29.8	19.8
	39.2	61.8	59.3	57.0	64.8	65.6	60.0	63.5	59.3	69.3	71.4	75.6	71.1	71.5	68.0	77.3	70.6	57.8	73.3	67.0
新中・旧小	15.8	20.8	19.2	13.1	10.7	16.6	17.7	16.4	14.9	14.2	12.8	16.0	15.1	14.5	13.4	13.4	13.2	15.9	9.6	3.3
	12.5	21.1	16.1	17.4	10.1	8.7	15.3	12.4	14.9	13.2	11.1	11.8	14.0	20.0	13.4	10.6	8.9	16.6	8.6	6.6
その他	21.8	5.7	7.7	9.3	6.0	6.0	16.5	8.8	13.0	8.7	11.0	10.0	13.3	4.4	11.9	8.6	7.1	9.1	4.8	7.7
	40.0	4.9	9.3	12.4	9.4	13.1	16.7	10.0	14.5	7.9	7.7	4.2	6.1	1.7	8.3	2.3	2.8	6.7	3.8	7.7

〈表6〉 生徒の家族構成（年次別兄弟・姉妹百分比）

兄弟数＼入学期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1 人	3.3	11.1	6.6	11.4	8.1	13.5	13.2	11.8	5.9	9.2	8.1	10.4	6.6	7.1	6.6	15.8	7.4	9.0	13.1	6.6
2 人	17.7	16.7	14.9	22.0	26.9	30.7	34.7	42.9	42.5	36.0	42.8	41.3	48.9	46.7	48.9	52.3	56.9	60.7	55.1	57.1
3 人	29.8	25.4	36.4	31.7	36.3	28.8	37.1	25.9	43.0	42.1	38.6	33.3	34.0	35.7	34.0	26.4	29.6	16.9	26.2	28.6
4 人	21.8	23.8	30.6	24.4	17.5	18.4	7.8	14.1	7.7	9.2	9.7	12.9	7.9	8.0	7.9	4.6	5.6	7.9	4.7	6.6
5・人以上	27.4	23.0	11.5	10.5	11.2	8.6	7.2	5.3	0.9	3.5	0.8	2.1	2.6	2.5	2.6	0.9	0.5	5.6	0.9	1.1

〈表7〉 年次別大学合格状況 ( )内卒業生

大学＼入試年度＼入学期	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
東京大	8	16(2)	12(3)	19(6)	23(8)	20(6)	14(1)	25(4)	20(3)	21(7)	入試ナシ	34(12)	33(10)	31(2)	276(64)
京都大	5	8(5)	5(1)	4(2)	10(2)	18(3)	11(3)	19(5)	24(5)	17(7)	20(4)	23(9)	22(7)	11(3)	197(56)
大阪大	2	2	0	6(1)	9(1)	10(2)	10(3)	19(3)	22(5)	17(5)	16(7)	13(3)	30(6)	23(3)	179(39)
一橋大	1	2	0	2(1)	3(2)	2	3(2)	3(2)	9(1)	4(1)	4(1)	4(1)	7(1)	7(1)	51(13)
名古屋大	0	0	0	2(1)	6(1)	1	3(1)	3	4(1)	9(2)	4(2)	7(1)	7(5)	2	48(14)
神戸大	1	2	4	0	7(2)	8(1)	2(1)	5(1)	5(1)	4(1)	4(2)	8(3)	6(1)	2	58(13)
岡山大	1	1	3(2)	0	7(1)	5(1)	2	5	2	2(2)	3(2)	3	6(1)	3(1)	43(10)
広島大	1	0	1	0	2	1	0	3	2(1)	8(1)	9(5)	4	11(4)	10(4)	52(15)
九州大	1	1	0	0	6(2)	3	1	3(2)	1	5(1)	0	3(2)	2(2)	2(2)	28(11)
東北大	0	2	1	2(1)	3	5(1)	3(2)	3(1)	4(1)	1	2(1)	4(1)	7(2)	2(1)	39(11)
長崎大	0	0	2	1(1)	2(2)	0	0	2	1	2	1(1)	4(2)	1	4(2)	20(8)
その他	3	3	5(1)	1(1)	4(1)	2(1)	8(1)	8(1)	5(2)	12(2)	7(1)	8(4)	16(3)	16(8)	98(26)
国立一期校計	23	37(7)	33(7)	37(14)	82(22)	75(15)	57(14)	98(19)	99(20)	102(29)	70(26)	115(38)	148(42)	113(27)	1,089(280)
国立二期校計	13	16(3)	16(10)	20(5)	36(8)	17(1)	29(10)	31(12)	32(7)	39(15)	45(17)	35(17)	36(15)	21(7)	386(127)
公立校計	5	12(5)	7(3)	15(6)	25(7)	17(9)	6(1)	12(7)	11(6)	14(6)	9(7)	10(6)	8(3)	4(3)	155(69)
国公立校計	41	65(15)	56(20)	72(25)	143(37)	109(25)	92(25)	141(38)	142(33)	155(50)	124(50)	160(61)	192(60)	138(37)	1,630(476)
早大	6	13(2)	11(7)	14(9)	24(14)	22(8)	20(7)	38(21)	30(16)	41(22)	41(27)	50(32)	64(36)	35(15)	409(216)
慶大	10	12(4)	15(4)	20(11)	33(18)	30(11)	27(16)	24(6)	20(12)	19(9)	19(12)	33(19)	25(13)	17(8)	304(144)
同志社大	0	6(4)	5(2)	1	10(1)	18(1)	12(1)	18(6)	30(6)	30(6)	36(18)	21(14)	40(28)	22(10)	249(97)
関学大	2	2	0	0	6	4(1)	1	12(4)	5(4)	5(4)	7(4)	13(3)	13(7)	6(0)	76(27)
立命大	0	1	1	1	3(1)	3	0	1	7(2)	7(2)	4(1)	6(5)	23(13)	15(12)	72(36)
中央大	6	10(1)	15(2)	5	0	0	6(2)	1(1)	2(1)	2(1)	9(4)	14(10)	11(5)	7(7)	88(34)
その他	34	37(8)	48(22)	43(14)	41(18)	32(10)	25(15)	27(11)	40(36)	78(40)	82(45)	92(54)	115(52)	102(57)	796(382)
私立校計	58	81(19)	95(37)	84(34)	117(52)	109(31)	91(41)	121(49)	134(77)	182(84)	198(111)	229(133)	291(154)	204(104)	1,994(933)

註 (1) 国立一期校のその他の中には北大・東京工大・千葉大・東京教育大・東京水産大・徳島大・熊本大などがある。

(2) 国立二期校では東京医歯大・横浜国立大・愛媛大・香川大・名工大・九工大・滋賀大・東京外大・大阪外大・山口大・鹿児島大などに進学している。

(3) 公立校では横浜市大・大阪市大・名古屋市大・京都府立医大・三重県立医大・和歌山県立医大・都立大・札幌医大・奈良県立医大などに進学している。

(4) ここに記すのは，合格者数であって入学者の実数ではない。１人で２つ以上の学校に合格した者もあり，合格しても進学しない者もある。

〈表8〉 年次別学部別進学状況

学部 / 卒業年度(期)	法 I(含文をむ)	経商 II(経営政経)	文 III(外社文をむ)	理 理II	工 理I工I理工	医 理III	歯	薬	農 獣医畜産	水産	教	美・芸	商船	その他 人工学 神学 海洋 術生	防大	卒業者数
33 (1)	20	31	11	8	22	11	2	1	3	1	1	2	0	0	5	123
34 (2)	19	37	9	6	36	9	0	0	2	0	0	1	0	0	1	124
35 (3)	17	40	9	6	22	12	2	1	2	4	0	0	0	0	3	119
36 (4)	21	25	3	3	37	18	1	1	4	1	2	0	1	0	3	123
37 (5)	16	26	9	8	60	24	2	2	0	0	3	1	1	0	6	160
38 (6)	22	41	9	14	48	20	2	1	0	0	1	0	1	1	3	164
39 (7)	19	33	9	11	50	29	2	1	2	0	3	0	0	0	2	166
40 (8)	22	33	12	9	51	31	2	2	1	1	3	1	0	0	0	172
41 (9)	36	51	16	8	58	33	1	2	1	1	5	0	0	0	2	221
42 (10)	23	47	12	15	61	42	5	2	9	0	5	1	0	1	1	228
43 (11)	20	46	9	10	67	38	3	2	3	2	3	0	0	1	1	236
44 (12)	29	40	10	18	65	24	6	1	4	2	3	2	0	1	2	236
45 (13)	20	27	16	12	67	18	1	0	3	3	0	0	0	2	0	227
46 (14)	17	30	7	9	41	16	4	1	3	3	1	0	0	4	0	223
計	301	507	141	137	685	325	33	17	37	18	30	8	3	10	29	2,522
%	11.9	20.1	5.6	5.4	27.2	12.9	1.3	0.7	1.5	0.7	1.2	0.3	0.1	0.4	1.1	90.4

〈表9〉 卒業生の就職状況（大学卒業後）

年度(期)		33 (1)	34 (2)	35 (3)	36 (4)	37 (5)	38 (6)	39 (7)	40 (8)	41 (9)	計	%
農業		1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0.1
鉱業・土木・建設		5	4	4	8	6	5	4	3	1	40	2.9
製造・工業		40	37	22	21	33	25	12	9	9	208	15.1
倉庫・運輸・交通		2	4	6	2	5	6	1	2	2	30	2.2
通信		7	6	4	2	4	3	4	2	0	32	2.3
ガス・水道・電気		1	0	3	1	2	2	1	1	1	12	0.9
金融・保険・証券		5	6	9	14	6	6	4	3	4	57	4.2
自営		10	8	6	10	1	3	3	3	1	45	3.3
商事・貿易・デパート		9	11	5	7	2	6	2	6	2	50	3.6
教員	大学	7	1	2	0	2	0	0	0	0	12	0.9
	高校	2	3	4	3	1	2	0	1	0	16	1.2
公務員	地方	3	2	3	1	2	3	2	0	0	16	1.2
	国家	5	4	5	4	8	1	0	2	0	29	2.1
医師		7	6	6	15	14	8	1			57	4.2
その他		3	5	4	4	4	5	1	2	1	29	2.1
不明		16	26	36	31	70	89	131	138	200	738	53.8
計		123	124	119	123	160	164	166	172	221	1,373	100.0

〈表10〉 年次別分類別購入図書（単位・冊）

年度 \ 分類	0 総記	1 哲学宗教	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学	計
28	5	37	39	10	117	4	6	6	41	42	307
29	4	86	7	6	41	1	0	4	8	73	230
30	12	106	103	66	279	17	10	77	94	528	1,292
31	22	151	156	74	296	25	7	23	64	417	1,235
32	122	33	164	42	174	8	7	8	21	152	731
33	78	117	285	131	291	26	3	35	226	474	1,666
34	59	157	213	97	192	7	1	31	74	325	1,156
35	73	194	208	240	236	24	26	50	134	375	1,560
36	31	50	94	78	56	5	0	42	45	141	542
37	35	205	176	79	219	18	12	72	26	159	1,001
38	50	295	196	91	114	36	5	28	43	129	987
39	33	410	118	77	155	9	6	40	29	139	1,016
40	30	263	157	65	201	4	3	56	28	133	940
41	81	391	210	116	152	4	0	40	16	367	1,377
42	249	253	188	208	138	3	4	48	26	242	1,359
43	131	284	154	200	128	7	1	60	28	221	1,214
44	274	151	189	136	203	7	2	68	49	292	1,371
45	76	78	133	78	133	18	2	47	17	115	697
46	109	98	94	86	115	2	3	29	5	80	621
合計	1,474	3,359	2,884	1,880	3,240	225	98	764	974	4,404	19,302
比率	7.6	17.4	14.9	9.7	16.8	1.2	0.5	4.0	5.1	22.8	100

（S.47.6.6. 調べ）

〈表11〉　年次別分類別貸出図書冊数

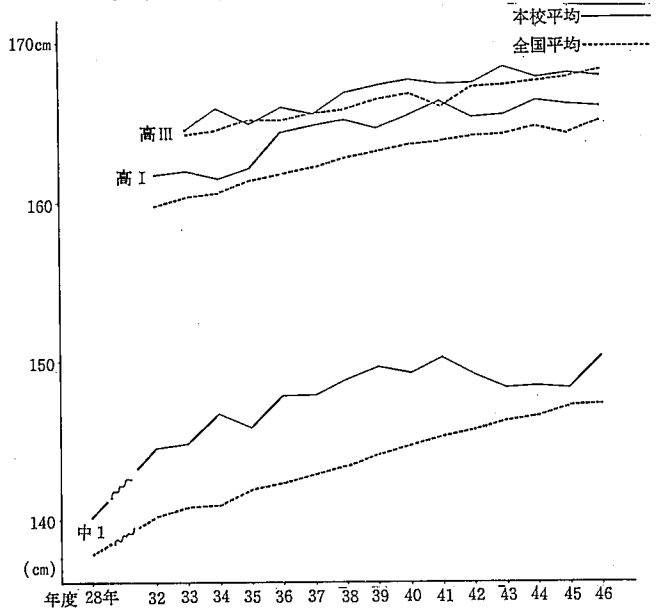
中学の部　　（　）内%

年度＼分類	0 総記	1 哲学宗教	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学
33年	50 (0.9)	223 (4.1)	493 (9.0)	121 (2.2)	756 (13.8)	107 (2.0)	7 (0.1)	74 (1.4)	91 (1.7)	3,555 (64.9)
34年	31 (0.5)	419 (6.4)	742 (11.4)	118 (1.8)	1,136 (17.5)	86 (1.3)	0 (0)	57 (0.9)	51 (0.8)	3,861 (59.4)
36年	213 (2.9)	350 (4.8)	1,310 (17.9)	333 (4.6)	1,526 (20.9)	84 (1.1)	12 (0.2)	56 (0.8)	89 (1.2)	3,342 (45.7)
37年	237 (3.1)	584 (7.6)	1,379 (18.0)	359 (4.7)	1,461 (19.1)	87 (1.1)	21 (0.2)	90 (1.2)	89 (1.2)	3,354 (43.8)
38年	296 (4.1)	496 (6.9)	1,066 (14.9)	263 (3.7)	1,069 (14.9)	55 (1.0)	19 (0.3)	127 (1.8)	129 (1.8)	3,643 (50.9)
39年	249 (4.7)	286 (5.3)	649 (12.1)	310 (5.8)	1,117 (20.9)	51 (1.0)	22 (0.4)	112 (2.1)	93 (1.7)	2,458 (46.0)
40年	174 (3.0)	352 (6.1)	639 (11.0)	270 (4.6)	1,108 (19.1)	90 (1.5)	10 (0.2)	158 (2.7)	94 (1.6)	2,920 (50.2)
41年	180 (3.5)	245 (4.7)	576 (11.0)	158 (3.0)	1,179 (22.6)	41 (0.1)	12 (0.2)	105 (2.0)	122 (2.3)	2,595 (49.8)
42年	277 (6.1)	243 (5.4)	490 (10.8)	243 (5.4)	1,130 (24.9)	24 (0.5)	27 (0.6)	131 (2.9)	67 (1.5)	1,897 (41.9)
43年	337 (6.6)	366 (7.2)	508 (10.0)	411 (8.1)	1,273 (24.4)	33 (0.7)	17 (0.3)	105 (2.1)	90 (1.8)	1,969 (38.8)
44年	166 (5.2)	76 (2.4)	435 (13.7)	122 (3.8)	691 (21.8)	37 (1.2)	15 (0.5)	73 (2.3)	94 (3.0)	1,467 (46.2)
45年	94 (2.9)	58 (1.8)	366 (11.4)	122 (3.8)	717 (22.4)	73 (2.3)	11 (0.3)	58 (1.8)	32 (1.0)	1,668 (52.0)
46年	120 (4.7)	57 (2.2)	281 (11.0)	82 (3.2)	593 (23.2)	55 (2.2)	5 (0.2)	55 (2.2)	22 (0.9)	1,279 (50.2)

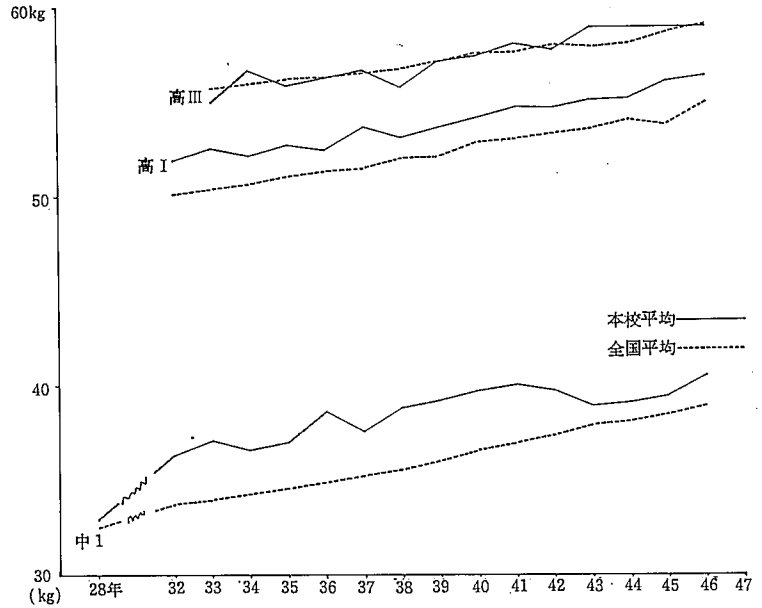
高校の部

年度＼分類	0 総記	1 哲学宗教	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学
33年	67 (1.4)	395 (8.4)	910 (19.2)	198 (4.2)	312 (6.6)	47 (1.0)	20 (0.4)	119 (2.5)	133 (2.8)	2,531 (53.5)
34年	108 (3.5)	321 (10.3)	816 (26.1)	147 (4.7)	320 (10.2)	49 (1.6)	5 (0.2)	84 (2.7)	109 (3.5)	1,169 (37.4)
36年	133 (3.3)	355 (8.8)	736 (18.2)	263 (6.5)	575 (14.2)	20 (0.5)	3 (0.1)	76 (1.9)	70 (1.7)	1,818 (44.9)
37年	102 (3.0)	239 (7.0)	640 (18.6)	142 (4.1)	634 (18.4)	32 (0.9)	12 (0.3)	44 (1.3)	54 (1.6)	1,539 (44.8)
38年	132 (4.2)	231 (7.4)	463 (14.9)	118 (3.8)	473 (15.2)	35 (1.1)	15 (0.5)	69 (2.2)	55 (1.8)	1,520 (48.9)
39年	98 (2.8)	292 (8.3)	726 (20.8)	219 (6.3)	649 (18.6)	40 (1.1)	6 (0.2)	71 (2.0)	109 (3.1)	1,280 (36.7)
40年	122 (2.9)	496 (11.8)	751 (17.9)	245 (5.8)	778 (18.5)	44 (1.0)	5 (0.1)	122 (2.9)	60 (1.4)	1,576 (37.5)
41年	81 (0.3)	382 (15.6)	422 (17.2)	154 (6.3)	358 (14.6)	13 (0.05)	2 (0.01)	59 (2.4)	49 (2.0)	935 (38.1)
42年	151 (6.7)	365 (16.3)	353 (15.8)	139 (6.2)	241 (10.8)	12 (0.5)	4 (0.2)	48 (2.1)	36 (1.6)	892 (39.8)
43年	185 (6.6)	285 (10.2)	422 (15.1)	220 (7.9)	390 (13.9)	11 (0.4)	5 (0.2)	87 (3.1)	40 (1.4)	1,152 (41.2)
44年	224 (6.4)	355 (10.1)	525 (14.9)	318 (9.0)	537 (15.3)	38 (1.1)	10 (0.3)	111 (3.2)	84 (2.4)	1,319 (37.5)
45年	236 (7.2)	285 (8.7)	606 (18.4)	177 (5.3)	407 (12.4)	24 (0.7)	11 (0.3)	80 (2.4)	45 (1.4)	1,412 (43.0)
46年	158 (7.7)	255 (12.4)	416 (20.2)	130 (6.3)	398 (19.4)	30 (1.5)	3 (0.1)	56 (2.7)	39 (1.9)	565 (27.6)

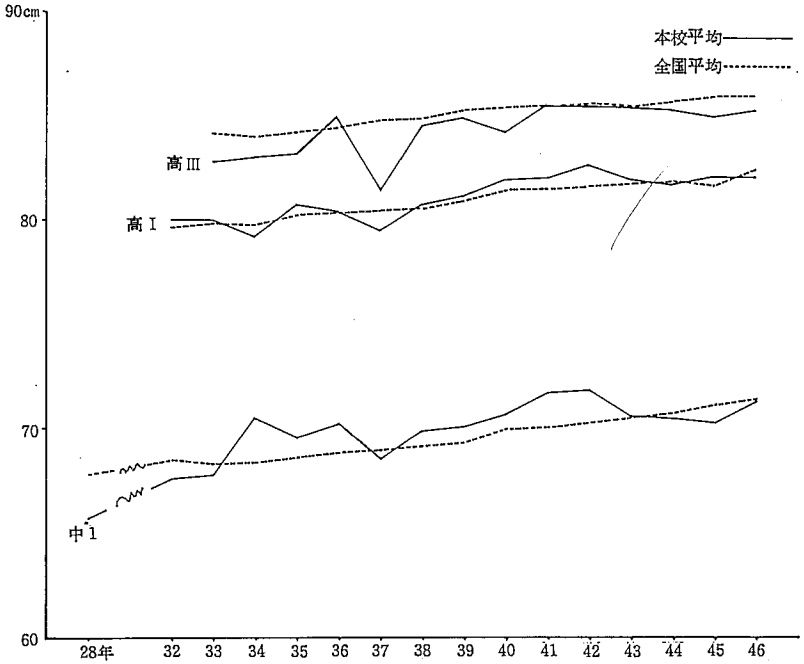
〈グラフ1〉中学1年・高校Ⅰ・Ⅲ年生の身長（学年平均）



〈グラフ2〉同　体　重



〈グラフ3〉同　胸　囲



愛光学園略年表〔昭和二六（一九五一）年～昭和四六（一九七一）年〕

昭和二六（一九五一）年度

5・12四国ドミニコ会会長ビセンテ・ゴンザレス師、スペインのアヴィラ修道院において、ドミニコ会マニラ管区長サンチョ・シルヴェストル師と会談、同会において日本に中等教育機関を設立することを提案。11月末ビセンテ師帰国、松山カトリック教会（松山市三番町）において、同教会司祭団と学校設立の具体案を協議。12月ビセンテ師、松山商科大学田中忠夫教授に、男子校設立について、具体案作成を依頼。ドミニコ会四国管区の中心地として、学校設立の地を愛媛県松山市に決定。私立城西女子高等学校田村清寿理事長、同校移譲を内諾。2・17サンチョ管区長来松、松山カトリック教会より、学校設立の大綱を提出。3・14ドミニコ会マニラ管区会議において、正式に学校設立を決定。

昭和二七（一九五二）年度

8月田中忠夫教授、学校設立の具体的構想のために、東京の暁星学院・横須賀の栄光学園・名古屋の南山中・高等学校・京都の洛星中・高等学校・神戸の灘中・高等学校・高知の土佐中・高等学校視察。11・12金井大介事務職員就任、執務開始。11・17城西女子高校を男子校に改革し、校長に田中忠夫教授を起用することを正式に公表（松山商科大学教授併任のまま）。12・8生徒募集に関する小学校連絡協議会開催（三七校四六名・報道関係者三名参加）。12・25河井豊教諭正式に就任2・1城西学園（法人）を愛光学園（法人）に名義変更。正岡二一教諭就任。2・18第一回入学試験に関する職員会開催。2・21～22第一回入学試験実施（応募者二二二名）。2・25同合格者発表（一一一名）。3・2愛光中学校設立認可。3・15第一回入学生父兄会総会開催（一一七名出席・四名欠席、ただし両親の出席を含む）、「父兄会規約」決定。

昭和二八（一九五三）年度

4・1開校式・入学式挙行（中学一年二学級）。4・2授業開始。

この時のスタッフは、教諭六名・講師四名・事務職員二名、その内訳はつぎの通りである。

教諭＝正岡二一（教頭・国語・社会）・河井豊（理科）・松野五郎（数学）・天野明子・サルバドル＝ルイス（英語）
オナルド＝マリン（社会倫理）
講師＝渡部徹（美術）・岩本猛（体育―兼任）・志摩智恵子（音楽―兼任）・沢田大暁（書道―兼任）
事務職員＝金井大介・中村鈴子

4・9影浦稚桃氏（郷土史家）「薄墨桜」などについて講話。4・14遠足実施（温泉郡伊台村〈現在・松山市〉より太山寺へ）5・11～12学級別父兄会において、父兄会委員を選出し、学区編成決定。5・16ドミニコ会マニラよりサンチョ管区長巡視のため来校。歓迎のためスポーツ大会実施。5・13第一回父兄会委員会開催、会長に金井滋雄氏を、監査委員に佐伯源、大北音松各氏を選出。7・30～8・1温泉郡野忽那島において海浜キャンプ実施。8・10～15第一期夏季補講（午前中）実施。8・24～29第二期夏季補講（同前）実施。9・1第二学期始業式、正副級長任命。野本忠則教諭（体育）就任。10・4第五回高松宮杯全国中学英語弁論大会愛媛県大会において、中学三年生に伍して一年生光藤英彦三位に入賞。11・1～3正岡教頭以下四名、土佐中・高校視察。11・7昭和二九年度生徒募集に関する小学校長招待会開催（松山市二番町友愛会館において）。11・13学校記念祭実施、モデスト師講演（「聖トマスの話」）。雨のため、スポーツ大会は翌日実施。11・20大沢章九州大学法学部教授講演（「真の幸福について」）。1・24～26父兄会委員（大北・徳本・本田各氏）、土佐中・高等学校訪問、同校校長・父兄委員と、父兄会運営について懇談。1・27校内英語弁論大会実施、父兄有志、仕舞・コーラス等に賛助出演。2・27～28第二回入学試験実施（応募者一九七名）3・5同合格者発表（一二〇名）。3・20城西女子高等学校卒業式。

昭和二九（一九五四）年度

4・1第二回入学式挙行　父兄会総会開催、「愛光学園父母の会」と改称（規約改正）。門屋方典（国語）・藤井孝夫（社会）・白石一夫（英語）教諭就任。4・10遠足実施（温泉郡伊台村・湯山をへて帰校）。5・4ドミニコ会サンチョ管区長来校、歓迎スポーツ大会開催。5・20畑克忠日赤眼科医長、衛生講話（「視力と眼について」）。6・5正岡・門屋教諭、海浜キャンプ候補地として、松山市興居島視察。7・26～30中学一・二年希望者に海浜キャンプ実施（松山市興居島、父母有志参加）。8・5～11第一回夏季授業実施（英語・数学・国語）。8・19～25同第二回。8・12～18第一回夏季英語特別講座実施（講師＝大野武之助松山商科大学教授）。8・26～28同第二回。9・9職員会議において、生徒の運動クラブの対外試合を許可しないことに決定。9・24高松宮来校（午前九時十分）、生徒の作品（書および絵画）・

全校体操・講堂における英語劇ご鑑賞。十一時二十分ご退出。その間、講堂において久松県知事より激励の辞。10・24第二回運動会実施。10・25～11・1東京班学校視察（白石・ルイス各教諭、大北・中西・渡部各父母会委員―栄光学園・日比谷高校・新宿高校・東京教育大付属高校・成蹊高校）。11・27～30神戸班学校視察（正岡・門屋各教諭、大野・武智・吉田・泉田各父母会委員）。○この月、藤井啓三郎（中学二年）、「全国学生油絵展」に入選。11・15この日より中間体操において、駆足を実施（以後継続）。11・16学園教員住宅（松山市朝美町二丁目）上棟式挙行（二戸建一棟）。11・21松野教諭ほか四名、六甲学園（神戸市）視察のため出発。この年より、十一月末を以て第二学期の終了とする。12・11～12金井父母会長、土佐高校視察。12・15父母会有志十六名による座布団作り作業（この月完成）。12・26クリスマス祝会開催（英語劇・狂言・合唱など城西校女子生と共演・父母約一五〇名参会）。1・8山田貞夫用務員就任（前大工職）。2・13昭和三〇年度中学二・三年編入試験実施（応募者十八名）。2・15同第一次合格者発表。2・20同第二次試験実施。第一次第二次計二年生四名・三年生五名合格。2・26～27第三回入学試験実施（応募者二一九名・出願校八三校、四国以外では大阪・岡山・広島・大分の一府三県を含む。父母会委員八名・生徒十名・入試雑務に協力）。3・4合格者発表（一二〇名）。3・8城西女子高等学校卒業式（この卒業式で、同校は最後の卒業生を送り出し、これより愛光生のみとなる。）

昭和三〇（一九五五）年度

4・1第三回入学式挙行。午後、父母会総会（昭和三〇年度行事計画、同父母会予算など審議、金井滋雄会長辞任、新会長に中西直幹氏就任）。砂田任叙（国語）・望月迪昭（理科）・榎本富士夫（英語）教諭就任。4・16新入生歓迎スポーツ大会実施。5・21ドミニコ会総長来校。午後、歓迎運動会実施。5・4ロゲンドルフ上智大学教授講演。5・5松山女子商業高校におけるドミニコ会四国伝道五〇周年記念ミサ及び記念行事に、教職員・生徒全員と父母有志参加。5・19遠足実施（鹿島・高縄山方面）。5・21田中耕太郎最高裁判所長官講演（「日本国憲法について」）。5・23門屋教諭、来年度高校編入生募集のため、八幡浜地区在校生父母と懇談、中学校巡回訪問。5・29田中校長、八幡浜・長浜・大洲各地の中学校巡回訪問、八幡浜地区在校生父母と懇談。6・5～6田中校長、今治地区中学校巡回訪問、今治地区在校生父母と懇談。6・18～19河井・砂田教諭、海浜キャンプ候補地として、温泉郡野忽那島視察。7・3建築委員会開催（中西父母会長・古川・桑原・三好・滝沢各父母会委員及び正岡教頭・門屋・河井・望月各教諭出席）。7・4愛光高等学校設立認可。7・21～23中学三年生希望者、大川嶺キャンプ実施（門屋・野本教諭引率）。7・27～8・3来年度の高校編入志願者の

ための第一回夏季講座実施（国語・英語・数学――参加者四八名）（8・12～17、第二回）。7・30～8・3中学一年生、海浜キャンプ（野忽那島）実施。8・5～11在校生のための第一回夏季授業実施（午前中）。8・18～27同第二回実施（土佐高校片岡教諭〈国語〉特別出講）。8・8白井儀十郎氏（ニューギニア遺骨収集団長）講演。8・22ドミニコ会マニラ管区長来校、講堂において歓迎会開催。8・23神田県病院眼科医長講演（「眼の衛生」）。9・2第一期校舎建築工事着工（三階建延三九五坪――化学・生物教室・実験室など）。○この月、井上正義（中学三年）、二科会ジュニア展に特選入賞、ほか四名入賞。10・3父母会服装委員会開催（父母会委員十名・教員三名――来年度よりの高校生に、黒フロシキを採用することを決定）。10・11安倍能成学習院大学学長講演。10・16高松宮杯中学英語弁論大会愛媛大会において、高岡紀彦（中学三年）第一位に入賞。10・22第一期工事定礎式挙行（ビセンテ神父司式）。10・23第三回運動会実施。11・1泉田一郎教諭（数学）就任。11・12高岡紀彦、前記全国大会（東京）において予選通過。11・12～20父母会委員（金井・藤川・森）とマリン神父・松野教諭・東京視察（栄光学園・麻布・日比谷両高校・駿台予備校）。11・14聖トマス祝日のため、鈴木習之松山女子商業高校教諭講演（「聖トマスについて」）。11・27～30父母会委員（中西・鴻農・木原・村上）と今村・泉田・藤井・砂田各教諭、阪神視察（灘中・高等学校・六甲学院）。12・1門脇司教講演。12・2ビセンテ理事長一時帰国のため、マルシアノ神父代理就任。12・14クリスマス祝会開催。1・16職員会において、高校文理科コース設定を決定。1・21中学三年生臨時父母会において上記説明。2・10三橋喜久雄体育研究所長来校、全校生徒指導、午後、本校生徒を用い、松山市・温泉郡・伊予郡の体育教員に指導講習（県民館において）。2・11～12中学・高校編入試験実施。2・14同合格者発表（中学二年五名・同三年四名・高校三三名）。2・25～26第四回入学試験実施（二六九名）。2・28同合格発表（一三一名）。3・13職員会において、高校生の映画観覧は自由にすることに決定。3・29第一回中学部卒業式挙行。3・25父母会松山市周辺有志、座布団三〇〇枚綿入れ作業。

○この月、松野五郎教諭（数学）辞任。

昭和三一（一九五六）年度

4・2第四回入学式挙行。光藤芳夫・望月勇（数学）・佐藤利啓・藤原保（英語）・今村章（理科）・村上みゆき（養護）教諭、および和田幸子事務職員就任（4・1付）。午後、父母総会開催（規約改正により副会長・常任委員をおく）。○この月、榎本富士男教諭（英語）辞任。5・7新校舎落成祝別式（教皇使節フルステンベルグ枢機卿司式）・同祝賀会（知事・松山市長代理・田口司教・田中神父他ドミニコ会神父および教職員・父母会委員参加）。5・19入試に関する小学校連絡協議会開催（三六校四八名参加）。5

・20全校生徒・父母会有志宮島小旅行実施。5・24高校編入志願者入試説明会開催（二六名参加）。5・26中学入学志願者入試説明会開催（一四〇名参加）。7・27～8・3来年度の高校編入志願者のための第一回夏季講座実施（国語・数学・英語、四九名参加）（8・12～18同第二回）。7・27～29父母会地区別懇談会実施（西条・今治・宇和島・八幡浜）。8・29～9・5木造校舎補強工事施工。（この夏休みより夏季授業中止）。9・8トマス寮敷地、農地転用許可。9・20「臨時家庭連絡」を配布し、転校・進級について学校側の態度を表明。9・23高松宮杯中学英語弁論大会愛媛県大会において、中三生窪田良二・同大野三郎、一位・三位入賞。10・3サンチョ管区長視察。歓迎クラスマッチ実施（柔道・相撲・バスケットボール）。10・21第四回運動会開催。11・13聖トマス記念文化祭実施。プリオット・トマス学院長講演（「勉強態度に関する聖トマスの手紙について」）及び合唱と英語劇開催。11・16高松宮杯全国中学英語弁論大会（東京）に於て、大野三郎、十位入賞。12・15校内マラソン実施（学校――祝谷――吉藤――学校）。12・23クリスマス祝会開催。11・26～27中学二・三年・高校一年編入試験実施。1・28職員会において、新年度高I生の能力別学級編成検討。1・29同編入試験合格者発表（中学二年七名・中学三年八名・高校一年十八名）。2・9～10第五回入学試験実施（応募者二五七名）。2・11同合格者発表（一四二名）。3・25第二回中学部卒業式挙行。

昭和三二（一九五七）年度

4・1第五回入学式挙行。武内卓也（国語）・家安幸男（数学）・島津豊幸（社会）・安藤和博・一宮一男（理科）教諭、川井トシ子・渡部敏子事務職員就任。4・9職員会において、高II生の夏期休暇中集団予備校講習参加計画検討。5・1ビセンテ理事長辞任、マルシアノ神父理長就任。5・15遠足実施。6・15高II生夏期予備校講習参加に関する教員分担および諸計画決定。7・6高II生臨時父母会（夏期予備校講習参加について）。7・19高II生城西予備校班出発。7・22同駿台予備校班・水道橋予備校班出発。7・29藤原教諭（英語）、フルブライト留学生として米国に向け出発。8・1一宮一男教諭辞任。8・21第二期校舎建築工事着工（本館四階鉄筋）。（このため、この年の運動会は中止）。8・25高II生予備校講習参加者全員帰松。9・6職員会において、新聞部を承認（顧問＝武田・ルイス両師、門屋・島津教諭、部長＝高II安永弘紀、部員四十三名）。9・12職員会において、「学校法人愛光学園寄付行為」第二十条に基づく評議員六名を互選（正岡教頭・門屋・河井・天野・白石教諭、金井事務職員当選）。9・23高松宮杯中学英語弁論大会愛媛県大会において、中三生堀田好夫三位入賞。11・9全校マラソン実施（校門→祝谷→吉藤→山越→校庭）。11・11「愛光新聞」創刊号発行。11・30サンチョ管区長、巡視のため来校、講堂において訓話。12・7～8昭和三三年度高校編入試験実施（合格者十

一名）。12・14臨時父母会総会開催（人事院勧告にともなう教職員給料増額のための授業料二〇〇円増額案承認）。12・22クリスマス祝会開催。12・25～26高II生、城西予備校主催全国模擬試験（国・数・英）受験（校外模試の最初）。1・25岡部豊（旧姓乗松）図書館司書就任。2・8～9第六回入学試験および昭和三三年度中学二・三年編入試験実施（応募者＝中学一年一九一名）。2・11同合格者発表（中学一年一四一名、中学二年六名、中学三年三名）。2・28職員会において、新年度高I・II生の能力別学級編成基準決定。3・19第三回中学部卒業式挙行。3・22新校舎落成、職員室・事務室移転。○この月、藤井孝夫（社会）・佐藤利啓（英語）・光藤芳男（数学）教諭辞任。

昭和三三（一九五八）年度

4・1第六回入学式挙行。酒井和林（社会）・名村忠雄（理科→数学）・大島謙介（数学）・谷後道行（英語）教諭就任。○この月、マリン神父（社会倫理）・山田貞夫用務員辞任、加藤栄用務員就任。4・30生徒図書委員会発足（委員長高II生蓮井有一）。5・10父母の会総会開催（この年度より、五月に開くこととする）。6・9田口芳五郎司教来校、講堂において講演。6・30図書館報「ビブリオ」創刊号発行。7・22渡部松山東署刑事部長、高校部父母会において防犯講演。7・22同、中学部父母会において講演。7・25～8・2高II生以下、第一回夏期補習実施（国語・数学・英語）。8・18～27同第二回実施。9・13～14小出哲夫師（エリザベト音楽大教授）、全校生徒・保護者に宗教講演。9・23高松宮杯中学英語弁論大会愛媛県大会において、中三生八木功治第四位に入賞。9・26職員会において、生徒会創立指導委員（教員側）を任命。○この月、生徒会設立準備委員会（生徒側）結成。10・28第六回運動会実施。11・13全校マラソン実施（松山市古町阿沼美神社境内出発、コースは前年と同じ）。11・15旺文社主催全国大学入試模擬試験に高III生全員、高II生希望者参加（旺文社模試参加の最初）。12・13高III生授業終了（自宅における大学入試準備に入る）。12・15～23高III生希望者に対する特別授業（社会・理科）実施。12・19ミカエル・ブラウン総長（ドミニコ会）来校、講堂において歓迎式および同師講演。12・21クリマス祝会および高III生送別予餞会実施。1・5～2・5高III生希望者に対する特別授業（国語・数学・理科）実施。1・8昭和三四年度中学二・三年および高校編入試験実施。1・9同合格者発表（中学二年一名、同三年三名・高校六名）。2・7～8第七回入学試験実施（応募者二五七名）。2・9同合格者発表（一四〇名）。2・12職員会において、「生徒会規則」（案）を一部修正して承認。2・14第一回高校部卒業式挙行（卒業生一二三名）、続いて同窓会結成式挙行。卒業生・教職員の会食実施。3・20第四回中学部卒業式挙行。2・28生徒会会長・副会長選挙実施、（会長高II生大野直・副会長高I生栗川善二郎当選）。○この月、渡部徹（美術）・玉本緑（音楽）講師辞任。

昭和三四（一九五九）年度

4・1第七回入学式挙行。　新田三千典（社会）・蔵田五十憲（音楽）教諭・田代博（美術）講師就任。4・22職員会において、昭和三五年度中学入試科目に、理科を加えること、および高校一学級増設にともなう編入試験科目を、国語・社会・数学・理科・英語の五科目に決定。4・27サンチョ管区長視察のため来校、講堂においてメッセージ。5・9父母の会総会開催。6・5～6高校部小豆島修学旅行実施（生徒四〇三名・職員二三名参加）。この間、6日に中学部遠足実施（一年太山寺・二年鹿島・三年岩堰）。6・11松居桃楼氏講演（「蟻の町のマリア」）。6・31同窓会準備委員会開催。7・16高II高III生と卒業生の進学についての懇談会開催。7・20第一回同窓会開催（講堂）。7・24～8・1前期夏季補習実施。7・31望月勇教諭（数学）辞任。8・11～14中学一年、海浜キャンプ実施。（興居島中学）。8・20～29後期夏季補習実施。9・1**新校舎第三期建築工事開始**（鉄筋三階―物理教室・図書館・普通教室など）。城築淳英教諭（数学）就任。9・14生徒会会長・副会長選挙実施（会長高II生野間隆・副会長栗川善二郎（再）無当票当選）。9・19高松宮杯中学英語弁論大会愛媛県大会において、中三生宮崎貞第一位に入賞。9・27第七回運動会実施（始めて生徒会企画運営に参加）。11・7全校マラソン実施（コースは昨年どおり）。12・3高II・III生、駿台予備校模試受験（同模試参加の最初）。12・23クリスマス祝会および高III生送別予餞会開催。1・23高III生授業終了。2・6～7昭和三五年度編入試験実施（応募者、高校九二名ほか）。2・8同合格者発表（高校一学級六〇名、中学三年五名、中学二年六名）。2・13～14第八回入学試験実施（応募者四四二名）。2・16同合格者発表（二〇一名――この年より三学級に増員）。2・18第二回高校部卒業式挙行（卒業生一二四名）。2・29職員会において、昭和三六年度より、中学編入生の募集を中止することを決定（ただし、一家転住の場合を除く）。3・4評議員増員にともなう選挙実施（今村・武内教諭当選）。3・7聖トマス像除幕式挙行。3・22第五回中学部卒業式挙行。○この月、城築淳英教諭（数学）辞任。

昭和三五（一九六〇）年度

4・1第八回入学式挙行。村上禎治（国語）・中村正雄（数学）・小林光男（理科）・長島宏（英語）・竹本友賢（体育）教諭、松長稔事務職員就任。○この月、新校舎第三期建築工事落成（物理教室・図書館・普通教室5室・体育準備室完成）。5・7父母会総会開催（中西直幹会長辞任。藤川郁三副会長、会長代理、後、会長就任。）。5・25～27中三生修学旅行

実施（香川県小豆島）。5・28全校遠足実施（中学一・二年昨年通り、高I生大谷池・高II生皿ヶ嶺・高III生別子ライン。中三生休校）。6・17職員会において、学校安全会加入を決定。6・27生徒会会長・副会長選挙実施（会長高I生冨永靖徳・副会長同宮崎貞当選）。7・18～19石鎚登山実施（生徒一八名参加）。7・25～31高I生理科実験実施。7・28～8・3中一生野忽那海浜キャンプ実施（二〇〇名参加）。9・16松居桃楼氏講演（「蟻の町のマリア」）。9・25第八回運動会実施。11・5全校マラソン実施（コースは例年どおり）。12・24クリスマス祝会および高III生送別予餞会開催。1・16安倍能成学習院大学学長文化講演。1・28高III生授業終了。2・4～5昭和三六年度高校編入試験実施（応募者七七名）。2・6同合格者発表（五八名）。2・11～12第九回入学試験実施（応募者四二八名）。2・13同合格者発表（一九八名）。2・18第三回高校部卒業式挙行（卒業生一一九名）。2・23職員会において、主任補佐の新設を決定（各学年二名ずつ）。3・1～4流感のため、中一・三生学級閉鎖。3・21職員会において、新入生に対する表札の廃止を決定。3・22第六回中学部卒業式挙行。○この月、天野明子教諭（英語）・渡辺律子事務職員辞任。

昭和三六（一九六一）年度

4・1第九回入学式挙行。日比野正信（国語）・中村一省（社会）・安藤敬三（数学）・沢田衛（数学）・堀本邦雄（理科）・丸山恒（理科）・加藤登（英語）・高須金作（英語）教諭、ヴァリエス神父（社会倫理）就任。5・8父母会総会開催。（藤川郁三会長辞任、白石定義会長就任）。5・15職員会において、カウンセラー設置決定（ヴァリエス神父担当）。5・27遠足実施（乗物を利用しないことを原則として、各学年毎に行先決定）。6・4～7正岡教頭・中村（正）・白石教諭・ヴァリエス・ルイス両神父、鹿児島ラ・サール中学高等学校視察。6・5田口芳五郎司教、中間試験終了後、中学部に講演。6・12三橋喜久雄体育研究所長、全校生徒に体育実技指導。6・22天野教諭辞任とにもなう評議員補欠選挙実施（家安教諭当選）。6・26生徒会会長・副会長選挙実施（会長高II生久枝普三・副会長同田中光雄当選）。8・31久枝会長転出のため、田中副会長昇格）。7・25～27中学三年修学旅行実施（門司市より関門トンネルをへて秋芳洞へ）。7・28～31中一生夏季海岸キャンプ実施（温泉郡中島町怒和島）。10・1第九回運動会実施。10・16沢田衛教諭（数学）辞任。10・26文部省全国中学学力調査実施。（中学一・二年、国語・社会・数学・理科・英語）。10・28～29武内・島津・家安・今村・白石教諭、上記テスト採点のため県庁に出向。10・31全校マラソン実施。11・7～11伊予市における集団赤痢発生のため、泉田教諭および生徒三七名登校停止。11・16生徒会会長副会長選挙実施（会長高I生向井東彦・副会長同石丸修当選。今回より任期を高II生の10月までとする）。12・18伊東博横浜国立大学教育学部教授、「カウンセリングについて」

父母会希望者・教職員に講話。12・23卒業生予餞会開催（この年、講堂の関係でクリスマス祝会取止め）。2・5桑原九州大学教授講演（「科学と宗教」）。2・10～11第十回入学試験・高校編入試験実施（応募者中学四〇七名・高校八九名）。2・12同合格発表（中学二〇一名・高校六〇名）。2・17第四回高校部卒業式挙行（卒業生一二三名）。2・25講堂改修工事着工（モルタル仕上）。3・22第七回中学部卒業式挙行。○この月、安藤和博教諭（理科）辞任。

昭和三七（一九六二）年度

4・2第十回入学式挙行。岡部迪彦（社会）・岡田重夫（数学）・平岡光雄（理科）教諭就任。4・9教皇使節ドミニコ・エンリッチ大司教、視察のため来校、高校生に講話。4・10教皇使節より賜った特別休暇。5・17職員会において、全校生徒のアンケート結果により、生徒会の中・高分離決定。5・22生徒会長副会長選挙実施（中・高分離第一回）、（中学部＝会長中二生岡田浩治・副会長同山内元、高校部＝会長高II生渡辺道・副会長同米田吉之当選）。5・23ドミニコ会マニラ管区長視察のため来校、歓迎式挙行。5・29～31門屋・白石・今村・家安教諭、東京・長野方面学校視察。7・5職員会において、創立十周年記念行事計画決定。7・11～12中二・三生、文部省全国中学学力調査実施（科目は前年に同じ）。7・26～28中学三年修学旅行実施（秋芳台―青海島―萩市へ）。7・27～30中学一年海浜キャンプ実施（前年に同じ）。9・1武田義雄神父辞任。竹島幸一神父（社会倫理）就任。9・22全校遠足実施。10・26佐々木鉄治神父（カトリック海外移住団長）講演（南米移民の事情について）。10・27全校マラソン実施（コース前年通り）。10・31創立十周年記念音楽会開催（エリザベト音楽大学合唱団出演・松山女子商業高等学校講堂において）。11・1創立十周年記念ミサ（ドミニコ会マニラ管区カスタニォン管区長代理司式）および式典挙行（式場にて校歌〈日比野正信作詞・安部幸明作曲〉発表、田中忠夫校長、ローマ教皇より教会教皇褒章受賞）。11・3教職員・父母の会・同窓会、創立記念懇親会開催。11・4創立十周年記念第十回運動会実施。（この間図書館において、カトリック展開催。同時に、創立十周年記念「キリシタン文庫」公開）。11・13創立十周年記念講演会開催（ロゲンドルフ上智大学教授「西欧の理解について」、竹島幸一神父「友情について」）。12・6職員会において、田中校長より、特別委員会の答審に基づき、来年度高I生より能力別学級編成を解消する旨発表。12・8創立記念十周年記念講演会（松居桃桜氏「蟻の町のマリア」）。12・23クリスマス祝会および卒業生予餞会開催。1・18高III生授業終了。2・9～10第十一回入学試験および高校編入試験実施（応募者、中学四二九名・高校七八名）。2・11同合格者発表（中学二〇一名・高校二四名）。2・16第五回高校部卒業式挙行（卒業生一六〇名）。3・22終業式挙行（中学部卒業式行われず）。○この月、丸山恒（理科）・高須金作（英語）教諭辞任。

昭和三八（一九六三）年度

4・1第十一回入学式挙行。田井貞良・松田洋教諭（理科）就任。4・9生徒会会長・副会長選挙実施（中学部＝会長中二生松本博法・副会長同宇都宮真、高校部＝会長高I生池内文雄・副会長同越智浩当選）。4・11職員会において、中学学生対象の給食ミルクの開始を決定。6・3松田洋教諭（理科）就任。6・3カタリナ女子高等学校における故ヨハネス二十三世教皇の追悼ミサに各クラス代表生徒および教職員参列。6・11故ローマ教皇に関する講演。6・26～27中二・三生、文部省全国学力検査実施（科目は前年に同じ）。6・30長谷部寿郎教諭（英語）着任。7・27～30中一生海浜キャンプ実施（温泉郡中島町津和地）。7・31岡部迪彦教諭（社会）辞任。8・1～3中学三年生修学旅行実施（小豆島・鳴門方面へ）。8・31職員会において、新校舎建築の件の報告。平松勝太郎教諭（社会）就任。9・16職員会において、新校舎建築に関する父母会総会の結果を報告。9・26職員会において、松山市中学駅伝大会への参加を決定。10・20第十一回運動会実施。11・16愛光マラソン実施。12・5職員会において、来年度中学一年から一学級増設し、四学級とすることを決定。12・9桑原万寿太郎九州大学教授講演（「科学と宗教」）。12・18イエズス会士・愛宮真備神父講演。12・22～23クリスマス祝会および第一回文化祭開催。12・24松山市中学駅伝大会に初めて参加し、大会新記録で準優勝（市内十八校参加）。1・20高松司教区長田中英吉司教来校歓迎会開催。1・24校内駅伝大会に二一チーム参加。○この月浅山修事務職員就任。2・8～9第十二回入学試験及び高校編入試験実施（応募者数、高校一四八名、中学四一四名）。2・10同合格発表（高校七〇名、中学二六〇名）。2・15第六回高校部卒業式挙行（卒業生一六四名）。3・4評議員改選（正岡・門屋・河井・白石・家安・小林・島津教諭金井事務職員当選）。3・12職員会において、来年度からの学級増に関する措置として、各教員に月三〇〇〇円の研究費を支給するとの理事会の決定を報告。3・12終業式挙行。○この月、村上禎治教諭（国語）辞任。

昭和三九（一九六四）年度

4・1第十二回入学式挙行。二宮一夫（国語）・吉村年博（理科）教諭・高見ミチ子・江戸鈴子（旧姓久保）事務職員就任。4・10生徒会会長・副会長選挙実施（中学部＝会長中二生上田和夫・副会長同林州平、高校部＝会長高II生稲荷国扶・副会長同山崎義幸当選）。4・18遠足実施（目的地は各学年で決定）。4・30松田洋教諭（理科）辞任。5・1岡本哲夫神父（倫理社会）就任。5・6新校舎（約四七〇坪）竣工。5・9父母会総会開催（白石定議会長辞任、森勲会長就任）。6・

6新校舎落成内祝挙行。6・30～24中二・三生、文部省学力検査実施（科目は前年に同じ）。7・28～31中学一年生海浜キャンプ実施（前年に同じ）。8・1～3中学三年生修学旅行実施（阿蘇・竹田方面へ）。8・31職員会において、日米交換留学生ウォルトン・ヒーリーの受け入れを決定。9・10オリンピック聖火リレーに本校から大出宗徳・徳永研介参加。9・21粕谷甲一神父講演。10・3第十二回運動会挙行。10・4～5第二回文化祭開催。10・31全校マラソン実施。12・23クリスマス祝会開催。12・26第十回松山市中学駅伝大会に参加し、大会新記録で優勝。1・28職員会において、二日四日（立春）を「少年の日」として中学二年生を祝うことを決定。2・9職員会において、集団風邪流行のため10～12日を臨時休校とすることを決定。2・13～14第十三回入学試験及び高校編入試験実施（応募者中学四四七名、高校一〇六名）。2・15同合格発表（中学二六〇名、高校七〇名）。2・20第七回高校部卒業式挙行（卒業生一六七名）。2・26終業式挙行。

昭和四〇（一九六五）年度

4・1八代昌一（国語）・玉井和夫（社会）・大嶋徳雄（数学）・佐々木稔（理科）教諭・マルチネス＝カルロス（社会倫理）・本郷震（同）神父就任。4・3職員会において教員の日直勤務を決定。4・5第十三回入学式挙行。4・16父母会総会開催（森勲会長辞任、後藤喬会長就任）。4・17生徒会会長・副会長選挙実施（中学部＝会長中二生黒田純生・副会長中二生川原国男、会長高Ⅰ生村上元・副会長同三並春夫当選）。5・5中村正男教諭（数学）逝去。5・6中村正男教諭の告別式に教職員および生徒クラス代表参列。5・26職員会において、本年度より、クリスマス祝会は宗教行事を主とすることに決定。6・16～17中学二・三年生、文部省全国学力検査実施。7・1愛光学園教職員互助会規約成立。8・2～4中学三年生修学旅行実施（阿蘇方面）。10・3第十三回運動会実施。10・3 4第三回文化祭開催。10・30全校マラソン実施。12・24クリスマス祝会、宗教行事を中心に開催。12・26松山市中学駅伝大会に参加。2・12～13第十四回入学試験・高校編入試験実施（中学部応募者三四八名、高校部応募者七七名）。2・14同合格発表（中学二六一名、高校六四名）。2・19第八回高校部卒業式挙行（卒業生一七二名）。3・19評議員改選（正岡・門屋・河井・白石・家安・武内・島津教諭、金井事務職員当選）。3・22終業式挙行。

昭和四一（一九六六）年度

4・1田村泰（社会）・山一保穂（数学）・大前尚道（理科）・砂田国雄（体育）教諭就任。近藤満寿美・大森鈴子・菅

昌子各事務職員就任。4・4第十四回入学式挙行。4・12生徒会会長・副会長選挙実施（高校部会長高Ⅱ生林州平・副会長同落合孝則・中学部会長中三生安藤正人、副会長同加藤健一当選）。4・26江草旭ヶ岡学園長講演。5・14父母会総会開催（後藤喬会長辞任、須賀清次郎会長就任）。5・18遠足実施（中一太山寺・中二マラソンコース・中三谷上山・高Ⅰ、Ⅱ高縄山・高Ⅲ皿ヶ嶺）。この月、川井トシ子事務職員辞任。6・20職員会にてバスケット部とサッカー部の対外試合許可。8・1～4中学三年生修学旅行実施（北九州方面へ）。10・1第四回文化祭開催（テーマ「考えることの回復を」）。10・2第十四回運動会実施。10・28高橋功医学博士講演（「シュヴァイツァー博士」について）。11・1校内マラソン実施（千秋寺前～護国寺社前、一四キロ）。12・25第十三回松山中学駅伝大会参加（優勝）。1・21第六回校内駅伝実施（三一チーム、一八六名完走）。12・16高校部生徒会会長、副会長選挙実施（会長高Ⅰ生一色秀夫・副会長同永田一義当選）。12・22中学部生徒会長・副会長選挙実施（会長中二生生島弘康、副会長同渡部教夫当選）。2・12～13第十五回入学試験・高校編入試験実施（中学応募者三六〇名・高校応募者三六名）。2・14同合格者発表（中学部二六一名、高校部一七名）。2・18第九回卒業式挙行（卒業生二二一名）。3・11朝五時頃、木造トマス寮全焼、中学一年生一名全身やけどで重態。3・22終業式挙行。この月、八代昌一（国語）・酒井和林（社会）・吉村年博（理科）教諭・本郷震神父（社会倫理）辞任。

昭和四二（一九六七）年度

4・1尾海孝平・更科正道（国語）・平田仁（社会）・伊藤順次（社会）・浜田俊三（理科）・清水襄（英語）教諭、高橋英治（理科）講師、カルロス神父（社倫）・フェリペ神父（会計）・木村千恵子・渡部伊都子事務職員就任。4・4第十五回入学式挙行。4・22遠足実施（中一生＝太山寺～梅津寺、中二・三生＝学校～山田～潮見～学校、高校部＝学校～湯山～伊台～潮見～学校）。5・30田口芳五郎司教講演。7・29～8・1中学三年生修学旅行実施（北九州方面へ）。9・17第一回父の会開催（約四〇〇名参加、ハンス・ヘルヴェック師講演、「今日の教育の問題と父親の責任」）。9・30第五回文化祭開催。10・1第十五回運動会実施。10・3吉田茂国葬のため午後休校。11・1校内マラソン実施（中学部・高Ⅲ生＝護国神社～祝谷～護国神社、七キロ。高Ⅰ・Ⅱ生＝護国神社～伊台～護国神社、一四キロ）。12・12～16中学一年一学級流感のため学級閉鎖。12・14～16中学一年全学級・中学二年一学級学級閉鎖。12・23クリスマス祝会実施、西尾優エリザベート音楽短期大学講師講演（「宗教音楽について」）。12・24第十四回松山中学駅伝大会参加（第三位入賞）。1・20第七回校内駅伝実施（三一チーム、一八六名完走）。1・21生徒会会長・副会長選挙実施（高校部会長高Ⅰ生岩崎滋雄・副会長同高橋正志、中学部会長中二生岡真・副会長同岡本和人当選）。2・10第十回高校部卒業式挙行（卒業生二二八

名）。2・18～19第十六回入学試験・高校編入試験実施（中学応募者四一六名・高校応募者二二名）。2・20同合格者発表（中学二三〇名・高校一〇名）。3・22終業式挙行。○この月、日比野正信教諭（国語）・菅昌子事務職員辞任。

昭和四三（一九六八）年度

4・1斎藤武人教諭（国語）就任。4・4第十六回入学式挙行。4・20遠足実施。6・3評議員選挙（門屋・正岡・河井・武内・島津・望月・家安教諭・松長事務職員当選）。7・1松山市中学総合体育大会参加。7・29～8・1中学三年修学旅行実施（北九州方面）。8・31伊藤順次教諭（社会）辞任。9・1五百木誠也教諭（社会）就任。ピセンテ神父（社会倫理）就任。9・15父母会伊予支部結成会及び総会（伊予市民会館）。9・28第六回愛光祭 9・29第十六回運動会実施。10・24高校生政治活動に関して、学校長の訓辞。10・27全校マラソン実施。11・25職員会にて就業規則起草委員の構成について学校側より委嘱（理事長・校長・教頭・理事・評議員・村上教諭・金井事務職員と教職員代表七名で構成）。12・14父母会総会において学校長「最近の生徒指導の問題点」を講話。12・23上智大学安斎伸教授（社会学）、「学生問題」について教員に講演。12・24クリスマス祝会。1・10職員会にて学校運営委員会発足決定（学校長、教頭、事務長、教科主任、校務主任、学年主任で構成）。1月、生徒会会長・副会長選挙（高校部生徒会長今野真・副会長小池洋二、中学部生徒会長富久保哲也・副会長宮下通永当選）。2・3職員会にて正岡二一教頭の辞任と理事会顧問就任、昭和四四年度より河井豊教諭の教頭新任を発表。2・8～9第十七回中学部入学試験および昭和四四年度高校部編入試験実施（応募者中学三八〇名、高校二五名）。2・10合格者発表（中学二三四名・高校八名）。2・15第十一回卒業式挙行（卒業生二三六名）2・21ドミニコ会アニセト総長・同ガジョ・マニラ管区長来校・歓迎式挙行。3・12サトルニノ理事長スペインへ一時帰国。不在中ルイス神父理事長代理就任。○この月藤原保（英語）教諭辞任。

昭和四四（一九六九）年度

4・1大沢武男（社会）・小立豫司（数学）・イルデフォンソ神父（英語）・青野勁（英語）・河野勝昭（体育）教諭、岡本哲男神夫（社会倫理）就任。河井豊教頭就任。4・4第十七回入学式挙行。4・19遠足実施。4・21佐々木利昭神父（社会倫理）就任。5・10父母会総会開催（須賀清次郎会長辞任、沖永善五郎会長就任）。5・16職員会にて、昭和四五年度高校部編入試験の中止、中学部入学試験科目に社会科を加えることを決定。5・27本校事務統計、統計協会より表彰。6・9職員会にて、この間の長髪問題を含む全般的生徒指導に関し、服装委員会・生徒手帳検討委員会の設置を決定。6・14服装・頭髪の問

題に関して、父母の会常任委員会開催。6・21松山市中学部総合体育大会参加（総合優勝）。7・12服装・生徒手帳委員会より、生徒の頭髪について「中・高校部ともに自由、但し質素・端正・清潔を旨とする」との答申、職員会議で決定。二学期始めより実施。7・19家庭連絡第四四―三号にて、頭髪問題に関する最終決定を保護者に連絡。7・28～31中三生修学旅行実施（北九州方面）。8・3中学部陸上競技、県大会で総合優勝。8・21同上四国大会で総合第二位。9・19職員会にて、交通事情悪化のため、全校マラソン大会の中止を決定。9・27第七回愛光祭。9・28第十七回運動会実施。10・6サトルニーノ理事長帰任。10・20林健太郎東京大学文学部教授講演。11・6松長稔事務職員辞任。11・24朝未明校舎に投石、ガラス数枚を破損。12・5服装委員会より黒皮靴着用許可の答申、職員会決定。12・15より許可。12・20クリスマス祝会挙行。12・26松山市中学駅伝参加（市営陸上競技場）。1・22生徒会会長副会長選挙（高校部生徒会長村上晴紀・副会長日野良一、中学部生徒会長堀洋一・副会長古山将康当選）。2・8～9第十八回入学試験実施（応募者二八三名）。2・10合格者発表（一六〇名）2・14第十二回高校部卒業式挙行（卒業生二三六名）。一部生徒（高Ⅲ生10名、高Ⅱ生12名）卒業式を拒否し、付近阿沼美神社境内にて自主卒業式を計画。3・20中学部卒業式挙行。○この月、大沢武男教諭（社会）辞任。

昭和四五（一九七〇）年度

4・1春日井直吉神父（社会）・青葉厳治（社会）教諭就任。4・3第十八回入学式挙行。4・7中学一年生体力テスト実施（同テストの最初）。5・15評議員選挙（門屋・白石・武内・正岡・島津・望月・田井教諭、金井事務職員当選）。5・28職員会にて服装委員会より黒提げ鞄許可の答申、職員会決定。6・20松山市中学総合体育大会参加。7・6門脇神父講演（現代青少年の自主性について」）。7・27～30中学三年生修学旅行実施（南九州方面）。8・1～4中学一年生林間学校実施（大分県九重高原）。9・18ドミニコ会マニラ管区カスタニオン管区長来校。9・26第八回愛光祭実施。9・27第十八回運動会実施。10・9職員会にて、従来の全校マラソン大会を校内三千米競走に切り変えることを決定。10・16ルイス神父帰国。10・7川崎清美教諭（国語）、非常勤講師として就任。12・21クリスマス祝会挙行。1・16校内駅伝大会実施。2・6～7第十九回入学試験実施（応募者二七九名）。2・8同合格者発表（一六一名）。2・13第十三回高校部卒業式挙行（卒業生二二七名）3・20中学部卒業式挙行。○この月斎藤武人・尾海孝平（国語）教諭・川崎清美（国語）講師、和田幸子事務職員辞任。

昭和四六（一九七一）年度

4・1越智聡・小野理行教諭（国語）、アントニオ神父（英語）就任。4・3第十九回入学式挙行。5・14職員会において、来年度中学一年生募集一クラス増加（定員総数二一〇名）を決定。6・19松山市中学総合体育大会参加。7・29中学総合体育大会県大会参加（バスケット、柔道、陸上）。7・31～8・3中一生林間学校実施（九重高原）。中三生修学旅行実施（阿蘇内牧周辺）。9・25第九回愛光祭実施。9・26第十九回運動会実施。10・18衣山新校舎地鎮祭挙行。11・4粕谷甲一神父講話。11・12森田宗一氏講話。11・29職員会において、中三生修学旅行を林間学校形式に変更することを決定（実施場所長野県菅平）。12・21クリスマス祝会挙行。2・5～6第二〇回入学試験実施（応募者三三九名）。2・7同合格者発表（二二一名）。2・12第十四回高校部卒業式挙行（卒業生二二三名）。2・18生徒会選挙実施（高校部生徒会長原田光久、同副会長福井康二、中学部生徒会長村上佳和、同副会長野村政文当選）。3・20中学部卒業式挙行。

〔この年表は、各年度の「職員会議録」「学校日誌」「教務日誌」をもとにして作成し、「父母の会連絡綴り」「愛光学園新聞」などによって補足した〕

昭和47年度　行事予定

30	火	中間考査
31	水	（中学30日より）
6	月	
2	金	健康相談（校医）
3	土	小中学校長招待会
5	月	㊋テスト
10	土	入試説明会（13：00）
12	月	㊋テスト
13	火	第１回日脳予防接種（中）
14	水	〃　（高）
16	金	第２回校内模試・職員会
21	水	第２回日脳予防接種
26	月	㊋テスト
30	金	中１健康診断・職員会
7	月	
1	土	中３健康診断
7	金	職員会
12	水	
13	木	
14	金	第１学期末考査職員会
15	土	（中学13日より）
16	日	
17	月	

4	月	
7	金	職員会（10：00～）
8	土	入学式（中学（10：00）高校（13：00））
10	月	始業式・対面式（８：30）
11	火	第１回校内模試（高Ⅲ）実力テスト（高Ⅱ～中２）
12	水	中１生ガイダンス
13	木	（中１）耳鼻科検診（中学）レントゲン　午后
14	金	職員会
18	火	第１回ツ反
20	木	年次健康診断・眼・歯検診　中レントゲン（高）高（授業なし）
22	土	父母会総会（沖永会長辞任・埜下会長就任）主任面談
24	月	㊋テスト
25	火	ＢＣＧ接種（放課後）
28	金	遠足（高Ⅲスポーツデイ）
5	月	
8	月	㊋テスト
9	火	検便・検尿（中学）・職員会
10	水	〃　（高）
12	金	職員会
15	月	㊋テスト
18	木	（中１）血液型検査（放課後）
19	金	職員会
29	月	第１学期

22	金	職員会
25	月	㊐テスト
10 月		
2	月	㊐テスト
3	火	健康相談（校医）
11	水	第２学期中間考査
12	木	（中学12日より）
13	金	関西模試（高Ⅲ）
14	土	
17	火	第２回ツ反
19	木	ツ反検診
23	月	㊐テスト
28	土	代替休日
29	日	参観日・父母会臨時総会
11 月		
1	水	20周年記念式典
2	木	運動会
3	金	（同窓会総会）
5	日	旺文社模試（Ⅲ） 関西模試（Ⅱ・Ⅰ）
6	月	第４回校内模試（高Ⅱ・Ⅲ）
7	火	（高Ⅲのみ）
8	水	インフルエンザ第１回（中） 予防注射
9	木	〃　（高）
13	月	㊐テスト

18	火	関西模試（高Ⅲ・Ⅱ）
19	水	
25	火	主任面談
27	木	中１林間学校（第１班） 30日まで
30	日	中１林間学校（第２班） ８月２日まで
31	月	中３林間学校出発
8 月		
5	土	中３林間学校帰着
15	火	（新校舎竣工）
16	水	移転輸送作業
17	木	
18	金	
19	土	
20	日	
29	火	登校日（清掃）・職員会
30	水	始業式・新築落成祝別式
31	木	第２学期授業開始
9 月		
4	月	第３回校内模試（高Ⅲ）
5	火	実力テスト（高Ⅱ以下）
8	金	職員会
15	金	敬老の日
18	月	㊐テスト
19	火	進学会議

9	火	実力テスト（高Ⅱ以下）
20	土	高Ⅲ授業終了
22	月	㊐テスト
26	金	卒業認定会議
29	月	㊐テスト
2 月		
1	木	健康相談（校医）
3	金	第15回高校卒業式
10	土	中・高入試
11	日	
12	月	（合格発表）
13	火	代替休日
14	水	第３学期中間考査
15	木	
3 月		
13	火	第３学期末考査（中学14日より）
14	水	
15	木	
16	金	
17	土	終業式
23	金	及落会議（１：00）
26	月	中学卒業式

〔９月末までは実際の日付によって修正した〕

15	水	インフルエンザ第２回（中） 予防注射
16	木	〃　（高）
24	金	第２学期末考査（中学25日より）
25	土	
26	日	
27	月	
28	火	
29	水	
30	木	
12 月		
1	金	学期末休暇
2	土	
4	月	第３学期始業
7	木	高Ⅲ計測（午后）
9	土	主任面談（高Ⅱ以下）
11	月	㊐テスト
14	木	健康相談所診断（高Ⅲ）
18	月	㊐テスト
23	土	クリスマス祝会
24	日	高Ⅲ父母面談
25	月	冬期休暇始まる
1 月		
6	土	冬期休暇終る
8	月	第５回校内模試（高Ⅲ）

あとがき

この創立二十周年記念誌の企画が、校務分掌における係り一名(島津)を置いて発足したのは、昭和四四年の四月であった。その主旨は、昭和二八年四月の開校以来迂余曲折を経たこの二十年の年月をふりかえって、なにがしかのものを残しておこうというのであった。朝鮮戦争が終結に向いはじめ、スターリン暴落と共に戦後不況の波が押し寄せはじめた年に出発した、この一私立中・高校の歩みのなかに、一体何があったのか、何が、この二十年をここまで歩ませたのか、といったことを改めて考え直してみようというのであった。

二学級一一一名の生徒で出発しながら、現在の二二学級一、一八〇名の生徒を擁するまでに発展したことの裏には、その間に起ってきた日本経済の高度成長の余恵をうけたこともさることながら、この事業に取り組んできた数多くの関係者の、莫大なエネルギーが注ぎこまれていたことも事実である。そうしたことの全貌が明らかにされるならば、二十年という余り長くない年月ではあるが、一私学の歩みにとって、これは決して無意味なことではないと思われた。日本という国の、この愛媛という地域社会にあって、今後幾世紀にもわたって発展していくであろう学園の、この草創期の二十年は、その発展の基礎を築き、その基本的性格を決定するということにおいて、決して無視することのできないエポックであった。そして、時あたかも、旧城西女子高校から引き継いだ松山市宮西の地を引き払い、山を削って造成された新しい衣山の土地に、全校舎を新築して移転することになり、その移転を完了するのが、創立二十周年の年に予定された。つまり、そのことによって、草創期の二十年は、新校舎に衣更えし、新しく築かれるであろう学園史にとって、それこそまさに、礎石であり土台であるという位置を確定したのである。

ところで、このような意味をもつ学園草創期の二十年を表現するのにはどのような観点と方法が必要なのであろうか。この記念誌の編集委員会を構成するに当って、先ず第一に問題となったのは、そのことであった。基本的観点を明確に把握し、その上に立って、それを充分に反映させることのできるような編集スタッフの構成が望まれたのである。そうした意味で、先ず、基本的観点をつぎのように設定した。①学園を構成している四つのグループ(理事者集団・教職員集団・生徒集団・保護者集団)のそれぞれの活動を明確にすること、②学園をとり巻く諸条件を明らかにし、それらと学園の関係を解明すること、③学園の教育活動がどのような影響を及ぼしているかを分析すること、④それらを通してカトリック教育がどのように実現されているかを明らかにすること、の四点であった。つまり、教育機関としての学校の歴史一般を記述する場合の観点と同じであって、④においてだけ、本学園の特殊性が考慮されていた。この観点が実際に明らかにされ、それらの総合の上に立って、この二十年の学園の動きが記述されるならば、たとえそれが、今後の学園史の中でほんの短かい期間であったとしても、充分に意

味のある仕事であると思われた。こうして、この観点が明確にされると共に、そのそれぞれに関する資料収集のための資料委員会が構成され、やがて、資料委員会を発展的に解消して編集委員会を構成したが、それは、昭和四六年の二学期になってからであった。その第一回の席上、資料委員会によって収集された資料を中心として、なるべく多くの教員が編集に参加することを確認したのであるが、さきにあげた基本的観点に基づいて総合的な二十年史の可能性が問題とされ、結局、現実的には「二十周年記念誌」とする以外に方法がないことに一致して、つぎのような分担が決定された。

記録写真編=◎二宮一夫、田井貞良

回　想　編=◎平岡光雄、長谷部寿郎、島津豊幸(父母の会)、◎砂田任叙、泉田一郎、五百木誠也、小野理行(卒業生)
◎中村一省、島津(教職員)

年　表　編=◎島津、中村、青葉巌治

資　料　編=◎島津、谷後道行、中村

統　計　編=◎大島謙介、田村泰、小立予司、竹本友賢、村上みゆき、蔵田五十憲、望月廸昭

原稿整理その他=◎渡部伊都子、江戸鈴子

(◎印は各分野の責任者)

以上のスタッフと構成であったが、基本的観点の①であげた学園を構成している四つのグループの動きを客権的に表現できるように配慮すること、今後の学園史編纂に際して、史料的価値のあるものとすること、この二点が編集上の重点として確認され、具体的な編集作業を開始した。編集の任に当ったスタッフは、何しろ、全員授業その他の校務を持ち、その合い間を縫っての仕事であったために、その苦労は大変なものであった。が、そのひとつひとつの経過については控えて置こう。ただ、その苦労を苦労ともせず完成に漕ぎつけた裏には、少しでも良いものを、少しでも役に立つものを作りたいという一致した願いが、横たわっていたことを銘記して置きたい。

ともあれ、こうして、一つの形をとって記念誌『愛光二十年』は完成した。これがどのような意味をもつのか、今後の学園史の中で、どのように作用するのか、その点については、この冊子を繙かれる方がたにおいて充分に検討し活用していただきたい。ただ、編集スタッフとしては、当初の基本的観点から大きく後退せざるを得なかったことと、谷後教諭を中心として資料編の編集がすすめられながら、時間と労力の関係で割愛せざるを得なかったことなどが、心残りであることを付記しておきたい。が、これにしても、やがて書かれるであろう学園五十年史、百年史の礎石として活用されるならば、決して無駄ではなかったと思う。

(72・9・26　文責・島津)

愛光二十年　（非売品）　昭和47年11月1日発行

発行者　松山市衣山5丁目1610番地の1　**愛光学園**
印刷者　松山市三番町7丁目10の9　不二印刷KK